多賀城市文化財調査報告書第23集

新　田　遺　跡

（第４・11次調査報告）

平成２年３月

多賀城市埋蔵文化財調査センター

正　誤　表

頁	行	誤	正
5	11	（条賀城市役所税務課保管）	（多賀城市役所税務課保管）
5	25	支配したようである。　家に	支配したようである。同家に
5	26	譲渡状	譲渡状
6	図	＜図番号及びタイトル脱＞	第４図　新田遺跡調査区位置図
8	31	註11　『美濃阿磁歴史館報』	註11　『美濃陶磁歴史館報』
32	5	第24図２	第24図１
35	5	「南元阿彌陀」	「南无阿彌陀」
64	表	＜9・10の遺物名脱＞	9　無釉陶器甕、10　無釉陶器甕
73	17	第86図１	第83図１
73	19	第83図３	第83図４
83	1	第97図２	第94図２
90	6	図版12－13	図版18－13
93	表	第105図	第100図
93	表	第106図	第101図
105	13	第109図５	第109図６
105	14	第109図５	第109図６
107	図	＜古銭番号脱＞	27
123	図	図127	図128
151	表	第148図９	第148図19
図版38		＜遺物名脱＞	1～5　板草履、6・7　下駄
図版39		＜遺物名脱＞	1・2・4～9　板草履、3　下駄

多賀城市文化財調査報告書第23集

新　田　遺　跡

序　文

当埋蔵文化財調査センターでは今年度６件の発掘調査を実施いたしました。諸般の事情から４月早々新田・山王・市川橋の三遺跡の調査に同時に着手しなければならず、調査体制の不備、作業員の不足など多くの問題をかかえてのスタートでした。

来年度以降も仙塩道路関係遺跡の調査、多賀城跡周辺の区画整備事業計画等、大規模な事業に直面し、今年以上に厳しい情況が予想されますが、職員一同一丸となって文化財に対する適確な対応を心掛けていく所存です。関係者各位のご指導・ご協力を切に願うものであります。

さて、今年度調査を実施した新田遺跡の11次調査報告書を上梓することができました。また、昭和59年度に調査を実施して以来、未報告のままとなっていた第４次調査の成果につきましても、株式会社大東ならびに関係者各位の御高配により、併せて本書に収録することができました。発見された資料は今後当センターにおいて広く一般の方々に公開してまいりますので、当市の歴史を考える材料として大いに活用していただきたいと願っております。

最後になりますが、発掘調査から本書の作成に至るまで、東北歴史資料館・宮城県多賀城跡調査研究所をはじめ多くの諸機関及び諸氏より多大なるご指導・ご協力を頂戴致しました。また、実際に発掘調査に携わった皆様に対しても衷心よりお礼を申し上げ、ごあいさつのことばと致します。

平成２年３月

多賀城市埋蔵文化財調査センター

所長　斎　藤　一　司

例　言

1．本書は新田遺跡第４次調査と第11次調査の報告を収録したものである。第４次調査は昭和59年度、第11次調査は平成元年度に株式会社大東からの受託事業として実施している。

2．第Ⅲ・Ⅳ章はそれぞれ第４次・第11次調査の成果について事実を中心とした記載を行ない、第Ⅴ章で両者を合せて考察を行なっている。

3．写真図版のうち、遺物については第４次調査分と第11次調査分とを合せ、種類ごとに構成した。

4．遺構の名称は第１次調査からの一連番号とし、その前に遺構であることを示すＳと、種類を示すアルファベット記号を付した。記号は宮城県多賀城跡調査研究所が現在用いているものにならった。

ＳＡ…柱列、ピット群、柵	ＳＢ…建物	ＳＣ…廓	ＳＤ…溝	ＳＥ…井戸
ＳＦ…築地	ＳＨ…広場	ＳＩ…竪穴住居	ＳＫ…土壙	ＳＸ…その他

（宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡―政庁跡本文編―』1982）

5．遺物の登録番号は、調査年度ごとに、土器・陶磁器・石製品と木製品に対しそれぞれ付している。

6．発掘基準線は国家座標の方向をとっており、南北基準線（Ｙ＝11,750）と東西基準線（Ｘ＝189,050）の交点を原点とした。

遺構の位置は原点からの距離で示しており、例えば南北基準線から東へ50ｍの位置はＥ50、南へ20ｍの位置はＳ20のように表示している。

7．断面図の基準レベルはすべて標高5,800ｍに統一している。

8．土色は『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄：1976）を参照した。

9．第４次調査出土の石製品については仙台市科学館の佐々木隆氏に肉眼鑑定していただいた。

10．第11次調査出土の動物遺体については鹿児島大学農学部の西中川　駿氏にご教示いただき、墨書のある礫については国立歴史民俗博物館の平川　南、佐伯昌紀両氏にご教示いただいた。礫の赤外線写真は同館の勝田　徹氏の撮影によるものである。

11．発掘調査及び報告書作成にあたっては下記の方々より多くの指導・助言を得た（敬称略、順不同）。

楢崎彰一（名古屋学院大学）　三上次男（故人、当時出光美術館）

渡辺　誠・斉藤孝正（名古屋大学）　伊藤嘉章（東京国立博物館）

大石直正（東北学院大学）　入間田宣夫（東北大学）

赤羽一郎（愛知県教育委員会）　小野田勝一（元田原東部中学校）

大橋康二（九州陶磁文化館）　伊藤　晃（岡山県教育委員会）

中野晴久（常滑市民俗資料館）　吉村正親・百瀬正恒（京都市埋蔵文化財研究所）

井上光夫（名古屋市博物館）　足立順司（静岡県埋蔵文化財調査研究所）

内野　正（東京埋蔵文化財センター）

河野真知郎・斎木秀雄・馬淵和雄（鎌倉考古学研究所）　田中則和（仙台市教育委員会）

佐藤芳彦・藤沼邦彦・小井川和夫・吉沢幹夫・佐久間広恵（東北歴史資料館）

桑原滋郎・高野芳宏・丹羽　茂・古川雅清・後藤秀一（宮城県多賀城跡調査研究所）

進藤秋輝・白鳥良一・佐藤則之・菅原弘樹（宮城県教育委員会文化財保護課）

吉岡康暢・小野正敏（国立歴史民俗博物館）　山田しょう（東北大学）

12. 資料の整理については、瀧口裕子（第４次調査分）、佐藤悦子・柏倉霜代・須藤美智子・熊谷純子・黒田啓子（第４次・11次調査分）、菊池　豊・林　久子・山田紀子（第11次調査分）の協力を得た。特に第11次調査出土の石製品については沢田　敦・津島秀章（東北大学考古学研究室）の全面的な協力を得た。

13. 本書作成については、第Ⅲ章を石川俊英・相沢清利・千葉孝弥、その他を千葉が執筆・編集した。

14. 調査・整理に関する諸記録、及び出土遺物は多賀城市教育委員会が一括して保管している。

15. 本書と現地説明会資料及び他の発表資料等とで見解が異なる場合は、本書の記述内容が優先するものである。

目　　次

第Ⅰ章　遺跡の立地と周辺の環境 …… 1

第Ⅱ章　記載の方法 …… 7

第Ⅲ章　第４次調査（昭和59年度） …… 9

1．調査要項 …… 9

2．調査に至る経緯 …… 9

3．調査方法と経過 …… 11

4．層　　序 …… 13

5．発見した遺構と遺物 …… 14

第Ⅳ章　第11次調査（平成元年度） …… 94

1．調査要項 …… 94

2．調査に至る経緯 …… 94

3．調査方法と経過 …… 95

4．発見した遺構と遺物 …… 97

第Ⅴ章　考　　察 …… 152

1．古墳時代 …… 152

2．古　　代 …… 153

3．中　　世 …… 155

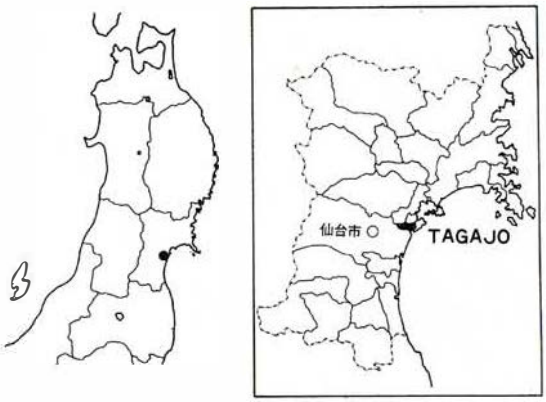
(1)　重複関係の整理 …… 155

(2)　遺構の年代 …… 159

(3)　遺構の性格 …… 160

第Ⅰ章　遺跡の立地と周辺の環境

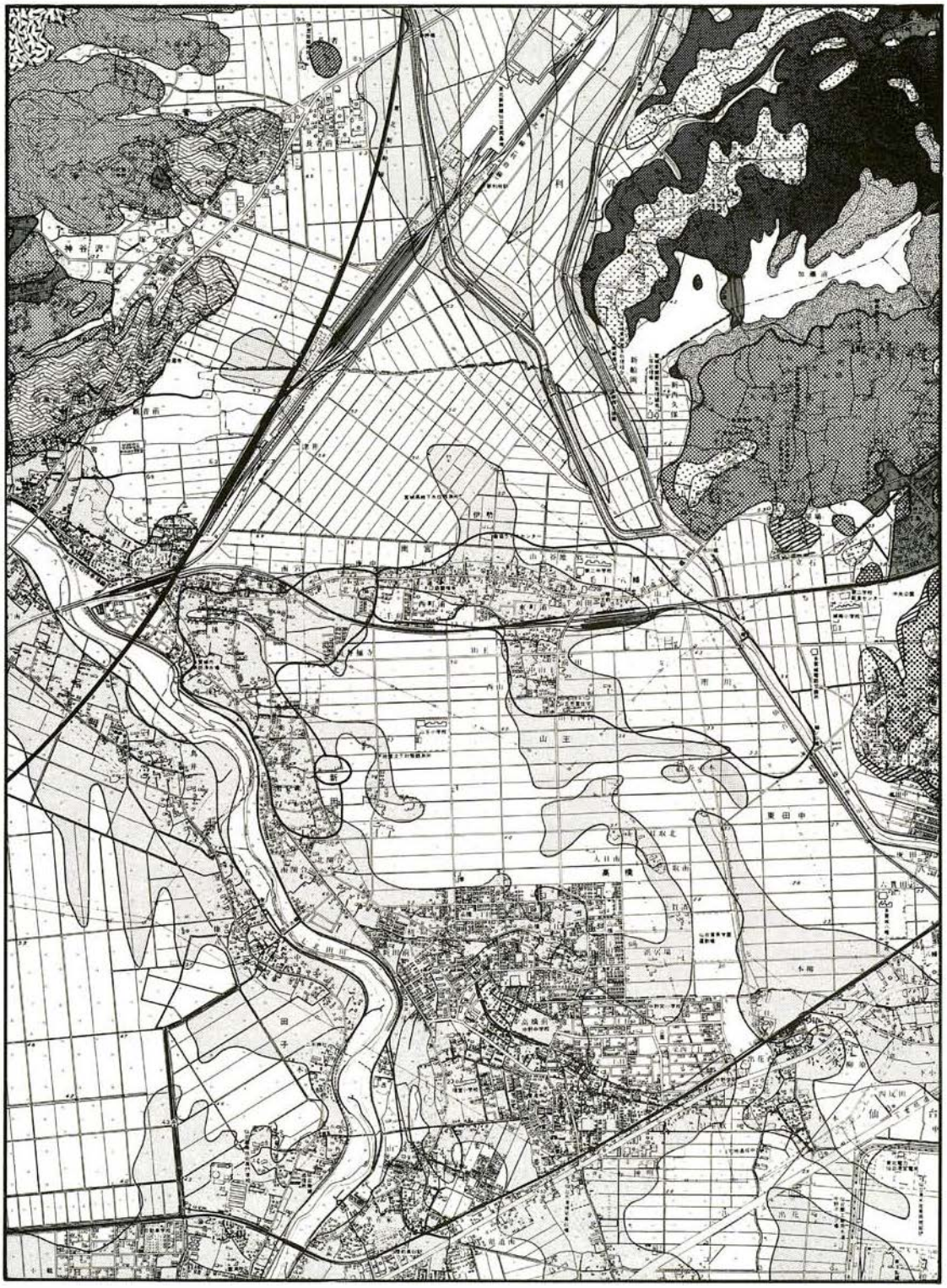
遺跡の立地：新田遺跡は、仙台市の中心部から北東へ約10km、多賀城市の西端部に所在する。仙台市岩切から塩釜市方面へ通じる県道泉～塩釜線沿い、及び仙台市との境界をなす七北田川東岸に「く」の字形に展開している。その範囲は南北1.6km、東西0.8kmにわたり、面積は約1.3㎢である。



第１図　遺跡の位置

地理的環境：多賀城市の地形は、東半部が低丘陵、西半部が沖積地と東西に大きく二分されている。地理的にみると、東半部の丘陵は塩釜丘陵と呼ばれる標高80ｍ未満の緩やかな丘陵で（註１）、大小の谷が複雑に入り組んだ地形である。一方、西半部の沖積地は仙台平野の中の富城野原平野と呼ばれているものである。これは、海岸線に平行して分布する砂浜海岸や浜堤、浜堤間の後背湿地、複雑な分布を示す自然堤防、旧河道、後背湿地などで特徴づけられると言われている（註２）。本遺跡はこの富城野原平野の最北端に位置し、仙台市岩切から多賀城市山王にかけて東西に細長くのびる微高地、即ち県道泉～塩釜線に沿った地域及び七北田川の東岸に形成された微高地上に立地している。両微高地の内、前者は、かつて本遺跡の南側を東流していたという旧七北田川の沖積作用によって形成されたと考えられているものである。その北側と南側はいずれも後背湿地となっており、南側では小さな微高地が島状にいくつか認められるが、北側では利府町との境界に至る広い範囲一帯が湿地となっている。本遺跡は、一部低湿地も含んでいるが大部分は海抜５～６ｍの微高地上に立地しており、東側に接する山王遺跡とともに広大な範囲を占めている。

歴史的環境：多賀城市において、旧石器時代に遡る遺跡は東部の丘陵上でいくつか知られている。その内、発掘調査が行なわれた志引遺跡と柏木遺跡はいずれも10万年以上も前の遺跡であると考えられている。縄文・弥生時代の遺跡は周辺の他の市町村に比べて数は少ないが、海岸部に近い大代地区では縄文時代晩期の橋本囲貝塚、弥生時代中期の桝形囲貝塚などの小規模な貝塚や弥生時代の大代洞窟遺跡などが知られている。この内、橋本囲貝塚と桝形囲貝塚は大正８年に長谷部言人氏によって発掘調査されている。桝形囲貝塚は、山内清男氏の「石器時代にも稲あり」の論文（註３）で学史的にも有名である。なお、縄文・弥生時代の遺物は、多賀城跡の所在する丘陵部においても発見されており、今後新たな遺跡の発見される可能性は高い。

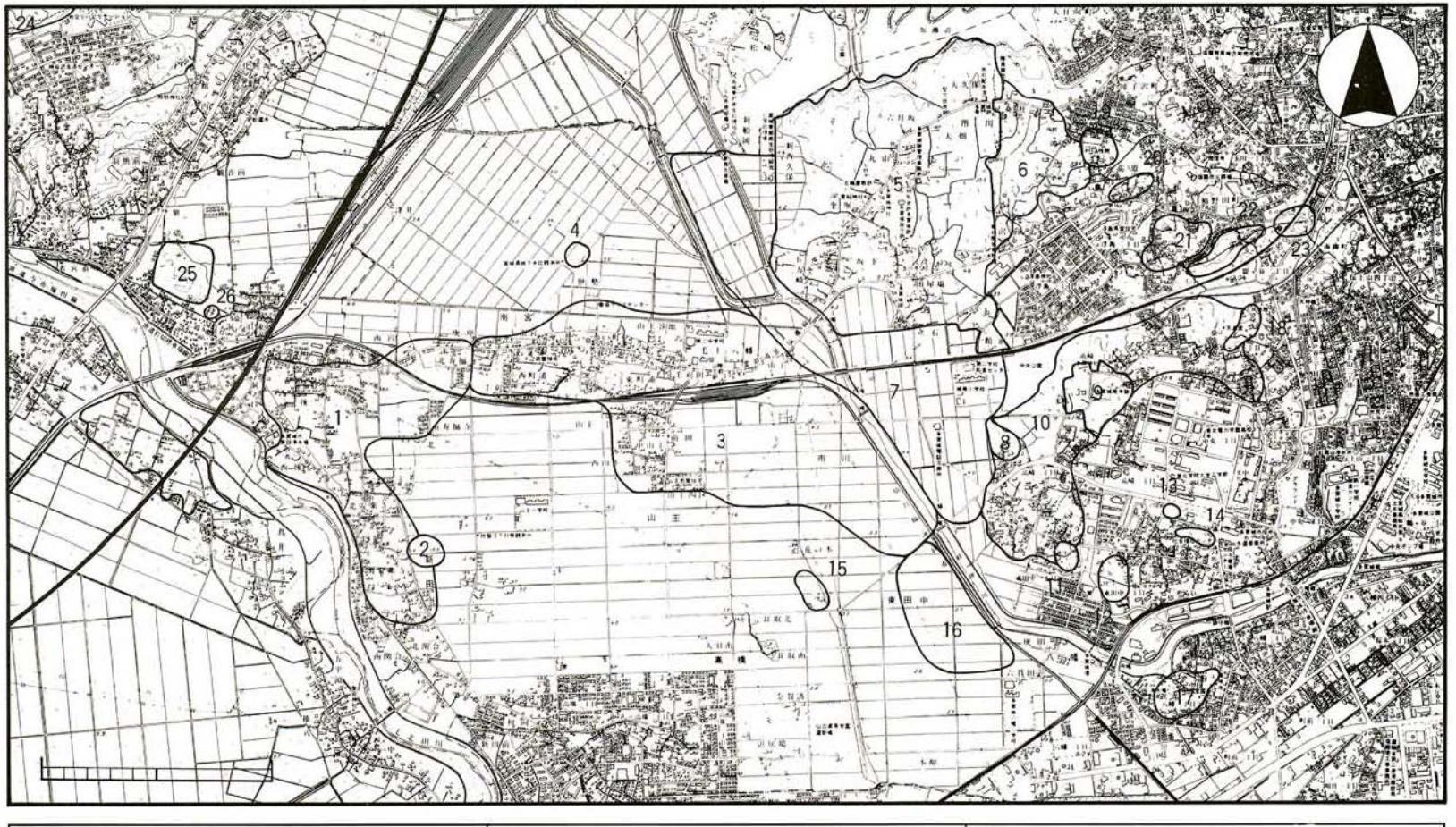


砂岩・軽石凝灰岩及び礫岩	砂（自然堤防堆積物）	火山円礫岩・凝灰岩及び凝灰質砂岩
砂岩（凝灰岩薄層を挟む）	火山角礫岩及び凝灰角礫岩	頁岩・砂質頁岩及び砂岩
土砂（埋谷土）	砂岩及び礫岩	デイサイト質角礫岩及び凝灰質砂岩
砂岩・凝灰岩・シルト岩・亜炭及び礫岩又は礫混土	軽石凝灰岩	シルト岩・砂質シルト岩・凝灰岩及び砂岩

第２図　周辺の地形

本遺跡が所在する微高地上においては、最も古い段階の遺構として古墳時代前期（塩釜式期）まで遡るものがいくつか知られている。本遺跡南寿福寺地区では、住居跡は未発見であるが土壙が数基発見されており、土師器杯・高杯・器台・壺・甕・甑などが出土している。この時期の遺構としては、多賀城跡や多賀城廃寺跡の立地する丘陵部において方形周溝墓や竪穴住居跡が発見されているが、本遺跡の立地する沖積地ではまだあまり知られていない。続く中期（南小泉式期）になると、微高地上のほぼ全域に亘って遺構が発見されている。本遺跡西端部の後地区では、昭和39年の土取り工事の際に大量の土器が発見され、緊急調査が行なわれている。住居跡は発見されなかったが、石製模造品とともに土師器壺・高杯などが出土し、祭祀遺跡と考えられた（註4）。隣接する山王遺跡においても良好な資料が発見されており、同遺跡西町浦地区からは、竪穴住居跡や方向に規則性のある細長い土壙などが発見され、大量の遺物が出土している。同地区では、各遺構及び堆積層から石製模造品のみならずその原石や未製品も発見されており、模造品を作っていた住居跡も確認されている。山王遺跡東町浦地区では幅約3mで「コ」の字形にめぐる溝跡が発見されている。東西約40mを計る大規模な遺構であり、その周辺からは古式須恵器の杯身、杯蓋、甕、把手付椀、甕などが複数発見されている。新田・山王遺跡の立地するこの微高地は、古墳時代中期にはまだ沖積作用が進行中であり、山王遺跡東町浦地区では現在の地表から約1.4m掘り下げたところで堰状の遺構が発見されている。この微高地が現在の姿とほぼ変わらない状況になるのは古墳時代後期頃であろう。後期（栗囲式期）の遺構としては、本遺跡後地区において、約200点の土器を浅いくぼみに据えた祭祀遺構が発見されている。また、同地区では先に述べた昭和39年の土取り工事の際にこの時期の土器も発見されている（註5）。しかし、他の遺跡において該期の資料はあまり知られておらず、わずかに八幡沖遺跡の西側に接した地点や館前遺跡などから少量出土しているにすぎない（註6）。また、後期でも一段階古い住社式期の遺構・遺物はこれまで市内では全く発見されていない。古墳時代後期の様子については今後の発見に期待するところが大きい。

奈良・平安時代の遺構は市内のほぼ全域に広く分布しており、中には集中している地域もみられる。本遺跡の東方約1.5kmの低丘陵上に立地する多賀城跡は、陸奥国府と鎮守府が置かれたところで、その周辺に立地する高崎遺跡、市川橋遺跡、山王遺跡そして本遺跡では厖大な数の遺構や遺物が発見されている。市川橋遺跡水入地区では掘立柱建物跡によって構成されるブロックがあり、それらとセットになる井戸跡も発見されている。また同遺跡高平地区では微高地に立地しているところには掘立柱建物跡や竪穴住居跡があり、低湿地部分は水田となっていることが判明している。新田・山王遺跡は、各地区で掘立柱建物跡、竪穴住居跡、井戸跡、溝跡などが発見されており、新田遺跡北寿福寺地区と山王遺跡東町浦地区では東西方向にのびる幅12mの道路跡も発見されている。山王遺跡発見の道路跡は多賀城外郭南辺築地と同方位をとっ



番号	遺跡名	種別	時代
1	新田遺跡	包含地	古墳、奈良、平安、中世
2	安楽寺遺跡	寺院跡	古代末～中世
3	山王遺跡	包含地	古墳、奈良、平安
4	内館館跡	城館	中世
5	特別史跡鶴賀城跡	城柵跡、国府跡	奈良、平安
6	西沢遺跡	包含地	古代
7	市川橋遺跡	包含地	縄文、弥生、古墳、奈良、平安
8	丸山囲古墳群	円墳	古墳中・後
9	特別史跡多賀城廃寺跡	寺院跡	奈良、平安
10	高崎遺跡	包含地、城館	奈良、平安、中世
11	東田中窪前遺跡	包含地、城館	古代、中世
12	志引遺跡	包含地、城館	旧石器、古代、中世
13	稲荷殿古墳	円墳	古墳後
14	桜井館跡	城館	中世
15	大日北遺跡	包含地	古代
16	六貫田遺跡	包含地	古代
17	八幡館跡	包含地、城館	古代、中世
18	留ケ谷遺跡	包含地、城館	奈良、中世、近世
19	法性院遺跡	包含地、寺院跡	古代
20	高原遺跡	包含地	古代、中世
21	小沢原遺跡	包含地	古代
22	野田遺跡	包含地、城館	古代、中世
23	矢作ケ館跡	包含地、城館	古代、中世
24	(仙台市)国史跡岩切城跡	城館	鎌倉～室町
25	(仙台市)洞ノ口遺跡	包含地	平安、中世、近世
26	(仙台市)洞ノ口古碑群		鎌倉

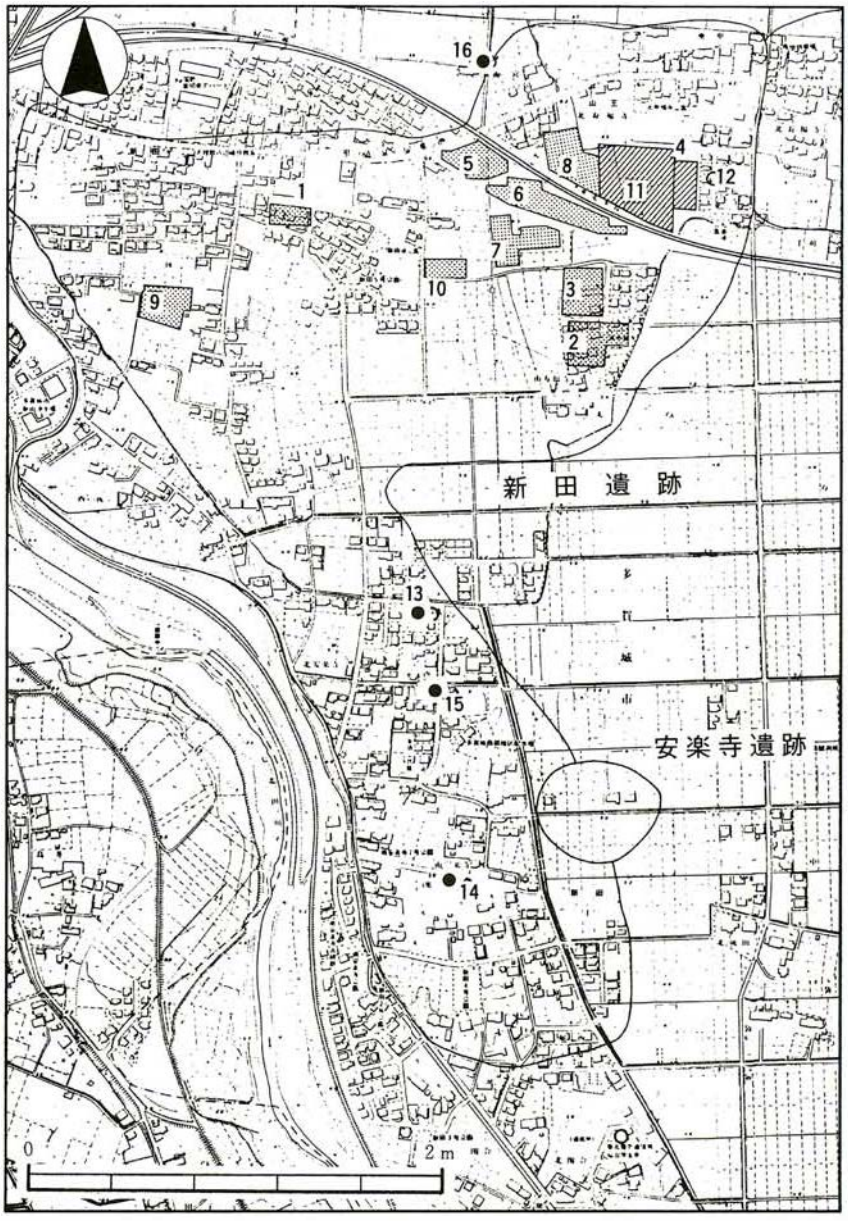
第3図　遺跡分布図

ており、新田・山王遺跡で発見されている建物跡や溝跡にもそれと同方位のものがあることから、多賀城周辺には計画的な地割が存在した可能性が考えられる。また、多賀城跡及びそれをとりまく新田・山王・市川橋・高崎遺跡では、中国陶磁、及び灰釉・緑釉陶器など高級な食器類の出土量が県内総出土量の過半数以上を占め、銙帯や石帯など官人階級の所持品とみられるものも各地区から出土している。このことは、新田・山王・市川橋・高崎遺跡には多賀城にかかわりのある人々が住んでいたことを示唆するものであろう。

鎌倉・室町時代の遺構も市内各地にみられる。特に本遺跡では周囲に溝をめぐらせた武士の屋敷跡が数か所で発見されており、陶磁器をはじめ、古銭、鉄製品、石製品、木製品が大量に出土している。特に北寿福寺地区から南寿福寺地区にかけては、周辺一帯の中心的な遺構と見られる大規模な屋敷跡が発見されており、注目される。昭和36年撮影の航空写真及び明治19年作成の地籍図（条賀城市役所税務課保管）を参考にすると、そのような屋敷跡は本遺跡から山王遺跡西町浦地区にかけてほぼ連続して連なっている様子がうかがえる。その他の屋敷跡、館（たて）跡としては、本遺跡の東方約0.8kmの地点に内館跡、西方約1kmの地点に洞ノ口遺跡（仙台市岩切）が所在している。いずれも発掘調査は実施されていないが、低湿地に突き出た微高地上に立地しており、地籍及び航空写真を参考にすると周辺に溝をめぐらせていた様子がうかがえる（註7）。以上のような生活の跡とは別に人々の信仰にかかわる遺跡・遺物もみられる。本遺跡及び山王遺跡は中世の供養碑である板碑の多い地域として知られている。市内で確認されている50基の内、24基が新田・山王遺跡内に所在している。特に本遺跡の南側にある安楽寺古碑群には8基の板碑があり、最も古いものは正応3年（1290）、最も新しいものは正和元年（1312）の造立である。これらはかつて七北田川の河原にあったものを現在の地点に集めたと言われている。

文献史学側の研究：中世の多賀城については文献史学の立場からもいくつかの研究がなされている。本遺跡及び山王遺跡を含む多賀城市の西部一帯は、中世には「高用名（こうゆうみょう）」に含まれ、陸奥国留守所長官の支配する特別行政区域であったとされている。鎌倉時代初期に陸奥国留守職に任ぜられた伊澤氏は後に留守氏を名のり、この地域を支配したようである。家に伝わる護渡状には「岩切」「南宮」「冠川（七北田川）」など本遺跡周辺の地名が散見し、留守氏の生活の基盤であったことをうかがわせている。また、同家の文書にしばしば見られる「荒野七町」の開墾の舞台を、本遺跡北方の湿地帯に比定する考え（註8）や、観応2年（1351）の吉良貞家軍勢催促状に見られる「岩切、新田両城之間、連日合戦最中也」とある内の新田城を留守氏の主城とし、その推定地を本遺跡の南側に位置する安楽寺遺跡周辺に求める考え（註9）なども示されている。また、中世の多賀国府所在地については諸説があるが、いずれにせよ、本遺跡を含む岩切から山王にかけての一帯を陸奥府中とする見方が多いようである。

註1　北村　信・石井武政・寒川　旭・中川久夫『仙台地域の地質』一地域地質研究報告　秋田（6）第98号　1986
註2　註1に同じ
註3　山内清男「石器時代にも稲あり」『人類学雑誌』第40巻第5号　1925
註4　小笠原好彦・阿部義平「宮城県新田遺跡出土の土師器」『考古学雑誌』第54巻第2号　1968
註5　註4に同じ
註6　昭和61年八幡沖遺跡の西側に隣接する地点（仙台市）から土師器長胴甕が1点採集されている。多賀城市埋蔵文化財調査センター保管。未報告。
註7　加藤　孝・野崎　準「多賀城市内の館跡」『東北学院大学東北文化研究所紀要』第5号　1973。野崎　準「中世富城郡内の若干の考古資料」『東北学院大学東北文化研究所紀要』第10号　1979
註8　入間田宣夫「郡地頭職と公田支配」『日本文化研究所研究報告　別巻』第6集　1968
註9　佐々木慶一「中世の留守氏」『水沢市史』2　1976



番号	調査年次	調査地	面積	摘要
1	第1次調査 (昭和56年度)	新田字後	1,780m²	奈良時代、平安時代、中世の遺構、遺物を発見。
2	第2次調査 (昭和57年度)	山王字南寿福寺	3,100m²	古墳時代、奈良時代、平安時代、中世の遺構、遺物を発見。
3	第3次調査 (昭和58年度)	山王字南寿福寺	3,700m²	同上
4	第4次調査 (昭和59年度)	山王字北寿福寺	1,800m²	平安時代、中世、近世の遺構、遺物を発見。
5	第5次調査 (昭和61年度)	山王字北寿福寺	2,000m²	古墳時代、平安時代、中世の遺構、遺物を発見。
6	第6次調査 (昭和62年度)	山王字北寿福寺	3,090m²	奈良時代、平安時代、中世の遺構、遺物を発見。
7	第7次調査 (昭和63年度)	山王字北寿福寺	2,640m²	平安時代、中世の遺構、遺物を発見
8	第8次調査 (昭和63年度)	山王字北寿福寺	3,150m²	古墳時代、奈良時代、平安時代、中世の遺構、遺物を発見
9	第9次調査 (昭和63年度)	新田字後	1,100m²	奈良時代、平安時代、中世の遺構、遺物を発見
10	第10次調査 (昭和63年度)	山王字北寿福寺	620m²	古墳時代、平安時代、中世の遺構、遺物を発見。
11	第11次調査 (平成元年度)	山王字北寿福寺	5,185m²	古墳時代、平安時代、中世の遺構、遺物の発見。
12	試掘1 (昭和56年度)	山王字北寿福寺	54m²	遺構、遺物なし
13	試掘2 (昭和56年度)	新田字西	78m²	同上
14	立合1 (昭和58年度)	新田字北関合	72m²	同上
15	試掘3 (昭和59年度)	新田字南安楽寺	120m²	同上
16	立合2 (平成元年度)	南宮字一里塚		10世紀前半以前の水田跡の可能性あり。

表1　新田遺跡発掘調査概要一覧（番号は第4図の番号を示す）

第Ⅱ章　記載の方法

1　遺構調査に係る数値の計測

ここでは、掘立柱建物跡の柱間及び方向の計測基準について記す。

柱間：柱痕跡を確認できたものについては1m未満の数値の3桁目を四捨五入し、2桁目まで記載する（例：○、○○m）。柱痕跡を確認できなかったものについては、柱穴の中心に柱位置を想定し、1m未満の数値の2桁目を四捨五入し、1桁目まで記載する（例：約○、○m）。後者は有効数値とはなりえず、一応の目安にすぎない。

方向：基本的には側柱列で計測する。両端の柱穴の柱痕跡を確認できた場合、30秒以下は切り捨て、31秒以上を切り上げて記載する（例：○度○分）。側柱両端の柱穴の片方でしか柱痕

跡が確認できず、少ない柱間で計測せねばならない場合、或いは柱痕跡を確認できない場合は、柱穴の中心に柱位置を想定して計測し、30分以下は切り捨て、31分以上は切り上げて記載する（例：約〇度）。後者は有効数値とはなりえず、一応の目安にすぎない。

2　遺物の種類

ここでは、第Ⅲ章以降の説明に用いる土器、陶磁器の種類と概要について示す。

土師器：古墳時代以降の酸化焔焼成による軟質の土器。古墳時代後期以降は内面をヘラミガキし、黒色処理を施す。更に9世紀以降はロクロ調整を施す。

須恵器：還元炎焼成による硬質の土器。

赤焼き土器：平安時代に出現する酸化焔焼成による土器。ロクロ調整後はヘラミガキなどの再調整は施さず、黒色処理も行なわない。この種の土器をどう位置づけるかについては県内の各機関で評価が分かれている。多賀城跡調査研究所では、酸化焔焼成に転じた須恵器と見て「須恵系土器」と称し、県文化財保護課では、ヘラミガキや黒色処理を施さなくなった土師器と見て「赤焼土器」と称している。器種構成については、前者が杯や皿以外のものも含めているのに対し、後者は杯だけに限定して用いている。出現、消滅をめぐる時期についても異なっている。当センターでは、年代観や器種構成など内容については多賀城跡調査研究所の見解に従いつつも、名称については、昭和54年度以降の報告書で用いている「赤焼き土器」を使用している。

灰釉陶器：灰釉を施した硬質の陶器。この名称は古代のものに限定して用いる。

緑釉陶器：緑色に発色する鉛釉を施した硬・軟質の陶器。

カワラケ：中世以降の酸化焔焼成による土器。成形後、ロクロ調整するものとしないものとがある。器種には椀と皿がある。

無釉陶器：釉を施さず硬く焼き締めた陶器。器種は壺、甕、擂鉢が主体。

施釉陶器：中世以降の釉を施した陶器。釉には灰釉と鉄釉とがある。

瓦質土器：表面を燻し焼きした軟質の土器。器種には火鉢、擂鉢などがある。

3　遺構の年代

中世以降の遺構の年代については、現在のところ定点となるものを見出し得ないため、出土した陶磁器の年代観に全面的に頼っている。常滑窯製品については赤羽一郎氏の編年（註10）、瀬戸・美濃窯製品については藤澤良祐氏と伊藤嘉章氏の編年（註11）を用いた。

註10　赤羽一郎『常滑焼－中世窯の様相－』 1984

註11　藤澤良祐「〝古瀬戸〟概説」『美濃阿磁歴史館報』Ⅲ　1984

伊藤嘉章「瀬戸・美濃窯における大窯生産」　『岐阜市歴史博物館研究紀要』2　1988

第Ⅲ章　第 4 次 調 査

1．調 査 要 項

(1)　遺跡名　　新田遺跡

(2)　所在地　　多賀城市山王字北寿福寺53-7他

(3)　調査面積　1,800㎡

(4)　調査期間　昭和59年６月11日～10月５日

(5)　調査主体　多賀城市教育委員会

(6)　調査担当　多賀城市教育委員会社会教育課

(7)　調査員　　文化財保護係　高倉敏明、瀧口　卓、石川俊英、石本　敬
相沢清利、千葉孝弥

(8)　調査参加者　芳賀英実、赤間かつ子、阿部敏子、阿部トシ子、阿部美津子、
阿部美智子、阿部米子、伊藤藤吉、猪俣敏子、浦山一馬、遠藤一代、
大友道子、小野玉乃、熊谷あつ子、熊谷きみ江、黒崎庸治、後藤恵子、
後藤はつみ、桜井エイ子、桜井喜作、桜井静江、桜井三千夫、
佐々木四郎、佐藤節子、佐藤サタ子、佐藤たま子、佐藤東三、
佐藤とき子、佐藤三夫、下道博信、菅原絹代、鈴木　劭、高野敏子、
千葉亨一、角田静子、鶴巻まき子、早坂えみ子、渡辺園恵、渡辺ゆき子.

(9)　調査協力　　株式会社大東
大友藤造、桜井清喜、桜井周之助、桜井三弥、佐藤辰雄（地権者）

2.　調査に至る経緯

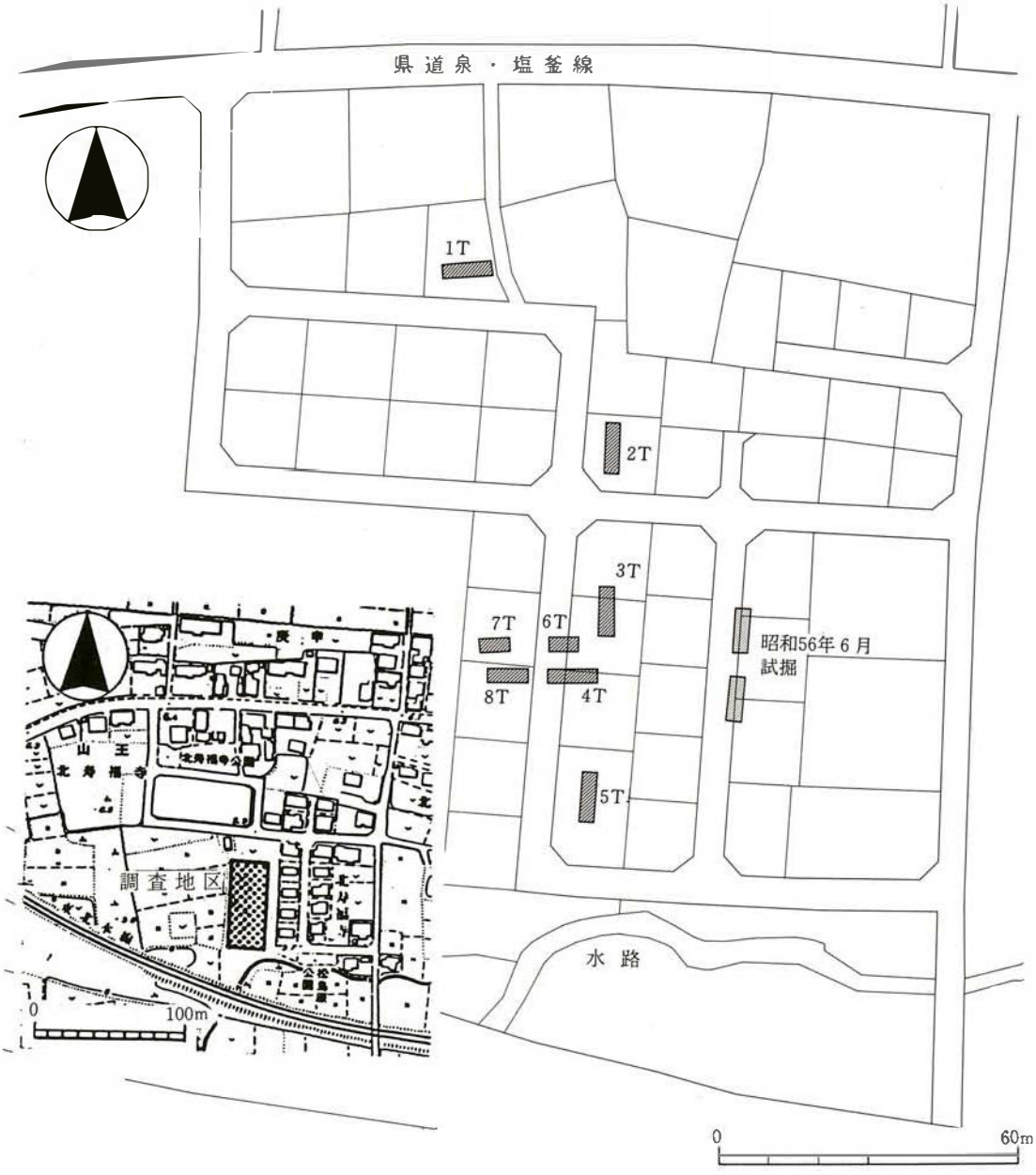
多賀城市の西部に位置する山王・南宮・新田地区は市街化区域に指定されており、近年宅地造成が盛んな地区である。特に交通の便の良い寿福寺地区においては、その傾向に一層拍車がかかっているのが現状である。

本件については昭和58年２月に地元の地権者８名より開発計画が示された。これは山王字北寿福寺の 9,378.57 ㎡を対象として分譲住宅を造成しようとするものであった。

これに対し、当教育委員会では遺構の有無の確認、ひいてはその分布状況等を把握することを目的として、昭和58年５月10日から５月25日まで試掘調査を実施した。

かつて、大規模に土取り工事を行ったという西側地区一帯を避け、他の開発予定地内に８本のトレンチを設定した。その結果、第３・４・５・６・８トレンチに於いて建物跡の柱穴、溝跡、土壙等を発見し、遺物も土師器、須恵器や中世陶器等が出土した。一方、第１・２トレ

ンチではかなり深くまで削平されている状況がみられ、遺構、遺物は発見できなかった。以上の所見から西側及び北側地区一帯の4,950.40㎡は調査の対象から除外し、南側地区 3,200㎡の内、比較的遺構が多く分布する南側 1,800㎡を対象とした発掘調査を計画した。昭和59年2月、開発の主体となった株式会社大東（仙台市六丁目字土佐3番地の5）から発掘届が提出され、同年6月11日から9月30日まで発掘調査を実施した。



第5図　試掘調査トレンチ配置図

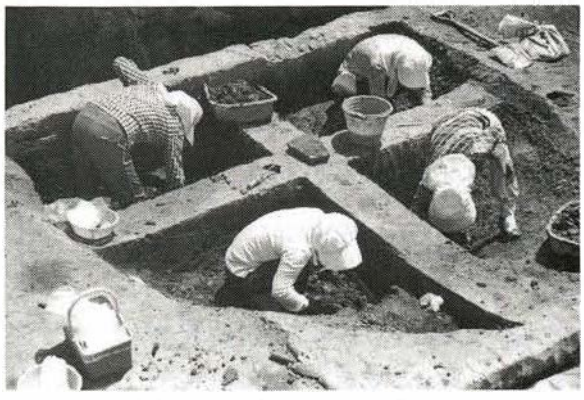
3. 調査方法と経過

今回の調査区は、昭和57・58年度に実施した第２次調査区（南寿福寺地区）の北東約 100m の地点に位置している。遺物の表面採集及び試掘調査の結果から遺構の存在が十分に予想された。

調査に先立ち、測量基準点から原点移動を行なった（６月４日)。調査区の設定については調査予定地内に基準点１（X：-189.000.000．Y：+11.900.000）と基準点2、3、４を設定し、一辺３m グリッドで区画した（６月11日)。調査区は東西30m、南北60m とし、その面積は 1,800m² である。調査区のグリッドは、東西をアルファベット、南北をアラビア数字で表示した。

試掘調査の結果より、本調査区には表土が厚く堆積していることが判明していたため、６月12日より重機を導入してその除去を行なった。それと並行して第Ⅱ層上面で検出した近代以降の溝数条も逐次掘り上げていった。遺構検出作業は６月18日より開始した。これと並行して遺構の輪郭をとらえたものからグリッド杭を利用して1/100の略図の作成を行なっていくこととした。調査区東壁の断面観察によると第Ⅲ層上面とⅣ層上面がそれぞれ遺構面となっていることが判明した。しかし、北半部は第Ⅳ層上面まで露出させてしまった部分があった。一方、南半部では第Ⅲ層が良好に残っており、水田となっている西端と南端においてもその床土を除去すると北半部の第Ⅲ層に対応する堆積層の一部やそれを掘り込んだ遺構、また、それに覆われた遺構などを検出することができ、二枚の遺構面を層位的に調査していくことが可能となった。第Ⅲ層は一部削平されてはいるものの調査区のほぼ全域に堆積していることが先の断面観察によって判明していたため、この層を介在させることによって、南半部と北半部各遺構の層位関係をとらえる可能性は残された。こうして南半部では第Ⅲ層上面から掘り込まれた遺構群、北半部では第Ⅳ層上面で検出した遺構群の調査を同時に並行して進めることとした。この時点で各遺構に多数重複しているものが見られたことから、調査を効率良く進めるため７月16日遺り方の設定を行ない、遺構の掘り込みと実測を並行して進める方法をとった。

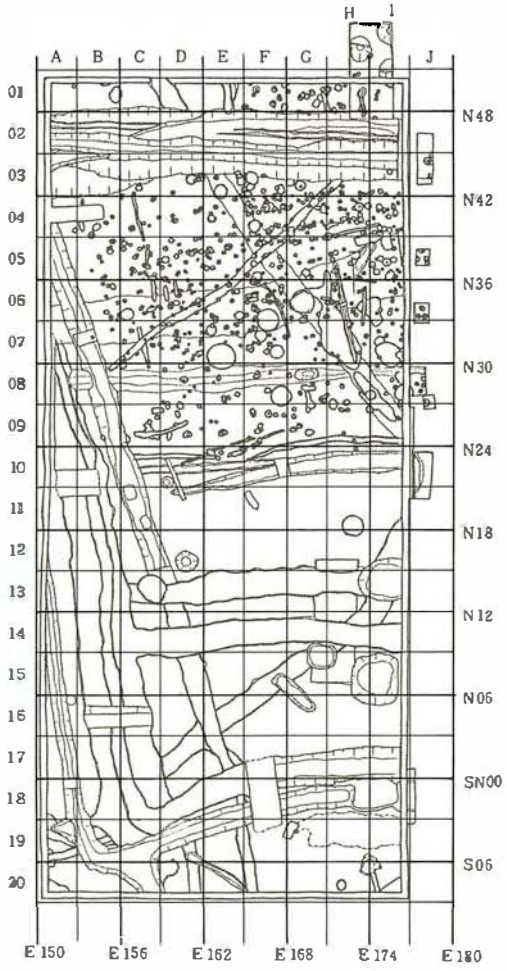
南半部においては第Ⅲ層上面で数基の土壙と多数の溝を検出し、７月10日から掘り込みを開始した。溝には規模の大きなものがあり、そのうち東西方向のものは４条、南北方向のものは３条あった。最も新しいＳＤ 638とＳＤ 639・640溝跡は一部に土橋を有するもので何らかの区画となる溝の西辺と南辺の一部であると



土壙発掘風景（ＳＫ 661）

考えられるに至った。また、南西隅近くから南へ向かって延びていく溝も検出することができた（ＳＤ642溝跡）。本溝と重複し、これより古いＳＤ634溝跡も東西方向に走るＳＤ633溝跡がその東壁に取り付くことから、本溝と類似する形態を取るものであろうと見られた。更にこれらと重複するＳＤ632・635・636・637溝跡も残存状況は良好とはいえないまでも同様の形態を取るものと推定するに至り、５時期の変遷があることを理解した（８月31日）。８月上旬、南半部における第Ⅲ層上面の調査がほぼ終了したのでその層を除去し、第Ⅳ層上面の調査を開始した。第Ⅳ層上面より掘り込んだ遺構は数少なかったが、灰白色火山灰が堆積していたＳＤ645・646溝跡や中世陶器を出土したＳＤ631・643溝跡、ＳＫ660など検出することができ、本遺構面上には古代～中世にかけてのものがあることを確認した。

一方、北半部で検出した遺構は柱穴と土壙がほとんどで、しかも密集した状況を呈しており、南半部とは全く異なった様相を呈していた。柱穴は、多くのものが掘立柱建物跡としてまとまり、それらは複雑に重複していることが判明した。埋土中からは中世、近世の遺物を出土したものがあり、その規模も小さなものが多く見られた。また、土壙も建物と重複しているものが多く、この両者は密接に関連したものと推定された。また、この建物跡や土壙は南半部で検出したＳＤ638・639溝跡やＳＤ633・634 溝跡など区画を成す溝とはほとんど重複するものがなく、これらは建物跡や土壙を溝で囲んだ一連の遺構としてとらえるべきものであると考えるに至った（８月３日）。ＳＤ653溝跡は調査区を東西に走る大溝で、今回検出した遺構の中では最も古い遺構であり、本遺構の掘り上げをもってすべての遺構の調査はほぼ完了した（９月25日）。ところで、北半部の遺構のうち一部の建物跡や溝を除き、多くの遺構の掘り込み面は不明なままとなっていた。そこでそれらの検討を目的とした補足調査を行なった。これは調査区東側に延びている建物跡について柱位置想定部分に小トレンチを設定したものである。その結果、対象とした建物の柱穴はすべて第Ⅲ層上面で検出することが



第６図　グリッド配置図

できた。このことから南半部で検出した5時期の溝と北半部で検出した建物跡との関係は、層位的にも矛盾しないことが明らかとなった（10月3日）。これに先立ち、9月27日に調査の概要について記者発表を行ない、9月29日には一般の人々を対象とした現地説明会を開催した。10月5日、現場から器材の撤収を行ない、すべての調査を完了した。

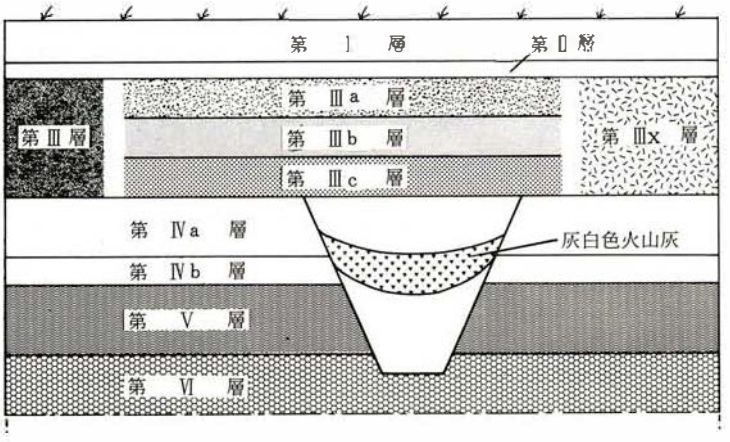
4. 層 序

調査区内を壁に沿って第Ⅵ層まで掘り下げたところ、南端部及び西端部は第Ⅳ層まで大きく削平を受けていたが、ほかは各層がほぼ水平に堆積していた。それらについての検討の結果、二つの遺構面と一つの包含層を確認した。以下説明を加える。

第Ⅰ層　表土。厚さ0.2 ～0.3 m を計る。

第Ⅱ層　調査区のほぼ全域に堆積しており、土質は第Ⅰ層に近似しているがより均質で若干しまりがある。近代以降の陶磁器が出土している。厚さは10～30cmを計る。

第Ⅲ層　調査区のほぼ全域に堆積している。上面は中世・近世の遺構面となっており、掘立柱建物跡、溝跡、土壙など多数の遺構を検出している。本層はⅢa、Ⅲb、Ⅲcの三枚の層に細分され、厚さはそれぞれ19～12cm、20～12cm、6cmを計る。このうちⅢc層は南側のみに堆積しており、上面にはマンガンが大量に見られた。本層は調査区北端部では単一層となっており、厚さ36cmを計る。また、調査区南端部の中央から南西隅にかけて小範囲に分布している黒褐色土（Ⅲx 層）がある。これは後述する第Ⅳ層上から掘り込まれた遺構を直接覆っており、本層上から掘り込まれた遺構は、第Ⅲ層上から掘り込まれたものとほぼ近い時期のものとみられることから、本層は第Ⅲ層に対応するものと考えられる。



層　位	土　　色	土 性
第Ⅰ層	黒褐色（10YR 3/2）	砂質土
第Ⅱ層	同　上	砂質土
第Ⅲ層	黒色（10YR 2/1）	砂質土
第Ⅲa層	暗褐色（10YR 3/4）	砂質土
第Ⅲb層	黒褐色（10YR 3/2）	砂質土
第Ⅲc層	同　上	砂質土
第Ⅲx層	同　上	砂質土
第Ⅳa層	にぶい黄褐色（10YR 5/3）	粘質土
第Ⅳb層	淡黄色（2.5Y 8/4）	粘質土
第Ⅴ層	黒褐色（10YR 3/2）	粘質土
第Ⅵ層	灰黄色（2.5Y 7/2）	砂質土

第7図　層序模式図

第Ⅳ層　調査区全域に堆積している。上面は古代・中世の遺構面となっており、その遺構の中には10世紀前半に降下したとされている灰白色火山灰が埋土中に堆積しているものもみられる。Ⅳa・Ⅳb層の二層に細分され、それぞれ厚さ10～22cm、10cmを計る。Ⅳb層は調査区中央部に部分的に堆積しているものである。この層より遺物は全く出土しておらず、最終の遺構面となっている。

第Ⅴ層　調査区全域に堆積する非常にしまりのある粘質土である。厚さ50cmを計る。

第Ⅵ層　本遺跡周辺一帯の基盤となっている砂層である。

5.　発見した遺構と遺物

第4次調査で発見した遺構には、掘立柱建物跡30棟、井戸跡15基、土壙12基、溝跡25条、焼土遺構1基、畝状遺構などがある。以下、主な遺構とその出土遺物について概要を述べ、その後に堆積層出土の遺物について説明する。

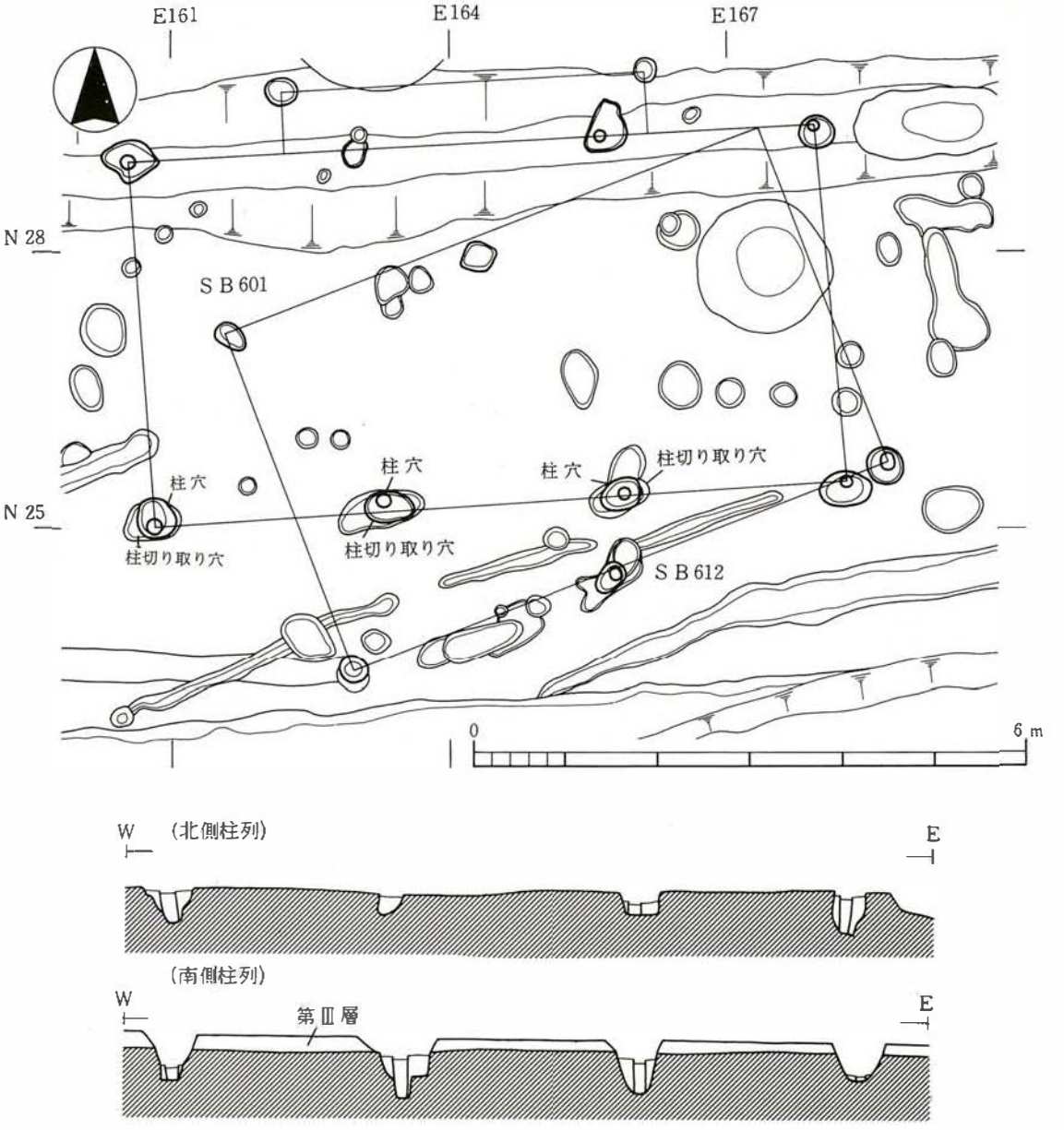
A．掘立柱建物跡

(1)　SB601建物跡

東西3間、南北1間の東西棟掘立柱建物跡である。柱穴は第Ⅲ層上より掘り込まれている。柱穴はすべて検出しており、北側柱列西より1間目の柱穴を除くすべての柱穴で柱痕跡を確認している。SB612 建物跡、SE681 井戸跡と重複しており、新旧関係はいずれのものとも不明である。本建物跡の方向は、北側柱列でみると東で4度38分北に偏しており、南側柱列でみると東で3度40分北に偏している。桁行については、北側柱列で総長7.42m、柱間は西より5.11m（2間分）・2.32m、南側柱列で総長7.51m、柱間は西より2.50m・2.60m・2.42mである。梁行柱間は東妻で3.88m、西妻で3.97mである。柱穴の平面形は、楕円形を呈するものや不整形のものがあり、規模は長径65cm、短径40cm前後である。柱穴の断面形は逆台形を呈するものが多く、柱の部分を一段深く掘り込んだものもある。柱はいずれも掘り方の底面に接して据えられているが、その底面レベルを比較すると、北側柱列では両端のものが深く、中間の柱穴との比高差は10～18cmである。一方、南側柱列の場合はその反対で、両端のものが浅く比高差は16～18cmである。埋土は地山の小粒を含む黒褐色土である。柱は、柱痕跡より径13～16cmである。本建物跡では南側柱列のすべての柱穴に切り取り穴を確認した。埋土はしまりのない褐灰色砂質土である。北側柱列については近代以降の溝で削平されているため不明である。また、北側柱列の北に接して、2個の小柱穴からなる柱列を検出した。本建物を南北の中軸線で折り返した際、これらはほぼ対称の位置にくることから、本建物跡の北側柱列に取り付く縁になる可能性がある。この柱穴は、径25～30cmの円形を呈しており、柱痕跡はいずれの柱穴でも確

認していない。縁の出は約0.7mである。

遺物は出土していない。



第8図　SB 601・612建物跡平面図及びSB 601柱穴エレベーション

(2)　SB612建物跡

東西2間、南北1間の東西棟掘立柱建物跡である。柱穴は第Ⅲ層上より掘り込まれている。北東隅の柱穴は、近代以降の溝によって破壊されている。SB601 建物跡、SE681 井戸跡と重複しているが新旧関係は不明である。本建物跡の方向は、南側柱列でみると東で約22度北に

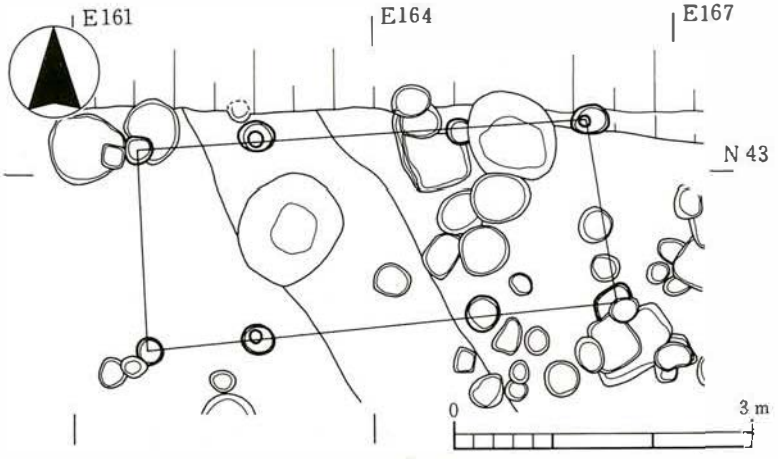
偏している。桁行は南側柱列で総長約6.2ｍ、柱間は西より約3.0ｍ・3.18mである。梁行柱間は西妻で約3.9ｍである。柱穴は、径42cmの円形や、長径36cm・短径26cmの楕円形のものなどがある。埋土は地山の小粒を含む黒褐色土である。柱は、柱痕跡より径約14cmである。

遺物は出土していない。

(3) ＳＢ602建物跡

東西３間、南北１間の東西棟掘立柱建物跡である。第Ⅳ層上で検出した。柱穴は南東隅のものが一部破壊されているほかはすべて検出し、そのうち三つの柱穴で柱痕跡を確認している。ＳＤ645・656溝跡、ＳＢ628・629建物跡、ＳＥ688井戸跡と重複しており、ＳＤ645溝跡より新しくＳＢ629建物跡、ＳＤ656溝跡より古い。他の遺構との新旧関係は不明である。本建物跡の方向は、北側柱列でみると、東で約３度北に偏している。桁行は北側柱列で総長約4.5ｍ、柱間は西より約1.2m・3.28m（２間分）、南側柱列で総長約7.7ｍ、柱間は西より約1.1ｍ・約2.3m・約1.3mであり、西妻より１間目に比べ２間目がやや広い。梁行柱間は、東妻が約1.9ｍ、西妻が約2.0mである。柱穴は、径25～30cmの円形を呈し、埋土は地山小粒を含む黒褐色土である。柱は柱痕跡より径10～15cmである。

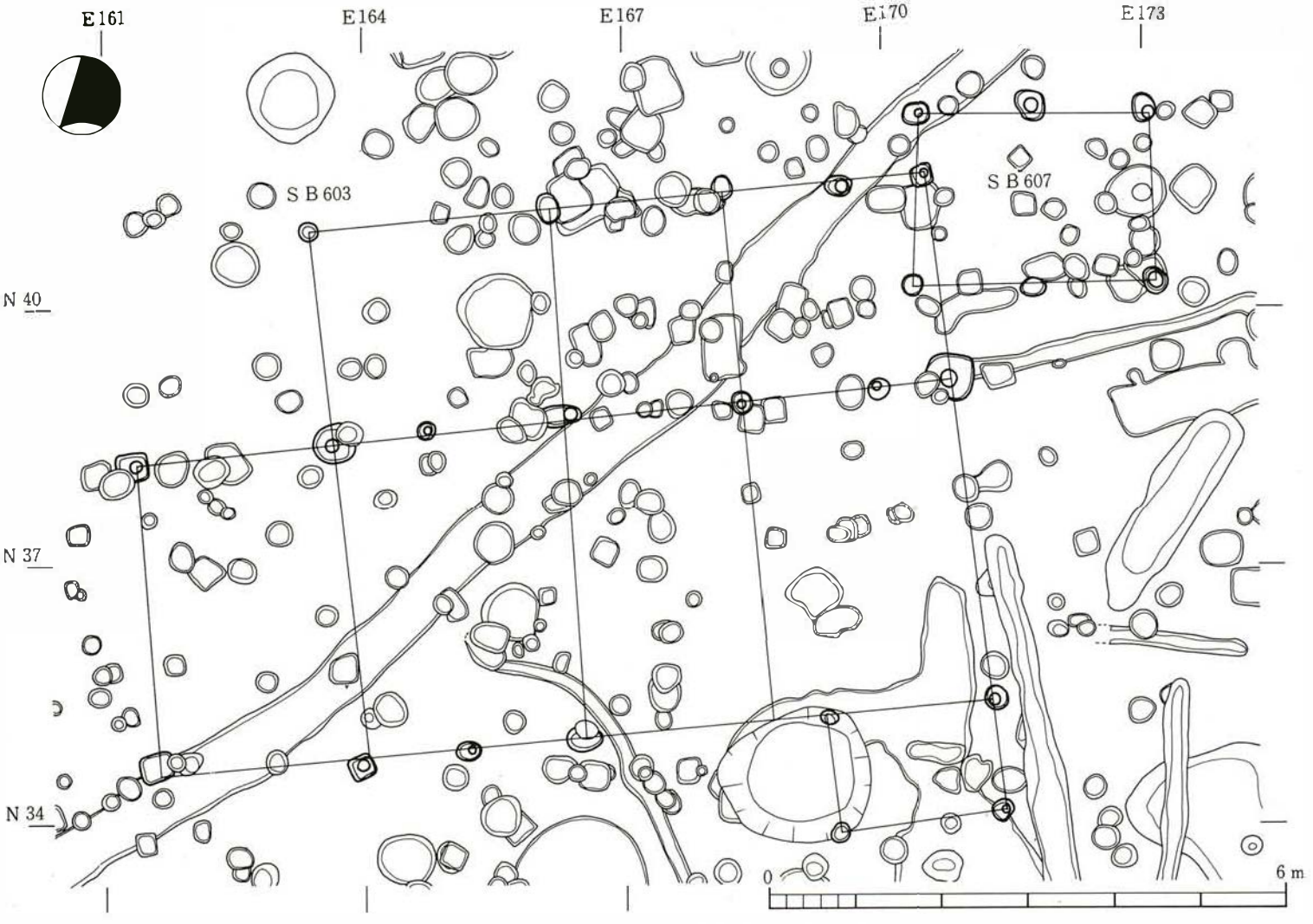
遺物は、埋土から無釉陶器甕の体部破片が１点出土している。



第９図　ＳＢ602建物跡平面図

(4) ＳＢ603建物跡

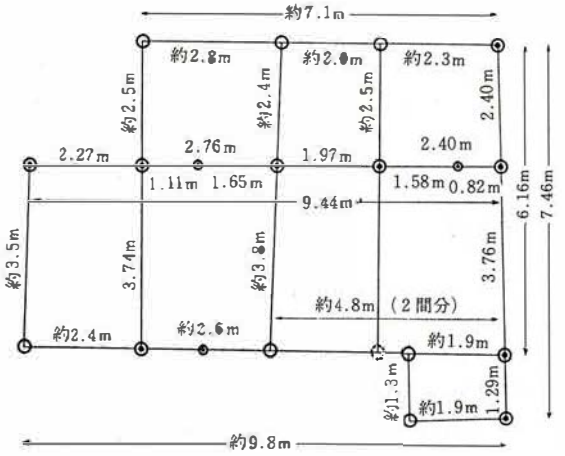
北側に廂、南側に張り出し部を設けた東西棟掘立柱建物跡である。第Ⅳ層上で検出した。身舎は東西４間、南北１間であり、廂はそれと東妻をそろえて東西３間、南北１間である。張り出し部は１間四方であり、身舎南側柱列の東妻から１間目の柱穴（検出できず）の東側に柱穴を設け、そこから南へ１間分出したもので、東側は身舎東妻と柱筋をそろえている。柱穴は身舎南側柱列の内一つを検出できなかったが、他はすべて検出しており、その内９個の柱穴で柱痕跡を確認している。ＳＢ605・606・607・620・622・628・629・630建物跡、ＳＳ677・689井戸跡、ＳＤ644・645・653溝跡と重複しており、ＳＤ644・645・653溝跡、ＳＥ677井戸跡より新しいが、ＳＢ622・630建物跡より古い。他のものとの新旧関係は不明である。本建物



第10図　SB 603・607建物跡平面図

跡の方向は、身舎北側柱列でみると東で5度54分北へ偏している。柱間については模式図（第11図）によって示す。柱穴は身舎北側柱列両の内、東妻と西妻から1間目の二つがやや大きく、径50～60cmの円形を呈している。柱は柱痕跡より径20～17cmである。他の柱穴は径25～35cmの円形を呈するものや長軸40cm・短軸25cmの楕円形を呈するものなど一様ではない。柱は、柱痕跡より径約15cmであるが、南側の張り出しのものは径約10cmと小さい。なお身舎北側柱列で東妻と東妻から1間目の間、身舎入側柱列で東妻と東妻から1間目の間及び西妻と西妻から1間目の間において、柱筋上に柱穴を検出している。これらの規模は他の柱穴と比較してさほど差のないものもあるが、柱痕跡はやや小さめであり間柱と考えられる。

遺物は、柱穴埋土より土師器甕や赤焼き土器杯の小片が数点出土している。



第11図　ＳＢ603模式図

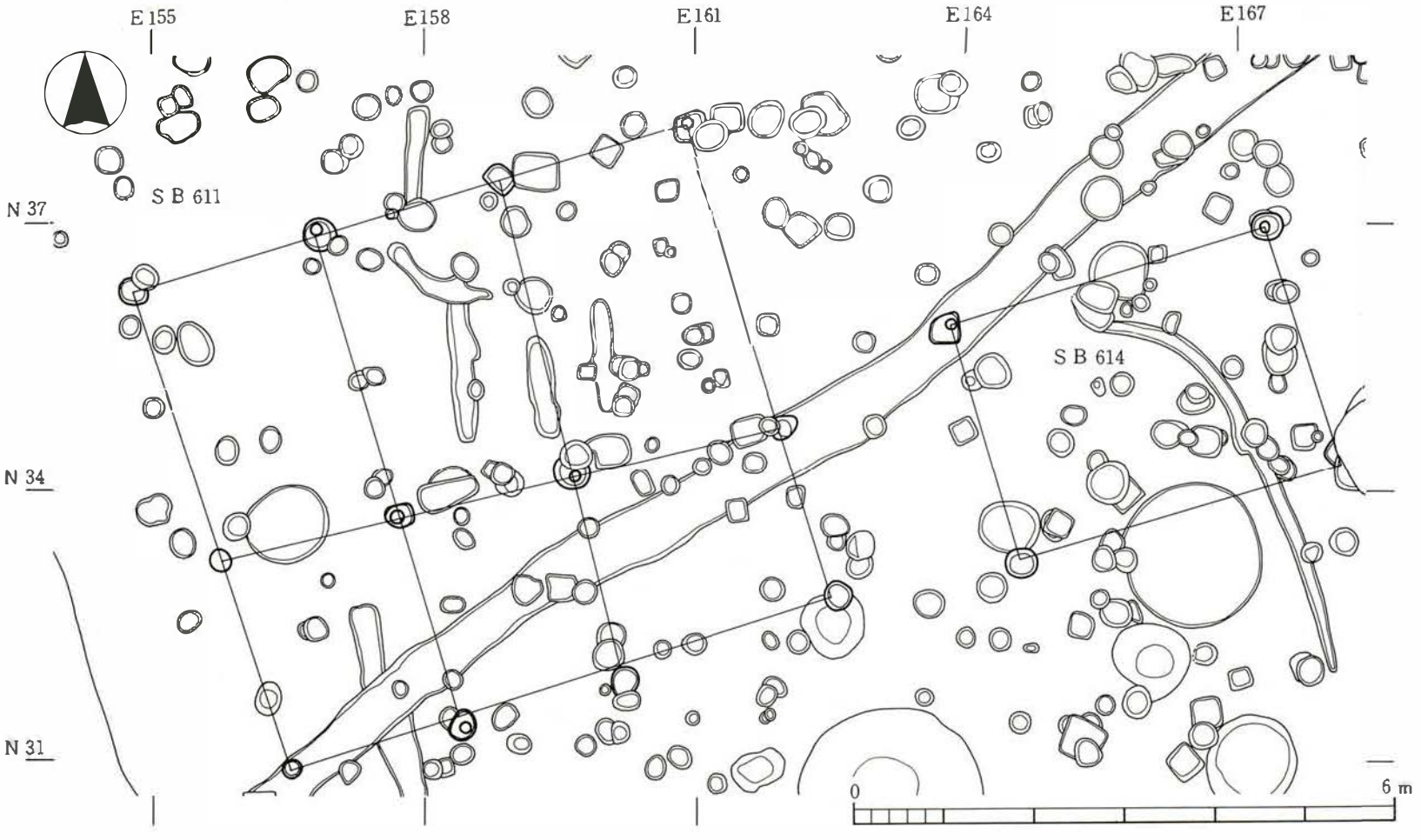
(5)　ＳＢ607建物跡

東西2間、南北1間の東西棟掘立柱建物跡である。第Ⅳ層上で検出した。柱穴はすべて検出しており、そのうち4個の柱穴で柱痕跡を発見している。ＳＢ 603・605・622・630建物跡、ＳＤ 644建物跡と重複しており、ＳＢ 605建物跡、ＳＤ 644溝跡より新しい。他の遺構との新旧関係は不明である。本建物跡の方向は、北側柱列でみると東で0度14分北に偏している。桁行については、北側柱列が総長2.64m、柱間は西より1.28m・1.36mであり、南側柱列は総長約2.8mである。梁行柱間は、東妻が1.94m、西妻が約2.0mである。柱穴は径25～40cmの円形を呈し、柱は柱痕跡より10～18cmである。

遺物は、柱穴から赤焼き土器の小片が出土している。

(6)　ＳＢ611建物跡

東西3間、南北2間の東西棟掘立柱建物跡である。第Ⅳ層上で検出した。内部に2個の柱穴を検出しており、それらは両側柱及び両妻のそれぞれ対面する柱穴の柱筋上に位置している。柱



第12図　ＳＢ611・614 建物跡平面図

穴はすべて検出しており、その内5個の柱穴で柱痕跡を確認している。ＳＢ 620 建物跡、ＳＥ 687 井戸跡、ＳＤ 644 ・ 653 溝と重複しており、ＳＤ 644 ・ 653溝跡より新しいが、ＳＢ 620 建物跡より古い。ＳＥ 687井戸跡との関係は不明である。本建物跡の南側柱筋は後述するＳＢ 614 建物跡の南側柱筋と一致している。本建物跡の方向は北側柱列でみると東で約17度北に偏している。桁行は南側柱列で総長約6.3ｍ、柱間は西より 2.0ｍ ・ 1.8ｍ ・ 2.6ｍ、北側柱列で総長約6.4ｍ、柱間は西より 2.1ｍ ・4.25m（２間分）である。梁行は西妻で総長約 5.6ｍ、柱間は北より 3.2ｍ ・ 2.4ｍ、東妻で総長約5.5ｍ、柱間は北より 3.6ｍ ・ 2.0ｍである。柱穴は径20～40cmの円形あるいは一辺25～35cmの方形を呈し一様ではない。柱は柱痕跡より径約12cmである。

遺物は、柱穴から赤焼き土器杯の小片が１点出土している。

(7) ＳＢ 614建物跡

東西１間、南北１間の東西棟掘立柱建物跡である（註1）。第Ⅳ層上で検出した。ＳＢ 603 ・ 620 建物跡、ＳＥ 677 ・678井戸跡、ＳＤ 644 ・645 溝跡と重複し、ＳＥ 677 井戸跡より古いが、ＳＤ 644 ・ 645 溝跡もり新しい。ＳＢ 620建物跡との関係は不明である。本建物跡の方向は北側柱列でみると、東で北に17度26分偏している。桁行については、北側柱列で3.64m、梁行については西妻で約2.7ｍである。

西に隣接するＳＢ 611 建物跡とは方向をほぼ同じくし、南側柱列は柱筋をそろえている。両建物跡の間隔は、本建物跡南西隅の柱穴とＳＢ 611 建物跡南東隅の柱穴の中心で計ると約２ｍである。遺物は出土していない。

(8) ＳＢ 605建物跡

東西２間、南北１間の東西棟掘立柱建物跡である。第Ⅳ層上で検出した。ＳＢ 603 ・ 607 ・ 622 ・ 630建物跡、ＳＫ 669 土壙、ＳＤ 644 ・ 651 溝跡と重複しており、ＳＤ 644 より新しく、ＳＢ622 建物跡、ＳＫ669 土壙、ＳＤ651 溝跡より古い。他のものとの関係は不明である。本建物跡の方向は、北側柱列でみると東で約1度北に偏している。桁行については北側柱列で総長約3.9ｍ、柱間は西より約2.1ｍ ・1.76m、南側柱列で西より１間分が約2.2ｍである。梁行柱間は西妻で約 3.4ｍである。柱穴の形状は、それぞれ異なり一様ではない。柱は柱痕跡より径14～18cmである。

遺物は出土していない。

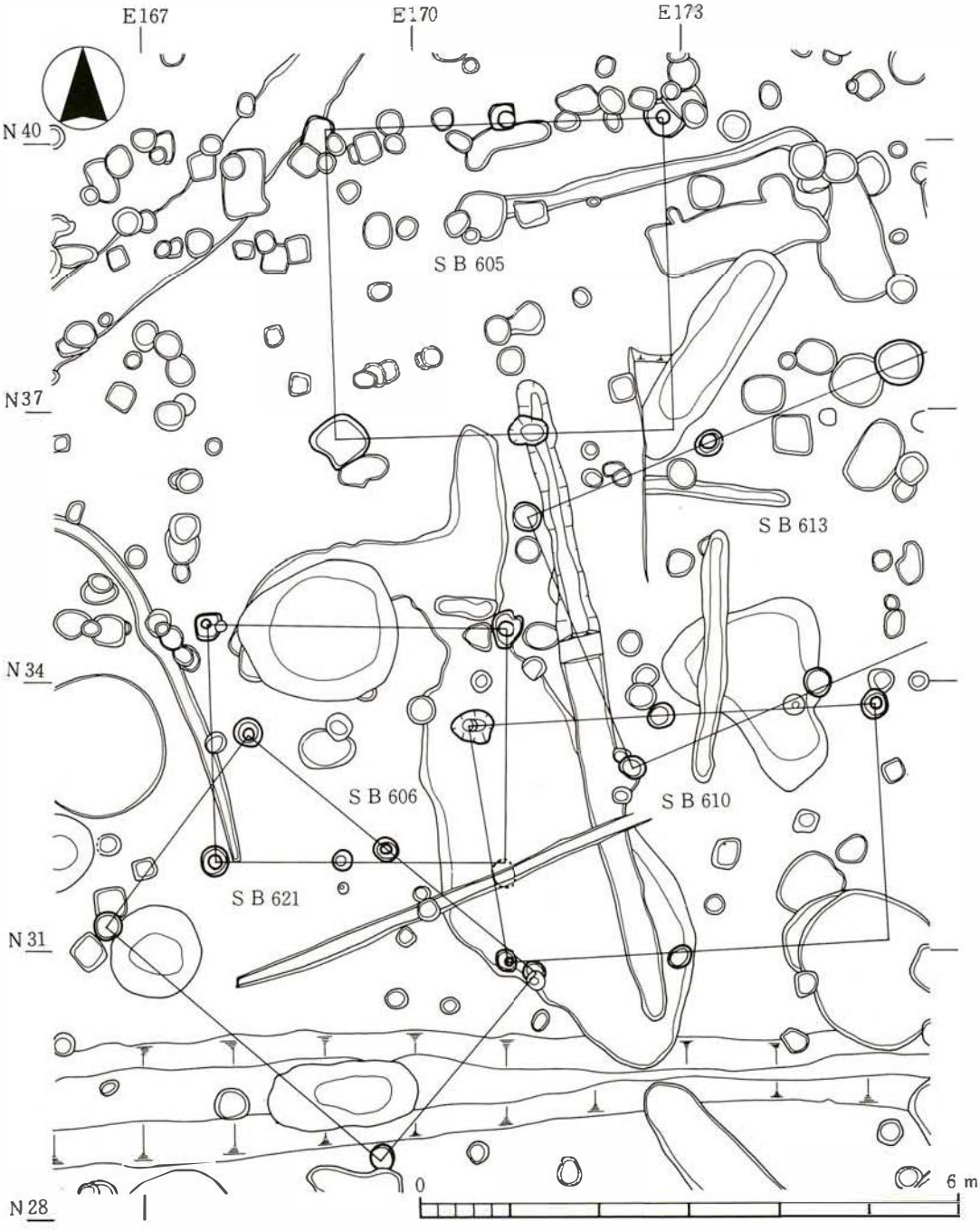
(9) ＳＢ 606建物跡

東西２間、南北１間の東西棟掘立柱建物跡である。第Ⅳ層上で検出した。ＳＢ 603 ・ 610 ・ 621建物跡、ＳＥ 677 井戸跡、ＳＫ 667 土壙と重複しており、ＳＥ 677井戸跡より古く、ＳＫ 667 土壙より新しい。他のものとの新旧関係は不明である。本建物跡の方向は、東で１度23分南

註１　両側柱とも中央が他の遺構と重複しているため桁行が２間となる可能性がある。
他の建物の形態を考慮するとその可能性の方が大きい。

に偏している。桁行については北側柱列で総長3.32m、南側柱列で総長約3.2mである。梁行柱間は西妻で2.64mである。柱穴は径30～35cmの円形や一辺30cmの方形を呈し、柱は柱痕跡より径10～18cmの丸柱である。

遺物は出土していない。



第13図　SB605・606・610・613・621建物跡平面図

(10) ＳＢ610建物跡

東西２間、南北１間の東西棟掘立柱建物跡である。第Ⅳ層上で検出した。南東隅の柱穴はＳＥ 680 井戸によって破壊されており、検出できなかった。柱痕跡は２つの柱穴で確認してる。ＳＢ 606 ・ 613 ・ 621 ・ 624 ・ 625 建物跡、ＳＥ 680井戸跡、ＳＫ 672 ・677土壙、ＳＤ651・653溝跡と重複しており、ＳＫ667土壙より新しく、ＳＢ625建物跡、ＳＥ680井戸跡より古い。他のものとの新旧関係は不明である。本建物跡の方向は、北側柱列でみると東で約3度北に偏している。桁行は北側柱列で総長約4.5ｍ、柱間は西より2.1ｍ・2.4ｍである。梁行柱間は西妻で約2.7ｍである。柱穴は長径45㎝、短径38㎝の楕円形や径28～32㎝の円形を呈している。

遺物は出土していない。

(11) ＳＢ613建物跡

東西２間以上、南北１間の東西棟掘立柱建物跡である。第Ⅳ層上で検出した。ＳＢ 603 ・610 ・ 627建物跡、ＳＫ 672 土壙、ＳＤ 651 ・653 溝跡と重複しており、ＳＫ 672 土壙、ＳＤ 651 ・653溝跡より新しい。他のものとの新旧関係は不明である。本建物跡の方向は、北側柱列でみると東で約22度北に偏している。桁行については北側柱列で西より約2.2ｍ・約2.3ｍであり、南側柱列で約2.3ｍである。桁行柱間は西妻で約3.0ｍである。柱穴は径３０㎝の円形を呈し、柱は柱痕跡より径18㎝である。

遺物は出土していない。

(12) ＳＢ621建物跡

東西２間、南北１間の東西棟掘立柱建物跡である。第Ⅳ層上で検出した。南側柱列の中央の柱穴は、近代以降の溝によって破壊されている。ＳＢ 606 ・ 610建物跡、ＳＥ 679 井戸跡、ＳＫ667土壙と重複しており、ＳＥ679井戸跡、ＳＫ667土壙より新しい。本建物跡の方向は、北側柱列でみると東で約40度南に偏している。桁行については北側柱列で総長約4.2ｍ、柱間は西より1.93ｍ・約2.2ｍであり、南側柱列で総長約4.0ｍである。梁行柱間はいずれも約2.6ｍである。柱穴は径26～32㎝の円形を呈し、柱は柱痕跡より径12～16㎝である。

遺物は出土していない。

(13) ＳＢ628建物跡

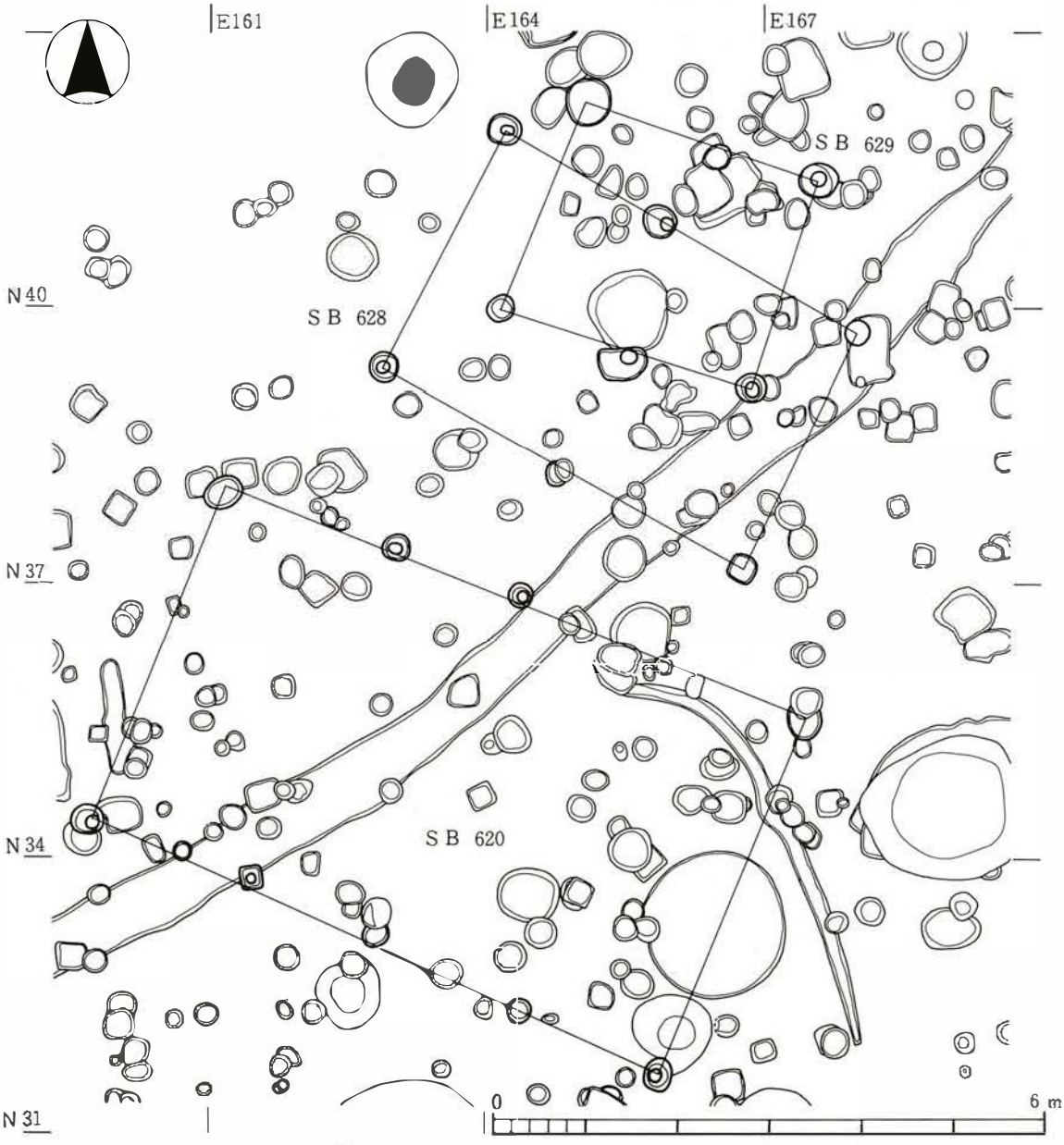
東西２間、南北１間の東西棟掘立柱建物跡である。第Ⅳ層上で検出した。柱穴はすべて検出し、そのうち３か所で柱痕跡も確認している。ＳＢ602・603・629建物跡、ＳＤ645溝跡、ＳＥ689井戸跡と重複しており、ＳＤ645溝跡より新しいが他のものとの新旧関係は不明である。本建物跡の方向は、北側柱列でみると東で約31度南に偏している。桁行については北側柱列で総長約4.4ｍ、柱間は西より2.0ｍ・約2.4ｍ、南側柱列で総長約4.5ｍ、柱間は西より約2.2ｍ・約2.3ｍである。梁行柱間は西妻で2.90ｍ、東妻で約2.9ｍである。柱穴は径24～38㎝の円形を呈す

るものと一辺30cmの方形を呈するものがあり、柱は柱痕跡より径14cmである。

遺物は、柱穴埋土より赤焼き土器杯の底部破片１点が出土している。

⑭　ＳＢ620建物跡

東西４間、南北１間の東西棟掘立柱建物跡である。第Ⅳ層上で検出した。柱穴はすべて検出した。ＳＢ603・611・614建物跡、ＳＥ678・690井戸跡、ＳＤ644・653溝跡と重複しており、ＳＤ 644 ・653 溝跡、ＳＥ 690 井戸跡より新しい。他の遺構との新旧関係は不明である。本建物跡の方向は、南側柱列でみると東で23度15分南に偏している。桁行については北側柱列で総長約6.3ｍ、柱間は西より1.5ｍ・2.2ｍ・2.7ｍであり、南側柱列は総長6.4ｍ、柱間は西



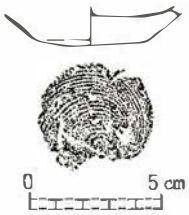
第14図　ＳＢ620・628・629建物跡平面図

より2.3ｍ・1.8ｍである。梁行柱間は東妻が約4.2ｍ、西妻が約3.9ｍである。柱穴は四隅の柱がやや大きく径33～41cmの円形、または一辺40cmの方形を呈している。他の柱穴は径約33cmの円形または一辺25cmの方径を呈している。柱は柱痕跡より径約15cmである。また本建物跡の両側柱列では、西妻と西妻より１間目の柱穴との間に間柱と考えられる柱穴を検出している。これらの規模は、他の柱穴に比べて小規模であり、径20～25cmの円形を呈している。柱痕跡を確認しているものはない。本建物跡を棟通りで折り返すと、これらはほぼ同位置にある。

遺物は、柱穴から土師器杯・赤焼き土器杯の小片が出土している。

(15) ＳＢ629建物跡

東西２間、南北１間の東西棟掘立柱建物跡である。第Ⅳ層上面で検出した。柱穴はすべて検出しており、東妻の２個の柱穴で柱痕跡を確認している。ＳＢ602・603・628建物跡、ＳＤ644・645溝跡、ＳＥ689井戸跡と重複しており、ＳＢ602建物跡、ＳＤ644・645溝跡より新しい。他のものとの新旧関係は不明である。本建物跡の方向は、東妻でみると北で17度45分東に偏している。桁行については、北側柱列で総長約2.6ｍ、柱間は西より約1.5ｍ・約1.1ｍ、南側柱列で総長約2.8ｍ、柱間は西より約1.4ｍ・1.45ｍである。梁行柱間は東妻で2.4ｍ、西妻で約2.4ｍである。



第15図 ＳＢ629建物跡出土土器

遺物は柱穴埋土よりカワラケが１点出土している。ロクロ調整されており底部には回転糸切り痕を残している。胎土には砂粒を含み、赤褐色を呈している（第15図）。

(16) ＳＢ608建物跡

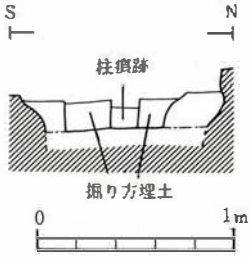
調査区東壁際で検出した掘立柱建物跡である。大半が調査区外にあたるため規模などは不明であるが、南にのびる可能性は少ないであろうという仮定のもとに検出した３個の柱穴を西妻と北側柱の一部と見て、東西２間以上、南北１間の東西棟と考えておきたい。柱穴は第Ⅲ層上から掘り込まれている。ＳＢ604・624建物跡、ＳＥ683井戸跡と重複しており、ＳＥ683井戸跡より古いが他のものとの新旧関係は不明である。本建物跡の方向は、北側柱列でみると東で約８度北に偏している。桁行柱間1.60ｍ、梁行柱間は約2.3ｍである。柱穴は径30cmの円形を呈し、柱は柱痕跡より径約13cmである。

遺物は出土していない。

(17) ＳＢ604建物跡

調査区東壁際で検出した掘立柱建物跡である。３個の柱穴を検出したにすぎないが、それらを西妻と南側柱とみれば東西１間以上・南北１間の東西棟と考えられる。柱穴は第Ⅲ層上から掘り込まれている。ＳＢ608・624・625建物跡、ＳＥ680・683井戸跡と重複しており、ＳＥ680井戸跡より新しくＳＥ683井戸跡より古い。他の遺構との新旧関係は不明である。本建

物跡の方向は、南側柱列でみると東で約3度北に偏しているが、西妻は発掘基準線とほぼ一致している。桁行柱間は南側柱列で西より1間分が1.62mであり、梁行柱間は3.48mである。柱穴は径50～80cmの円形を呈している。北西隅の柱穴で見ると、壁はほぼ垂直に掘り込まれており、深さは約38cmである。埋土は地山小粒を含む黒褐色土である。柱は柱痕跡より径14～20cmである。



第16図　SB 604建物跡北西隅柱穴断面図

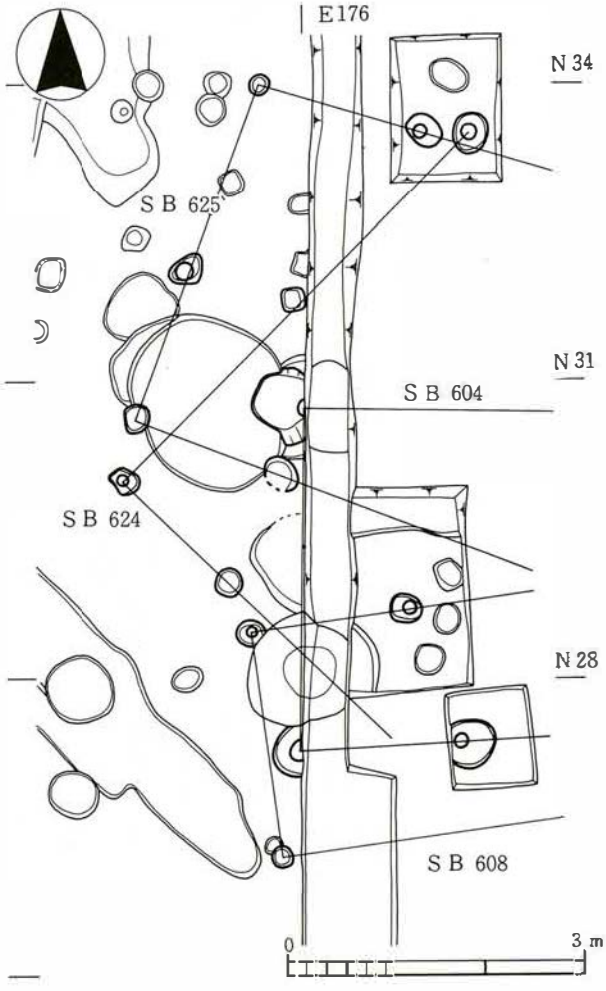
遺物は出土していない。

(18)　SB 625建物跡

調査区東壁際で検出した掘立柱建物跡である。東半部が調査区外へ出るため全体の規模は不明であるが、検出した5個の柱穴を西妻と両側柱列の一部と考え、一応東西2間以上、南北2間の東西棟と考えておきたい。柱穴は第Ⅲ層上から掘り込まれている。SB 604・610・624建物跡、SE 680井戸跡と重複しており、SB 610建物跡、SE 680井戸跡より新しいが他のものとの新旧関係は不明である。本建物跡の方向は、西妻で見ると北で約22度東に偏している。桁行柱間は西妻より1間目が北側柱列で約1.7m、南側柱列で約1.6mである。梁行は総長約3.6m、柱間は北より約2.0m・約1.6mである。柱穴は径20～32cmの円形を呈し、柱は柱痕跡より径14cmである。

第16図　SB 625出土古銭

遺物は、柱穴埋土より古銭〔文久永宝〕(1863年鋳造)が1点出土している(第16図)。劣化が著しく、背文は不明。



第17図　SB 604・608・624・625建物跡平面図

(19) ＳＢ 624 建物跡

調査区東壁際で検出した掘立柱建物跡である。大半が調査区外へ出るため規模など不明であるが、検出した4個の柱穴を西妻と北側柱列の一部と見て、一応東西2間以上、南北2間以上の東西棟と考えておきたい。柱穴は第Ⅲ層上より掘り込まれている。ＳＢ 604 ・ 608 ・ 625 建物跡、ＳＥ 680 ・ 683 井戸跡と重複しているが新旧関係は不明である。本建物跡の方向は、北側柱列でみると東で約38度北に偏している。桁行柱間は２間分で4.94m であり、梁行柱間は北より１間分で約１.5ｍである。柱穴は長径44cm、短径30cmの楕円形を呈し、柱は柱痕跡より径12～16cmである。　遺物は出土していない。

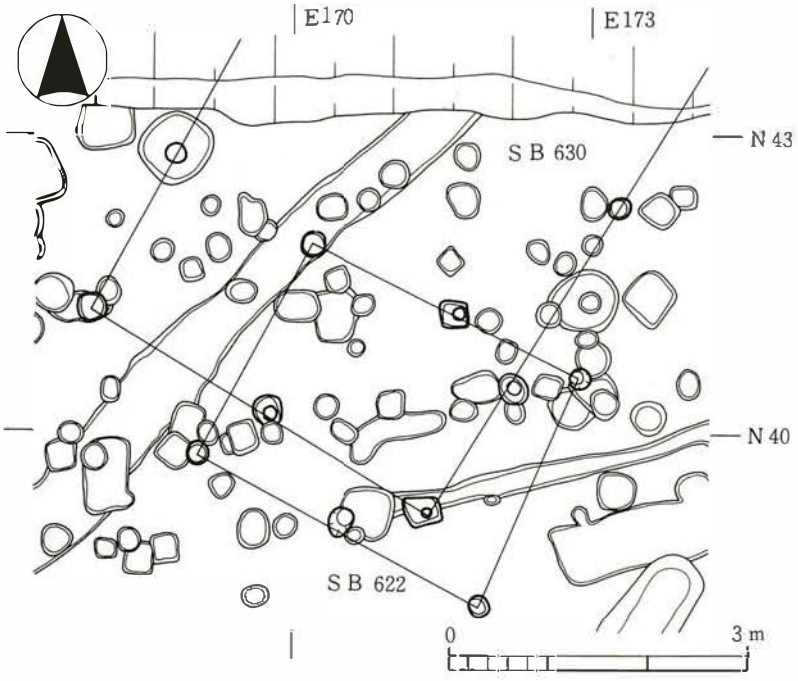
(20) ＳＢ 622建物跡

東西２間、南北１間の東西棟掘立柱建物跡である。第Ⅳ層上で検出した。柱穴はすべて検出している。ＳＢ603・605・607・630建物跡、ＳＤ644溝跡と重複しており、ＳＢ603・605建物跡、ＳＤ 644 溝より新しい。他の遺構との新旧関係は不明である。本建物跡の方向は、北側柱列でみると東で約29度南へ偏している。桁行は北側柱列が総長約3.0ｍ、南側柱列が総長約3.2ｍである。梁行柱間は、東妻が約2.5ｍ、西妻が約2.4ｍである。柱穴は径約18～25cmの円形、または30cm四方の方形を呈している。柱は柱痕跡より径12～20cmである。

遺物は、柱穴埋土からカワラケの小片が１点出土している。

(21) ＳＢ 630建物跡

東西２間、南北３間以上の南北棟掘立柱建物跡である。第Ⅳ層上で検出した。ＳＢ 603・607



第18図　SB 622・630建物跡平面図

・622建物跡、ＳＤ644・656溝跡と重複しており、ＳＤ656溝跡より古いがＳＤ644溝跡、ＳＢ603建物跡より新しい。他のものとの新旧関係は不明である。本建物跡の方向は、南妻でみると東で約30度南に偏している。桁行柱間は、東側柱列では南より1.52m・約2.1ｍ以下不明であり、梁行柱間は総長約4.0ｍ、柱間は西より約2.1ｍ・1.88ｍである。柱穴は径約30cmの円形や30×36cmの長方形を呈しており、柱は柱痕跡より径10～17cmである。

遺物は、柱穴埋土より無釉陶器擂鉢の体部破片１点が出土している。

(22) ＳＢ616建物跡

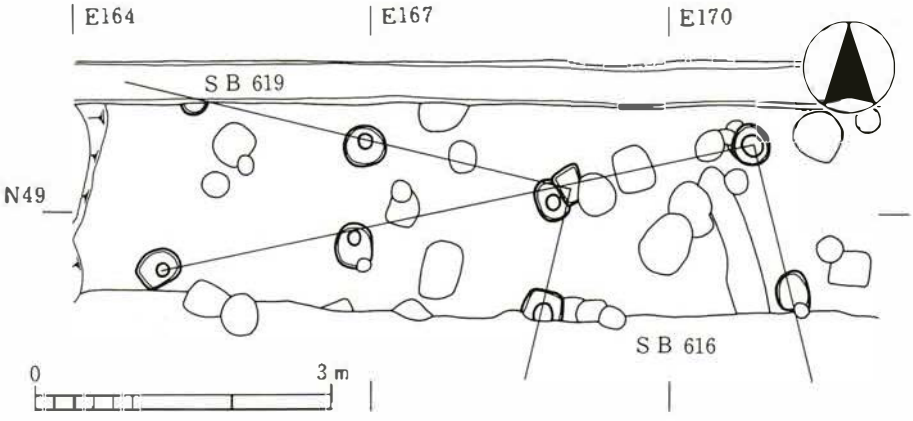
東西３間以上、南北１間以上の東西棟掘立柱建物跡である。第Ⅳ層上で検出した。北側柱列と東妻の一部を検出したにとどまり、全体の規模は不明である。ＳＢ617・618・619建物跡と重複しており、ＳＢ618・619建物跡より古い。ＳＢ617建物跡との新旧関係は不明である。本建物跡の方向は、北側柱列でみると東で11度54分北に偏している。桁行柱間は、東より2.08m・2.03ｍ・1.97mであり桁行３間の建物とすれば総長6.07ｍとなる。梁行柱間は北側柱列より１間分が約1.5mである。柱穴は30～40cmの円形を呈し、柱痕跡より径14～20cmである。

遺物は出土していない。

(23) ＳＢ619建物跡

調査区北端部で検出した掘立柱建物跡である。本建物跡は、西側の攪乱より西にはのびていないので、東西は３間の建物と見ることができる。一応東西３間、南北１間以上の東西棟と考えておきたい。第Ⅳ層上で検出した。ＳＢ616・618建物跡、ＳＤ655溝跡と重複しており、ＳＢ616建物跡より新しく、ＳＢ618建物跡、ＳＤ655溝跡より古い。本建物跡の方向は北側柱列でみると東で約12度17分南に偏している。桁行柱間は東から約2.1ｍ・1.8ｍであり、梁行柱間は約1.3ｍである。柱穴は径40cmの円形を呈するものと、方形を呈するものがある。柱は柱痕跡より径14～18cmである。

遺物は出土していない。



第19図　ＳＢ616・619建物跡平面図

(24) ＳＢ 617建物跡

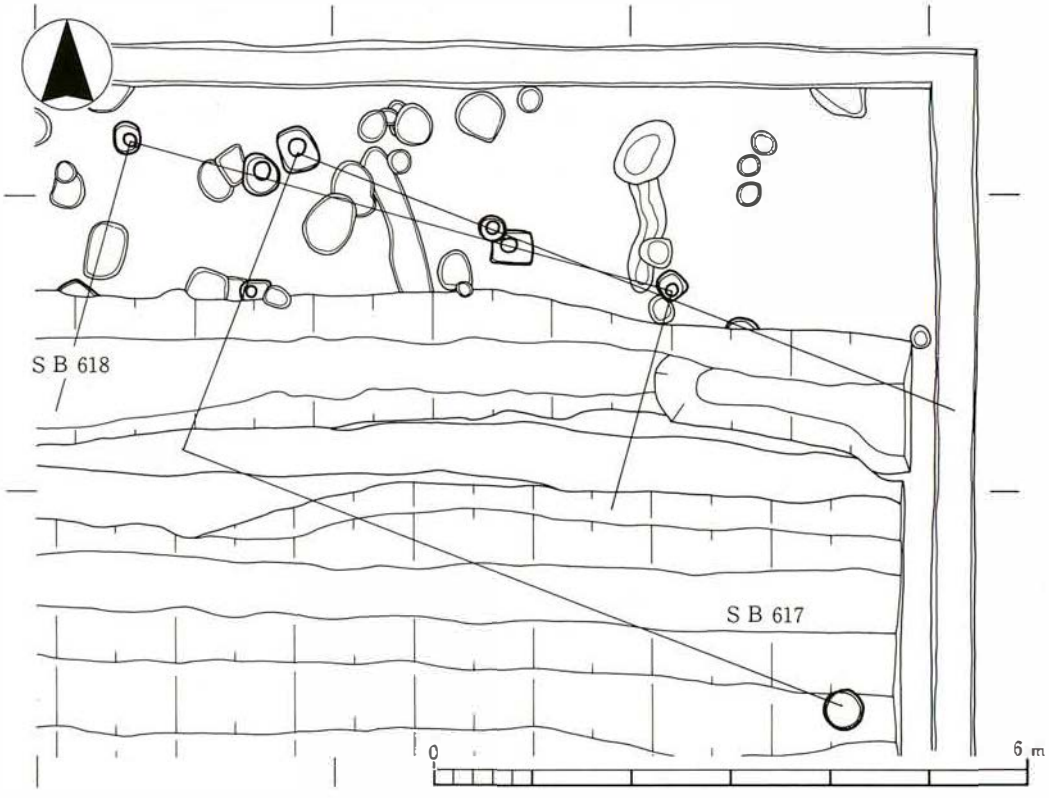
調査区北端部で検出した掘立柱建物跡である。南半部が大きく破壊されているため全体の規模は不明であるが、一応、東西３間以上、南北２間の東西棟と考えておきたい。第Ⅳ層上で検出した。ＳＢ 618 ・ 616 建物跡、ＳＤ 655 ・ 656 溝跡と重複しており、ＳＤ 655 ・ 656 溝跡より古く、ＳＢ 618 建物跡より新しい。ＳＢ 616建物跡との新旧関係は不明である。本建物跡の方向は、北側柱列でみると東で約25度南に偏している。柱間は、北側柱列で西より2.34m ・約 2.6 m 以下不明であり、梁行は総長約 3.0 m と推定される。柱穴は45×40cm、40×35cmの方形、あるいは径40cmの円形を呈している。柱は柱痕跡より径14～18cmである。

遺物は出土していない。

(25) ＳＢ 618建物跡

東西３間、南北１間以上の東西棟掘立柱建物跡である。第Ⅳ層上で検出した。北側柱列ではすべての柱穴で柱痕跡を確認している。ＳＢ616・617・619建物跡と重複しており、それらより新しい。本建物跡の方向は、北側柱列で見ると東で15度58分南に偏している。桁行は北側柱列が総長5.67m 、柱間は西より1.37m ・2.38m ・1.93m である。柱穴は径25～40cmの円形を呈し、柱は柱痕跡より径14 ～18cmである。

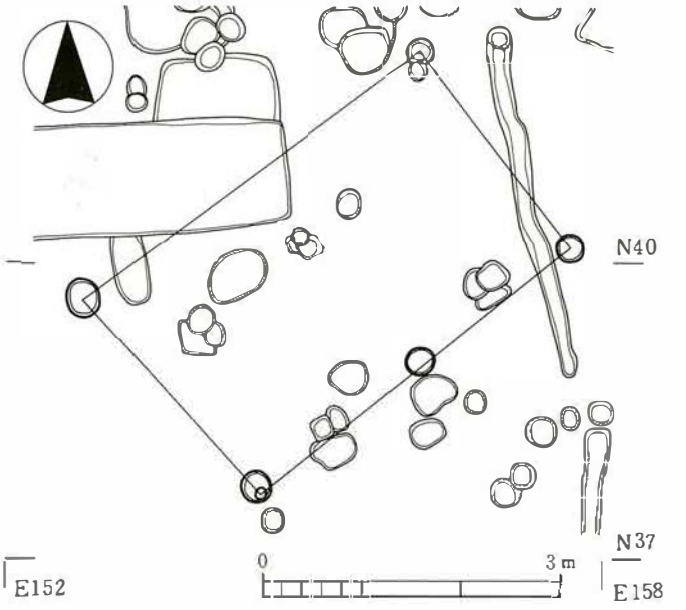
遺物は出土していない。



第20図　ＳＢ 617 ・618建物跡平面図

(26) ＳＢ 623建物跡

東西２間、南北１間の東西棟掘立柱建物跡である。第Ⅳ層上で検出した。柱穴は北側柱列の中央の柱穴が試掘の際のトレンチにより破壊されている。本建物跡の方向は、南側柱列でみると東で約39度北に偏している。桁行については南側柱列で総長約４.０ｍ、北側柱列で約4.２ｍである。梁行柱間は東妻で約2.5ｍ、西妻で約2.7ｍである。柱穴は径26～40cmの円形を呈し、柱は柱痕跡より径14cmである。



第21図　ＳＢ 623建物跡平面図

遺物は、柱穴埋土より近世以降のものと思われる施釉陶器（図版 22－４）が１点出土している。蓋の体部破片と見られ、外面には褐色の釉がかけられている。内面にも施釉されているが、白っぽくかすれた状態である。胎土は橙色を呈している。

(27) ＳＢ 615建物跡

調査区東壁際で検出した掘立柱建物跡である。４個の柱穴を検出したにとどまったため規模、形態については不明であるが、北へ延びる可能性は小さいであろうという仮定のもとに南北２間、東西１間の南北棟あるいは東西２間以上、南北２間の東西棟の両者が考えられる。ここでは一応後者としておきたい。柱穴は第Ⅲ層上より掘り込まれている。本建物跡の方向は、西妻で見ると北で約13度西に偏している。柱間については明確には示し得ないが南側柱列で西より１間分が約３.１ｍ、梁行柱間は西妻が総長約３.８ｍ、柱間は約1.９ｍである。柱穴は径40～46cmの円形あるいは一辺48cmの方形を呈し、柱は径15cmである。

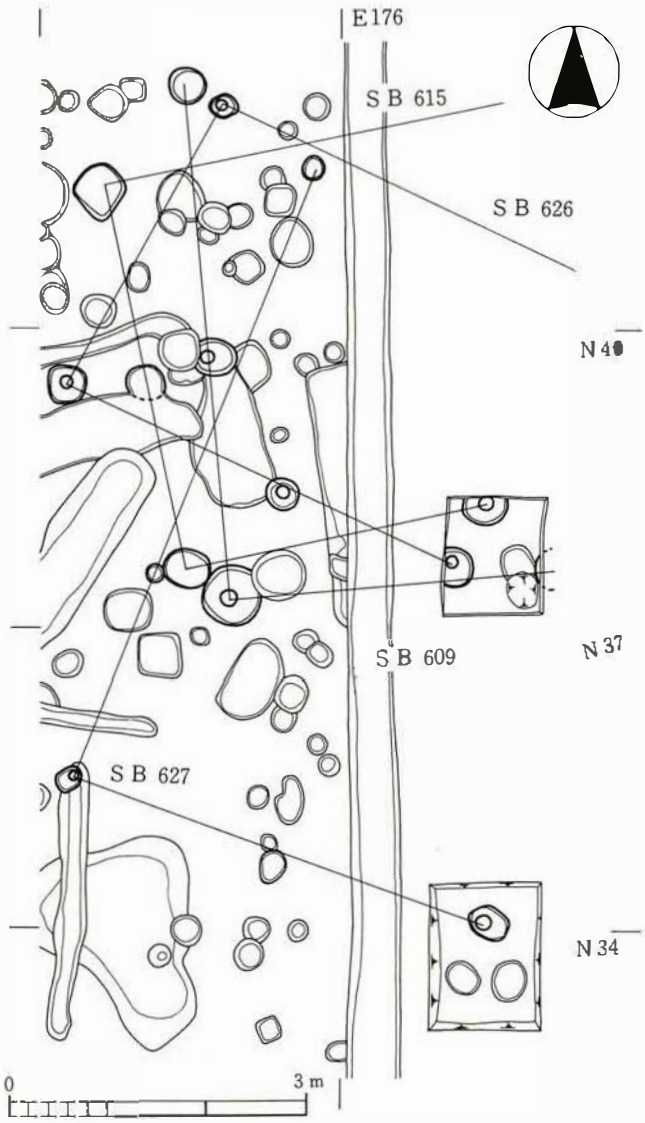
遺物は出土していない。

(28) ＳＢ 609建物跡

南北２間以上、東西１間以上の掘立柱建物跡である。４個の柱穴を検出したにとどまったため、形態や規模については不明である。柱穴は第Ⅲ層より掘り込んでいる。ＳＢ 615・626・627建物跡、ＳＤ 653溝跡、ＳＫ 670土壙と重複し、ＳＫ 670土壙より新しい。他のものとの新旧関係は不明である。本建物跡の方向は、南北の柱列でみると北で約５度西に偏している。東西

の柱間は約3.1ｍ、南北の柱間は北より約2.4ｍ・約2.7ｍである。

遺物は出土していない。



第22図　ＳＢ 609・615・626・627建物跡平面図

(29)　ＳＢ 626建物跡

調査区東壁際で検出した掘立柱建物跡である。東半分は調査区外へ出るため４個の柱穴を検出したにすぎないが、それらを西妻と南側柱列の一部と見て、一応東西２間以上、南北１間の東西棟と考えておきたい。柱穴は第Ⅲ層上から掘り込まれている。ＳＢ 609・615・627 建物跡、ＳＫ 670 土壙と重複しており、ＳＫ 670 土壙より古いが他のものとの新旧関係は不明である。本建物跡の方向は、南側柱列でみると東で約25度南に偏している。桁行柱間は西より2.41m・1.82m であり、梁行柱間は3.20m である。柱穴は径30～40cmの円形を呈しており、埋土は黒褐色の砂質土である。柱は柱痕跡より径12cmである。

遺物は出土していない。

(30)　ＳＢ 627建物跡

調査区東壁際で検出した掘立柱建物跡である。東側が調査区外へ出るため規模などは不明であるが、検出した５個の柱穴を南妻と西側柱列の一部とみて、南北３間以上、東西２間以上の南北棟と考えておきたい。柱穴は第Ⅲ層上から掘り込まれている。ＳＢ 609・613・615・626 建物跡、ＳＫ 670 土壙などと重複しており、ＳＫ 670 土壙より古いが他のものとの新旧関係は

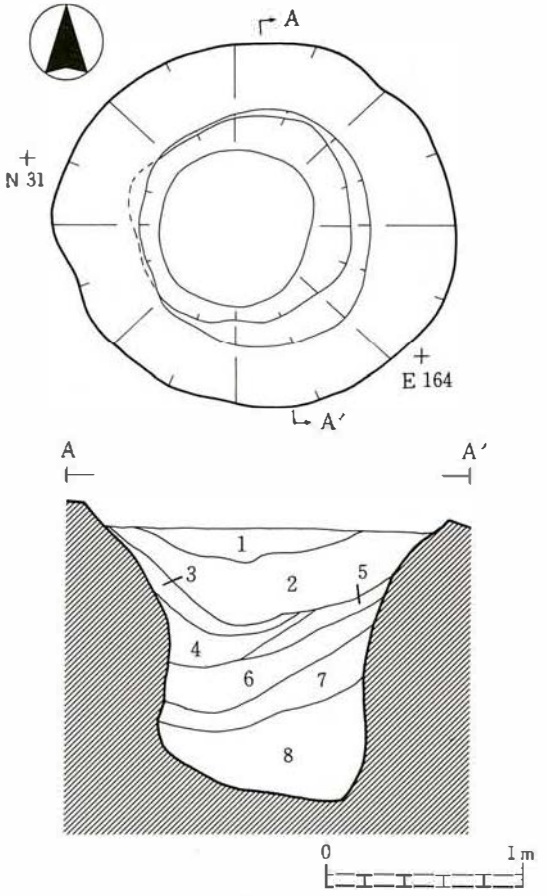
不明である。本建物跡の方向は、南妻でみると東で約19度南に偏している。柱間については、南妻が2間分で4.33mである。桁行は3間分約6.5mまで検出した。柱穴は長径42cm、短径30cmの楕円形を呈し、柱は柱痕跡より径12～14cmである。

遺物は出土していない。

B．井戸跡

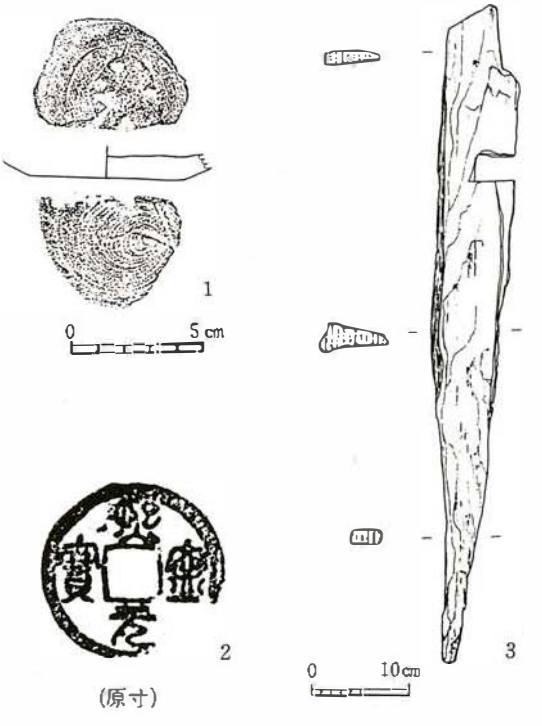
(1) SE676井戸跡

調査区北半部の第Ⅳ層上で検出した素掘りの井戸跡である。平面形は円形を呈し、規模は直径2.0m、深さ1.4mである。埋土は地山である褐灰色砂質土の小ブロックや炭化物を多く含



番号	土色	土性・混入物・その他	層位
1	暗褐色	砂質土。炭化物を含む。	ℓ～1
2	〃	〃 褐色色砂質土粒や小ブロック、炭化物を含む。	〃
3	褐灰色	〃 〃 〃 のブロックを多く含む。	〃
4	黒褐色	粘性あり。上層(北側)には褐灰色砂質土が混じる。	〃
5	〃	〃 〃 (南側) 〃 〃 〃	〃
6	〃	青灰色砂質土と多量の黒褐色粘性土を含む。	ℓ～2
7	青灰色	黒褐色粘質土と多量の青灰色砂質土を含む。	〃
8	〃	黒褐色粘質土粒少し含む。	〃

第23図　SE 676井戸跡



番号	遺物名	層位	図版	登録No.
1	カワラケ			
2	古銭	ℓ～1	44-15	
3	欠き取りのある板	ℓ～1		

第24図　SE 676井戸跡出土遺物

む上層（１～５層）と青灰色の砂質土を主体とする下層（６～８層）とに大別される。下層は南から北へ傾斜して堆積しており、上の層になるほど混入物を多く含んでいる。また上層でも下の方（４・５層）はグライ化して粘性を帯びている。

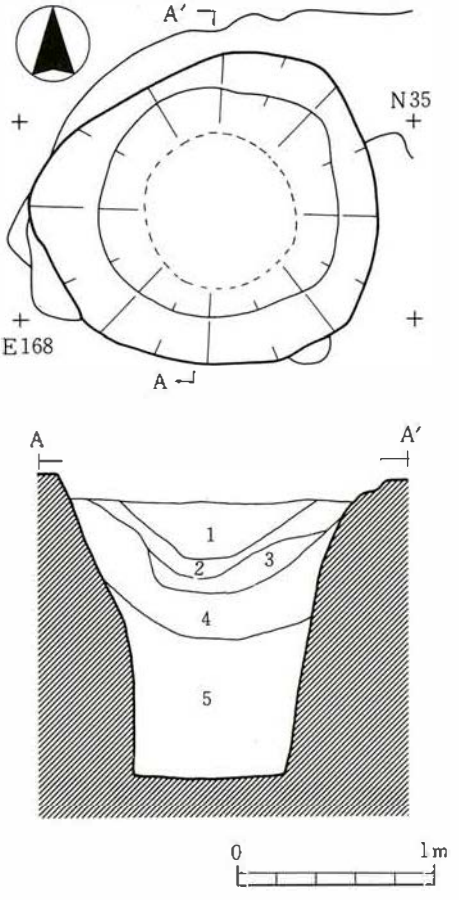
遺物はカワラケ、須恵器、土師器、赤焼き土器、瓦、古銭〔熙寧元宝〕(1068年初鋳)、欠き取りのある板などが出土している。第24図２はカワラケの底部破片資料である。外面には回転糸切り痕がみられ、内面には見込みに沿って粗くナデつけた痕跡が認められる。

(2) SE 677 井戸跡

調査区北半部のＳＤ 653溝跡の埋土上で検出した素掘りの井戸跡である。ＳＢ 603・606建物跡、ＳＤ 645溝跡、ＳＫ 667土壙と重複しており、ＳＢ 603建物跡より古いが他のものよりは新しい。平面形は多少歪みがあるがほぼ円形を呈し、規模は直径1.7ｍ、深さ1.6ｍである。埋土は上中下の３つに大別できる。５層は青灰色の砂質土や粘質土から成るしまりのない土で底面から中頃まで厚く堆積している。壁の崩落土かと考えられる。１～３層は地山の小ブロックや炭化物を含む層がレンズ状に堆積している。４層はグライ化して粘性を帯びている。各層からは比較的多くの遺物が出土しており、ほとんどのものが破損後廃棄された状況を呈している。

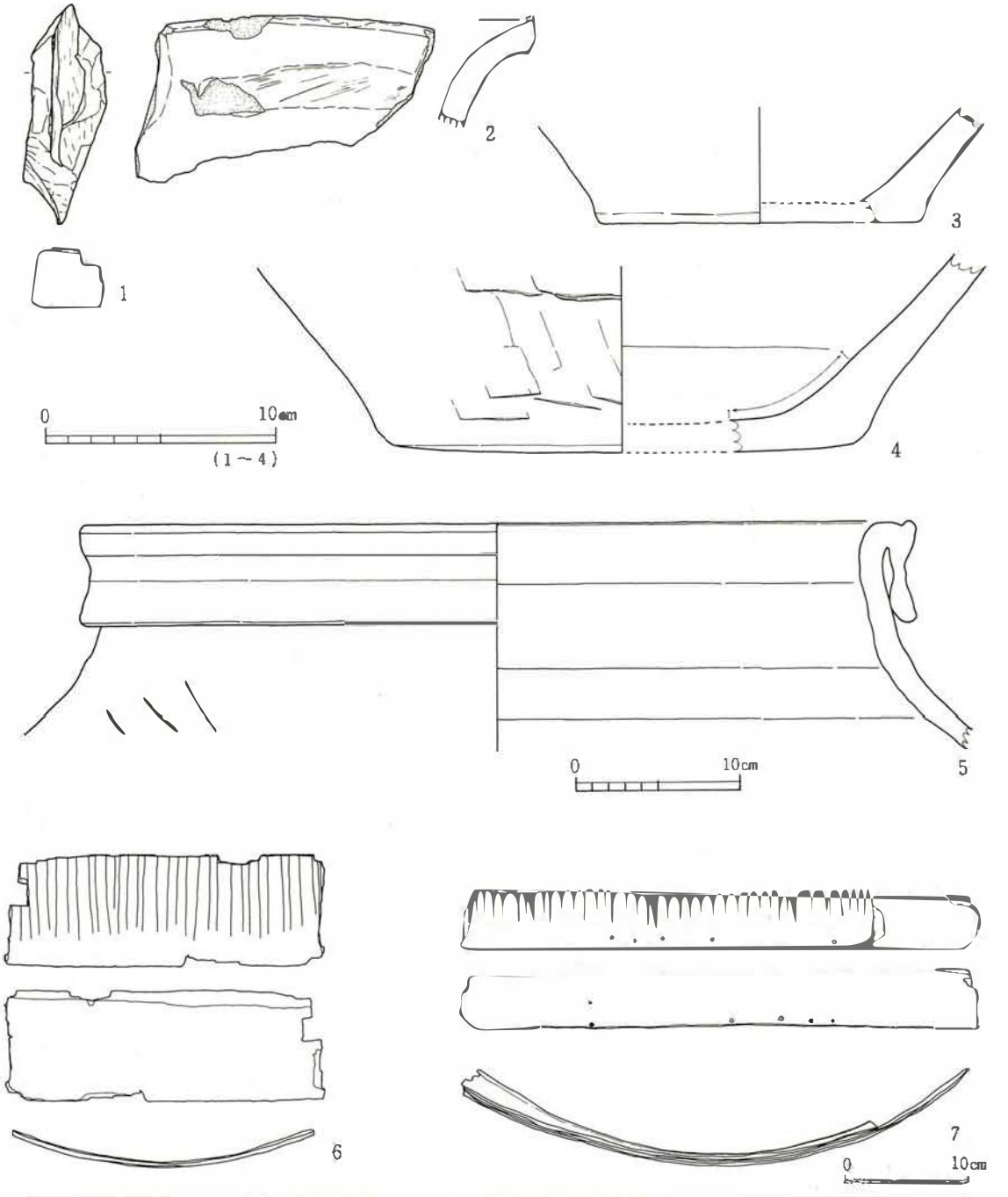
遺物は、無釉陶器甕・擂鉢、土師器、須恵器、赤焼き土器、木製品、鉄製品、石製品、焼けた壁土などが出土している。第26図５は無釉陶器大甕の口縁部である。折り曲げた口縁部が頭部に密着していわゆる「玉縁状」口縁を呈し、重厚で幅の広い口縁帯を形成している。外面は肩の一部にヘラナデの痕跡が見られるが他は丁寧にヨコナデ調整しており、内面も成形時に指で押えた跡がわずかに残っているが全体に丁寧にヨコナデ調整している。口径は推定で約56cm。口縁部の特徴から常滑窯製品と考えられ赤羽一郎氏の編年によれば第Ⅴ段階前半(15世紀後半)のものに類似している。

第26図４は無釉陶器甕の底部破片資料である。



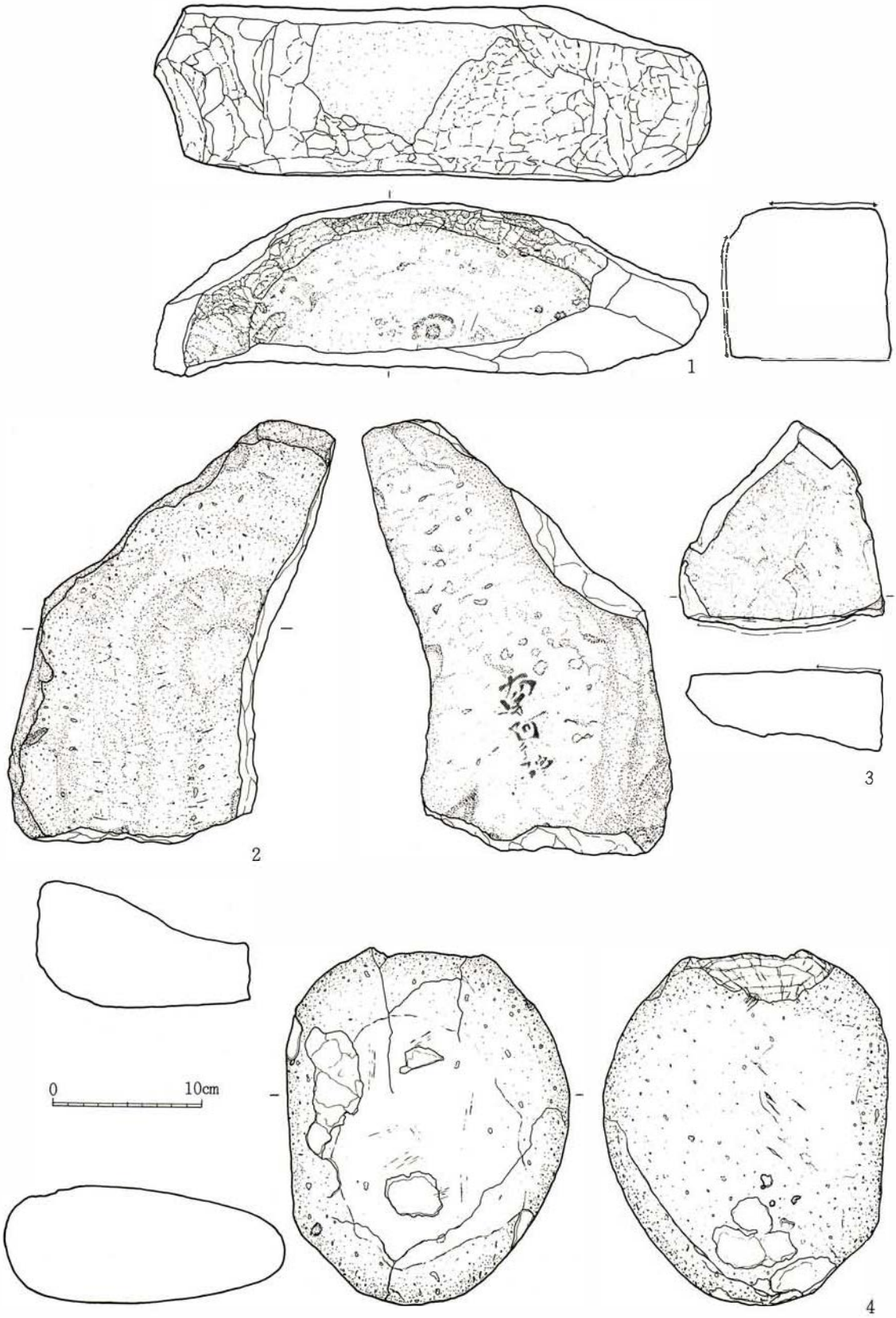
番号	土色	土性・混入物・その他	層位
1	暗褐色	砂質土。炭化物多く含む。硬くしまる。	ℓ－1
2	〃	〃 黄褐色の地山土小ブロックを含み硬くしまる。	〃
3	〃	粘性ややあり、黄褐色の地山土に小ブロックを含む。硬くしまる。	〃
4	〃	粘性あり（特に下層）。黄褐色の地山土小ブロックを含む。硬くしまる。	〃
5	〃	〃 。地山の砂を多く含む。	ℓ－2

第25図　SE 677 井戸跡



番号	遺物名	層位	図版	登録No.	番号	遺物名	層位	図版	登録No.
26-1	石硯	ℓ－1		R-227	26-7	曲物	ℓ－3		R-07
26-2	須恵器甕	ℓ－1			27-1	砥石	ℓ－3	47－4	R-210
26-3	無釉陶器擂鉢	ℓ－4	27－20	R-117	27-2	石皿	ℓ－3	47－5	R-201
26-4	無釉陶器甕				27-3	使用痕のある礫	ℓ－3		R-217
26-5	無釉陶器甕		23－18	R-039	27-4	同上	ℓ－3		R-135
26-6	曲物	ℓ－3		R-07					

第26図 SE 677 井戸跡出土遺物



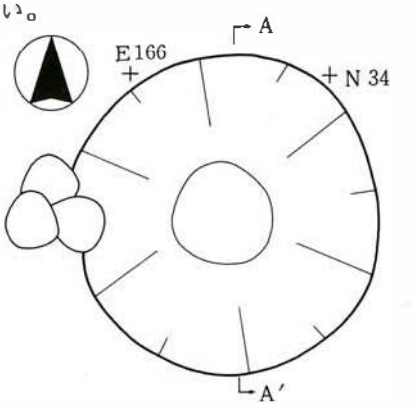
第27図　SE 677井戸跡出土遺物

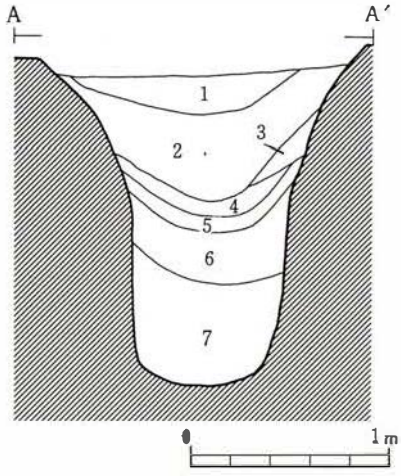
内面の底部を中心に摩耗痕、及びそれと重複して細かな剥離が認められる。第26図３は擂鉢の底部の破片資料である。内面には細かな剥離が全面に見られる。第26図２は研磨痕のある須恵器口縁部破片である。第26図６・７は曲物容器の側板である。内面にはケビキが施されており、７には底板を固定したと考えられる木釘の跡がある。第27図２は石皿と考えられる石製品である。内面は擂鉢状にくぼみ、細かな剥離が認められる。またこの外面には「南元阿彌陀」と墨書がみられる。「南」の右上にも墨痕はあるが判読できない。

(3) ＳＥ 678 井戸跡

調査区北半部のＳＤ 653 溝跡埋土上で検出した素掘りの井戸跡である。ＳＢ 608 建物跡と重複しているが新旧関係は不明である。平面形は円形を呈し、直径1.6ｍ、深さ1.7ｍである。埋土についてみると地山ブロックを含む上層（1～3層）とそれらをほとんど含まない下層（4～7層）とに大きく分けることができる。6･7層は木の細片などを多く混じえる砂質土と粘質土で、地山の崩壊土と考えられる。その上の方には粘性のある柔らかな4.5層があり、自然に堆積した様相を呈している。上層は下の方ほど地山ブロックが多く入っており、上の方は少ない。このような埋土のあり方は、壁が崩落して途中まで埋まり、しばし時間が経過した後、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

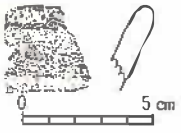
遺物は無釉陶器擂鉢（第28図）、土師器、須恵器、赤焼き土器が出土している。





番号	土　色	土性・混入物・その他	層位
1	暗褐色	褐灰色砂質土や地山粒を若干含む。ややしまりに欠ける。	ℓ～1
2	〃	褐灰色砂質土や地山粒を多く含む。下層がグライ化して	〃
	〃（やや黒い）	暗青灰色を呈し、粘性を帯びている。	〃
3	〃（やや黒い）	褐灰色砂質土の小粒を若干含む。比較的均質。粘性やや劣	〃
4	〃	粘性あり、柔らかい木質の細片を多く含む。	ℓ～2
5	〃	〃　〃　暗青灰砂質土を少量含む。	〃
6	暗青灰色	砂質土。暗褐色の粘質土が混じる。	ℓ～3
7	〃	砂質土。暗褐色の粘質土が混じる。木片など多く入る。	〃

第29図　ＳＥ 678 井戸跡



遺　物　名	層　位	図　版	登録No.
無釉陶器擂鉢	ℓ －1		R-146

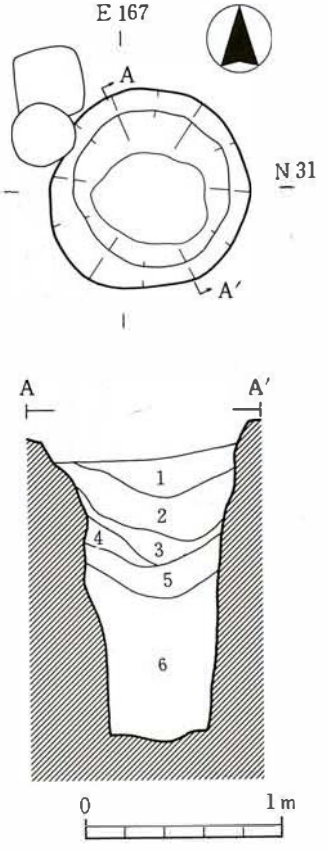
第28図　ＳＥ 678 井戸跡出土遺物

(4) ＳＥ 679 井戸跡

調査区北半部の第Ⅳ層上で検出した素掘りの井戸跡である。ＳＢ 621 建物跡と重複しており、それよりも古い。平面形は円形を呈し、規模は直径1.0ｍ、深さ1.6ｍである。埋土は底面から中頃にかけて粘質土の小粒を含んだ砂（6層）が厚く堆積し、その上に地山の小ブロックを

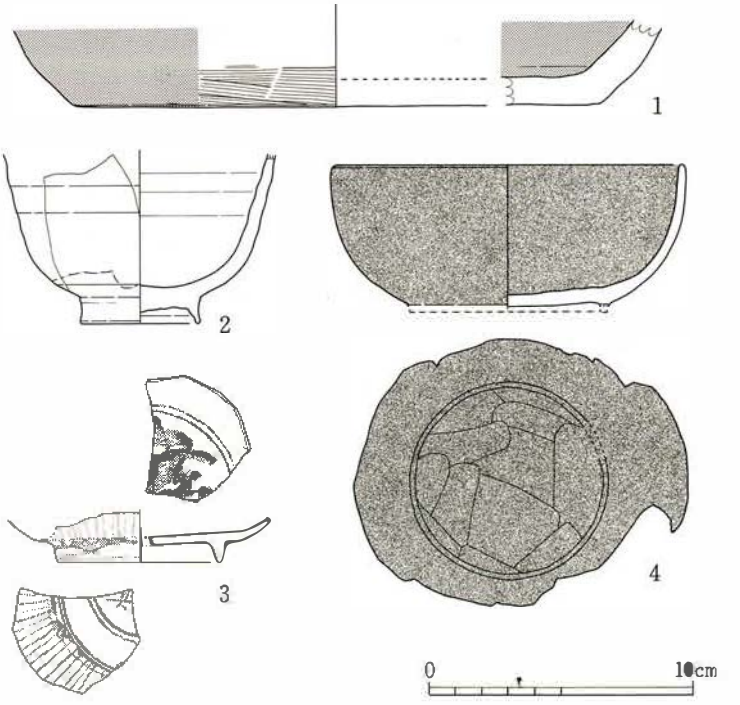
含んだ1～5層が堆積している。このような堆積状況より下層は自然に埋没し、その後人為的に埋め戻されたものと考えられる。

遺物は染付磁器、施釉陶器、瓦質土器、土師器、赤焼き土器が出土している。第31図3は染付磁器皿の底部破片資料である。内面には呉須で二重の圏線の中に崩れた獅子文(?)を描き、外面には縦の条線を釘状のもので細く陰刻し、高台に呉須で文様を描いている。外底（高台内）には銘款を思わせる文字があるが判読できない。第31図1は瓦質土器の火鉢である。外面は燻べ焼により黒色を呈している。底部際には横方向にハケメがみられ、内面はヨコナデ調整されている。底部は砂底である。第31図2は施釉陶器の椀である。断面二等辺三角形の高台を有するやや深目の椀で、高台はロクロで削り出した後、ロクロナデして仕上げている。体部下半には回転ヘラケズリが認められる。高台及び外面体部下半をのぞいて緑釉が施されている。胎土



番号	土色	土性・混入物・その他	層位
1	黒褐色(10YR3/1)	地山の小ブロックを含む。硬くしまる。	ℓ～1
2	〃（〃 〃）	地山の小ブロックを多く含む。硬くしまる。	〃
3	〃（〃 〃）	地山の小粒を少し含む。やや粘性あり。	ℓ～2
4	〃（〃 3/1）	砂質土。2層が混じる。	〃
5	〃（〃 3/1）	3層土、2層土が混じり、しまりなくぜい弱	〃
6	暗青灰色	砂質。黒褐色粘質土小粒が混じり、もろく崩れ易い。	ℓ～3

第30図　SE 679 井戸跡



番号	遺物名	層位	図版	登録No.
1	瓦質土器火鉢	ℓ－3	30－6	R-30
2	施釉陶器丸椀	ℓ－1	21－2	R-106
3	染付磁器皿	ℓ－1	18－15	R-25
4	漆器椀	ℓ－3	35－2	R-9

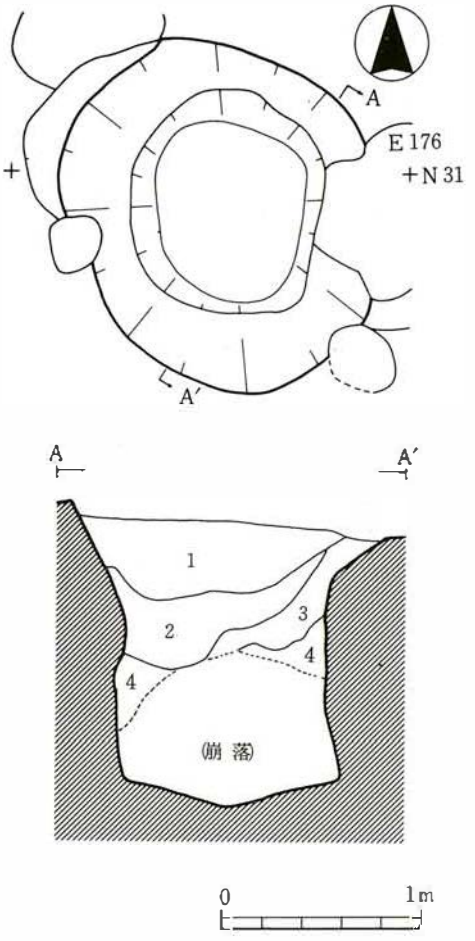
第31図 SE 679 井戸跡出土遺物

は白色の精土である。器形及び胎土、釉調などから17世紀前半の美濃の製品と考えられる。第31図4は漆器の椀である。内外に黒漆が施されている。高台内には削り出しの痕跡が認められる。

(5) SE 680井戸跡

調査区北半部東壁付近の第Ⅳ層上で検出した素掘りの井戸跡である。SB 625・604・610建物跡跡と重複しており、SB 625・604建物跡より古い。SB 624建物跡との新旧関係は不明である。平面形は円形を呈し、規模は直径1.7m、深さ1.6mである。埋土は、下層は崩落しているものの、上層（1～4層）については、地山の小粒や炭化物を多く含む土が南側から北側に強く傾斜して堆積している状況が観察された。このような堆積状況から少なくとも上層は人為的に埋め戻されたものと考えられる。

遺物は無釉陶器甕、土師器、赤焼き土器、瓦などが出土している。



番号	土色	土性・混入物・その他	層位
1	黒褐色(10YR3/2)	地山粒、炭化物を多く含む。硬くしまる。	ℓ～1
2	〃 〃)	粘性ややあり、炭化物を多く、地山土粒を少量含む。	
3	〃 〃)	砂を多量に含み、炭化物を多く、地山小粒を少量含む。	
4	黒 色(10YR2/1)	青灰色砂質土を少々含む。もろい。	

第32図 SE 680井戸跡

(6) SE 682井戸跡

調査区南半部の第Ⅲ層上で検出した素掘りの井戸跡である。SD 631・632溝跡と重複しており、これらより新しい。平面形は楕円形を呈するが歪んでいる。規模は長径2.7m、短径2.2m、深さ1.2mである。埋土の状況については明らかでないが、少なくとも上層については人為的に埋められた様相を呈している。

遺物は出土していない。

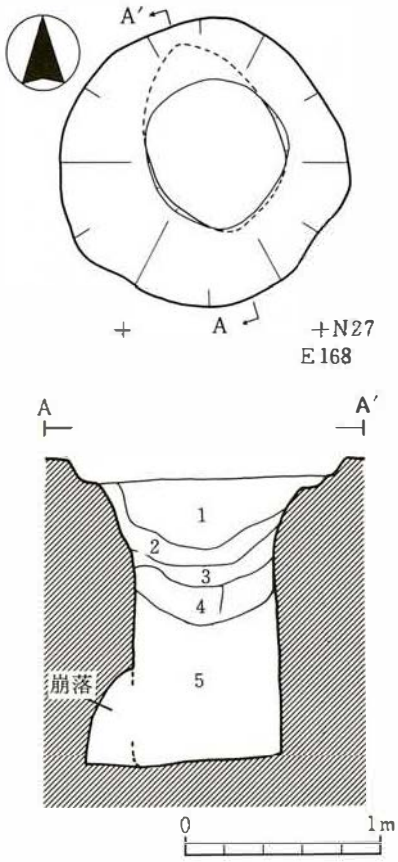
(7) ＳＥ 681 井戸跡

調査区北半部の第Ⅳ層上で検出した素掘りの井戸跡である。ＳＢ 612 建物跡と重複しているが新旧関係は不明である。平面形は円形を呈し、規模は直径1.5ｍ、深さ1.6ｍである。埋土についてみると、底面から中頃にかけて砂の厚く堆積した層（５層）は地山の崩壊土と見られ、その上の地山粒が層状に堆積する層（３・４層）はその後の自然堆積層と考えられる。１・２層は更にその後の人為的な埋め戻しによるものと考えられる。

遺物は無釉陶器甕・擂鉢、土師器、須恵器、赤焼き土器などが出土している。

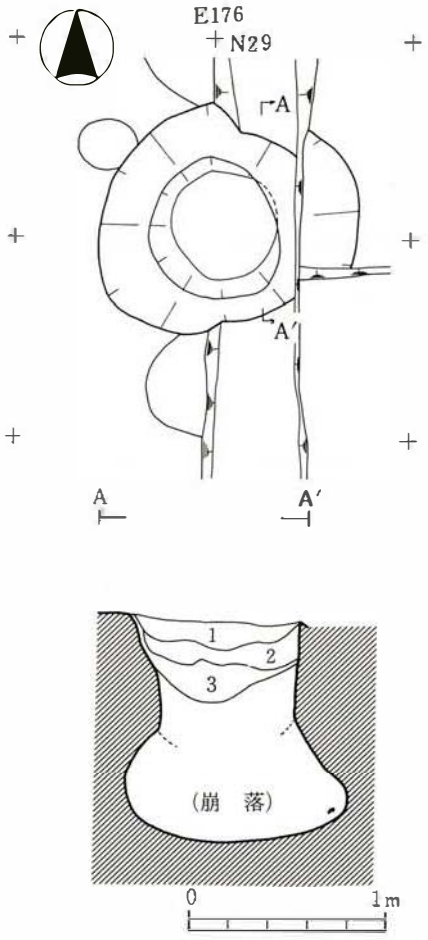
(8) ＳＥ 683井戸跡

調査区北半部の第Ⅲ層上から掘り込まれた素掘りの井戸跡である。ＳＢ 604・624・608建物跡と重複しており、ＳＢ 604・608建物跡よりは新しいが、ＳＢ 624との新旧関係は不明で



番号	土　色	土性・混入物・その他	層位
1	黒褐色(10YR3/1)	砂質土。しまりあり。白色粒と炭化物を多く含む	ℓ～1
2	褐灰色(7.5YR4/1)	粘性ややあり、炭化物やや大きめを多く含む。	〃
3	黒褐色(7.5YR3/1)	粘性強く、炭化物を若干含む。	ℓ～2
4	黒　色(10YR3/1)	粘性強く黄褐色の砂質土が層状に入り一部に木片を含	〃
5	暗灰色	黒褐色土粒を含む	ℓ～3

第33図　ＳＥ 681 井戸跡



番号	土　色	土性・混入物・その他	層位
1	黒　色(10YR3/1)	砂質土。炭化物、明褐灰色土のブロックを含む。しまりあり	
2	〃　(　〃　)	砂質土。明褐灰色の砂を非常に多く含む。	ℓ～1
3	〃　(　〃　)	オリーブ灰色の砂ブロックを含む。粘質土	

第34図　ＳＥ 683井戸跡

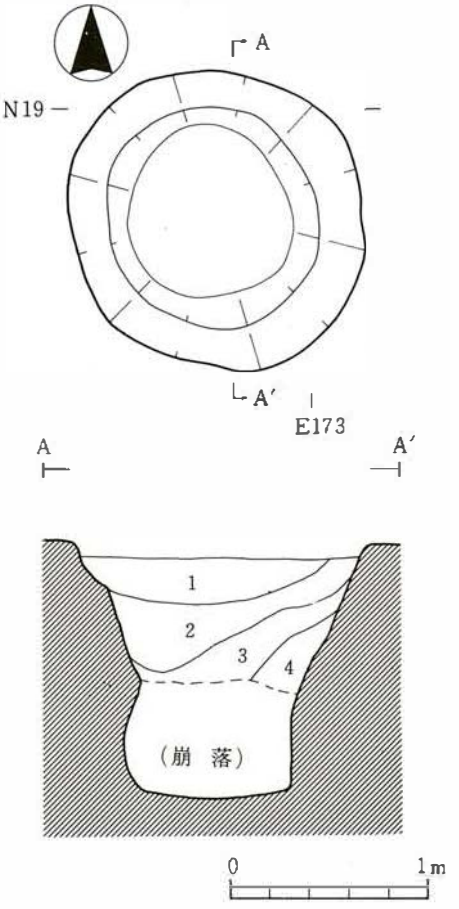
ある。平面形はおよそ円形を呈するものと思われ、規模は長径1.4m、短径1.1m、深さ1.7mである。埋土は、下層が崩落のため不明であるが、上層(1a～1c層)は地山ブロックや炭化物を多く含む土が堆積しており、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

遺物は出土していない。

(9) SE 684井戸跡

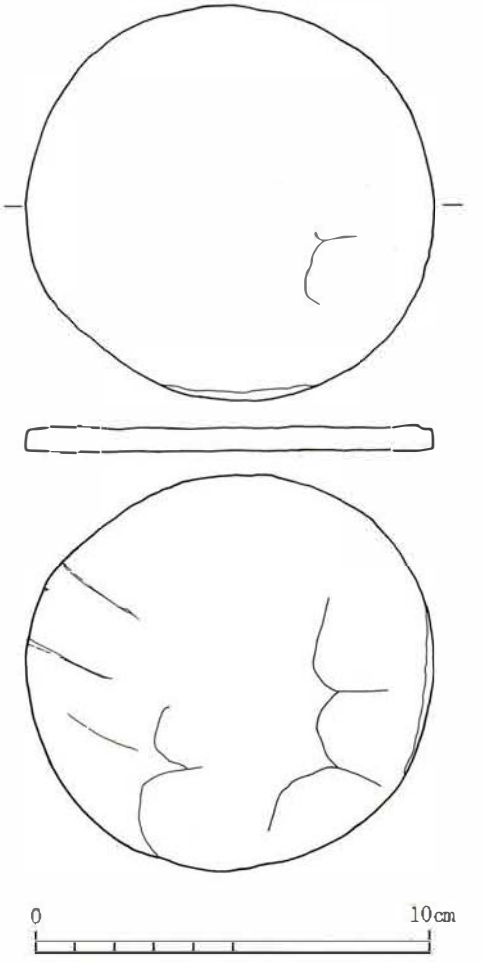
調査区南半部の第Ⅳ層上面で検出した素掘りの井戸跡である。規模は直径1.5m、深さは1.3mである。埋土は地山ブロックを多く含む土が南側から大きく傾斜して堆積しており、人為的に埋められた様相を呈している。

遺物は木製品と焦痕のある礫が出土している。第36図は曲物の底あるいは蓋になると考えられる円形の板である。



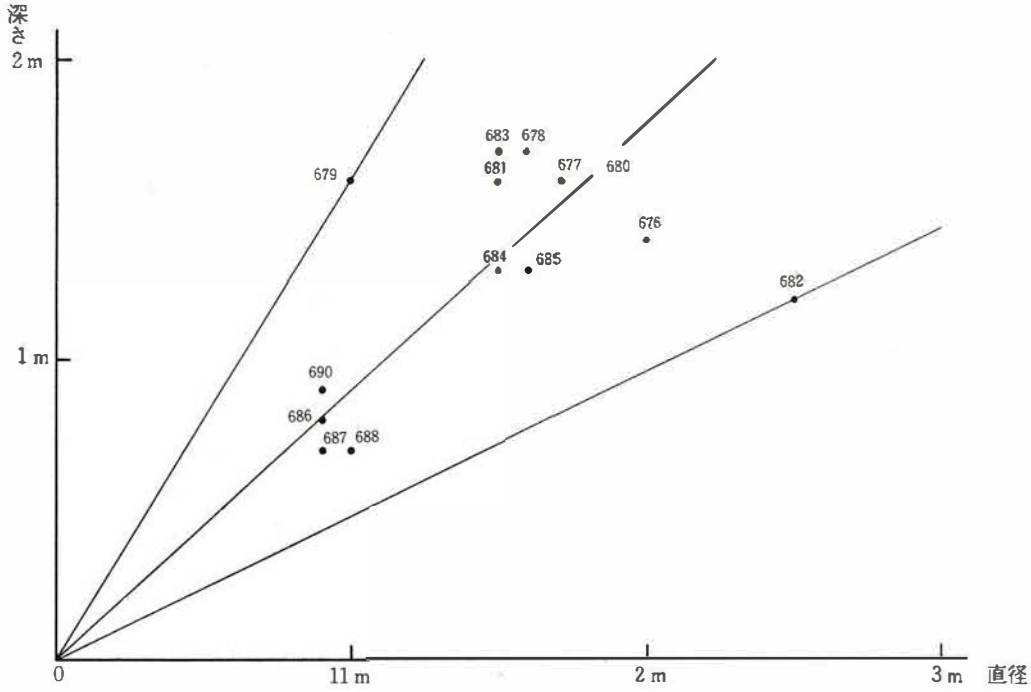
番号	土色	土性・混入物・その他	層位
1	黒褐色(10YR3/1)	褐灰色砂質土ブロックを多く含む	
2	〃 (〃 3/1)	〃	ℓ～1
3	褐灰色(〃 4/1)	粘性あり、砂を若干含む。	
4	〃 (〃 4/1)	やや色調暗くあまり混入物なし。	

第35図 SE 684井戸跡



遺物名	層位	図版	登録No.
曲物底板	ℓ－3		R-1

第36図 SE 684井戸跡出土遺物

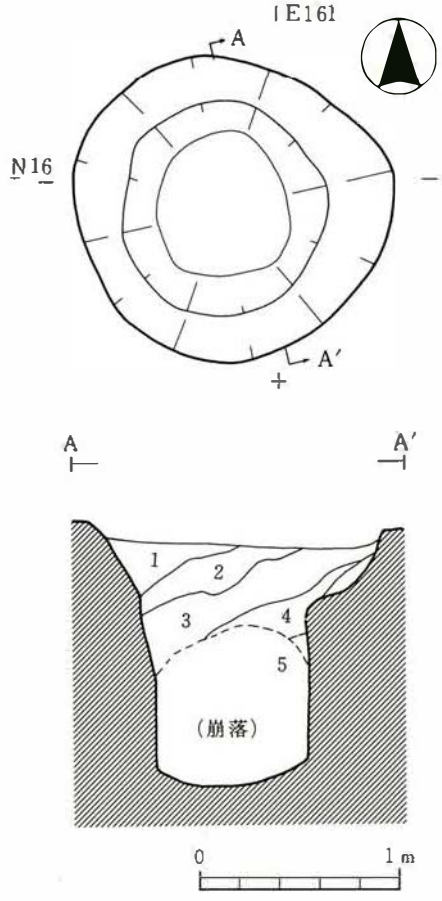


第 37 図　井戸跡の平面規模と深さ

(10)　ＳＥ 685 井戸跡

調査区南半部の第Ⅲ層上で検出した素掘りの井戸跡である。平面形は円形を呈し、規模は直径1.6ｍ、深さ1.3ｍである。埋土は下半部が崩落のため不明であるが、上半部についてみるとすべて地山ブロックを多く含んだ土が南側から北側に強く傾斜して堆積しており、人為的に埋められた様相を呈している。

遺物は出土していない。



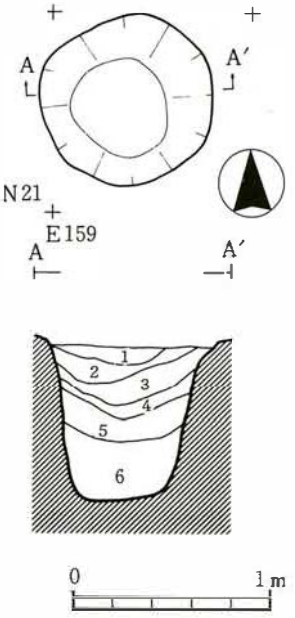
層位	土　色	土性・混入物・その他
1	黒褐色(10YR2/3)	淡黄色砂質土のブロックを多く含む。
2	〃　(10 〃　)	硬くしまっている。
3	〃　(〃　)	淡黄色砂質土のブロックを多く含む。褐鉄が沈着
4	〃　(〃　)	3層と近似、やや粘性あり。
5	灰　色(5Y4/1)	粘性あり、淡黄色土粒少々混じる。

第38図　ＳＥ 685 井戸跡

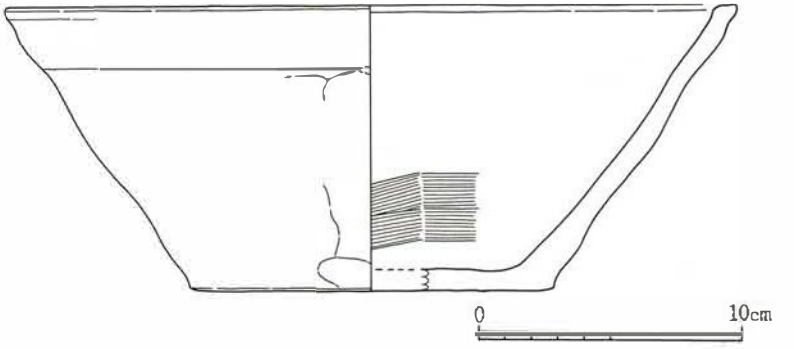
(11) ＳＥ 686 井戸跡

調査区中央部の第Ⅳ層上から掘り込まれた素掘りの井戸跡である。平面形は円形を呈し、規模は直径0.9ｍ、深さ0.8ｍである。埋土は大きく２層に分けられ、全体に黄橙色の地山細粒を含んでいる。上層（１～３）はしまりがなく粘性に乏しい褐灰色土である。一方、下層（４～６）には黒褐色の粘性を帯びた柔らかい土が厚く堆積している。いずれも自然堆積した様相を呈している。

遺物は無釉陶器擂鉢が１点出土している。外面は体部を縦方向にヘラナデした後、口縁部をヨコナデ調整している。内面は体部下半を板状の工具で横方向に強くナデている。



第39図　ＳＥ 686井戸跡



遺物名	層位	図版	登録No.
無釉陶器擂鉢	ℓ－２	27－9	R-77

第40図　ＳＥ 686 井戸跡出土遺物

層位	土色	土性・混入物・その他
1	褐灰色(7.5YR4/1)	褐鉄鉱を含む。粘性、しまりに欠ける。
2	黒褐色(〃 3/1)	木炭粒子を多く含む。
3	〃 (〃 〃)	斑点状に木炭粒子、橙色粒子含む。
4	〃 (10YR3/4)	粘性あり
5	〃 (〃 3/2)	4層より粘性が強く軟らかい。
6	黒色(〃 3/1)	軟かく、若干グライ化している。

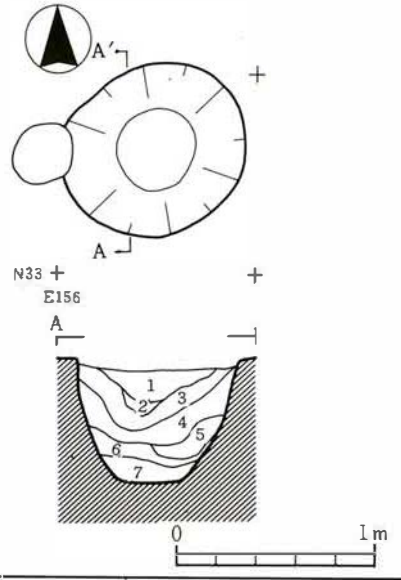
(12) ＳＥ 687 井戸跡

ＳＤ 653 溝跡の埋土上で検出した素掘りの井戸跡である。ＳＢ 611 建物跡と重複しているが新旧関係は不明である。平面形は円形を呈し、規模は直径0.9ｍ、深さ0.7ｍである。埋土についてみると、底には黒褐色の粘質土が10cm程堆積しており、その上には地山小粒を多く含んでいる土がレンズ状に堆積している。

遺物は出土していない。

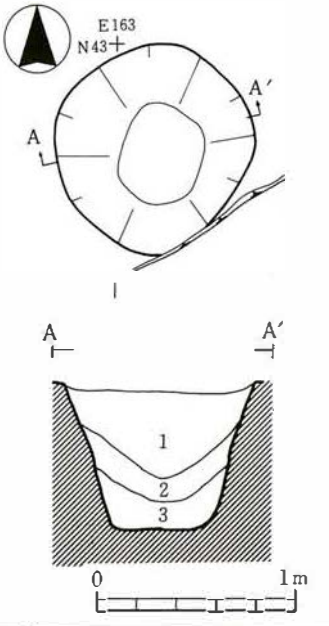
(13) ＳＥ 688 井戸跡

ＳＤ 645 溝跡の埋土上で検出した素掘りの井戸跡である。ＳＢ 602 建物跡と重複しているが新旧関係は不明である。平面形は円形を呈し、規模は直径1.0ｍ、深さ0.7ｍである。埋土についてみると、下層（２・３）は黒褐色土と黒色土が層状に堆積して自然堆積した様相を呈し



層位	土　色	土性・混入物・その他
1	灰黄褐色(10YR4/2)	粘性なし、しまりあり、炭化物を若干含む。
2	黒　色(10YR3/1)	粘性なし、しまり弱く、炭化物・木炭を含む。
3	灰黄褐色(10YR4/2)	地山土を斑状および小ブロックに含む。炭化物を若干含む
4	褐灰色(〃　4/1)	粘性ややあり、地山土を斑状に若干含む。
5	〃　(〃　4/1)	地山を斑状および小ブロック状に多く含む。
6	黒褐色(〃　3/1)	にぶい黄橙色土を斑状に含み、炭化物を若干含む。
7	〃　(〃　3/1)	粘性あり、しまりは弱い。

第41図　SE 687井戸跡



層位	土　色	土性・混入物・その他
1	黒褐色(10YR3/1)	黒色土を多く混入し、灰白色火山灰小ブロックを含む、粘性あり。
2	〃　(〃　)	黒褐色土と黒色土が粗い層状に入る。
3	〃　(〃　)	〃　〃　細い　〃

第42図　SE 688井戸跡

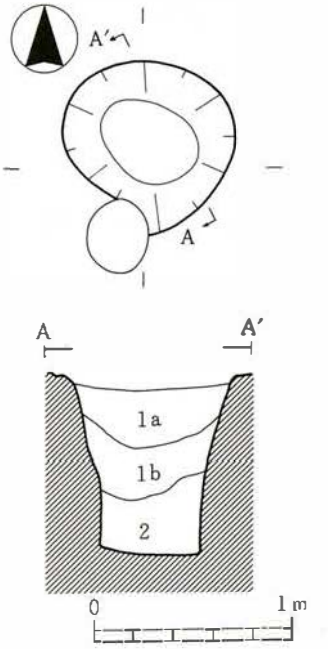
ており、上層（1）は灰白色火山灰と地山ブロックから成る人為的な埋土である。

遺物は出土していない。

(14)　ＳＥ 690 井戸跡

調査区北半部で検出した素掘りの井戸跡である。ＳＤ 653 溝跡より新しく、ＳＢ 620 建物跡より古い。平面形は歪んだ円形を呈し直径0.9 m、深さ0.9 m である。埋土についてみると、2 層は地山の崩壊土とみられ、1 層は人為的に埋め戻された様相を呈している。

遺物は無釉陶器甕、鉄滓、板状を呈する鉄製品、赤焼き土器、土師器、須恵器などが出土している。



層位	土　色	土性・混入物・その他
1	黒褐色(10YR3/1)	炭化物を含む。
2	暗褐色(〃　3/1)	地山と黒褐色土が多く混じる。
3	にぶい黄褐色(〃　4/3)	砂質土。やや1b層が混じる。

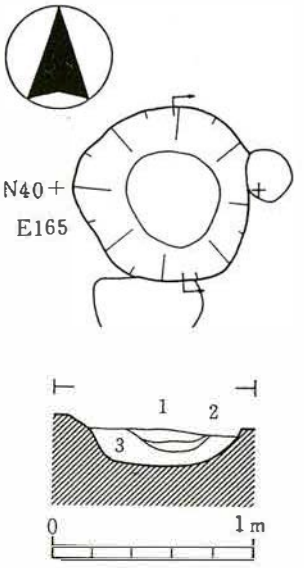
第43図　SE 690 井戸跡

C．土　壙

(1)　ＳＫ 689 土壙

調査区北半部の第Ⅳ層上で検出した土壙である。SD 645 溝跡、ＳＢ 628 ・ 629 建物跡と重複しており、ＳＤ 645 溝跡、ＳＢ 629 建物跡よりは新しいがＳＢ 628 建物跡との新旧関係は不明である。平面形は円形を呈し、規模は直径0.9 m、深さ 0.3 m である。埋土は均質な粘質土が主体を占め、中頃に薄い砂の層の堆積が見られるなど、自然堆積の様相を呈している。

遺物は赤焼き土器杯の口縁部破片が1点出土している。



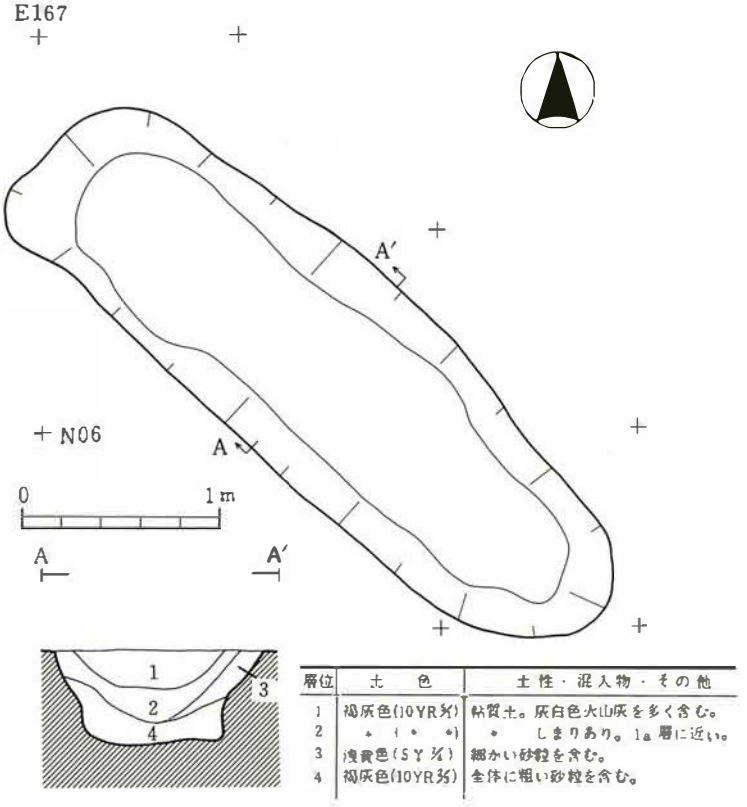
層位	土　色	土性・混入物・その他
1	黒褐色(10YR 3/1)	灰黄褐色土小粒を多く含む。しまりあり。
2	にぶい黄褐色(10YR 5/4)	砂層。黒褐色土を少し混入する。
3	黒褐色(10YR 3/1)	1層と近似するがやや粘性を帯びている。

第44図 ＳＫ 689 土壙

(2)　ＳＫ 660 土壙

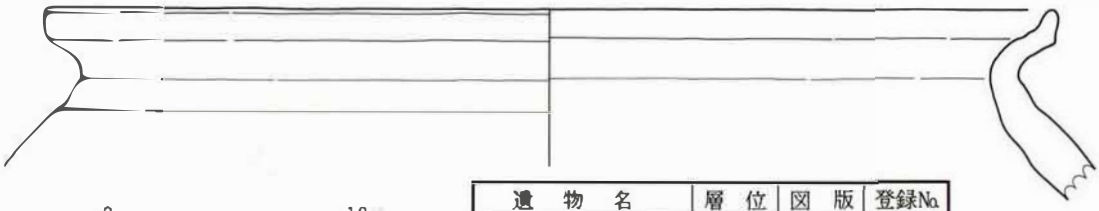
調査区南半部の第Ⅳ層上から掘り込まれた土壙である。ＳＤ 646 溝跡と重複しており、これより新しい。平面形は長楕円形を呈し、規模は長径 3.5 m、短径 1.1 m、深さ 0.4 m である。埋土は均質な粘質土を主体とする1層と砂質土を主体とする2層とに大きく分けられる。更に下層については東側から細砂粒を多く含んだ土の強く流れ込んだ状況が見られ、基底面には地山ブロックや粗い砂粒を含んだ土が堆積している。

遺物は、無釉陶器甕、土師器甕・杯、赤焼き土器杯などが出土して



層位	土　色	土性・混入物・その他
1	褐灰色(10YR 4/1)	粘質土。灰白色火山灰を多く含む。
2	〃　〃　〃	〃　しまりあり。1a 層に近い。
3	浅黄色(5Y 7/3)	細かい砂粒を含む。
4	褐灰色(10YR 4/1)	全体に粗い砂粒を含む。

第45図　ＳＫ 660 土壙



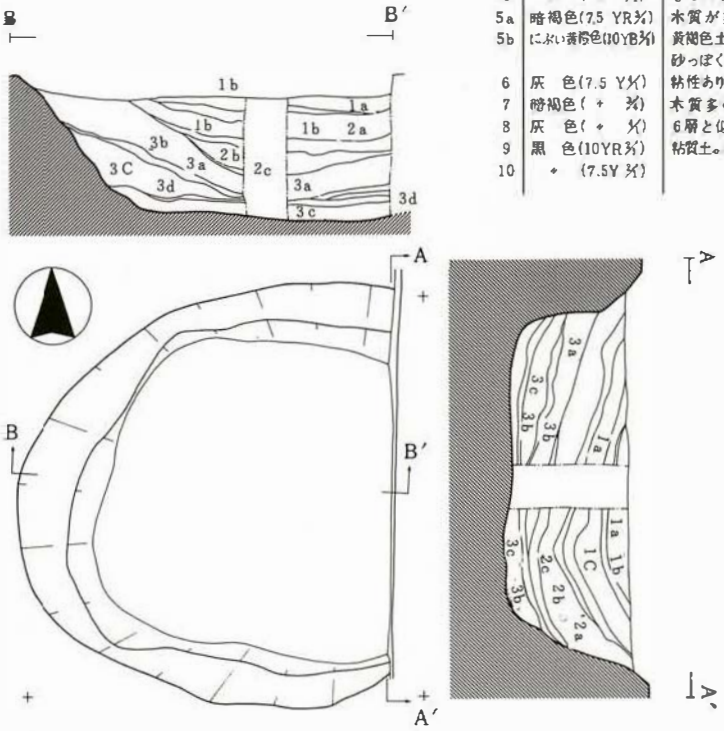
遺物名	層位	図版	登録No.
無釉陶器甕	ℓ－4	24－1	R-46

第46図　SE 686 土壙出土遺物

いる。第46図は無釉陶器甕の口縁部破片資料である。受口状を呈し、外面全面と内面口縁部付近は丁寧にヨコナデ調整されている。口縁部の特徴から地元窯の製品と考えられる（註2）。

(3) SK 661土壙

調査区南半部の第Ⅲ層上から掘り込まれた土壙である。SD 646・632溝跡と重複しており、それらより新しい。東半部は調査区外にあたるため明確ではないが、平面形はおよそ楕円形を呈するものと思われ、規模は長径3.7m以上、短径3.2m、深さ1.1mである。埋土は地山の小ブロックを多く含んだ粘質土や腐植土から成る層などが互層に堆積しており、自然に埋没した



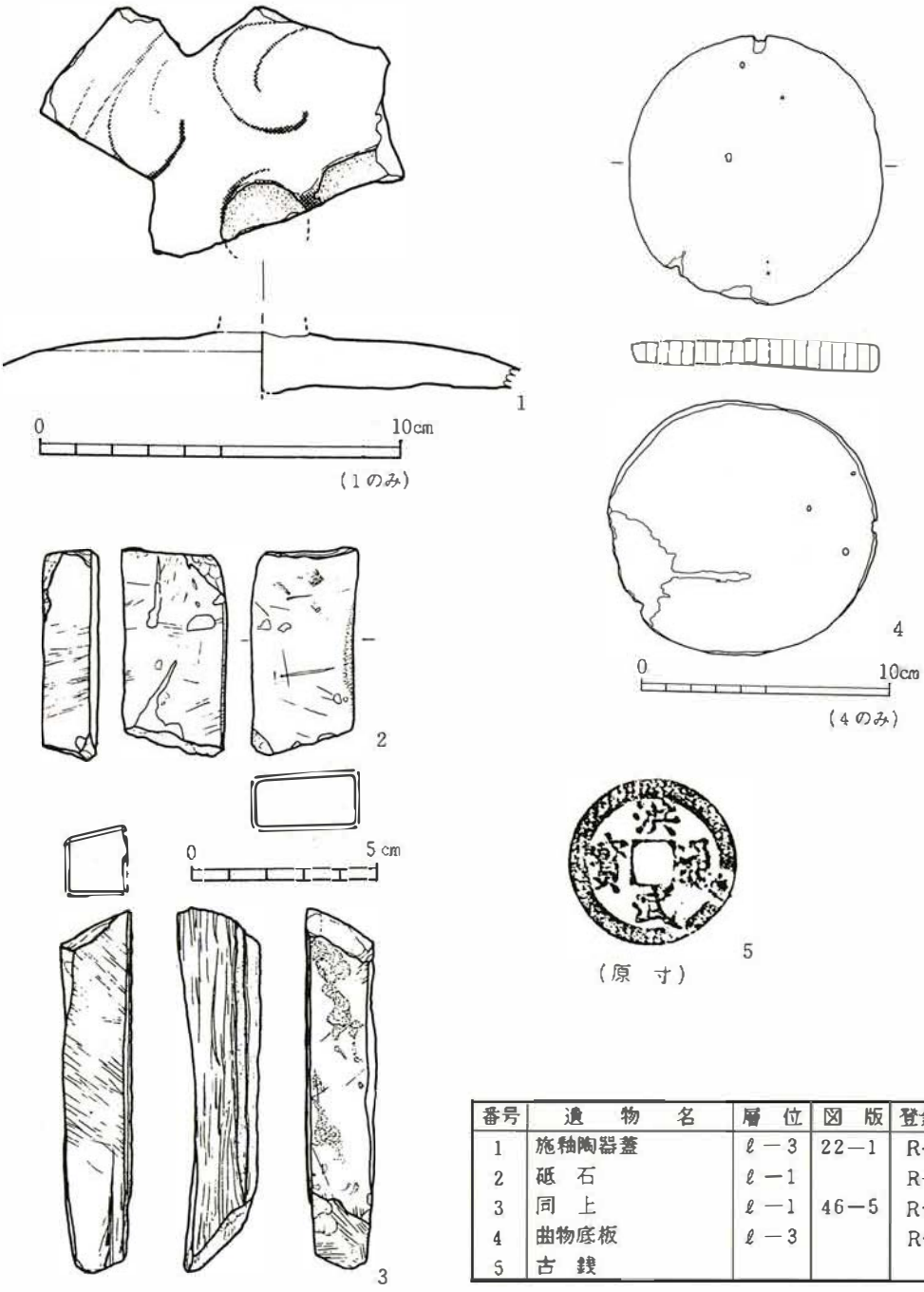
層位	土色	土性・混入物・その他
1	黒褐色(10YR3/1)	地山粒、炭化物粒を含む。
2	〃（〃　3/1）	地山粒を多く含み、炭化物少量も含む。
3	黒　色（〃　3/1）	やや粘性あり、炭化物を薄く層状に含み地山粒も含む。
4	〃（〃　3/1）	もろい炭化物層
5a	暗褐色(7.5 YR3/4)	木質が多く遺存する層。炭化物含む。
5b	にぶい黄褐色(10YR5/4)	黄褐色土と褐色土が縞状に入る層。全体に砂っぽくしまりがない。
6	灰　色(7.5 Y4/1)	粘性あり。暗灰色の粘質土粒を多く含み、砂も含む。
7	暗褐色（〃　3/4）	木質多く遺存する層。炭化物を含む。
8	灰　色（〃　4/1）	6層と似ているが砂が多くもろい。
9	黒　色(10YR3/1)	粘質土。風化凝灰岩と思われる白色粒を含む。
10	〃（7.5Y 3/1）	〃

第47図　SK 661 土壙

註2　ここでいう地元窯とはこれまで宮城県や福島県北部で発見されている瓷器系の窯を指している。

様相を呈している。

遺物は無釉陶器甕、施釉陶器蓋、須恵器、土師器、赤焼き土器、木製品、石製品、古銭〔洪武通宝〕（1368年初鋳）などがある。第48図1は鉄釉の施された広口壺の蓋である。頂部にはツマミが付いていたと思われ、剝離痕がある。またそれに接して短く帯状の剝離が認められ、



番号	遺　物　名	層　位	図　版	登録No.
1	施釉陶器蓋	ℓ－3	22－1	R-36
2	砥　石	ℓ－1		R-125
3	同　上	ℓ－1	46－5	R-122
4	曲物底板	ℓ－3		R-2
5	古　銭			

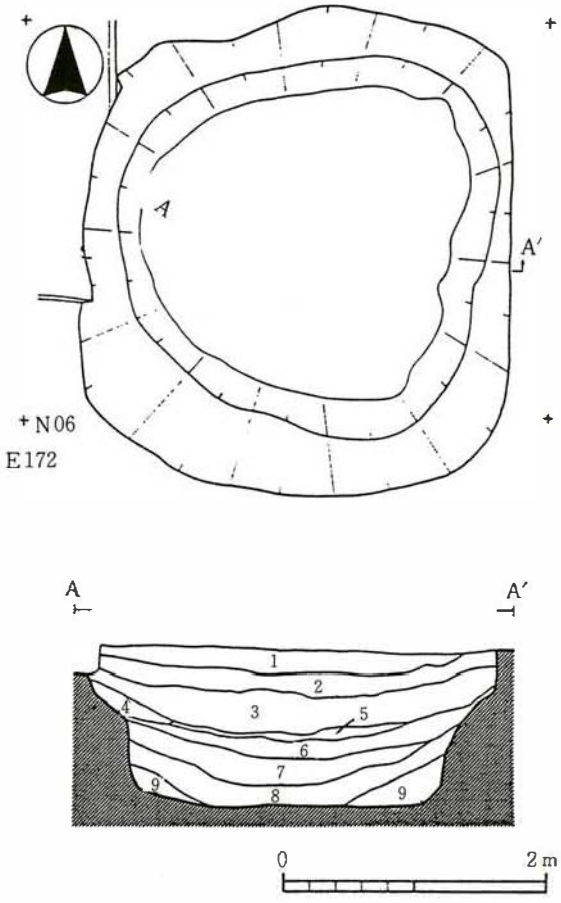
第48図　ＳＫ 661土壙出土遺物

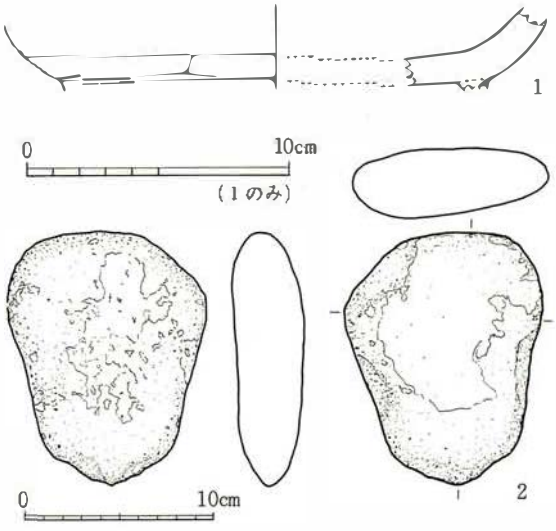
紐状の飾りのついたツマミであったと思われる。外面には文様が陰刻され、全面に施釉されている。これらの特徴から瀬戸窯の製品と考えられ、藤澤良祐氏の編年によると13世紀末～14世紀後半に位置づけられている。

(4) ＳＫ 662土壙

調査区南半部の東壁近くの第Ⅳ層上で検出した土壙である。平面形は円形を呈するがやや歪んでいる。規模は直径3.5ｍ、深さ1.2ｍを計る。埋土は９層に分けられるが各層とも水平に堆積しており自然に埋没した様相を呈している。上層には炭化物、灰が多く含まれている。

遺物は、無釉陶器擂鉢、焦痕のある礫と植物遺体が大量に出土している。第50図１は灰白色を呈する無釉陶器の擂鉢である。体部下半をヨコ方向にヘラケズリした後に高台を付けている。色調や形態から東海地方の製品と考えられる。





第50図　ＳＫ 662 土壙出土遺物

層位	土　色	土性・混入物・その他
1	褐灰色(10YR4/1	砂を多く含み、白色微粒を含む。
2	黒褐色(〃 3/1)	砂、白色微粒を多く含む。黄色土粒も含む。粘性ややあり。
3	黒褐色(〃 3/1)	砂、白色微粒、黄色砂質土を多く含み、炭化物も含む。
4	暗褐色(〃 3/1)	少々砂を含むが粘性あり、均質。
5	黒褐色(〃 3/1)	
6	〃 (〃 3/1)	粘質土、やわらかい。
7	黒　色(〃 3/1)	
8	〃 (〃 3/1)	粗い砂粒子を含む。
9	褐灰色(〃 3/1)	一部がグライ化している。

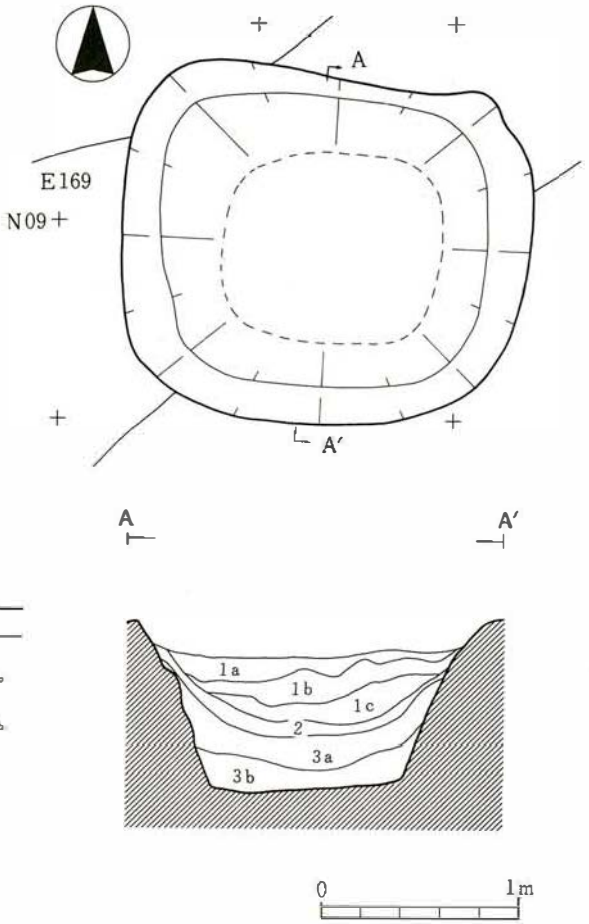
第49図　ＳＫ 662 土壙

番号	遺　物　名	層　位	図　版	登録No.
1	無釉陶器擂鉢	ℓ－1		R-126
2	使用痕のある礫	ℓ－6		R-203

(5) ＳＫ 663 土壙

調査区南半部の第Ⅲ層より掘り込んだ土壙である。平面形は隅丸方形を呈し、長辺 2.0m、短辺1.8m、深さ 0.8 m を計る。埋土は 4 層に分けられ、植物遺体から成る 2 層を境にして、その上層と下層とでは大きく様相が異なる。1 層は地山ブロックを多く含む人為的な埋土であり、3 層は均質な粘質土がレンズ状に堆積しており、自然堆積したものと考えられる。

遺物は無釉陶器甕、須恵器、土師器などが出土している。



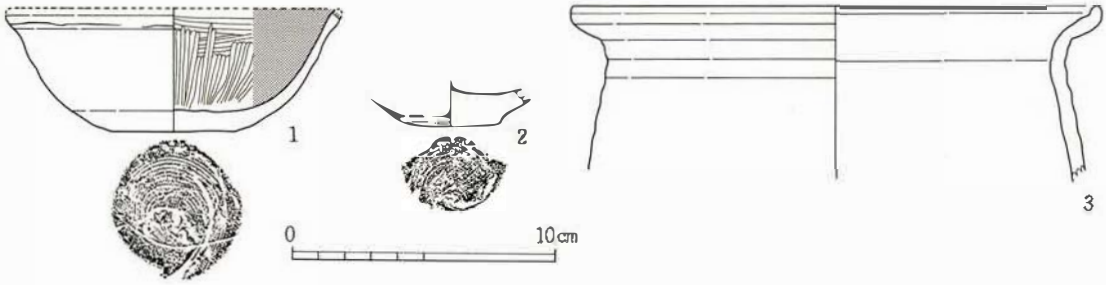
層位	土　色	土性・混入物・その他
1a	黄橙色(7.5YR7/8)	粘質土。褐色土ブロックを含む。
1b	褐灰色(10YR4/1)	粘質土。オリーブ灰砂質土ブロックを含む。しまりあり。グライ化。
1c	にぶい黄橙色(10YR7/4)	オリーブ灰の砂質土と褐色の砂質土の互層。しまりなし。
2	黒　色(2.5YR2/1)	植物遺体を含む。
3a	黒褐色(7.5YR3/1)	粘性強く、若干の植物遺体を含む。
3b	灰オリーブ(5Y 5/2)	3a層より粘性強く、若干の植物遺体が入る。

第51図　ＳＫ 663土壙

(6) ＳＫ 667 土壙

調査区北半部の第Ⅳ層上で検出した土壙である。ＳＢ 606・610・603・621 建物跡、ＳＥ 677 井戸跡、ＳＤ 651・645・653 溝跡と重複しており、ＳＤ 653・645 溝跡より新しいが、ＳＥ 677 井戸跡、ＳＢ 610・606・603・621 建物跡より古い。平面形は南北に長い不整形を呈し、北端部では西側へ舌状に張り出しているところもある。規模は幅 0.5 ～ 2.5 m とかなりばらつきがあり、深さは 0.3 m で南北1 2m にわたって検出した。埋土は 2 層に分けられ上層は多量の炭化物を含むしまりのない黒色土である。尚、調査区東壁において本土壙の南延長上に第Ⅲ層上から掘り込まれた土壙状の落ち込みを検出している。埋土は本土壙の 1 層と酷似し、底面のレベルもほぼ同じであることから一連のものである可能性が大きい。

遺物は無釉陶器甕、カワラケ、土師器甕・杯・高台杯、赤焼き土器杯、不明鉄製品などが出土している。第52図 2 はロクロ調整されたカワラケである。



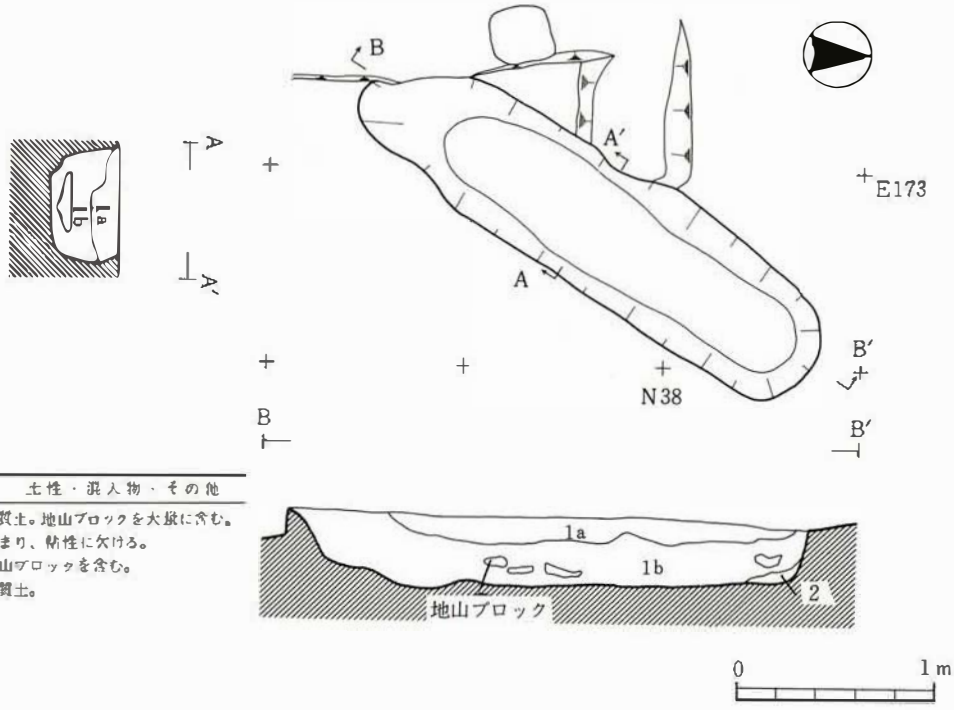
番号	遺物名	層位	図版	登録No	番号	遺物名	層位	図版	登録No
1	土師器杯	ℓ－1		R-1	3	土師器甕	ℓ－1		R-99
2	カワラケ	ℓ－1		R-26[illegible]					

第52図　ＳＫ 667土壙出土遺物

(7)　ＳＫ 669土壙

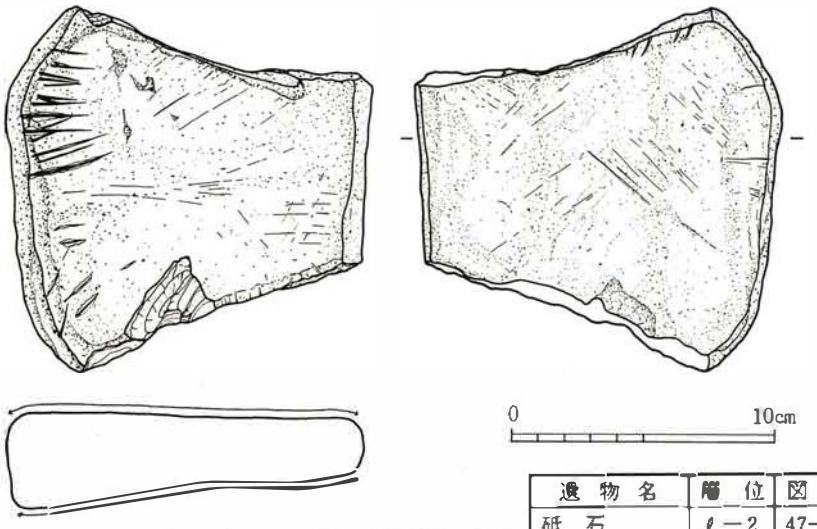
調査区北半部東壁付近の第Ⅳ層上で検出した土壙である。ＳＫ 671土壙、ＳＤ 653溝跡と重複しており、これらより新しい。平面形は長楕円形を呈し、その規模は長径2.7ｍ、短径0.8ｍ、深さ0.4ｍを計る。埋土には地山ブロックが大量に含まれていることから人為的に埋め戻されたものと考えられる。

遺物は赤焼き土器杯、土師器甕と砥石が1点出土している。



層位	土色	土性・混入物・その他
1a	暗灰黄色	砂質土。地山ブロックを大量に含む。
1b	暗褐色	しまり、粘性に欠ける。
2	暗灰黄色	地山ブロックを含む。
2	暗灰黄色	砂質土。

第53図　ＳＫ 669土壙



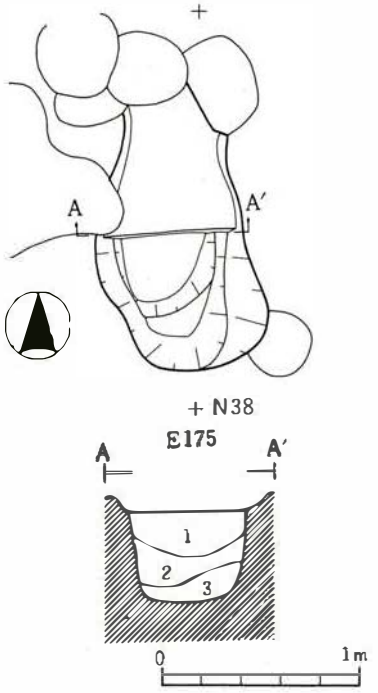
遺物名	層位	図版	登録No.
砥石	ℓ－2	47－3	R-69

第54図　SK 669土壙出土遺物

(8)　SK 670 土壙

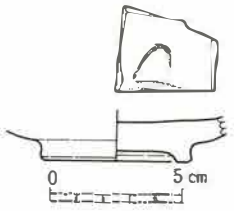
調査区北半部の第Ⅳ層上で検出した土壙である。SD 653 溝跡、SB 609・626・627 建物跡と重複しており、SD 653 溝跡よりは新しいが、SB 609建物跡よりは古い。SB 626・627 建物跡との新旧関係は不明である。平面形は楕円形を呈し長径1.4m、短径0.8m、深さ0.6mである。埋土についてみると底面には均質な砂質土が堆積し、その上には炭化物と地山小粒を含む土が層状に堆積している。

遺物は無釉陶器甕・擂鉢、青磁椀、カワラケ、土師器甕、赤焼き土器杯が出土している。第56図は内面に草花文が彫り込まれている青磁椀の底部破片資料である。高台内は無釉である。



層位	土色	土性・混入物・その他
1	黒褐色	炭化物を含み、地山砂粒多く含む。しまりあり。
2	〃	1層に比べ地山砂粒が少い。しまりあり。
3	黄褐色	砂質土。あまり不純物含まず粘性ややあり。

第55図　SK 670土壙



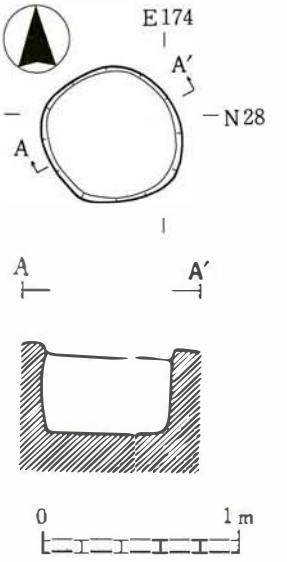
番号	遺物名	層位	図版	登録No.
	青磁椀	ℓ－1		R-23

第56図　SK 670 土壙出土遺物

(9) ＳＫ 674土壙

ＳＫ 667土壙の埋土上で検出した土壙である。平面形は円形を呈し、規模は直径0.7ｍ、深さ0.5ｍである。埋土は地山や灰白色火山灰のブロックや炭化物を多く含むしまりのない土である。

遺物は土師器甕や赤焼き土器杯などの破片が少量出土している。

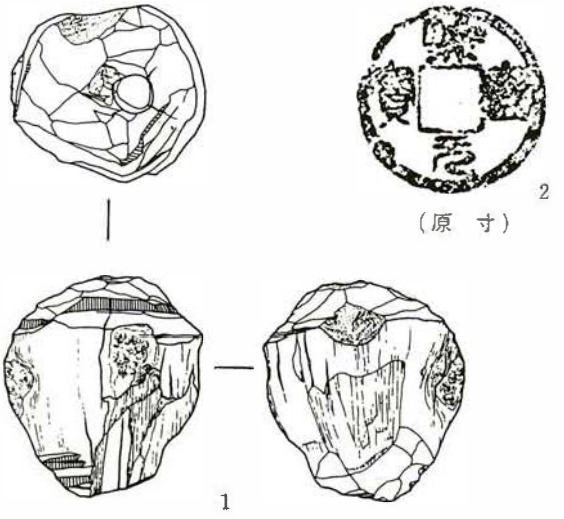


第57図　ＳＫ 674 土壙

(10) ＳＫ 699土壙

調査区南壁近くの第Ⅳ層上から掘り込まれた土壙である。ＳＤ 642溝跡によって西側を破壊されているため全容は不明であるが平面形は不整形を呈し底面も凹凸が著しい。規模は東西1.9ｍ以上である。埋土は２層に分けられ、いずれも砂質土を主体としている。

遺物は、古銭〔熙寧元宝〕(1068年初鋳）と木製品が出土している。第58図１は用途不明の木製品である。球状に加工した体部中央を穿孔している。



番号	遺　物　名	層　位	図　版	登録No.
1	不明木製品	ℓ－1	41－	R-11
2	古　銭	ℓ－1	44-14	

第58図　ＳＫ 699土壙出土遺物

No.	遺構(地区)	層位	長(mm)	幅	厚	重量(g)	石　質(形)	磨面	○	擦	そ の 他	備　　考	登録番号
1	SD-635	3層	122	71	25	350	安山岩(円)	×	×	Ⅲ			R- 78
2	SD-631	1層	(124)	(70)	(56)	(540)	細粒砂岩(角)	○	?	○	使用痕の位置不明	破損　砥石？	R-218
3	SK-677	1層	98	96	51	630		Ⅰ.Ⅱ.Ⅲ	Ⅲ	Ⅰ.Ⅱ.Ⅲ			R-196
4	SK-686	1層	99	83	46	480		×	×				R-199
5	SK-686	1層	83	73	23	110		Ⅲ			線条痕あり		R-200
6	C-15	Ⅲ層	(68)	(57)	(21)	(80)	砂岩(不明)	○	○	○	位置不明	破損　砥石か？	R-226
7	SK-33	1層	(118)	(50)	(44)	(380)	砂岩(〃)	Ⅰ.Ⅱ.Ⅲ	Ⅱ.Ⅲ	Ⅰ.Ⅱ.Ⅲ	線条痕	側面にも磨面あり砥石?	R-220
8	H-07	2層	(91)	(89)	(32)	(340)	砂岩(〃)	Ⅱ.Ⅲ	Ⅱ.Ⅲ	Ⅱ.Ⅲ	凹みⅢ	敲損　砥石？	R-205
9	SD-637	1層	(147)	(106)	(106)	(1390)	砂岩(〃)	○	○	○	線条痕	使用痕は　位置不明(Ⅲ?)	R-204
10	SK-669	2層	(153)	(145)	(51)	(890)	砂岩(〃)	Ⅲ	×	Ⅱ.Ⅲ	線条痕(Ⅱ.Ⅲ)	破損	R- 69
11	SD-631	1層	(149)	(85)	(30)	(400)	砂岩(〃)	○	×	○	線条痕	使用痕位置不明　破損	R-223
12	SK-665	2層	(133)	(115)	(36)	(490)	砂岩(〃)	○	×	○	線条痕	使用痕位置不明　破損	
13	SD-631	2層	90	60	51	290	安山岩(円)	Ⅲ	×	Ⅲ			
14	SD-633	1層	105	79	46	410	安山岩(円)	Ⅰ.Ⅱ.Ⅲ	×	Ⅰ.Ⅱ.Ⅲ	線条痕(Ⅲ)		R-197
15	SD-637	1層	(107)	(57)	(44)	210	砂岩(不明)	Ⅱ.Ⅲ	×	Ⅱ.Ⅲ	線条痕	破損	R-213
16	SK-662	6層	207)	88	77	1920	砂岩(亜円)	Ⅲ	×	Ⅲ			R-207
17	SK-665	1層	(150)	(118)	(86)	(1930)	安山岩(亜円)	Ⅲ	×	Ⅲ	線条痕	破損　スス付着	R-209
18	SK-662	6層	134	105	41	720	不明 (円)	不明	不明	不明	不　明	全面にスス付着	R-203
19			(145)	(141)	(46)	(980)	安山岩(円)	〃	〃	〃	〃	全面にスス付着接合4点	
20	SK-677	3層	(374)	(114)	(115)	(7110)	砂岩(不明)	Ⅱ.Ⅲ	Ⅲ	Ⅱ.Ⅲ		破損後も使用か？	R-210
21	SK-777	3層	(331)	(190)	(88)	(5460)	砂岩(不明)	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	敲打の集中による凹み(Ⅲ)	石Ⅲ(臼か?)文字あり	R-201
22	SK-677	3層	(237)	(188)	(82)	(5060)	安山岩(円)	Ⅲ	×	Ⅲ	ススありⅢ	一部破損	R-135
23	SD-637	3層	(110)	(81)	(78)	(640)	砂岩(不明)	㊁	側	㊁	線条線	中央に凹み　破損	R- 76
24	G-07	3層	157	153	46	800	安山岩(円)	?	?	?	?	全面にスス付着	R-212
25	SK-677	3層	(150)	(135)	(56)	(1210)	砂岩 (?)	○	×	○	使用痕 位置不明	破損	R-217
26	SK-678	1層	(123)	(84)	(53)	(150)	細粒凝灰岩	?	?	?	破損以外はスス付着		
27	SK-684	3層	(127)	(82)	(54)	(170)	〃	?	?	?	〃		R-215

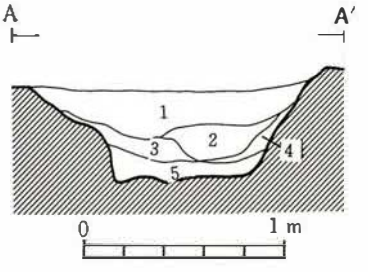
表　2　使用痕のある礫観察表（第4次調査分）

D．溝　跡

(1)　ＳＤ 631 溝跡

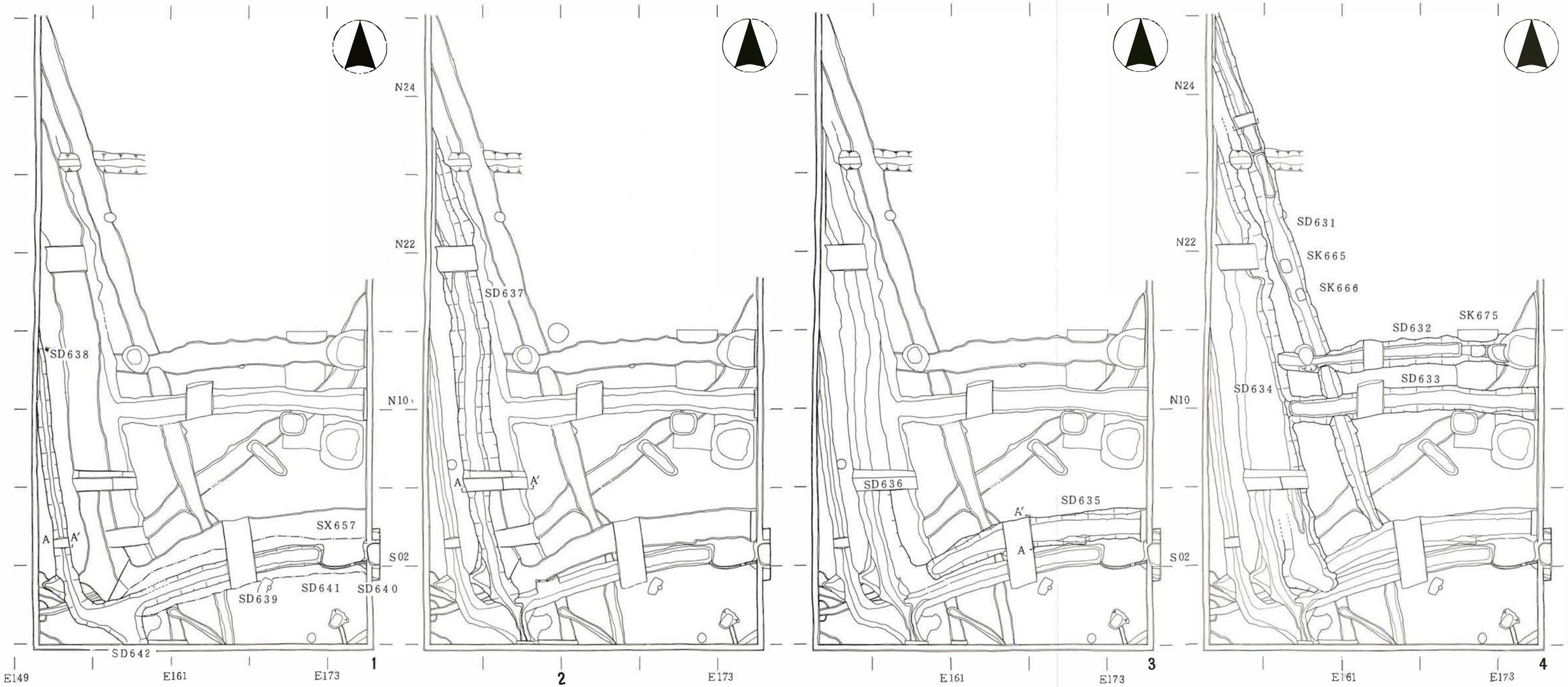
ＳＤ 631 溝跡は第Ⅳ層上から掘り込んだ溝跡である。調査区を南北に走り、北側は調査区外に延びているが、南側はＳＤ635 溝跡によって破壊されている。ＳＤ 653 ・ 646 ・ 633 ・ 632 溝跡、ＳＥ 682 井戸跡と重複しており、ＳＤ 653 ・ 646 溝跡より新しいが他のものより古い。ＳＤ 644 溝跡との関係については明らかにできなかった。方向は発掘基準線に対し北で約18度西に偏している。断面の形状については、底面から緩やかに立ち上がっているが段掘りを呈する部分もある。規模は上幅 0.8 ～ 1.5 m、 深さは段掘り状を呈するところで 0.7～ 0.5 m、他は 0.5～0.3 m を計る。長さは41 m にわたって検出した。埋土についてみると、下層は粘質土と砂質土が互層になっており、その上にはしまりのない均質な黒褐色土が厚く堆積している。

遺物は無釉陶器甕・壺・擂鉢、施釉陶器香炉、青磁椀、カワラケ、土師器甕・杯、須恵器甕・瓶、赤焼き土器杯・高台付杯、砥石、鉄製の皿、古銭〔皇宋通宝〕（1038年初鋳）などが出土している。第61図5は無釉陶器甕の口縁部破片資料である。口縁部はいわゆる受口状を呈し



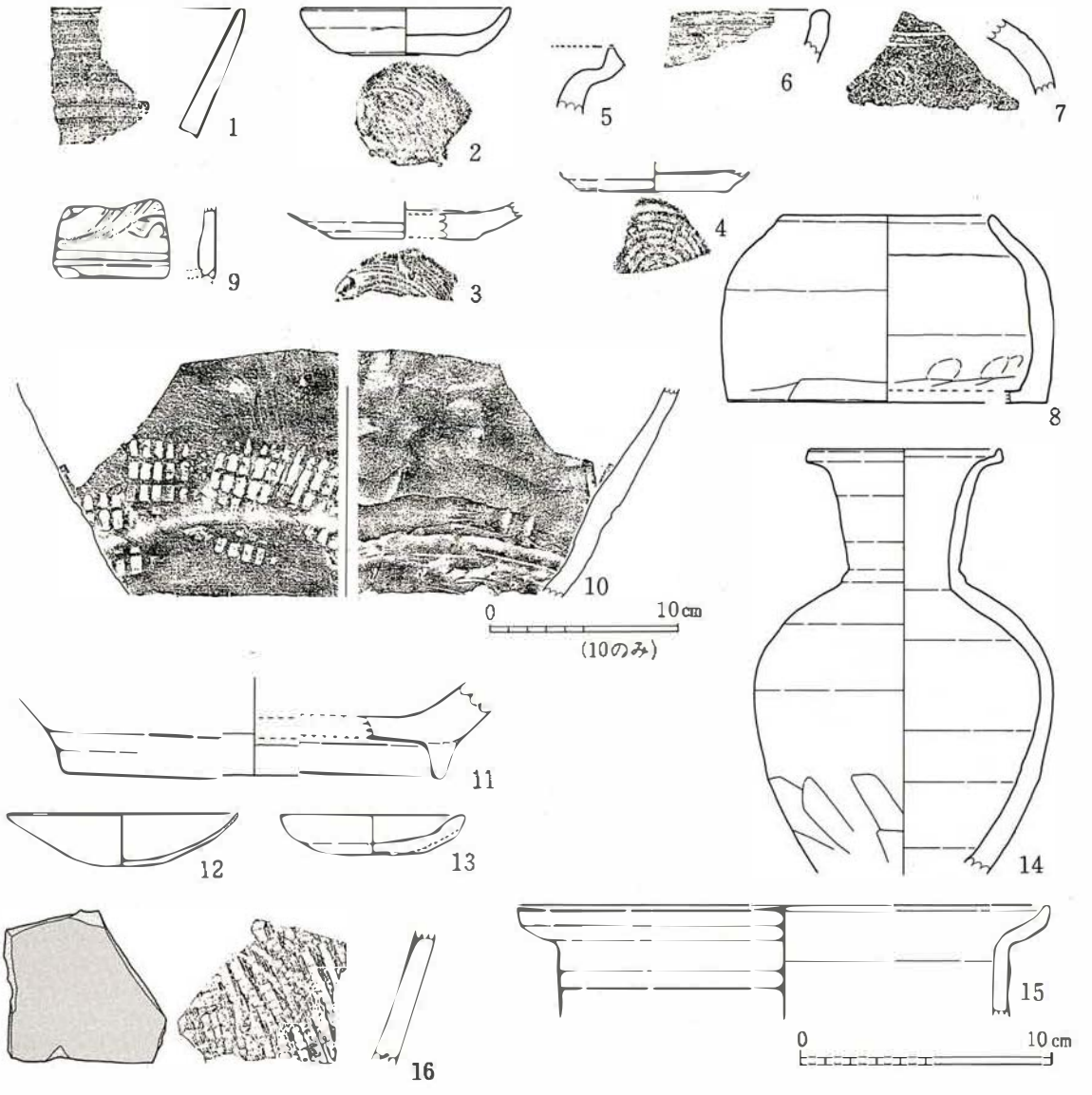
層位	土　色	土性・混入物・その他
1	黒褐色(10YR 3/1)	しまりがなく粘性乏しく、褐灰色土を含む。
2	黒　色(〃 3/1)	粘質土。
3	褐灰色(〃 4/1)	黄褐色土粒を斑状に含む。
4	にぶい黄橙色(〃 7/3)	褐色土と黄橙色土が層状に入る。
5	黒褐色(〃 3/1)	粘質土、黄橙色土の地山崩壊土を斑点状に含む。

第59図　ＳＤ 631 溝跡断面図



0 15m

第60図　調査区南半部溝跡平面図

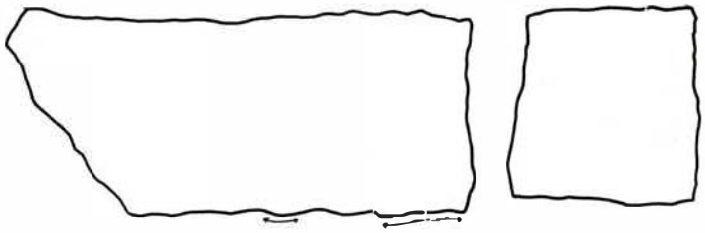


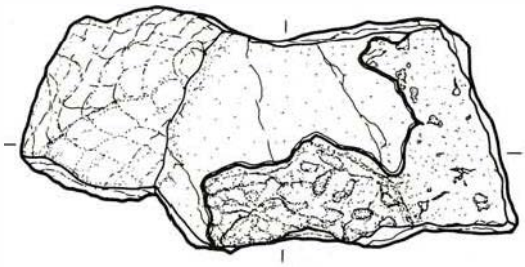
番号	遺物名	層位	図版	登録No.	番号	遺物名	層位	図版	登録No.
1	無釉陶器擂鉢	ℓ－1	25－5	R-162	9	施釉陶器香炉	ℓ－2	21—14	R-26
2	カワラケ	ℓ－1		R-35	10	無釉陶器壺	ℓ－1	24—11	R-129
3	同　上	ℓ－3		R-256	11	無釉陶器擂鉢	ℓ－1	25—18	R-100
4	同　上	ℓ－1		R-257	12	鉄製皿	ℓ－1	43—20	—
5	無釉陶器甕	ℓ－1		R-236	13	同　上	ℓ－1		—
6	無釉陶器擂鉢	ℓ－1		R-145	14	須恵器瓶	ℓ－1		R-79
7	無釉陶器壺	ℓ－1	24—8	R-231	15	土師器甕	ℓ－1		R-104
8	同　上	ℓ－1	24—14	R-58	16	須恵器甕(内面研磨)	ℓ－1		R-268

第61図　SD 631 溝跡出土遺物 (1)

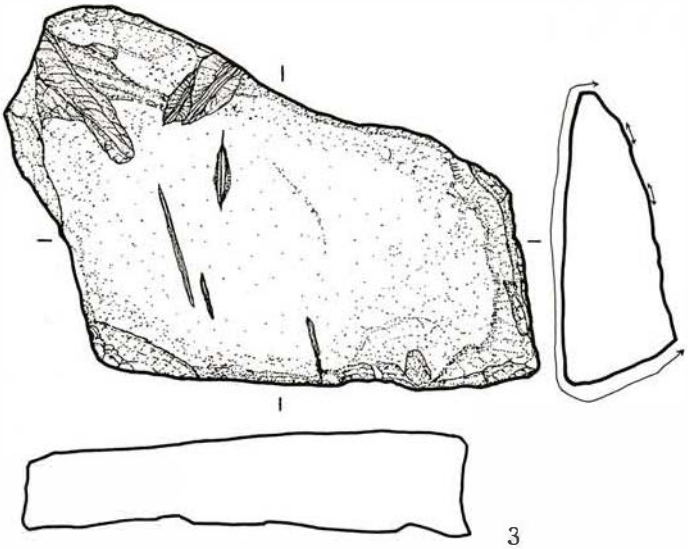
1

(原　寸)

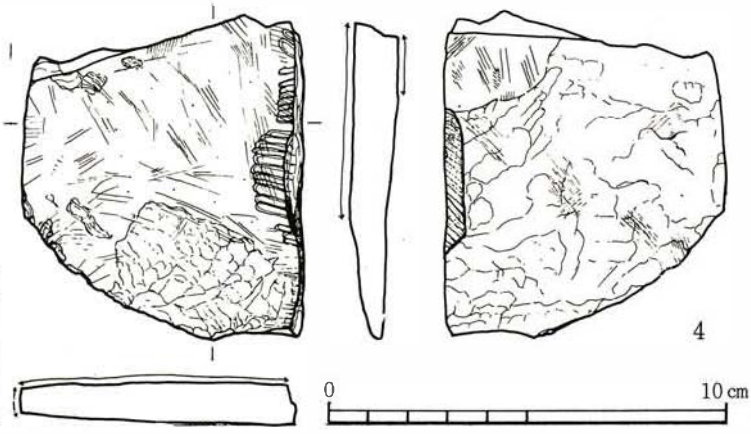




2



3



4

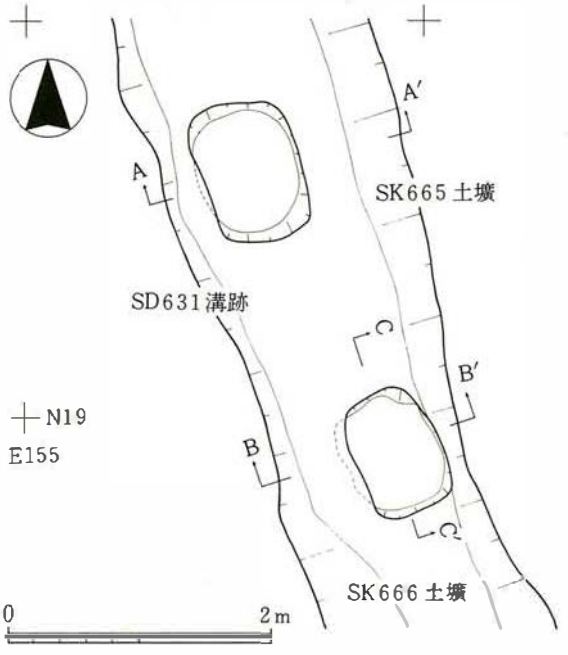
0　10 cm

番号	遺物名	層位	図版	登録No.
1	古　銭		44-10	R-218
2	使用痕のある礫	ℓ－1		R-218
3	同　上			—
4	同　上	ℓ－1		R-198

第62図　ＳＤ 631 溝跡出土遺物 (2)

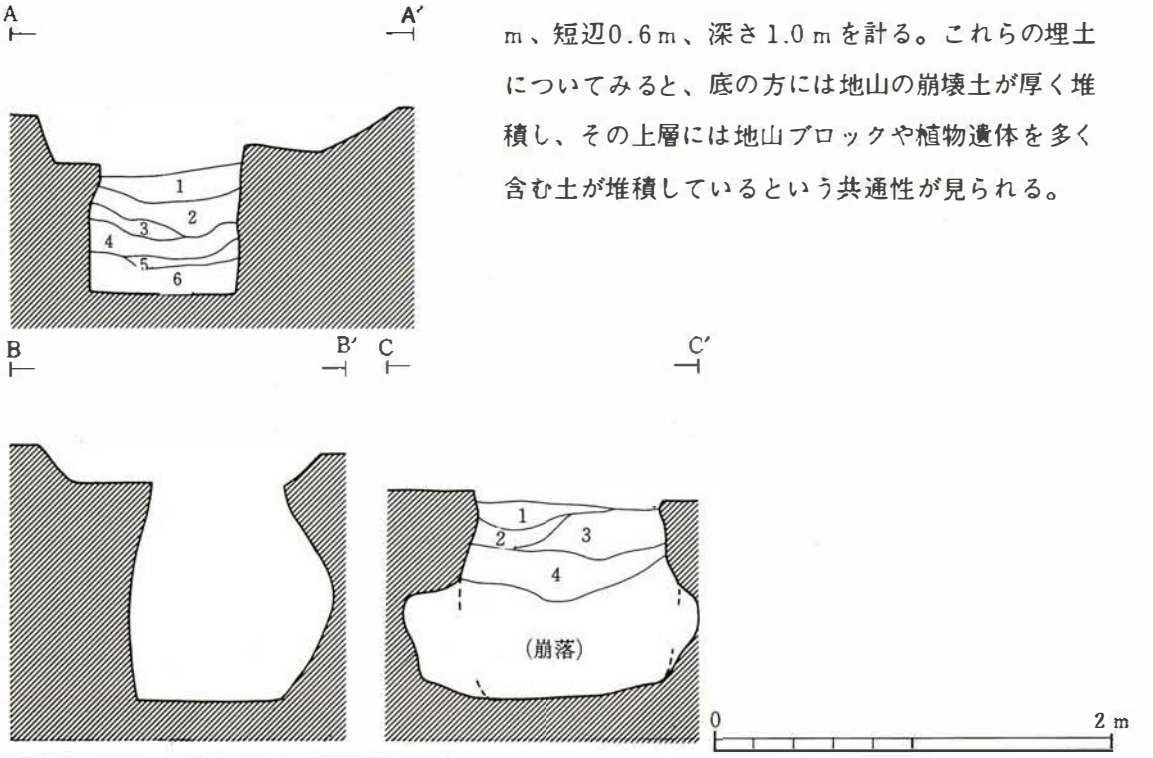
先端はわずかに立ち上がっている。内外ともヨコナデ調整されており、特に端部はシャープに仕上げられている。器表はにぶい赤褐色を呈し、内面には灰オリーブ色の自然釉が厚くかかっている。胎土は淡黄色の緻密な土で白色の微粒を含んでいる。以上のような口縁部の形態、胎土、色調などからこの甕は常滑窯の製品と考えられ、赤羽一郎氏の編年によると第Ⅱ段階後半（13世紀前半）のものに位置づけられる。なお、この口縁部片と同一個体と見られる甕の体部破片が本溝跡から20点出土している。第61図８は無頸壺である。粘土紐巻き上げ成形後、ヨコナデ調整し、外面体部下端は横方向に手持ちヘラケズリしている。底部はいわゆる砂底状を呈し平坦である。第61図７は壺の体部破片である。肩に二条の沈線がある。第61図10は壺或いは甕の体部下半部の破片である。粘土紐の継ぎ目が明瞭に残っており、その部分に格子の押印が密接して施されている。胎土は灰白色で砂質に富み、混入物はほとんど含まない。胎土や色調、押印のあり方などから渥美窯の製品と考えられる。擂鉢は口縁部の破片２点（第61図１・６）と底部の破片１点（第61図11）がある。11は体部下半を横方向にヘラケズリを施し、逆台形の重厚な高台を貼付している。灰白色を呈しており、その色調や高台の形状から東海地方の製品と推定される。赤羽一郎氏の常滑窯編年では第Ⅱ段階前半（12世紀後半）のものに類似している。第61図９は施釉陶器の香炉である。筒形を呈し、黄緑色の灰釉が外面に施されている。底部と体部の境には貼り付けによる脚の一部がかろうじて残存している。体部の下端には二条の沈線が施され、その上方には草花文かと思われる文様が陰刻されている。瀬戸窯の製品と見られ、藤澤良祐氏のご教示によれば14世紀前半の製品であるという。カワラケは３個体分出土している（第61図２・３・４）。いずれもロクロ調整されており、切り離しのわかるもの２点はいずれも回転糸切りによっている。２は体部に粘土紐の継ぎ目が残っている。第61図12・13は鉄製の皿である。12は薄手で丸底を呈しており、13は厚手で比較的浅い器形である。

なお、ＳＤ 631溝跡の底面でＳＫ 665・666土壙を検出した。これらは主軸方向が本溝跡と一致し、更に溝跡の底面の中におさまっていることから本溝跡に関連して機能した土壙と考えられる。平面形はいずれも長方形を呈し、規模はＳＫ 665土壙が長辺0.9ｍ、短辺0.8ｍ、深さ0.7mであり、ＳＫ666土壙が長辺0.9



第63図　ＳＤ 631溝跡、ＳＫ 665・666土壙

m、短辺0.6m、深さ1.0mを計る。これらの埋土についてみると、底の方には地山の崩壊土が厚く堆積し、その上層には地山ブロックや植物遺体を多く含む土が堆積しているという共通性が見られる。

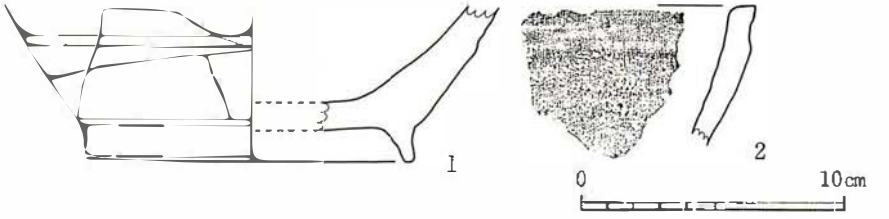


層位	土色	土性・混入物・その他
1	褐灰色(10YR 4/1)	粘質土。植物遺体を下層に含む。しまりあり。
2	淡黄色(5Y 7/3)	褐色土ブロックを下層に含む。しまりなし。
3	褐灰色(10YR 4/1)	粘質土。
4	淡黄色(5Y 7/3)	褐色土ブロックを含み。しまりなし。
5	にぶい黄橙色(10YR 7/4)	腐植土を含む。
6	褐灰色(10YR 4/1)	腐植土をまばらに含み、灰オリーブブロックを含む。

層位	土色	土性・混入物・その他
1	褐灰色(10YR 4/1)	砂質土。均質な堆積、しまりなし
2	にぶい褐灰色(7.5YR 5/3)	粘質土、腐植土を含む。
3	灰黄褐色(10YR 4/2)	若干腐植土を含む。
4	にぶい褐色(〃 5/3)	多量の腐植土を含む。

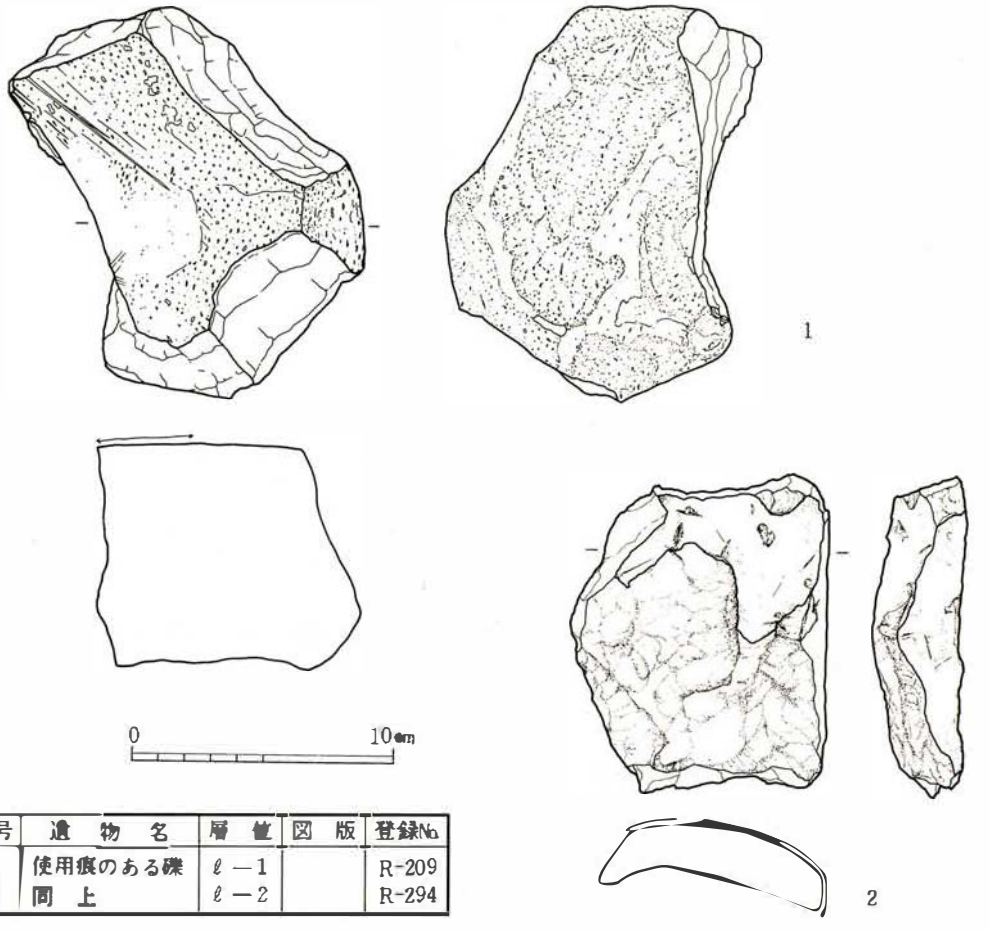
第64図　ＳＫ 665・666土壙断面図

遺物はＳＫ 665土壙から使用痕のある礫、ＳＫ 666土壙からは無釉陶器擂鉢、赤焼き土器杯などが出土している。第65図1は無釉陶器擂鉢の底部破片資料である。底部下端を横方向にヘラケズリした後、高台を貼付してヨコナデ調整している。高台は断面が二等辺三角形で先端がやや丸味を帯びている。硬く焼き締められており、灰白色を呈している。内面は著しく磨耗している。器形や色調から東海地方の製品と考えられ、赤羽一郎氏の常滑窯編年では第Ⅲ段階前半（13世紀後半）のものに類似している。



番号	遺物名	層位	図版	登録No.	番号	遺物名	層位	図版	登録No.
1	無釉陶器擂鉢	ℓ－2	25－16	R-51	2	無釉陶器擂鉢	ℓ－2		R-193

第65図　ＳＫ 665土壙出土遺物

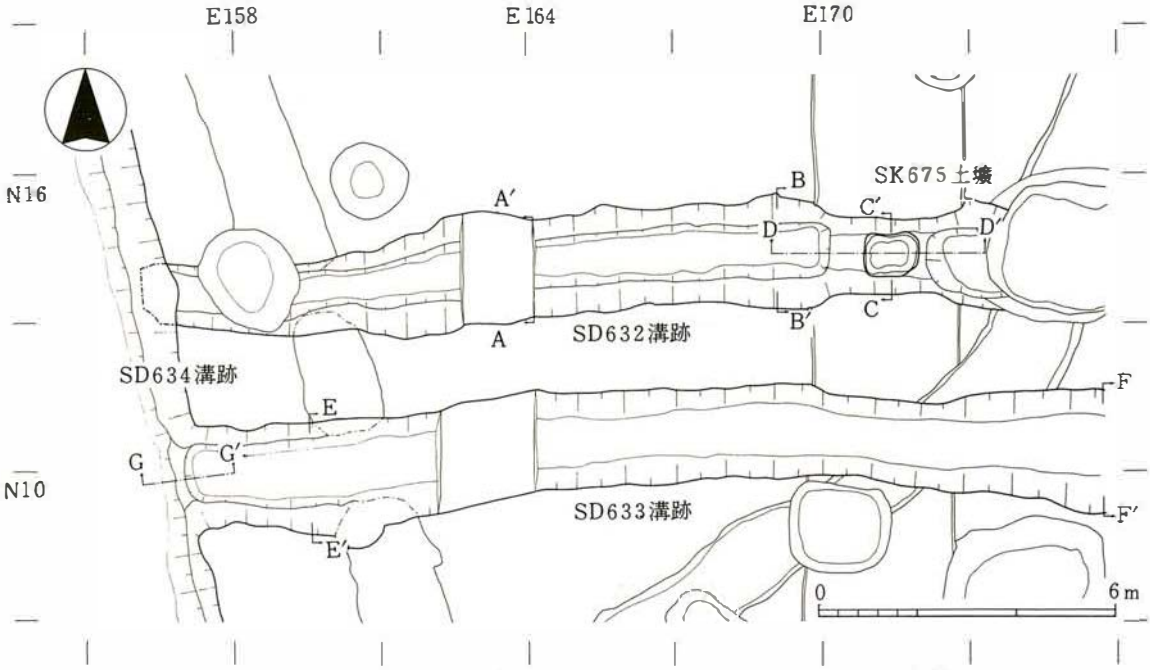


番号	遺物名	層位	図版	登録No.
1	使用痕のある礫	ℓ－1		R-209
2	同上	ℓ－2		R-294

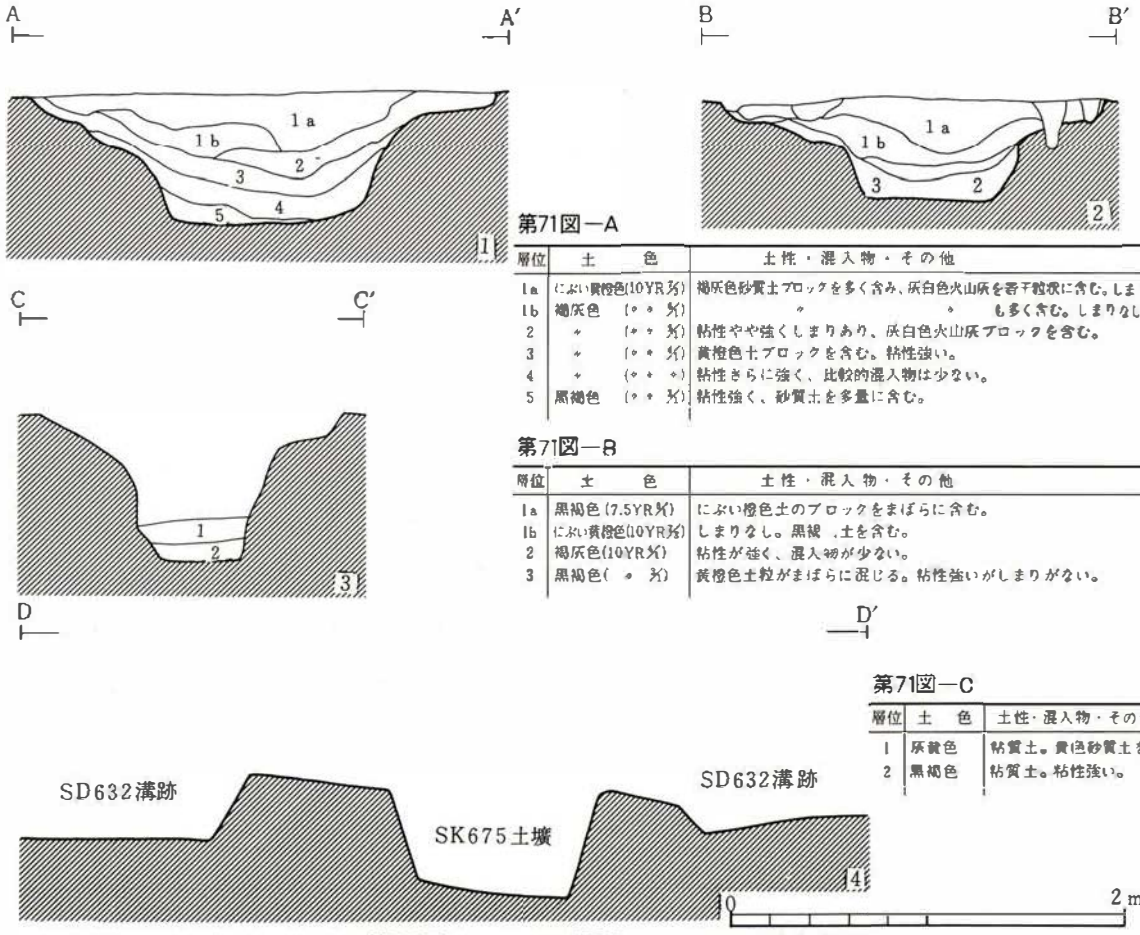
第66図　ＳＫ 665土壙出土遺物

(2) ＳＤ 632溝跡

ＳＤ 632溝跡は調査区南半部の第Ⅲ層上で検出した東西溝である。ＳＤ 631・674・634溝跡、ＳＥ 682井戸跡、ＳＫ 042・661土壙と重複しており、ＳＤ 631・646溝跡より新しく、ＳＤ 634溝跡、ＳＥ 682井戸跡、ＳＫ 661土壙より古い。本溝跡の方向は、発掘基準線とほぼ一致している。底面はほぼ平坦であるが、ＳＫ 661土壙のすぐ西側では、東西 2m にわたって高くなっている部分があり、そのほぼ中央にＳＫ 675土壙がある。本溝跡の底面のレベルは、この高い部分の西側が最も深く、ＳＥ 682井戸跡の周辺とでは約30cmの比高差がある。東側については明確にし得ないが、西側については、この高い部分に向かって緩やかに傾斜している（第68図4）。規模は、上幅２～2.3ｍ、深さ0.7ｍであり、長さは16m にわたって検出した。断面の形状は、いわゆる段掘り状である。埋土は、東壁近くのセクションを参考にすると底面近くには砂質土を含む粘質土が北壁寄りに堆積し、その上には厚い粘質土の堆積がみられ、自然に埋没



第67図　ＳＤ 632・633・634溝跡、ＳＫ 675土壙



第71図—A

層位	土　色	土性・混入物・その他
1a	にぶい黄橙色(10YR 7/3)	褐灰色砂質土ブロックを多く含み、灰白色火山灰を若干粒状に含む。しまりなし。
1b	褐灰色　(〃 〃 5/1)	〃　　〃　　も多く含む。しまりなし。
2	〃　(〃 〃 5/1)	粘性やや強くしまりあり、灰白色火山灰ブロックを含む。
3	〃　(〃 〃 5/1)	黄橙色土ブロックを含む。粘性強い。
4	〃　(〃 〃 〃)	粘性さらに強く、比較的混入物は少ない。
5	黒褐色　(〃 〃 3/1)	粘性強く、砂質土を多量に含む。

第71図—B

層位	土　色	土性・混入物・その他
1a	黒褐色 (7.5YR 3/1)	にぶい橙色土のブロックをまばらに含む。
1b	にぶい黄橙色(10YR 7/3)	しまりなし。黒褐色土を含む。
2	褐灰色(10YR 4/1)	粘性が強く、混入物が少ない。
3	黒褐色(〃 3/1)	黄橙色土粒がまばらに混じる。粘性強いがしまりがない。

第71図—C

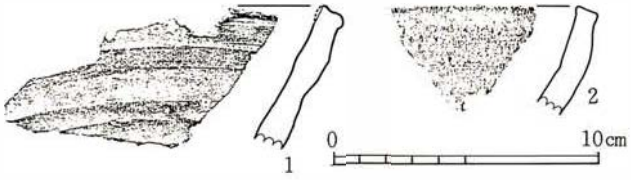
層位	土　色	土性・混入物・その他
1	灰黄色	粘質土。黄色砂質土を混入
2	黒褐色	粘質土。粘性強い。

第68図　ＳＤ 632 溝跡、ＳＫ 675土壙断面図

した様相を呈している。更にその上には、地山ブロックを多く含むしまりのない鈍い黄褐色土が堆積しているが、これについては人為的に埋め戻されたものである可能性が大きい。なおSK675 土壙は、平面形は長方形を呈し、規模は長辺1.1m、短辺0.8m、深さは0.5m を計る。埋土はグライ化して非常に粘性の強い黒褐色土である。

なお、SD 637溝跡の西側において本溝跡の続きは検出できなかった。

遺物は無釉陶器甕・擂鉢、土師器、須恵器、赤焼き土器・瓦、動物遺体が出土している。第72図1・2は無釉陶器擂鉢の口縁部の破片資料である。いずれも内外をヨコナデ調整している。動物遺体としては鹿角が1点出土している（図版5－4）。座骨を切断した痕跡が残っている。



番号	遺物名	層位	図版	登録No.	番号	遺物名	層位	図版	登録No.
1	無釉陶器擂鉢	ℓ－2	26－17	R-138	2	無釉陶器擂鉢	ℓ－2		R-163

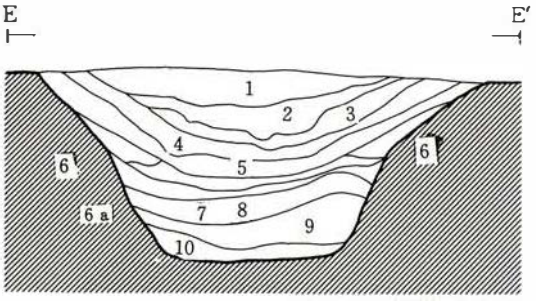
第69図　SD 632溝跡出土遺物

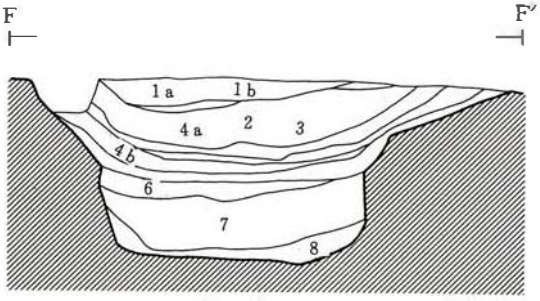
(3)　SD 633・634溝跡

SD 633・634溝跡は調査区南半部で検出した溝跡である。SD 633溝跡は東西に走り、その西端部が南北に走るSD 634溝跡に連結している。SD 633溝跡については第Ⅲ層上面で検出している。SD 633溝跡はSD 646・631溝跡と、SD 634溝跡はSD 636・637・635・646溝跡と重複しており、SD 646・631溝跡より新しいが他より古い。方向についてみるとSD 633溝跡は発掘基準線とほぼ一致しているが、SD 634溝跡は北で約13度西に偏している。規模についてみると、SD 633溝跡は上幅1.8～2.5m、深さ0.85～0.9mで18mにわたって検出しており、SD 634溝跡は上幅1.8m以上、下幅0.6m、深さ0.9mで長さ37mにわたって検出している。これらの溝跡はいずれも自然に埋没した様相を呈しており、下層に近いほど粘性を帯びている（註3）。なお、これらの溝跡の連結部は、SD 633溝跡が西端で一旦立ち上がるため底面が連続せず、高さ0.4mの高まりによって画されている（第70図）。底面は両者とも平坦であり、底面レベルを比較するとSD 634溝跡の方が18cm深くなっている。また、SD 634溝跡はSD 635溝跡の南側まではのびていないことを確認した。

遺物は、SD 633溝跡より無釉陶器甕・擂鉢、カワラケ、土師器、須恵器、赤焼き土器、平

註3　調査終了後、断面図の検討により、SD 633溝跡の第1～5層と第6～10層とでは堆積状況が異なっていることが判明した。SD 633、634溝跡連結部から東へ約0.8mの地点では平面的に埋土の違いも確認しており、SD 633溝跡は新旧二時期に分けられる可能性がある。



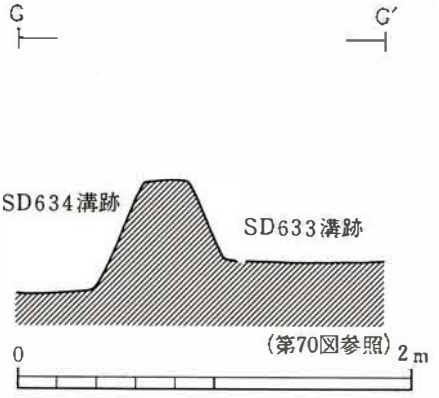


第73図—E

層位	土色	土性・混入物・その他
1	黄褐色	砂質土。粘性、しまり弱。
2	褐灰色	砂質土。粘性、しまりややあり、炭化物を多く含む。
3	灰褐色	砂質土。粘性、しまりややあり、黄灰色土ブロックを含む。
4	灰褐色	砂質土。粘性、しまりややあり、黄灰色土ブロックを含む。
5	褐色	砂質土。粘性、しまりあり、炭化物層を含む。
6a	〃	砂。粘性弱く、非常に硬くしまっている。
6b	暗灰黄色	砂。粘性あり、しまりあり、灰白色土層を上部に含む。
6c	暗褐色	砂。粘性あり、しまりあり。
7	〃	砂質土。粘性あり、しまりあり。
8	暗青灰色	砂質土。粘性あり、しまりあり、砂礫を含む。
9	〃	〃 〃 〃 〃
10	〃	〃 〃 〃 〃

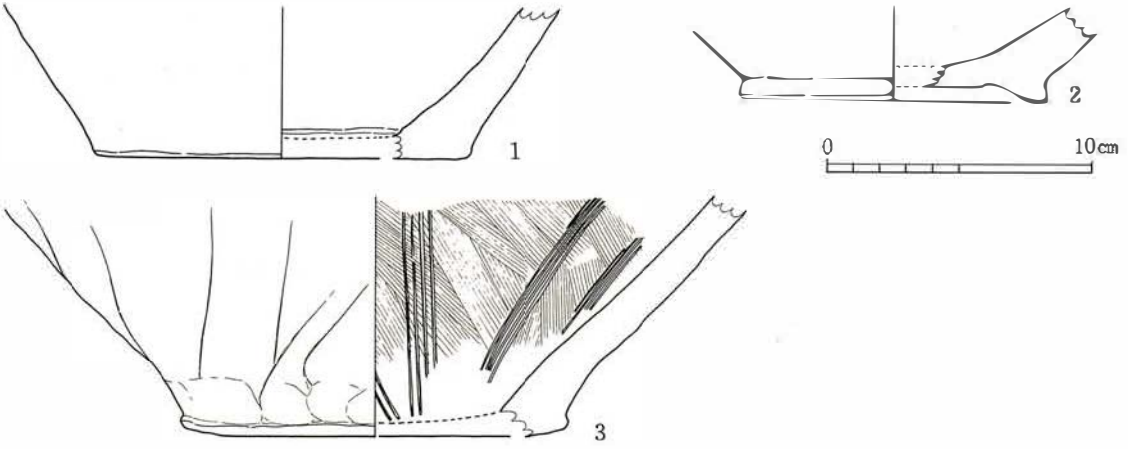
第74図—F

	土色	土性・混入物・その他
1a	黄褐色	砂質土。粘性、しまりとも弱い。
1b	〃	砂質土。粘性、しまりともにやや弱い。1a層より粗い。
2	褐灰色	砂質土。粘性、しまりともややあり、黄灰色土ブロックを多量に含む。
3	〃	砂質土。粘性、しまりともにややあり、炭化物層を含む。
4a	灰褐色	砂質土。粘性、しまりともに弱い、層下部に赤褐色土層を含み、炭化物を含む。
4b	褐色	砂。粘性、しまりともになし、層下部に灰白色土層を含む。
5	暗褐色	砂質土。粘性、しまりあり。
6	暗青灰色	砂質土。粘性、しまりともにあり、炭化物をわずかに含む。
7	〃	砂質土。粘性、しまりともにあり、炭化物と砂粒上部に腐葉層を含む。
8	〃	砂質土。粘性、しまりともにあり、粗い砂粒を多量に含む。



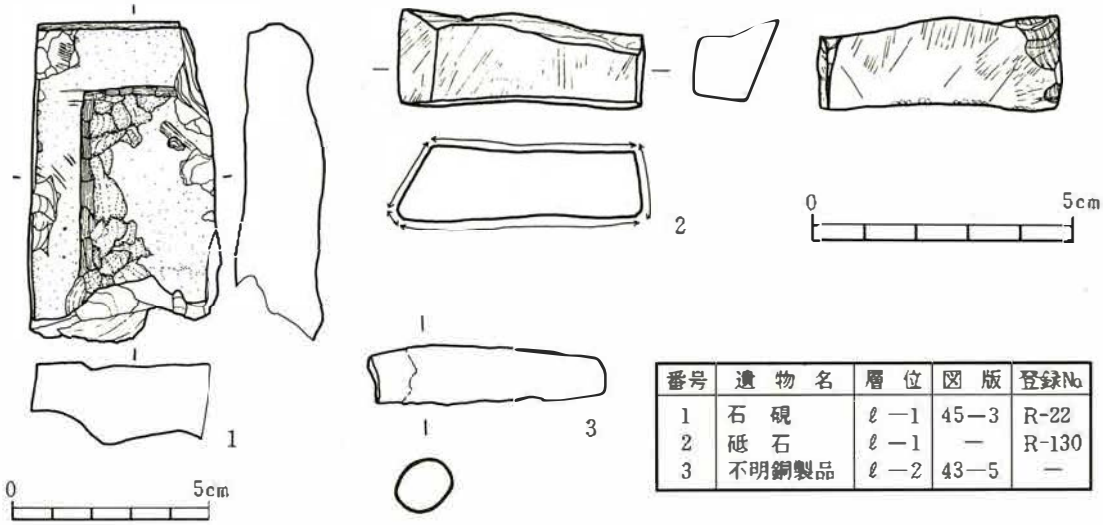
第70図　ＳＤ633溝跡断面図、ＳＤ633・634溝跡エレベーション

瓦、硯、砥石、使用痕のある礫、金属製品などが出土している。第71図1～3は無釉陶器の擂鉢である。2は体部をヨコナデ調整後高台を貼付している。3は内面に4本1単位の筋目を施している。外面は、下から上へハケメ調整されているが成形時の凹凸が残る粗い面を呈している。内面もハケメ調整されており、見込みに近い部分のみヨコナデしている。第72図1は硯の未製品である。縁を残して浅く掘り込んだ段階で終っており、裏面は未加工の状態である。石



番号	遺物名	層位	図版	登録No.	番号	遺物名	層位	図版	登録No.
1	無釉陶器擂鉢	ℓ—4	27—20	R-117	3	無釉陶器擂鉢	ℓ—1	28—1	R-143
2	同上	ℓ—2	27—13	R-115					

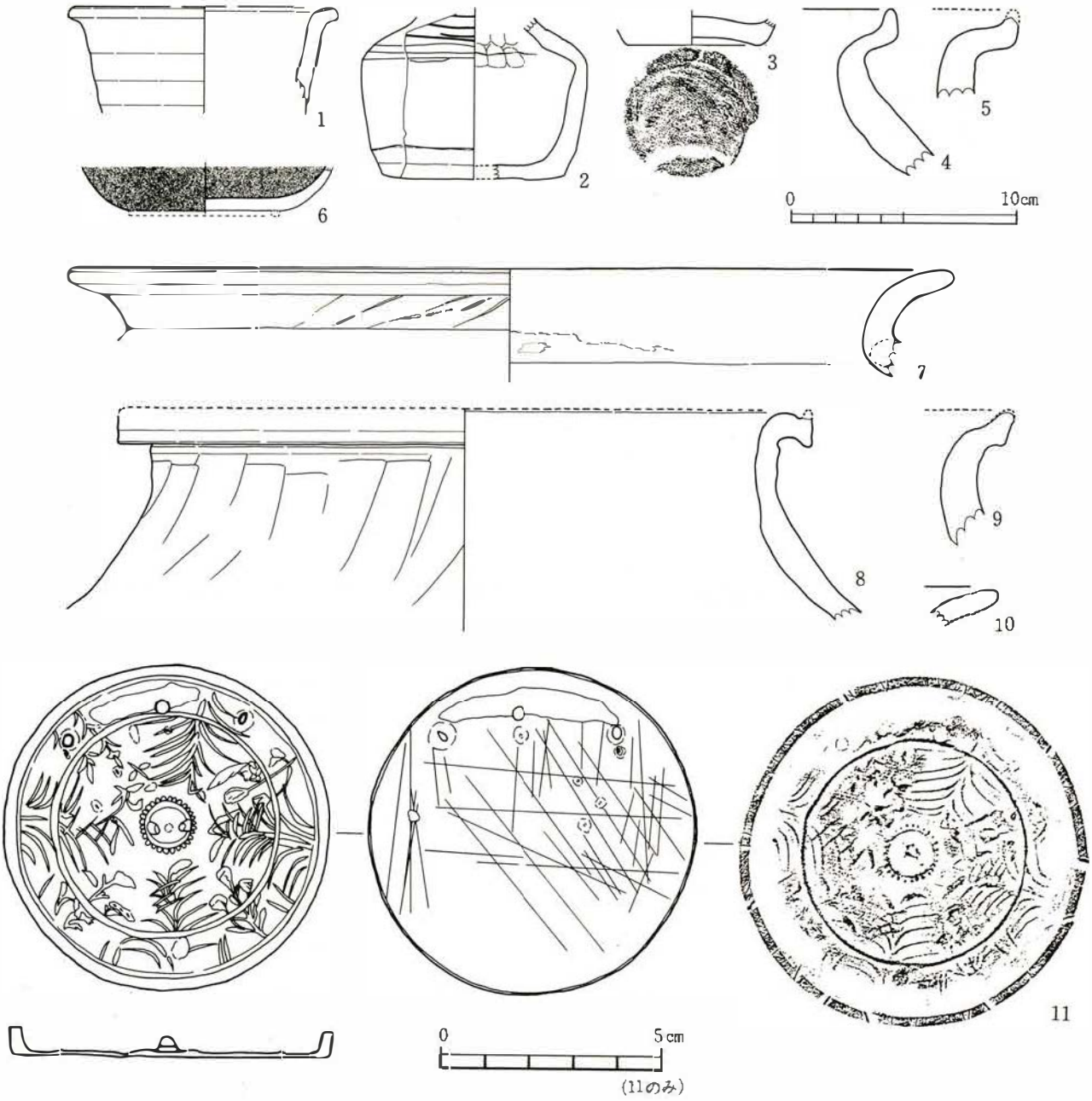
第71図　ＳＤ633溝跡出土遺物 (1)



番号	遺物名	層位	図版	登録No.
1	石硯	ℓ－1	45－3	R-22
2	砥石	ℓ－1	－	R-130
3	不明銅製品	ℓ－2	43－5	－

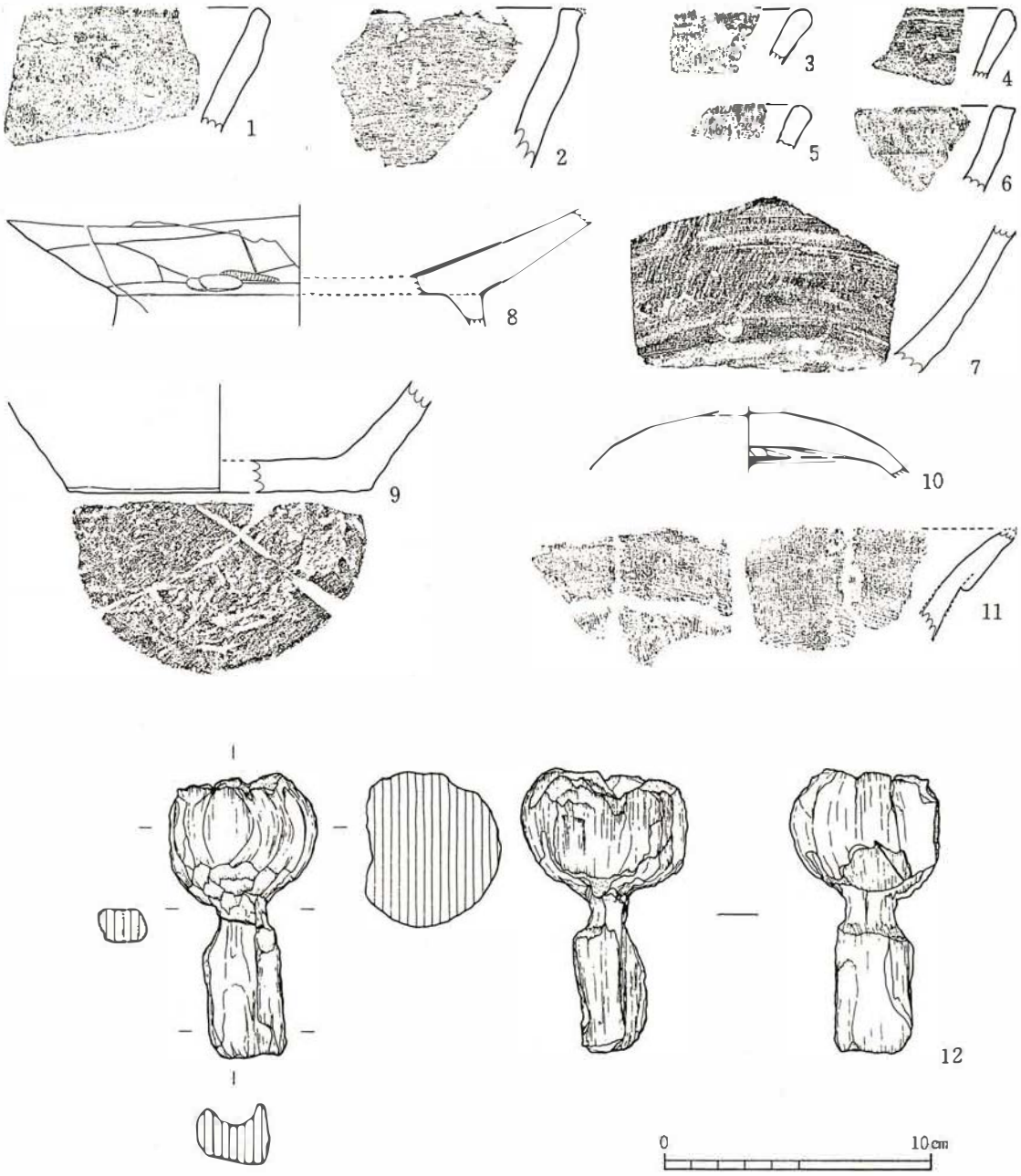
第72図　ＳＤ 633 溝跡出土遺物 (2)

材は頁岩である。3は銅製の管状の製品である。用途は不明である。ＳＤ 634 溝跡からは無釉陶器壺・甕・擂鉢、施釉陶器甕・鉢、カワラケ、漆器椀、用途不明の木製品、銅鏡、土師器、須恵器、瓦などが出土している。第73図2は無釉陶器の壺である。肩部の一番張ったところと体部下端を横方向にヘラケズリし、他に不定方向にナデている。内面は肩部に成形時の指による押圧痕が明瞭に残っており、その上をヨコナデ調整している。肩部の上には4条の沈線が施されている。4・5・8・9・10は無釉陶器甕の口縁部破片である。4・5・9は受口状の口縁を持つもので内外ともヨコナデ調整している。これらの特徴から地元窯の製品と考えられる。8は口縁部の先端がややT字形に近い形態をもつもので、外面体部は上から下へヘラナデ調整し、内面は成形時の指による押圧痕の上を粗くヨコナデ調整している。外面には緑色の自然釉がかかり、胎土は灰白色で黒色の粒子が混入している。これらの特徴から常滑窯の製品と考えられ、赤羽一郎氏の編年によれば第Ⅲ段階後半（14世紀前半）のものに類似している。7は口縁部内面に灰釉を施釉した大甕である。灰釉は薄くハケ塗りされており、光沢はない。口縁は先端を丸く仕上げただけの単純な形態を呈しており、頸部と体部では明瞭な境を成すようである。頸部には斜方向にヘラナデした痕跡が残っている。胎土は灰白色を呈し、混入物の少ない砂質に富んだものである。これらの特徴から渥美窯の製品と考えられる。10は施釉の痕跡は認められないが7と類似している。第74図1～9は無釉陶器の擂鉢である。いずれも内面に筋目は施されていない。8は体部下端を手持ちヘラケズリした後高台を貼付してヨコナデ調整している。灰白色を呈しており、東海地方の製品と考えられる。9は内外とも丁寧にヨコナデ調整されている。底部には調整台の圧痕かと思われる痕跡が残っている。1～6の口縁部は内外ともヨコナデ調整されている。第73図1は内外とも灰釉を施された鉢である。破片資料のため全



番号	遺物名	層位	図版	登録No.	番号	遺物名	層位	図版	登録No.
1	施釉陶器鉢	ℓ－1	21－4	R-17	7	施釉陶器甕	ℓ－1	24－5	R-56
2	無釉陶器壺	ℓ－5	24－14	R-48	8	無釉陶器甕	ℓ－2	23－13	R-54
3	カワラケ	ℓ－2		R-259	9		ℓ－2	23－15	R-237
4	無釉陶器甕	ℓ－2	24－2	R-50	10		ℓ－2		R-240
5	同上	ℓ－2		R-238	11	和鏡	ℓ－1	43－1	—
6	漆器椀	ℓ－2	35－12	R-6					

第73図　ＳＤ 634 溝跡出土遺物 (1)



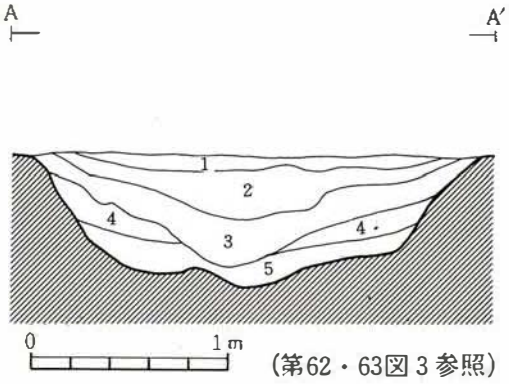
番号	遺物名	層位	図版	登録No.	番号	遺物名	層位	図版	登録No.
1	無釉陶器擂鉢	ℓ－4		R-168	7	無釉陶器擂鉢	ℓ－1		R-112
2	同上	ℓ－1	26－11	R-167	8	同上	ℓ－2	26－6	R-102
3	同上	ℓ－2		R-164	9	同上	ℓ－2		R-44
4	同上	ℓ－2		R-165	10	須恵器蓋	ℓ－2		R-53
5	同上	ℓ－1		R-144	11	土師器壺	ℓ-1-2		R-233
6	同上	ℓ－2		R-166	12	不明木製品	ℓ－2		R-4

第74図　ＳＤ 634溝跡出土遺物 (2)

容が明らかでないが、柄付の片口となる可能性がある。瀬戸窯の製品と考えられる。6は漆器の椀である。高台は完全には残っていないが、幅の狭い低いものであったようである。内外とも黒漆が施されている。3はカワラケである。ロクロ調整されており、底部はやや上げ底状を呈す。静止糸切りの痕跡が残っている。11は和鏡である。鏡背には全面にわたって草と花を配している。縁と界圏の間には貫通する3つの小孔が穿たれている。鏡面には不定方向の線状痕が多数あり、刺突痕（？）も5か所確認できる。第74図12は用途不明の木製品である。

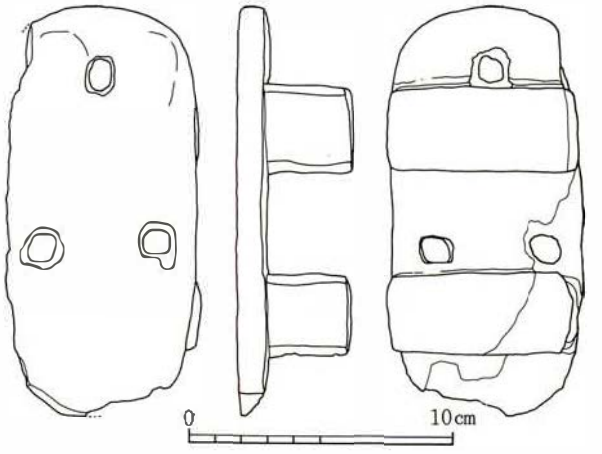
(4) ＳＤ 635・636溝跡

ＳＤ 635・636溝跡は調査区南半部で検出した溝跡である。それぞれ先端は調査区外にのびている。ＳＤ 635溝跡はＳＤ631・634・637・639・646溝跡と重複しており、ＳＤ639・637　溝跡より古く、他のものより新しい。方向は、いずれも蛇行しているため計測しがたいが、ＳＤ635溝跡はＳＤ639溝跡と、ＳＤ636溝跡はＳＤ638溝跡とほぼ同じ方向をとっている。長さは前者が20m、後者は36mにわたって検出した。遺存状態の良いＳＤ 635溝跡でみると、上幅は最大で2.3m、深さは0.7mであり、断面の形態についてはほぼ逆台形を呈している。底面には凹凸



（第62・63図3参照）

層位	土　色	土性・混入物・その他
1	褐灰色(10YR4/1)	粘性、しまりややあり．粒子細かく均質である。
2	〃（〃 4/1）	粘性、しまりあり、粒子は1層より細かく均質である。砂を縞状に含む。
3	黒褐色(10YR3/1)	粘性。しまりあり、粒子は2層同様細かく均質である。
4	〃（〃 3/1）	粘性、しまりややあり、粒子は2層同様細かく均質である。地山崩壊土ブロックを含む。



遺物名	層位	図版	登録No.
下駄	下層	39－2	R-3

第75図　ＳＤ 635溝跡断面図及び出土遺物

がみられる。埋土についてみると、下層（3～5層）は砂と粘質土が互層になって自然堆積した様相を呈しているのに対し、上層（1・2層）は地山ブロックを大量に含んだ土で人為的に埋められているようである。

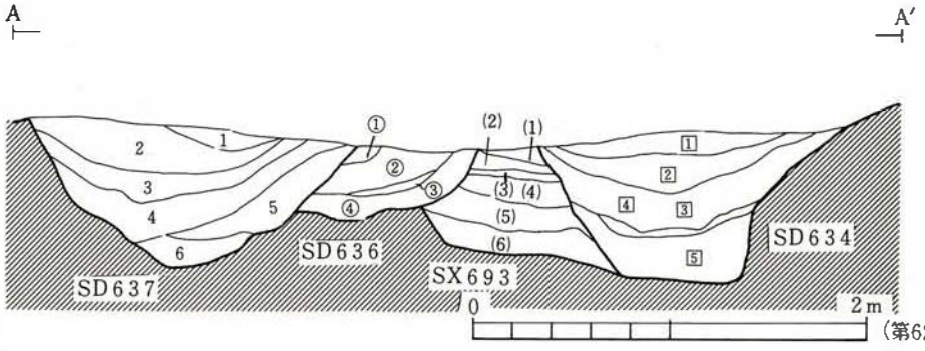
遺物は、平瓦の小片と木製品の下駄（第78図）が1

点出土している。この下駄は一つの材木から歯を切り出した「連歯下駄」で、角は丸味を帯びている。

(5) ＳＤ 637溝跡

ＳＤ 637溝跡は、調査区南半部で検出した南北溝である。本溝跡は北側が調査区外へ延びており、南側はＳＤ 639溝跡と重複するところで若干東へ屈曲する気配をみせるが、破壊されているため、その延長部分については不明である。さらにＳＤ 635溝跡と重複しており、これより新しい。本溝跡は第Ⅳ層上で検出しているが、第Ⅲ層上から掘り込んだ遺構より新しい。本溝跡の位置についてみるとほぼ平行して走るＳＤ 638・634溝跡のほぼ中間に位置している。方向は、蛇行しているため計測しがたいが、概ねＳＤ 638溝跡と同じ方向をとっている。底面の状況は、北側と南側ではほとんど比高差がなく平坦である。規模は、上幅1.7ｍ、深さ0.7ｍであり、長さ32ｍにわたって検出した。断面の形態は、底面から内湾気味に緩やかに立ち上がっている。埋土は自然堆積した様相を呈しているが、最上層のみは地山ブロックを多量に含んだ土で一手に埋められている。なお、ＳＤ 639溝跡と重複する部分より北側で、西壁に取りついた舌状の張り出しを検出している。その底面の状況は、先端よりＳＤ 637溝跡本体に向かって緩やかに傾斜しており、溝底面との比高差は約0.4ｍである。

遺物は無釉陶器甕・擂鉢、青磁椀、カワラケ、土師器、須恵器、赤焼き土器、漆器椀、硯、使用痕のある礫、古銭〔元□通宝〕、青銅製托などが出土している。第77図１・２は無釉陶器



（第62・63図２参照）

SD 637

層位	土　色	土性・混入物・その他
1	黄褐色(10YR 5/6)	黄色土と黒褐色ブロックを含む。全体的しまりなし。
2	褐灰色(〃 5/1)	粘性弱く、しまりややあり、粒子は均質で細かい。
3	〃 (〃 5/1)	粘性弱く、しまりややあり、粒子は細かく軟らかい。
4	黒褐色(〃 3/1)	粘性弱く、しまりややあり、粒子は細かく一部で粗く均質ではない。
5	褐灰色(〃 5/1)	粘性弱く、しまりややあり、粒子は細かい。
6	黒褐色(〃 3/1)	粘性弱く、しまりややあり、粒子は細かい。上部はやや粗い。

SD 634

層位	土　色	土性・混入物・その他
1	褐灰色(10YR 5/1)	粘質土。粘性弱く、しまりややあり。褐色土粒と白色土粒をまばらに含む。
2	褐灰色(10YR 5/1)	粘質土。粘性弱く、しまりは上層よりあり、白色土粒、炭化物を含む。
3	黒褐色(Y 3/1)	〃　〃　上層より強く、白色土粒少量、炭化物を多量に含む。
4	黒　色(〃 2/1)	〃　〃　ややあり、しまり弱い。植物遺体を層状に含む。
5	〃 (〃 〃)	〃　〃　強く、しまりあり。植物遺体をまばらに含む。

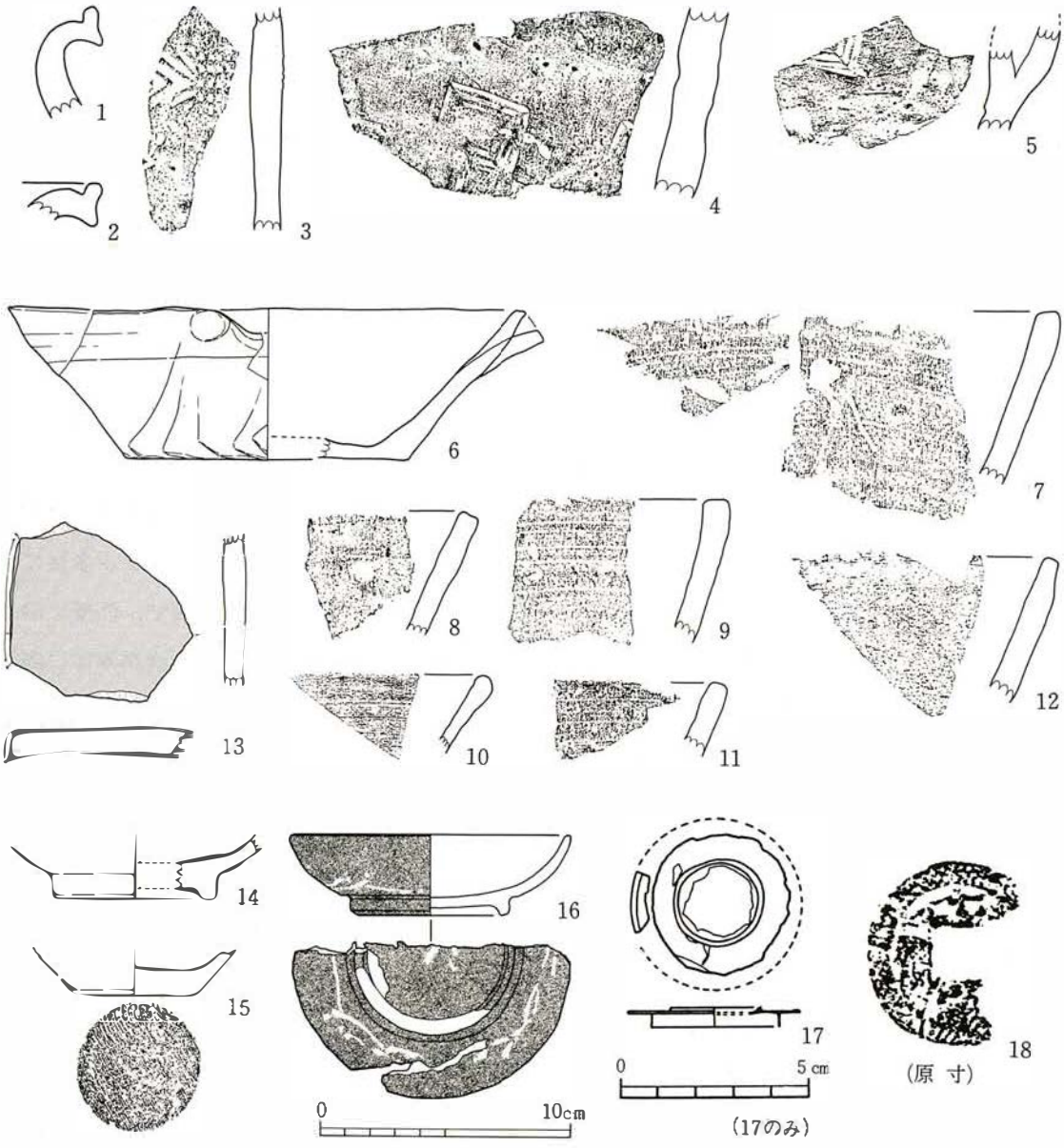
SD 636

層位	土　色	土性・混入物・その他
①	褐灰色(10YR 5/1)	粘性。しまりややあり。粒子細かく均質である。
②	〃 (〃 5/1)	粘性、しまり共にあり。粒子は上層より細かく均質である。縞状に砂粒が混入する。
③	黒褐色(〃 3/1)	粘性、しまり共にあり、粒子は細かく均質である
●	〃 (〃 〃)	粘性、しまり共にややあり、粒子は細かく均質である地山崩壊土ブロック。

SX 693

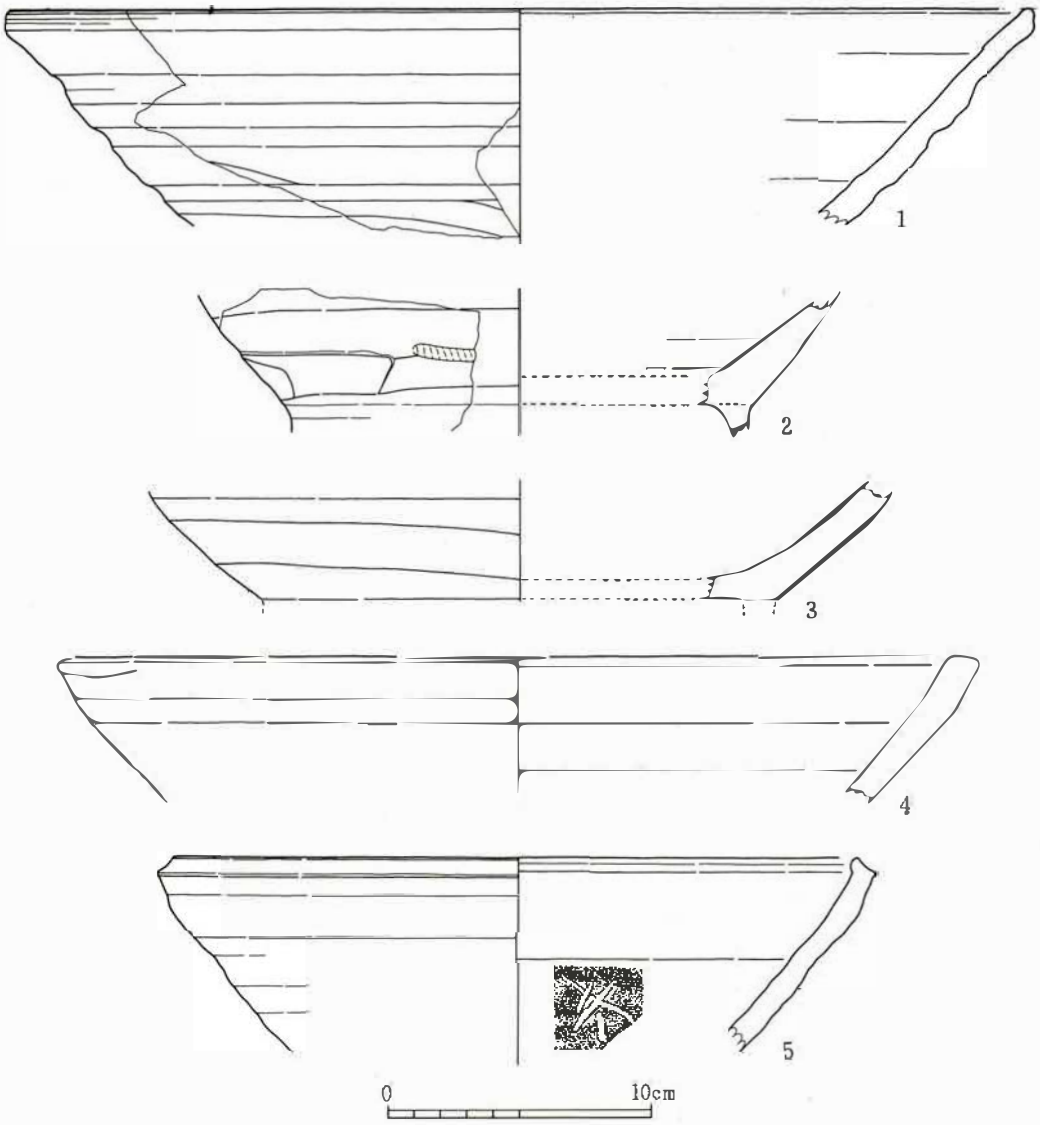
層位	土　色	土性・混入物・その他
(1)	にぶい黄橙色(10YR 7/3)	砂質土と粘質土の互層
(2)	褐灰色 (10YR 5/1)	粘質土。粒子細かく均質、粘性、しまりややあり。
(3)	にぶい黄橙色(10YR 7/3)	粘性、しまりに欠ける。1層に類似。
(4)	褐灰色(〃 5/1)	粘質土。2層に類似。
(5)	〃 (〃 5/1)	粘質土。2層に類似。砂質の地山崩壊土を斑状に含む。
(6)	オリーブ灰色(5GY 5/1)	砂質土。地山崩壊土を斑状に含む。

第76図　ＳＤ 637・636・634溝跡



番号	遺物名	層位	図版	登録No.	番号	遺物名	層位	図版	登録No.
1	無釉陶器甕	ℓ－3		R-234	10	無釉陶器擂鉢	ℓ－1		R-156
2	同上	ℓ－5		R-239	11	同上	ℓ－5		R-160
3	同上	ℓ－3		R-159	12	同上	ℓ－1		R-161
4	同上	ℓ－1		R-157	13	研磨痕のある陶片	ℓ－1		R-269
5	同上	ℓ－2		R-158	14	青磁椀	ℓ－2	20－4	R-73
6	無釉陶器擂鉢	ℓ－3	26－4	R-59	15	カワラケ	ℓ－3		R-263
7	同上	ℓ－3		R-137	16	漆器椀	ℓ－3	35－5	R-8
8	同上	ℓ－1		R-155	17	銅製六器（器台）	ℓ－2	43－2	—
9	同上	ℓ－4		R-154	18	古銭			

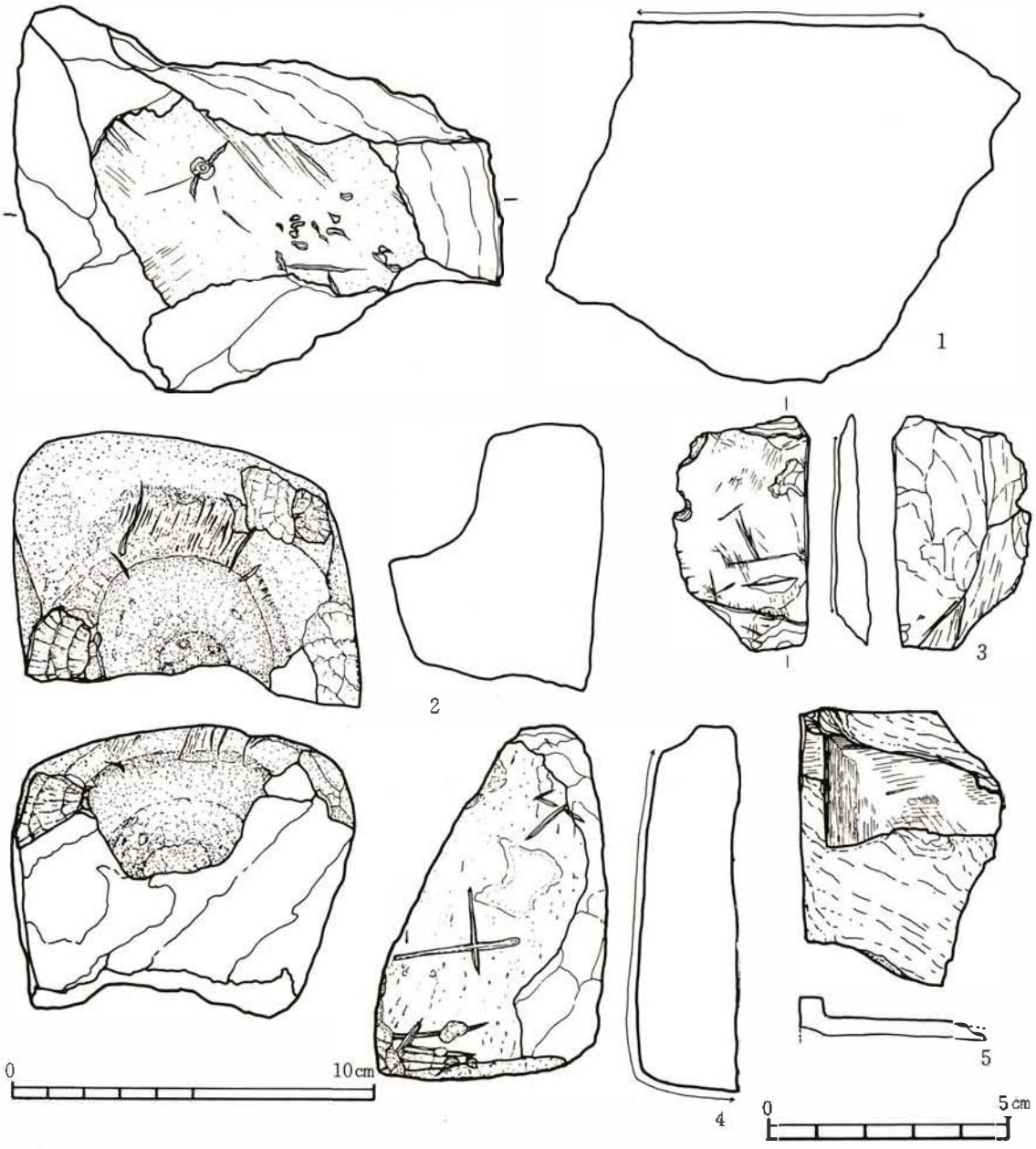
第77図　ＳＤ 637溝跡出土遺物 (1)



番号	遺物名	層位	図版	登録No.	番号	遺物名	層位	図版	登録No.
1	無釉陶器擂鉢	ℓ－1	26－2	R-41	4	無釉陶器擂鉢	ℓ－3	27－4	R-94
2	同　上	ℓ－3		R-128	5	同　上	ℓ－5	28－5	R-38
3	同　上	ℓ－4		R-82					

第78図　ＳＤ 637 溝跡出土遺物 (2)

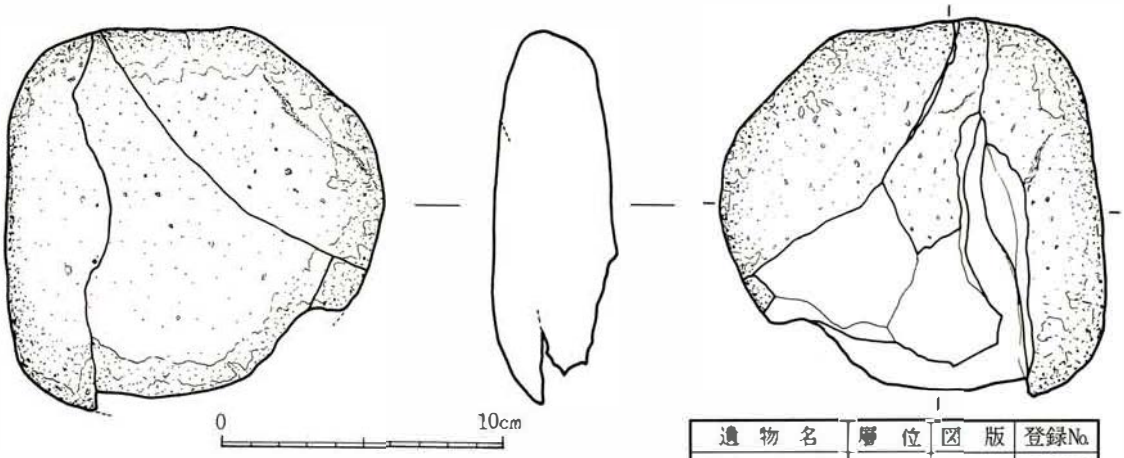
甕の口縁部破片資料である。いずれも幅の狭い縁帯を形成している。胎土は灰白色で表面はにぶい赤褐色を呈している。硬く焼き締まり、上面には灰オリーブ色の自然釉がかかっている。３～５は押印を施された無釉陶器の体部破片である。４と５は白色粒を多く含む灰白色の胎土であり、押印も類似することから同一個体である可能性が高い。無釉陶器擂鉢は口縁部破片で数えると12個体分出土している。いずれのものも内面に筋目は施されていない。第77図６は口



番号	遺物名	層位	図版	登録No.	番号	遺物名	層位	図版	登録No.
1	使用痕のある礫	ℓ－1		R-204	4	使用痕のある礫	ℓ－1		R-213
2	同上	ℓ－3		R-76	5	石硯	ℓ－1	45－4	R-111
3	同上	ℓ－1		R-222					

第79図　ＳＤ 637溝跡出土遺物 (3)

径20.4cmの比較的小型の擂鉢である。外面の体部は下端から中頃にかけて下から上へヘラナデしており、外面口縁部と内面はヨコナデ調整している。7～12はいずれも内外をヨコナデ調整している。第78図２・３は高台の付いた擂鉢である。体部をヨコナデした後、下端部を横方向



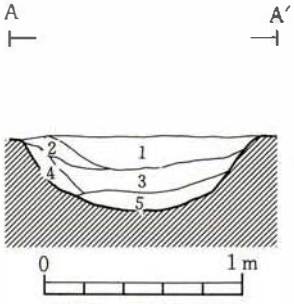
遺物名	層位	図版	登録No.
焦痕のある礫	ℓ－1		R-202

第80図　ＳＤ 637溝跡出土遺物 (4)

に手持ヘラケズリして高台を貼付し、その周辺を更にヨコナデして仕上げている。３は高台が欠失しているがその剝離痕が残っている。１も下端部に手持ヘラケズリが確認できるので高台付の擂鉢であった可能性が高い。１～３はいずれも灰白色を呈している。４と５は内外両面をヨコナデ調整している。特に５は丁寧に仕上げており、体部内面には釘状のもので「サ」と陰刻されている。第77図１・２・６はその形態や胎土、色調より常滑窯の製品と考えられ、赤羽一郎氏の編年によれば１・２が第Ⅲ段階後半（14世紀前半）、６が第Ⅳ段階前半（14世紀後半）のものに類似している。第78図１～３も形態や胎土、色調から常滑窯など東海地方の製品と考えられる。第77図14は青磁椀である。残存部についてみれば内外両面とも文様はない。底部及び高台畳付きをのぞいて施釉されている。15はカワラケである。ロクロ調整されており、切り離しは静止糸切りと思われるが判然としない。16は漆器椀である。内面は朱漆、外面は黒漆の上に朱漆で文様を描いている。17は青銅製の托である。

(6)　ＳＤ 638・639・640・641・642溝跡

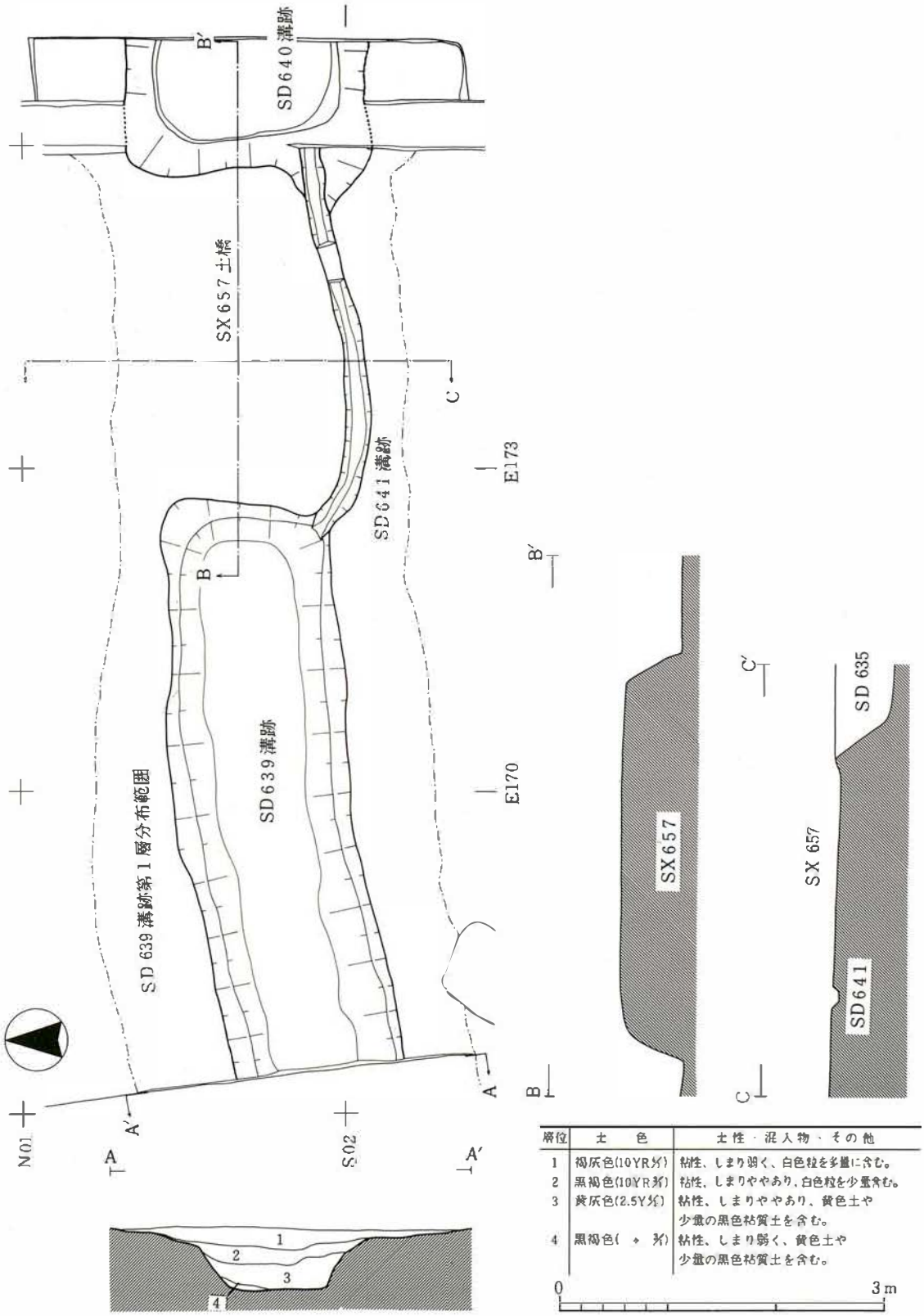
ＳＤ 638・639溝跡は、調査区南半部で検出した溝跡である。東西に走るＳＤ 639溝跡は調査区西端部を南北に走るＳＤ 640溝跡と合流し、東端部ではＳＸ 657土橋をはさんでＳＤ 640溝跡と直線に並んでいる。ＳＤ 639溝跡とＳＤ 640溝跡は幅のせまい641溝跡によって連結している。またＳＤ 639溝跡の西寄りには、南北に走るＳＤ 642溝跡が連結している。ＳＤ 637・646・635・634・650・643・648溝跡と重複しており、これらより新しい。このうち、ＳＤ 637・



（第62・63図１参照）

層位	土色	土性・混入物・その他
1	黒褐色(10YR2/2)	上部に灰褐色砂質土を塊状に含み、白色土粒、褐色土粒を全体に含む。粘性、しまりなし。
2	褐灰色(〃 5/1)	上層よりしまりあり、白色土粒、褐色土粒を含む。
3	〃 (〃 4/1)	粘性強く、混入物少なく均質な層。
4	にぶい黄褐色(〃 5/3)	地山崩壊土黄橙色ブロックを含む。
5	褐灰色(7.5YR5/1)	粘性強く、軟かい灰白色砂質土を塊状に含む。

第81図　SD 638溝跡断面図



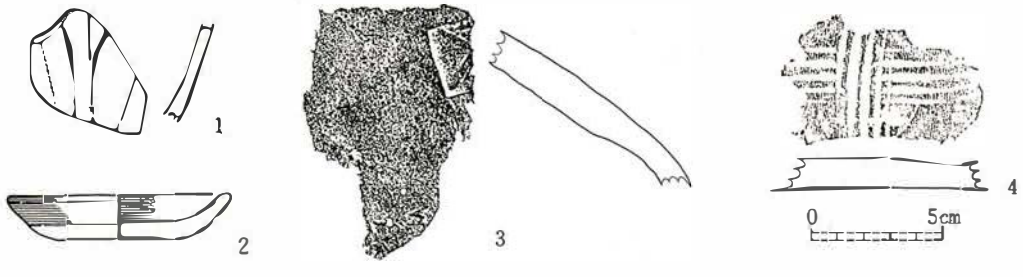
層位	土色	土性・混入物・その他
1	褐灰色(10YR4/1)	粘性、しまり弱く、白色粒を多量に含む。
2	黒褐色(10YR3/1)	粘性、しまりややあり、白色粒を少量含む。
3	黄灰色(2.5Y4/1)	粘性、しまりややあり、黄色土や少量の黒色粘質土を含む。
4	黒褐色(＋ 3/1)	粘性、しまり弱く、黄色土や少量の黒色粘質土を含む。

第82図　ＳＤ 639・640・641 溝跡、ＳＸ 657土橋

635・634溝跡とは方向を同じくし、しかもほぼ同位置で重複しているが、これらの溝の中では一番外側に位置している。なお、これらの溝跡は第Ⅳ層上で検出しているが、第Ⅲ層上で検出した遺構より新しいことを確認している。方向についてみると発掘基準線に対し、ＳＤ638溝跡は北で約7度西に偏しており、ＳＤ639溝跡は直線部分でみると東で約19度北に偏している。規模はＳＤ638溝跡が幅1.05～1.52ｍ、深さ38～45cm、ＳＤ639溝跡が幅1.55～1.65ｍ、深さ42～55cmを計る。埋土はＳＤ639溝跡中間付近のセクションを参考にすれば各層とも砂質土が主体となっており、それらがほぼ水平に堆積して自然堆積の様相を呈している。

ＳＸ657土橋は、ＳＤ638・639溝跡の合流点から東へ19m離れた地点に位置している。規模は東西3.1ｍであり、南側をＳＤ641溝跡によって画されている。この溝跡の規模は幅20cm、深さ4～9cmである。これは若干南側へふくらんでおり、両端はＳＤ639・640溝跡へそれぞれ合流している。また、西辺の南辺コーナー寄りの所では、西壁に取り付く舌状の張り出しを検出している。この張り出しについてみると、底面は先端より溝本体に向かって緩やかに傾斜しており、溝底面との比高差は約0.3ｍである。底面はほぼ平坦である。断面形は南辺では平坦な底面からやや急に立ち上がり、その後緩やかな傾斜で開いている。西辺では舟底状を呈し、壁は緩やかに立ち上がっている。

遺物は無釉陶器甕・擂鉢、瓦質擂鉢、青磁椀・皿、カワラケ、須恵器、土師器、赤焼き土器などが出土している。第86図1は外面に鎬蓮弁文のある青磁椀の体部破片資料である。内面は無文である。第83図2はカワラケである。手づくね成形されており、内外の口縁部をヨコナデ調整している。更にその後見込みにのみ不定方向のナデを施している。第83図3は瓦質土器擂鉢の底部破片資料である。燻べ焼きされており、5本1単位の筋目が施されている。底部は砂底である。



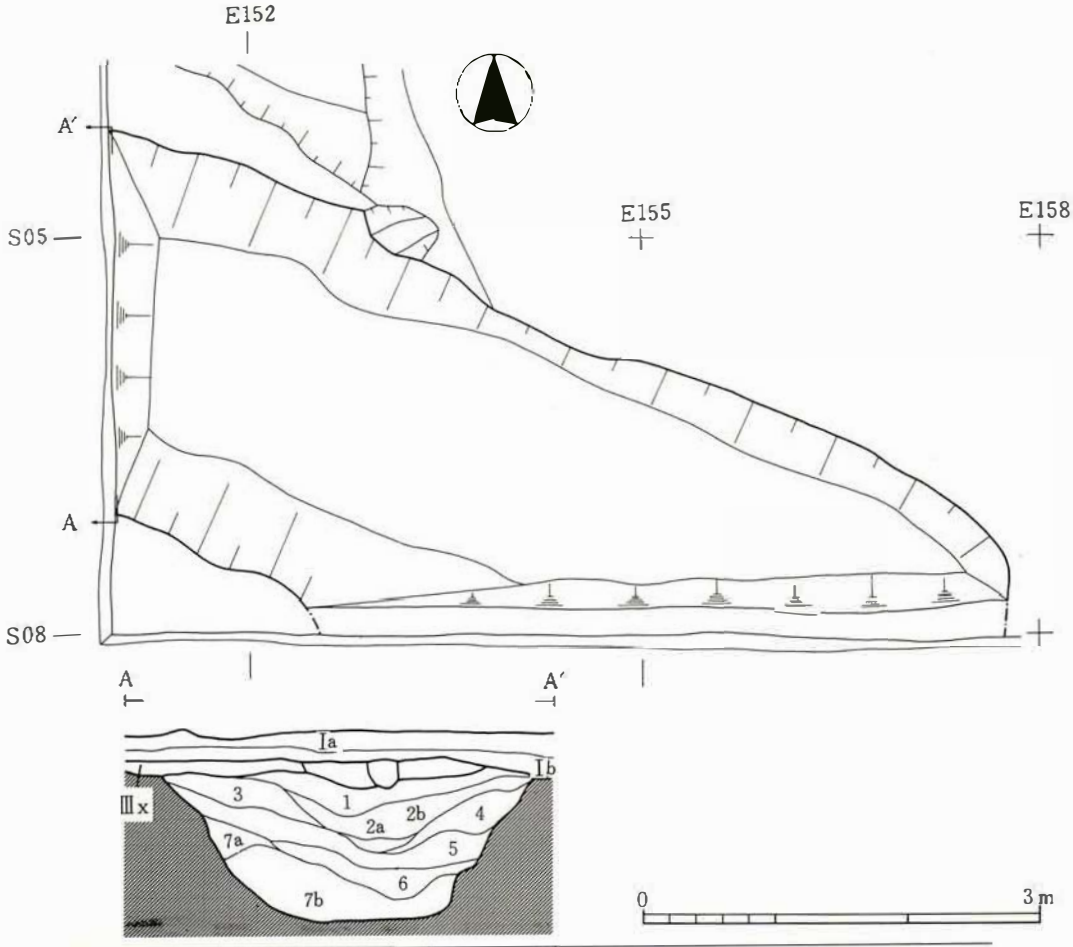
番号	遺物名	層位	図版	登録No.	番号	遺物名	層位	図版	登録No.
1	青磁椀	ℓ－5	20－5	R-11	3	無釉陶器甕	ℓ－4		R-297
2	カワラケ	ℓ－2		R-12	4	瓦質土器擂鉢	ℓ－2	30－1	R-229

第83図　ＳＤ638・639溝跡遺物

(7)　ＳＤ643溝跡

ＳＤ643溝跡は調査区南西隅で検出した溝跡である。調査区西壁から南壁にわたってのびて

いるが、南壁際では真っ直ぐのびてはいかない。止まってしまうか南へ屈曲するかは明らかにできなかった。方向は東で約25度南に偏している。ＳＤ 638 ・ 642 ・ 650 溝跡、ＳＫ 664土壙などと重複しておりそれらより古い。規模は上幅２.９～２.７ｍ、下幅１.７～１.６ｍで東西 7.7ｍにわたって検出した。底面はほぼ平坦である。埋土は７層に大別される。３・７層は地山ブロ



層位	土　色	土性・混入物・その他
Ⅰa		水田耕作土
Ⅰb		〃
Ⅲx	黒褐色(10YR3/2	砂質土。

1	褐灰色(10YR5/1)	砂質土。粘性ややあり、しまりなし、炭化物と白色土粒を均質に含む。
2a	〃 (〃 5/1)	粘質土。植物腐蝕物を含む。
2b	黒　色(2.5Y2/1)	粘質土。2a 層に類似、粘性強い。
3	にぶい褐色(7.5YR5/3)	砂質土。地山崩壊土ブロック、炭化物を含む。
4	褐灰色(10YR5/1)	粘質土。上部に砂質土が入り、しまりなく粘性も乏しい。
5	黒褐色(2.5Y3/1)	粘質土。腐植土を全体に含み、砂質土も多量に含む、均質な堆積。
6	黒　色(〃 3/1)	粘質土。砂質土の混入少なく、5層より粘性強い。
7a	淡黄色(5Y7/3)	地山崩壊ブロック。
7b	オリーブ黒色(〃 3/1)	地山崩壊ブロック、砂粒を混入。

第84図　ＳＤ 643溝跡

ックを主体とする層で、いずれも南から北へ落ち込んだ様相を呈している。

なお、本溝跡は第Ⅳ層上で検出し、第Ⅲ層におおわれていることを確認した。

遺物は、無釉陶器甕・擂鉢、青磁椀、カワラケ、土師器、須恵器、赤焼き土器、板草履、砥石、植物遺体などが出土している。第85図１はカワラケである。ロクロ調整しており、底部の

切り離しは静止糸切りである。2・3は無釉陶器甕の体部破片資料である。外面に押印が施されている。4は板草履である。図示したのは芯板だけであるが、出土時には芯板をくるんでいた藁と鼻緒が残存していた（図版39―7）。芯板は、左右対称の2枚の薄い板材から成り、先端部には小孔、側縁部には方形切り取り部がそれぞれ対称の位置に設けられている。表面には藁の圧痕が残っている。

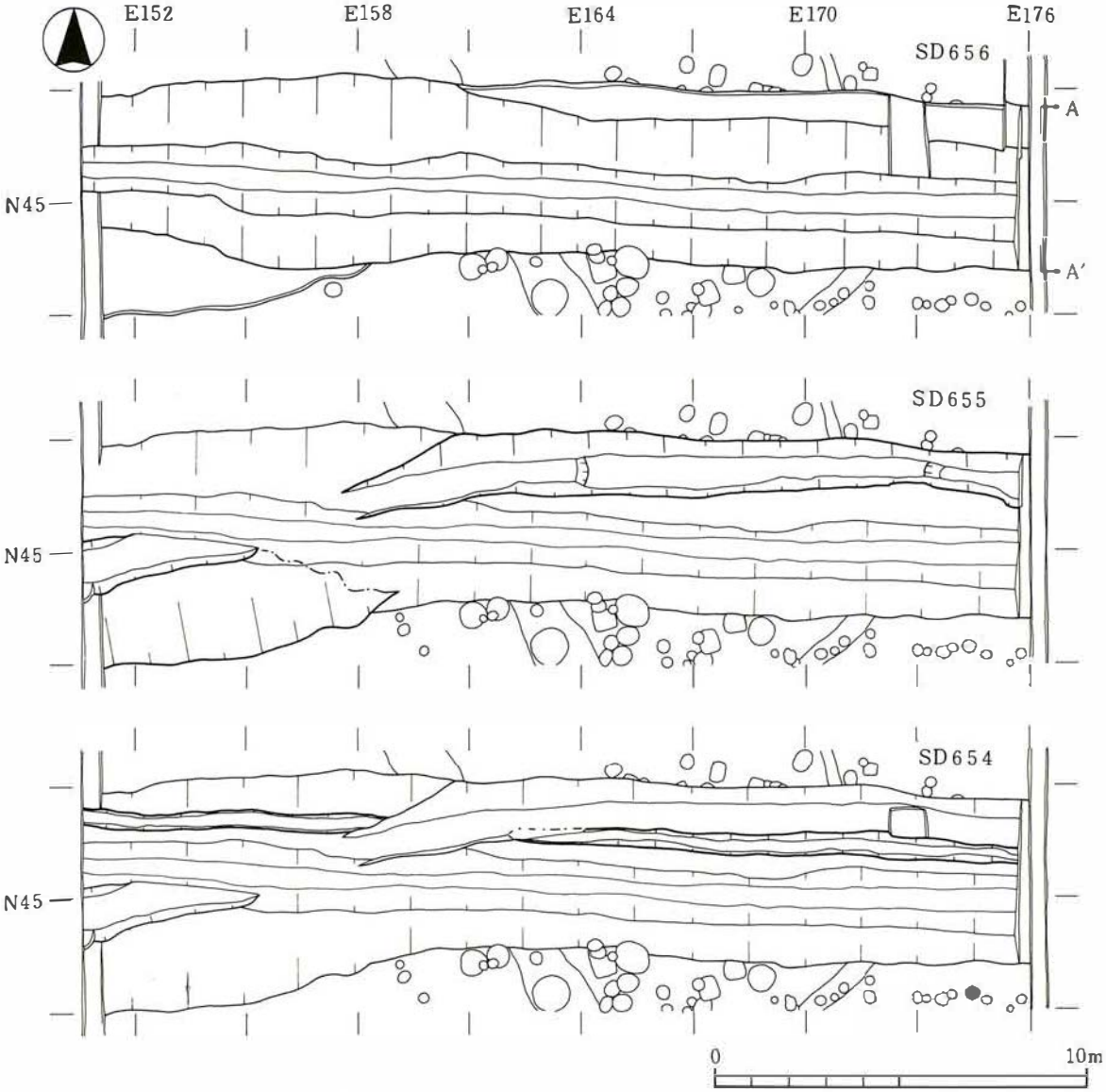
番号	遺物名	層位	図版	登録No.	番号	遺物名	層位	図版	登録No.
1	カワラケ	ℓ―4		R-255	3	無釉陶器甕	ℓ―3		R-170
2	無釉陶器甕	ℓ―2		R-153	4	板草履	ℓ―2	39―5	R-5

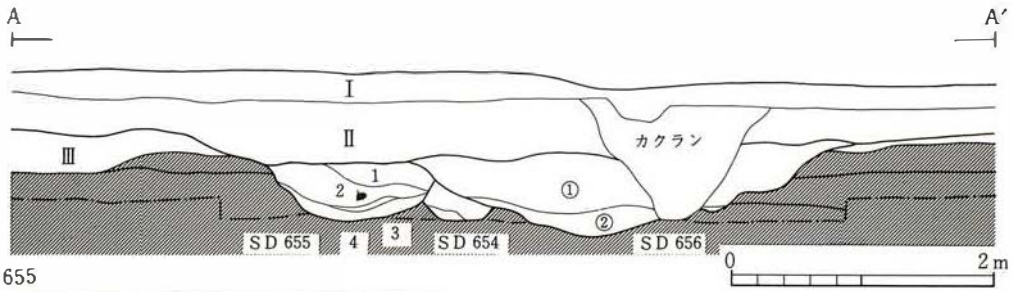
第85図　ＳＤ 643溝跡出土遺物

(8)　ＳＤ 655・656溝跡

ＳＤ 655・656溝跡は調査区北端部で検出した溝跡である。ほぼ同位置で重複し、ＳＤ 656・655溝跡の順に新しい。多くの建物跡や溝跡と重複しているが、これらの溝跡より新しいものは確認していない。ＳＤ656 溝跡については第Ⅲ層を掘り込んだ状況を確認しており、埋没しきらずくぼんでいたところに第Ⅱ層が堆積している。それぞれ26mにわたって検出した。

ＳＤ 656溝跡は上幅5.2～3.9ｍ、途中段の付く所で幅1.8～1.3ｍ、下幅0.6～0.4ｍ、深さ0.8ｍである。東西にほぼ直線的にのびており、東西両端の下幅中央で方向を計ると東で約3度南に偏している。ＳＤ 655溝跡は残存部分で上幅1.8～1.3ｍ、下幅0.9～0.5ｍ、深さ0.5ｍである。調査区東壁から中頃にかけてはほぼ直線的だが、途中から南に緩やかに折れ





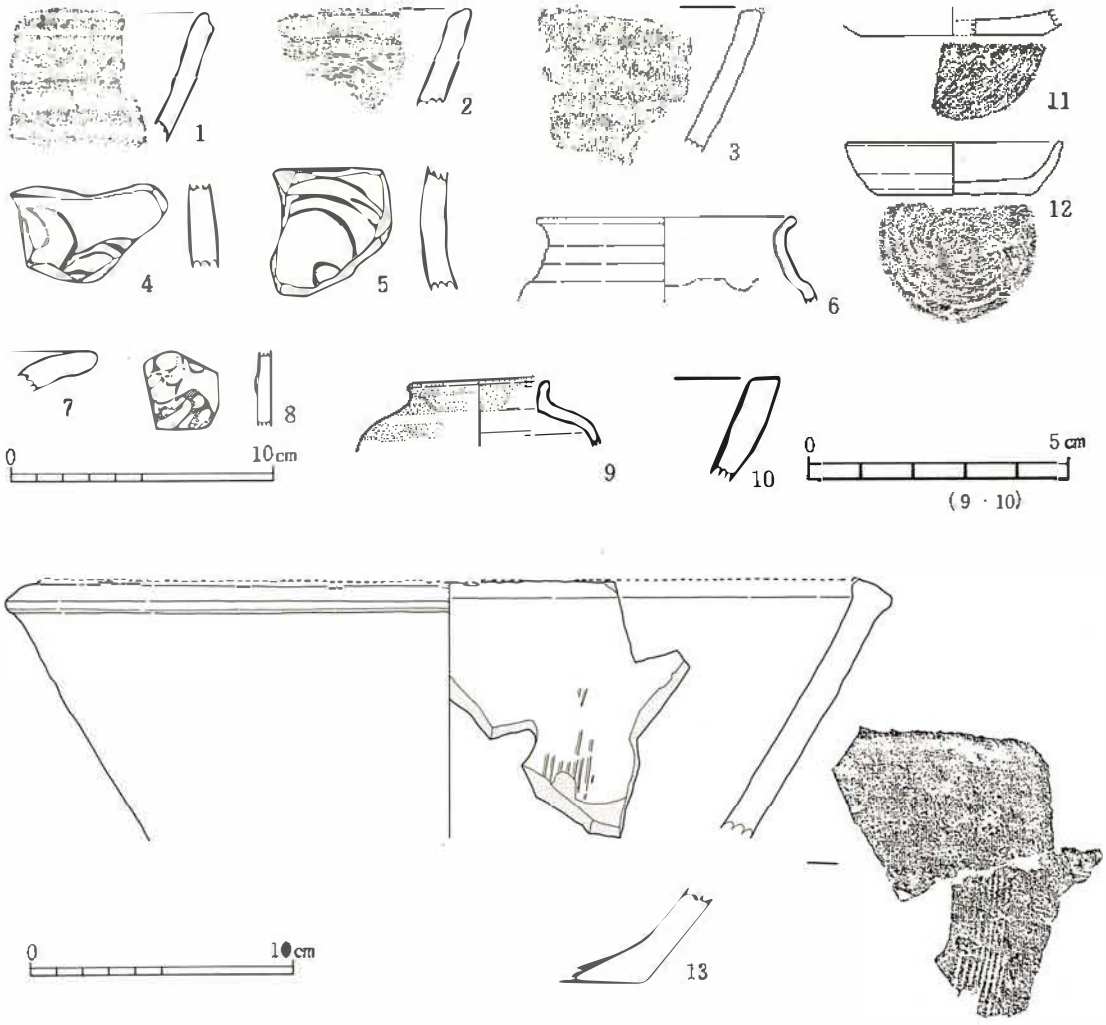
SD 655

層位	土色	土性・混入物・その他
1	黒褐色(10YR3/1)	粘性弱くしまり若干あり、炭化物、白色土粒を含む。
2	〃 (〃 3/3)	粘性しまり若干あり。
3	灰黄褐色(〃 4/2)	粘性しまりあり。
4	黒褐色(〃 3/1)	粘性しまりあり。炭化物、地山崩壊土を含む。

SD 656

層位	土色	土性・混入物・その他
①	褐灰色(7.5YR4/1)	粘性しまりなし。炭化物、白色土粒を含む。
②	黒褐色(10YR3/1)	粘性しまりあり。地山崩壊土ブロックを含む。

第86図　SD 654・655・656溝跡

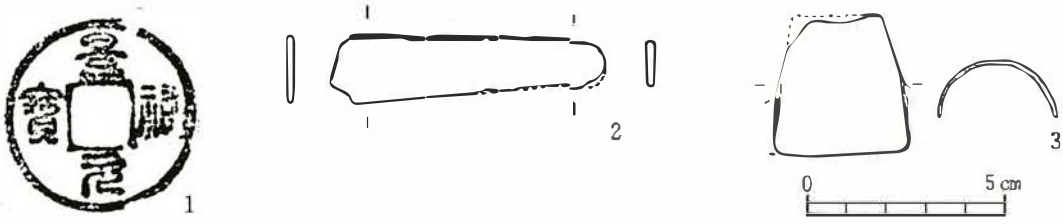


番号	遺物名	遺構・層位	図版	登録No.	番号	遺物名	遺構・層位	図版	登録No.
第90図 1	無釉陶器 擂鉢	SD656・ℓ－1		R-149	第90図 9	施釉陶器 茶入	SD656・ℓ－1	20－16	R- 6
2	無釉陶器 擂鉢	〃 〃		R-147	10	施釉陶器 卸皿	SD655・ℓ－1	21－10	R-150
3	無釉陶器 擂鉢	〃 〃		R-148	11	カワラケ	SD656・ℓ－1		R-258
4	施釉陶器 壺	〃 〃	21－11	R-313	12	カワラケ	SD655・ℓ－1	31－3	R- 15
5	施釉陶器 壺	〃 〃	21－15	R-312	13	無釉陶器 擂鉢	〃 〃	29－1	R- 20
6	施釉陶器 香炉	SD655・ℓ－1	21－6	R- 47	第91図 1	古銭(景祐元宝)	〃 〃	44－5	
7	無釉陶器 甕	SD656・ℓ－2		R-240	2	刀 子	〃 〃	43－7	
8	施釉陶器 香炉	SD655・ℓ－1	21－13	R-66	3	不明青銅製品	〃 〃	43－3	

第87図　SD 656・656 溝跡出土遺物

曲がっている。

SD 654 溝跡はSD 655・656 溝跡完掘後にその底面で発見した溝跡である。残存部分で上幅0.7～0.5m、下幅0.3～0.2m、深さはわずかに0.3m を計るのみである。東西にほぼ直線的にのびており、東西両端の下端中央で方向を計ると東で約3度南に偏している。遺物は出土していない。



（原 寸）

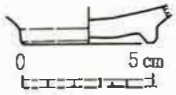
第88図　ＳＤ 655溝跡出土遺物

遺物は、ＳＤ 656溝跡から無釉陶器甕・擂鉢、青磁椀、施釉陶器茶入・壺、カワラケ、土師器、須恵器、赤焼き土器、瓦、砥石、鉄滓などが出土している。第87図１～３は無釉陶器擂鉢である。内外ともヨコナデ調整している。10は無釉陶器甕の口縁部破片資料である。端部を丸めただけの単純な形態である。４・５は施釉陶器である。内外とも灰釉が施されており、外面にはヘラ状の工具で文様が陰刻されている。器形は明らかでない。釉調や胎土から瀬戸窯の製品と考えられる。８は施釉陶器の茶入である。外面及び内面口縁部に鉄釉が施されている。胎土は灰赤色を呈し、緻密で混入物を全く含まない。中国製品と考えられる。ＳＤ 655溝跡からは無釉陶器甕・擂鉢、青磁椀、施釉陶器卸皿・香炉、カワラケ、土師器、須恵器、赤焼き土器、瓦、砥石、鉄滓、古銭〔景祐元宝〕（1038年初鋳）、青銅製品、刀子などが出土している。第87図13は無釉陶器擂鉢である。口縁部は上面を外下がりに少し斜めに切り落とされたような形態を呈し、端部は丁寧にヨコナデ調整されてやや丸味を帯びている。内面には８条を１単位とする筋目がつけられている。表面は赤褐色～にぶい橙色を呈し、灰白色の光沢のない自然釉が疎らに降りかかっている。焼成良好で硬く焼き締まっている。この擂鉢は口縁部の形態、筋目の存在、色調などから備前窯の製品と考えられる。特に口縁部の形態は胡耶山下窯の採集資料（註４）に類似するものがある。間壁忠彦氏の編年によれば鎌倉時代後半から南北朝時代に位置づけられている（註５）。第87図６は施釉陶器の香炉である。内面口縁部にはオリーブ黒色の鉄釉が施されている。外面には釉が全く存在しないが、表面にはわずかな光沢もないので釉は剝落してしまったものと推定される。７も施釉陶器香炉の体部破片資料である。外面に文様が陰刻され、灰釉が施されている。体部が筒形になるタイプと考えられる。９は施釉陶器卸皿の口縁部破片資料である。６・７・９は瀬戸窯の製品と考えられ、藤澤良祐氏の編年によれば６は後期様式前半（14世紀末～15世紀前半）、９は中期様式前半（13世紀末～14世紀前半）のものに類している。11・12はカワラケである。いずれもロクロ調整しており、12は底部の切り離しが回転糸切りである。第88図は器形が不明な青銅製品である。上端部と左右側面の下半部が欠損しているが、他はかろうじて原形を保っている。左右側面の欠損部はいずれも外側にめくれている。

註４　間壁忠彦・間壁葭子「備前焼研究ノート(2)」『倉敷考古館研究集報』第２号　1966
註５　間壁忠彦「備前」『世界陶磁全集』３　日本中世　1977
※なお第87図13の擂鉢については岡山県教育委員会の伊藤　晃氏に写真、実測図により鑑定を依頼し、ご教示を得た。

(9) ＳＤ 651 溝跡

ＳＤ 651 は、調査区北半部の第Ⅳ層上で検出した溝跡である。ＳＢ 605 ・ 610 ・ 613 建物跡、ＳＫ 667 土壙、ＳＤ 653 溝跡と重複しており、ＳＤ 653溝跡、ＳＫ 667 土壙、ＳＢ 605 建物跡より新しい。他のものとの関係は不明である。南北7.25m にわたって直線的にのびており、上幅49～25cm、深さ19cmを計る。底はほぼ平坦であり、壁は底部から緩やかに立ち上がっている。方向は、北で約11度西に偏している。埋土は黒褐色 (10YR 3/3)砂質土の単層であり、地山粒や焼土、炭化物を含んでいる。



遺物名	層位	図版	登録No.
白磁	ℓ -1	18-3	R-120

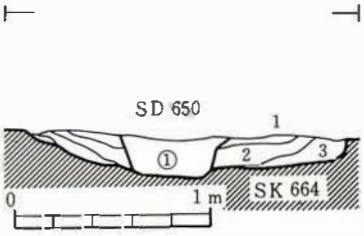
第89図 SD 651溝跡出土遺物

遺物は、無釉陶器甕、白磁椀、カワラケ、土師器、須恵器、赤焼き土器などが出土している。第89図は白磁椀の底部破片資料である。やや青味を帯びた釉は高台畳付きをのぞき、全面に施されていたようだが、畳付きまでたれている部分もある。高台内はロクロを用いず荒く削り取っている。見込みには浅い沈線が巡り、中央部にはヘソ状の突起が残されている。

(10) ＳＤ 650 溝跡

ＳＤ 650 は、調査区南西隅で検出した東西溝である。ＳＤ 638 ・ 646 ・ 643溝跡、ＳＫ 664 土壙と重複しており、ＳＤ 646 ・ 643溝跡や第Ⅲx 層から掘り込んでいるＳＫ 664 土壙より新しくＳＤ 638 ・ 637溝跡より古い。規模は、上幅50～60cm、深さ20cmを計り、約 4.8 m にわたって検出した。方向は直線的な部分で計ると、東で約22度北に偏している。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がっており、埋土はやや粘性のある灰褐色土砂質土である。

遺物は無釉陶器甕の体部破片が1点出土している。



第90図 SD 650溝跡、SK 664 土壙断面図

SD 650

層位	土色	土性・混入物・その他
①	褐灰色(10YR 4/1)	粘性ややあり、しまり弱、炭化物若干と白色土粒を含む。

SK 664

層位	土色	土性・混入物・その他
1	褐灰色 (10YR 4/1)	粘性しまりともになし、上部に粗い砂粒を多量に含み、まばらに白色土粒を含む。
2	灰黄褐色(〃 4/1)	粘性強、白色土粒をまばらに含む。
3	黒褐色(〃 3/1)	粘性強、粘質土、褐色の砂質土を層状に含む。

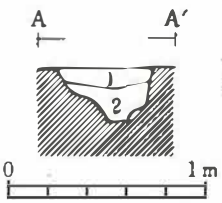
(11) ＳＤ 649 溝跡

ＳＤ 649 は、調査区南端部の第Ⅲx 層上で検出した溝跡である。ＳＤ 647 ・ 648 溝跡と重複しており、それらより新しい。方向は北で約56度西に偏している。規模は、上幅40～70cmを計り、約5 m にわたって検出した。残存状況が悪く、深さは6 ～15cmを残すのみである。

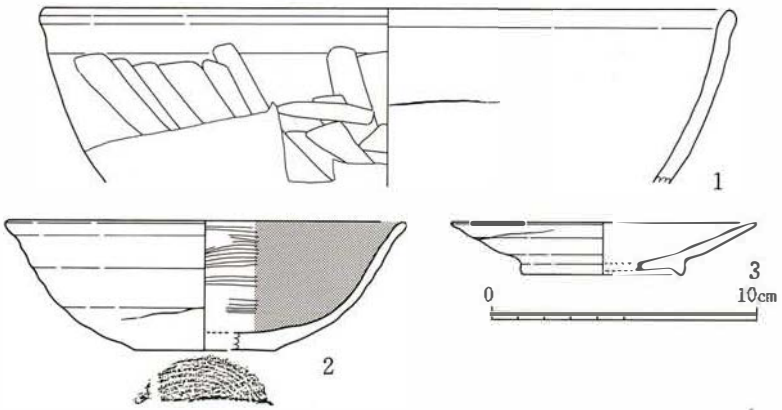
遺物は出土していない。

(12) ＳＤ 648 溝跡

ＳＤ 648 は、調査区南端部の第Ⅳ層で検出した南北溝跡である。方向は北で約 9 度西に偏し



層位	土色	土性・混入物・その他
1	黒褐色(10YR3/2)	砂質土。炭化物を含む均質な層。
2	にぶい黄褐色(10YR5/4)	粘質土。黄褐色ブロックを含む。しまりあり。



番号	遺物名	層位	図版	登録No	番号	遺物名	層位	図版	登録No
1	須恵器鉢	ℓ－1	22－6	R-42	3	赤焼き土器高台付皿	ℓ－1		R-33
2	土師器杯	ℓ－1		R-34					

第91図　ＳＤ 644 溝跡と出土遺物

ている。規模は、上幅80～90cmを計り、約3.4ｍにわたって検出した。残存状況が悪く、深さは５～７cmを残すのみである。

遺物は出土していない。

⑬　ＳＤ 644溝跡

ＳＤ 644は、調査区北半部の第Ⅳ層上で検出した溝跡である。ＳＢ 607・622・630・603・605・628・620・611建物跡、ＳＤ645・653溝跡と重複しており、ＳＤ645・653 溝跡よりは新しいが、ＳＢ607・622・628・605・611・620建物跡よりは古い。その他のものとの新旧関係は不明である。本溝はやや蛇行しているため、残存しているところの南北両端を結んだ線で方向をみると発掘基準線に対し、東で約40度北に偏している。規模は上幅0.4～0.8ｍ、深さ0.3ｍであり、約21ｍにわたって検出した。断面の形状はいわゆる段掘り状を呈している。埋土についてみると、下層は地山小粒をふくむ粘質土であり、上層は炭化物を含む均質な砂質土である。なお、本溝上層の砂質土は今回発見した他の遺構では全く見ることができなかったものである。

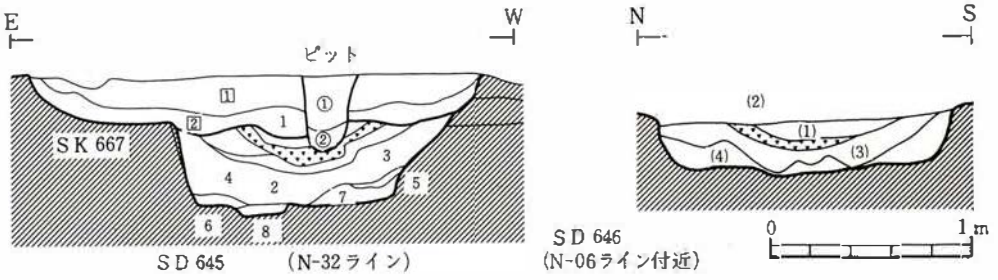
遺物は無釉陶器擂鉢、土師器甕・杯、須恵器甕・瓶・鉢、赤焼き土器杯・高台付皿、瓦などが出土している。第91図1は須恵器の鉢である。還元焔焼成されており、体部は内湾気味に立ち上がっている。内外とも丁寧にロクロ調整されており、外面下半はタテ方向にヘラケズリされている。内面中位より下にかけて磨耗している。第91図３は赤焼き土器高台付皿である。高台は体部下端に貼付されており、体部から口縁部まで直線的にのびている。無釉陶器擂鉢は底部の破片資料である。外底は砂底で、色調は灰白色を呈している。端部にはわずかにナデが見られる部分がある。高台付きであった可能性が高く、東海地方の製品と考えられる。

⑭　ＳＤ 645・646・647溝跡

ＳＤ 645・646は、第Ⅳ層上で検出した溝跡である。ＳＤ 645溝跡は調査区北壁から東壁にかけて直線的にのびており、ＳＤ 646溝跡は調査区南西隅付近から東壁に向かってのびている。この両者は東壁付近でほぼ直角に交わる一連の溝であることを確認している。また、ＳＤ 646溝跡の西端部は削平を受けてかなり浅くなってはいるが北に折れ曲がってのびている。SD645溝跡は概ね段掘り状を呈し、ＳＤ 646溝跡は断面が逆台形を呈している。規模についてみると、ＳＤ 645溝跡は上幅1.5～1.7ｍ、深さは段掘り状を呈するところで34～36cm、他の部分では27cmを計る。ＳＤ 646溝跡は上幅1.3～1.7ｍ、深さは0.5～0.2ｍである。両者とも約31ｍにわたって検出した。埋土は、遺存状態の良いＳＤ 645溝跡でみると８層に分けることができる。砂質土と粘質土が互層を成しており自然堆積の様相を呈している。中頃には10世紀前半に降下したといわれる灰白色火山灰が厚く堆積している。

なお、ＳＤ 646溝跡の西端近くにＳＤ 647溝跡が合流している。上幅1.0～0.6ｍ、深さ0.4～0.3ｍを計り、約11ｍにわたって検出した。

これらの溝跡の方向についてみると、ＳＤ 645溝跡は発掘基準線に対し北で約35度西に偏しており、ＳＤ 646溝跡は東で約37度北に偏している。ＳＤ 647溝跡は概ね北で約９度西に偏している。また、これらの底面レベルを比較すると、ＳＤ 646溝跡とＳＤ 647溝跡の合流点付近が最も浅くなっているが、他の部分については深浅に規則性は見出せなかった。調査区全体にわたって展開しているこれらの溝跡は多くの遺構と重複しているが、ＳＤ 653溝跡より新しいだけで他のすべての遺構より古い。



SD 645

層位	土　色	土性・混入物・その他
1	にぶい黄褐色(10YR5/4)	粘性あり、灰白色火山灰粒を多く含む。
2		灰白色火山灰層、汚れが目立つ。
3	暗褐色(10YR3/4)	灰白色火山灰粒、砂を含む。
4	黒褐色(10YR3/2)	粘質土、灰白色火山灰粒を含み、砂を一部に含む。
5	〃 (〃 3/2)	砂質土、4層土を多量に含む。
6	〃 (〃 3/2)	粘質土、やや砂を含む。
7	にぶい黄褐色(〃 5/4)	砂質土、地山崩壊土、5層土ブロックが入る。
8	〃 (〃 5/4)	砂質土。粘土質ブロックを含む。

	層位	土　色	土性・混入物・その他
ピット	①	黒褐色(10YR3/2)	炭化物を多量に含み、白色土粒を含む。
	②	灰黄褐色(10YR5/2)	灰白色火山灰を多量に含む。
SK 667	[1]	黒褐色(10YR3/2)	炭化物、灰白色火山灰粒を含む、しまりなし。
	[2]	にぶい黄褐色(10YR5/4)	一層土が流出し汚れており、オリーブ色の粒子を含む。

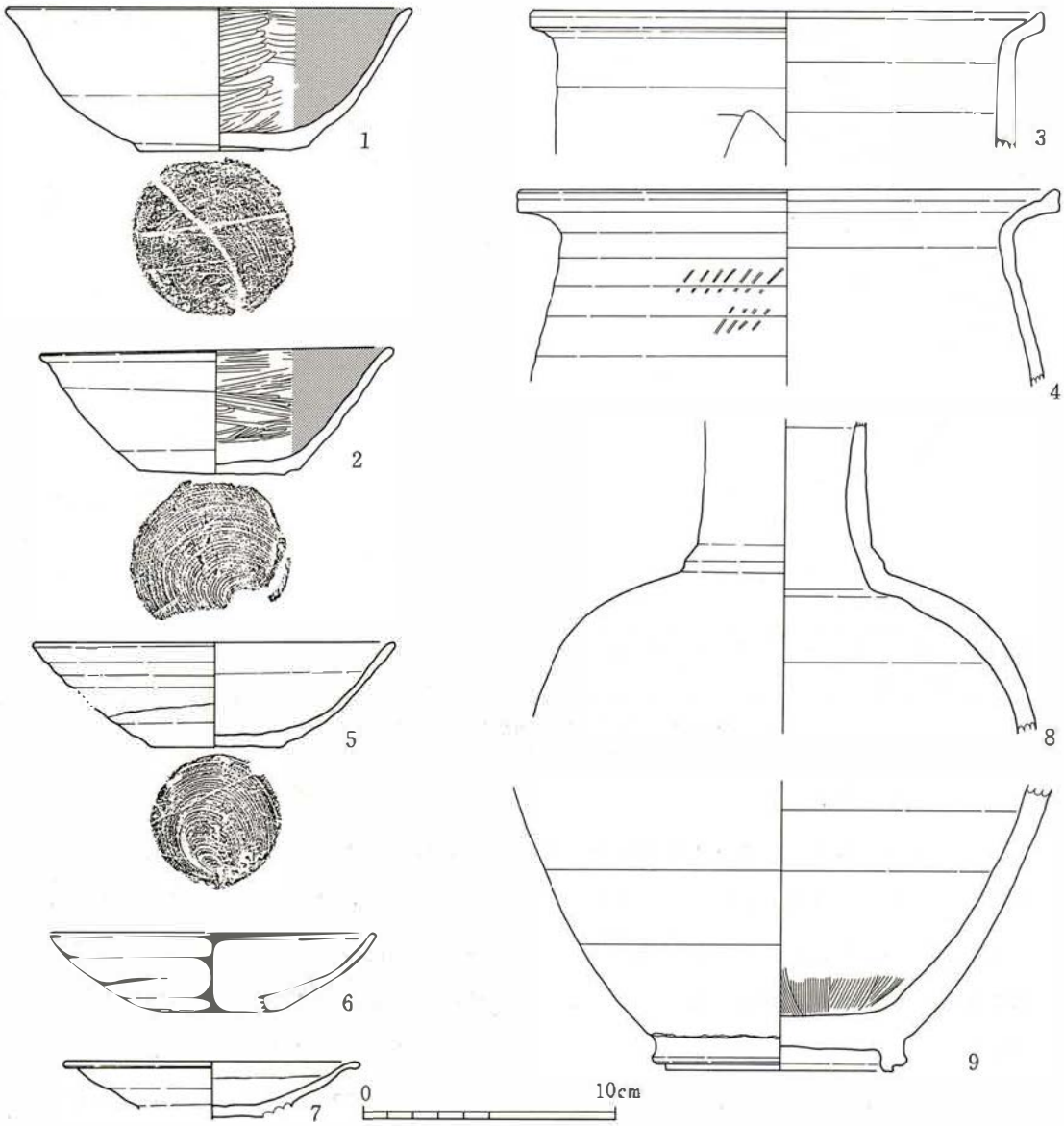
	層位	土　色	土性・混入物・その他
SD 646	(1)	褐灰色(10YR5/1)	褐鉄鉱を含み、ややしまりがある。
	(2)		灰白色
	(3)	褐灰色(10YR5/1)	1層に類似、斑状に灰白色火山灰を含む。
	(4)	〃 (〃 5/1)	褐鉄鉱を多く含み、地山砂粒を混入する。粘性ややあり。

第92図　ＳＤ 645・646溝跡断面図

遺物はＳＤ 645溝跡から土師器、須恵器、赤焼き土器、瓦、使用痕のある礫が出土している。土師器には甕（第93図 3・4）、杯（第 93図２）がある。甕はすべて破片資料であり、図示できたのは２点である。両者とも器形は長胴型であると思われ、ロクロ調整を行なっているものである。杯もすべてロクロ調整を行なっているもので、内面はヘラミガキ・黒色処理されている。須恵器には甕（第 94図１）、瓶（第93図８・９）、杯（第93図５）がある。甕は他の遺構埋土や堆積層中に散らばっていたものがまとまり、一個体となったものである。破片は完全に接合しなかったが、図上で復元すると器高が約38cmになる胴張型のものである。瓶は底部破片から推定して２個体分出土している。８は頸部と体部の境に突帯を巡らした長頸瓶である。全面に灰オリーブ色の釉がかかっている。頸部と体部との接合は２段構成である。９は瓶の体部から底部にかけての破片資料である。体部から底部にかけては丁寧に回転ヘラケズリ調整されている。焼成に際しては、筒状あるいは椀状を呈する陶製の焼台を用いたと思われる。高台の付け際にはそれとの溶着痕が残っており、それを境に器表面の色調も異なっている。杯は量的に少なく、１個体のみ復元できた。５はロクロ調整後、回転糸切りによって切り離し、その後再調整を全く加えていないものである。赤焼き土器には、杯、高台付杯、高台付皿があり、ほとんどが破片資料である。７は高台付皿である。高台内にはあまり明瞭ではないが螺旋状点列が観

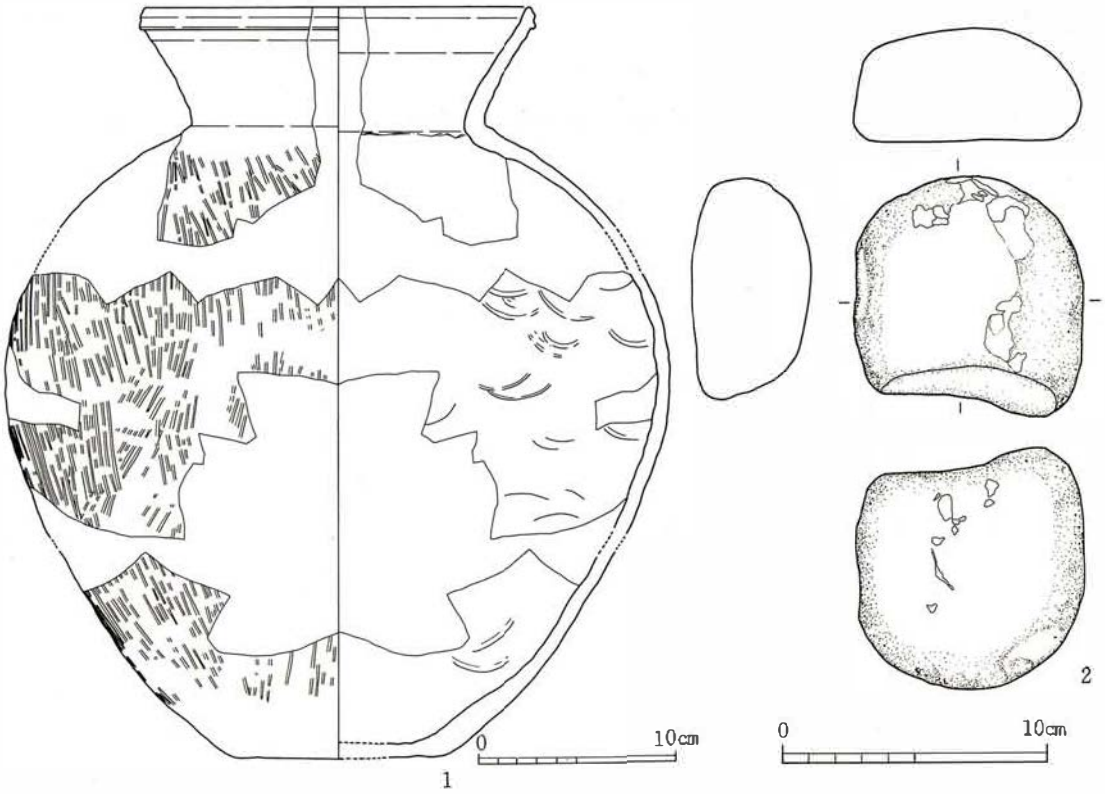
察される。瓦は丸瓦と平瓦が出土しているがいずれも小片で量も少ない。第97図2は使用痕のある礫である。両面とも摩耗して平滑になっている。

ＳＤ 646溝跡からは土師器杯（第93図１）、赤焼き土器杯、丸瓦が出土している。量は少ない。



番号	遺物名	層位	図版	登録No.	番号	遺物名	層位	図版	登録No.
1	土師器杯	ℓ－1		R-108	6	赤焼き土器杯	ℓ－1	15－3	R-109
2	同上	ℓ－1	15－1	R-21	7	赤焼き土器高台付皿	ℓ－1		R-27
3	土師器甕	ℓ－1		R-103	8	須恵器長頸瓶	ℓ－1		R-113
4	同上	ℓ－2		R-32	9	同上	ℓ－2	15－10	R-80
5	須恵器杯	ℓ－2	15－5	R-3					

第93図　SD 645・646溝跡出土遺物



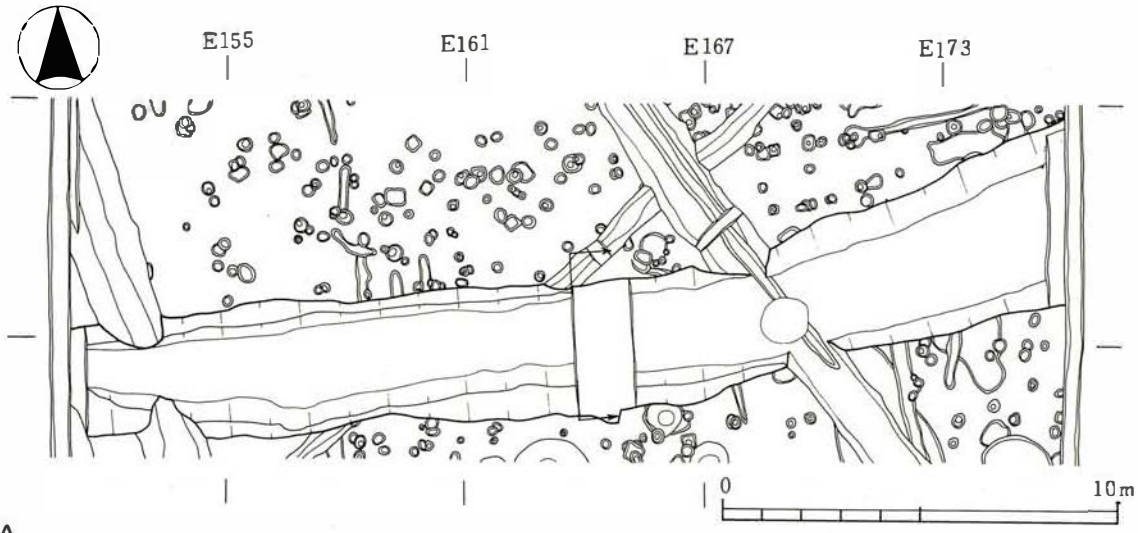
番号	遺物名	層位	図版	登録No.	番号	遺物名	層位	図版	登録No.
1	須恵器甕	ℓ－2		R-89	2	使用痕のある礫	ℓ－1		R-199

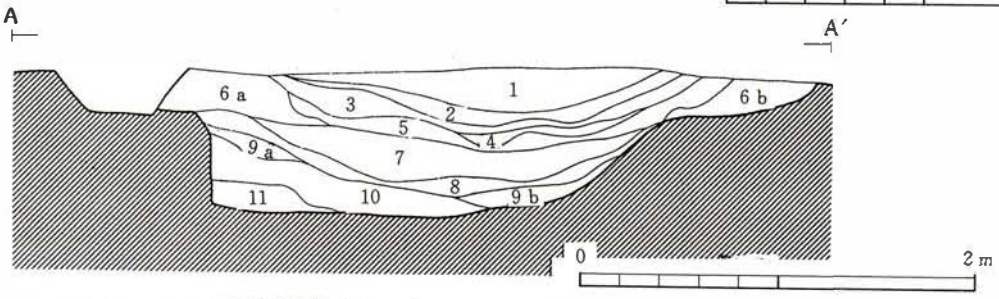
第94図　ＳＤ 645 溝跡出土遺物 (2)

(15)　ＳＤ 653 溝跡

ＳＤ 653 は、調査区北半部の第Ⅳ層上で検出した東西溝である。ＳＤ 645 ・ 631 ・ 644 溝跡をはじめ、多くの遺構と重複しているが、それらのすべての遺構より古い。規模は上幅 4.4 ～ 2.9 m、深さ 0.75m を計り、約26.5m にわたって検出した。方向についてみると西半分は発掘基準線に対し東で約 5 度北に偏しているが、東半分は北へ強く湾曲している。断面形は概ね逆台形を呈している。中央部のエレベーションを参考にすると北壁はほぼ垂直に立ち上がるのに対し、南壁は緩やかに立ち上がっている。しかし全般にわたってこのような形態ではなく、部分的に段掘り状を呈するところもある。底面は平坦である。埋土は、わずかに粘質土粒など含むものの、上層から下層までほとんど砂層が主体となっており、その中でも粗いものと細かいものとが互層を成して堆積して自然堆積した様相を呈している。なお、東半部の壁では炭化物を広範囲にわたり検出した。この炭化物の内容については分析を行っていないため不明である。

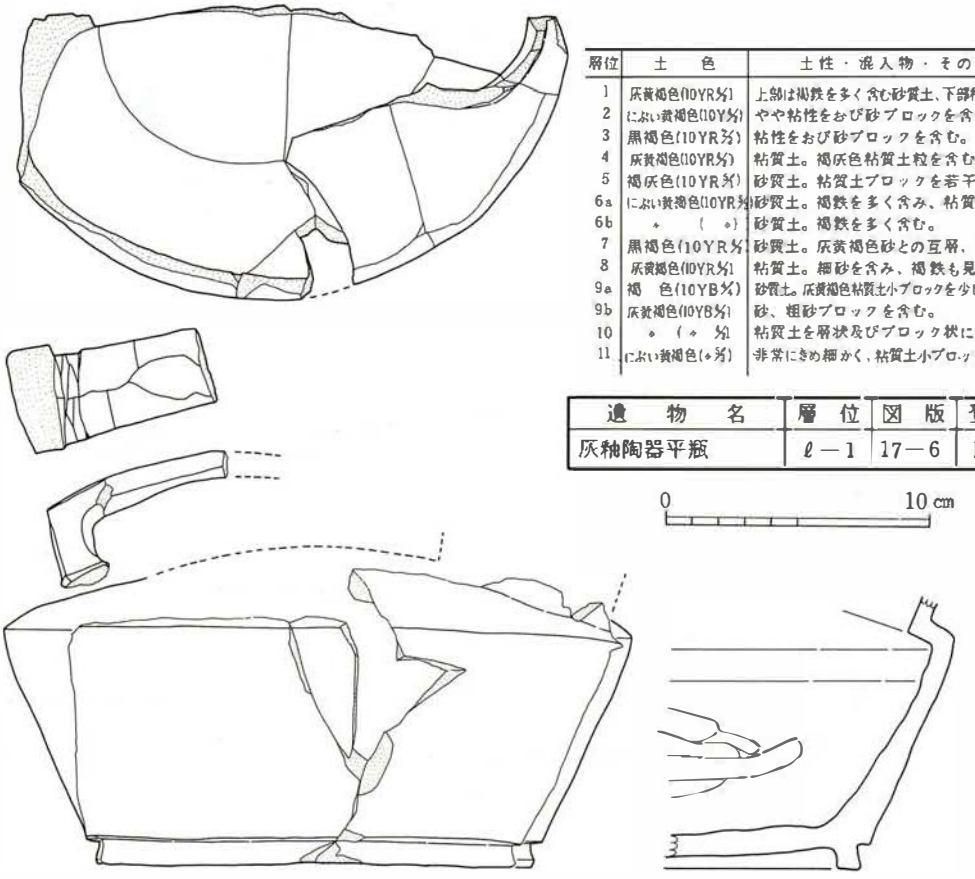
遺物は灰釉陶器平瓶、須恵器瓶、土師器杯、甕などが出土している。ほとんどが最上層から出土しており、下層からは土師器甕の小片が数点出土したのみである。第 95 図は灰釉陶器の





層位	土　色	土性・混入物・その他
1	灰黄褐色(10YR4/2)	上部は褐鉄を多く含む砂質土、下部程きめ細くなる。
2	にぶい黄褐色(10YR4/3)	やや粘性をおび砂ブロックを含む。
3	黒褐色(10YR3/2)	粘性をおび砂ブロックを含む。
4	灰黄褐色(10YR4/2)	粘質土。褐灰色粘質土粒を含む。
5	褐灰色(10YR4/1)	砂質土。粘質土ブロックを若干含む。
6a	にぶい黄褐色(10YR5/3)	砂質土。褐鉄を多く含み、粘質土粒を含む。
6b	〃　(〃)	砂質土。褐鉄を多く含む。
7	黒褐色(10YR3/2)	砂質土。灰黄褐色砂との互層、しまり強い。
8	灰黄褐色(10YR4/2)	粘質土。細砂を含み、褐鉄も見られる。
9a	褐　色(10YR4/4)	砂質土。灰黄褐色粘質土小ブロックを少し含み砂を混入する。
9b	灰黄褐色(10YR4/2)	砂、粗砂ブロックを含む。
10	〃　(〃　4/1)	粘質土を層状及びブロック状に含む。
11	にぶい黄褐色(〃4/3)	非常にきめ細かく、粘質土小ブロック、褐鉄を含む。

遺　物　名	層　位	図　版	登録No
灰釉陶器平瓶	ℓ－1	17－6	R-43



第95図　ＳＤ 653溝跡と出土遺物

平瓶である。口縁部および体部半分を失っている。体部、底部は回転ヘラケズリによって丁寧に調整されており、天井部、把手の上面には緑色の自然釉が厚くかかっている。胎土は灰白色を呈し、黒色の微粒を含む。形態的な特徴及び胎土、色調から猿投窯の製品とみられ、黒笹14号窯式に位置づけられる。第1層中からほぼまとまって出土した。

E．その他の遺構

(1) ＳＸ 658焼土遺構

ＳＸ 658は、調査区北半部のＳＫ 667土壙埋土上で検出した小型の焼土遺構である。平面形は楕円形を呈し、規模は長径70cm、短径30cm、深さ10cmを計る。壁・底面は硬く焼き締まり、赤色を呈している。内部には大量の焼土や炭化物が充填していた。

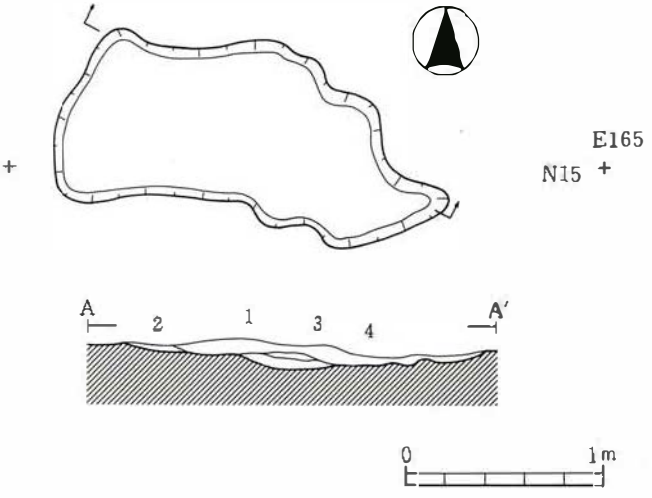
遺物は出土していない。

(2) ＳＸ 659掘り込み

ＳＸ 659は、調査区中頃の第Ⅲ層上面で検出した不整形の掘り込みである。ＳＤ 632溝跡と重複しており、それより新しい。1層と4層からアサリ51点（右殻21、左殻30）とシオフキ1点（左殻）が出土した。遺存状態は良くない。他に須恵器の破片が数点出土している。

(3) ＳＸ 694ピット

ＳＸ 694は、ＳＫ 670土壙北側の第Ⅳ層上面で検出した柱穴である。長径50cm、短径43cmの楕円形を呈し径17cmの柱痕跡を確認している。埋土中よりロクロ調整されたカワラケが1点出土している（第97図1）。内外に油煙状の付着物が認められる。底部には回転糸切り痕が残っている。

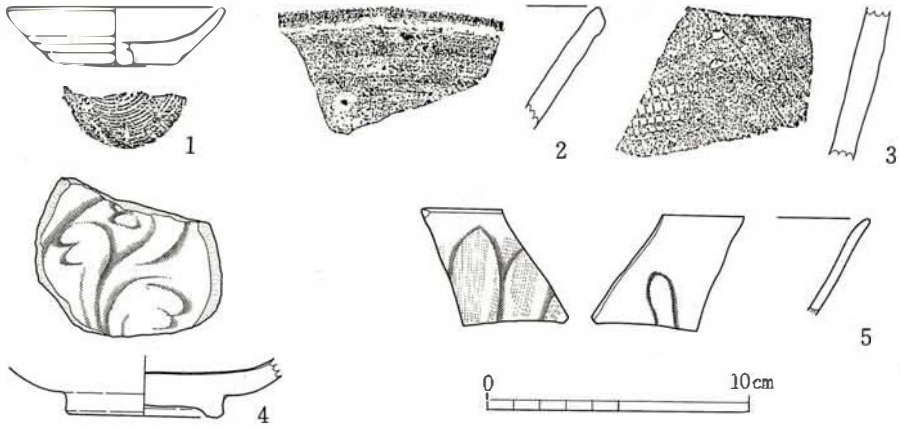


第96図　ＳＸ 659掘り込み

(4) ＳＸ 695ピット

ＳＸ 695は、ＳＢ 628建物跡東妻付近において、ＳＤ 645溝跡の埋土上で検出した小ピットである。円形を呈し、径32～36cmを計る。埋土中より無釉陶器擂鉢の口縁部破片が1点出土している（第97図2）。　内面に筋目はつけられていない。内外ともヨコナデ調整している。

(5) ＳＸ 696ピット



番号	遺物名	遺構・層位	図版	登録No.	番号	遺物名	層位	図版	登録No.
1	カワラケ	SX694 ℓ-1	32－4	R-31	4	青磁椀	SX698 ℓ-1	19－8	R-7
2	無釉陶器擂鉢	SX695 ℓ-1	26－8	R-141	5	青磁椀	SX697 ℓ-1		R-5
3	無釉陶器甕	SX696 ℓ-1		R-140					

第97図　SX694・695・696・697・698ピット出土遺物

SX696は、SD 651溝跡の南半部東壁付近で検出した小ピットである。SD 651溝跡と重複しているが新旧関係は把握できなかった。円形を呈し、径20cmを計る。埋土中より無釉陶器甕の体部破片が1点出土している（第97図3）。外面はヘラ状工具でナデ調整されており、格子の押印が施されている。

(6) SX 697ピット

SX697は、SB 602建物跡東妻の東側で検出した小ピットである。隅丸方形を呈し、一辺約50cmを計る。埋土中より青磁椀の口縁部破片が1点出土している（第97図5）。外面に蓮弁文を彫り出し、その上に櫛描きを施している。このような特徴を持つ椀は、大宰府における分類では龍泉窯系青磁Ⅰ－6・b類にあたり、12世紀後半以降の年代が与えられている。

(7) SX 698ピット

SX 698は径65cmを計る円形のピットである。SB 614・620建物跡と重複しており、前者より新しく後者より古い。埋土中より青磁椀の底部破片が1点出土している（第97図4）。見込みに片切彫りによる草花文を施している。高台内及び畳付きは無釉である。

F．遺構外出土の遺物

ここでは、中世の堆積層である第Ⅲ層や第Ⅰ層（表土）、近代以降の水路跡等から出土した主な遺物について説明する。

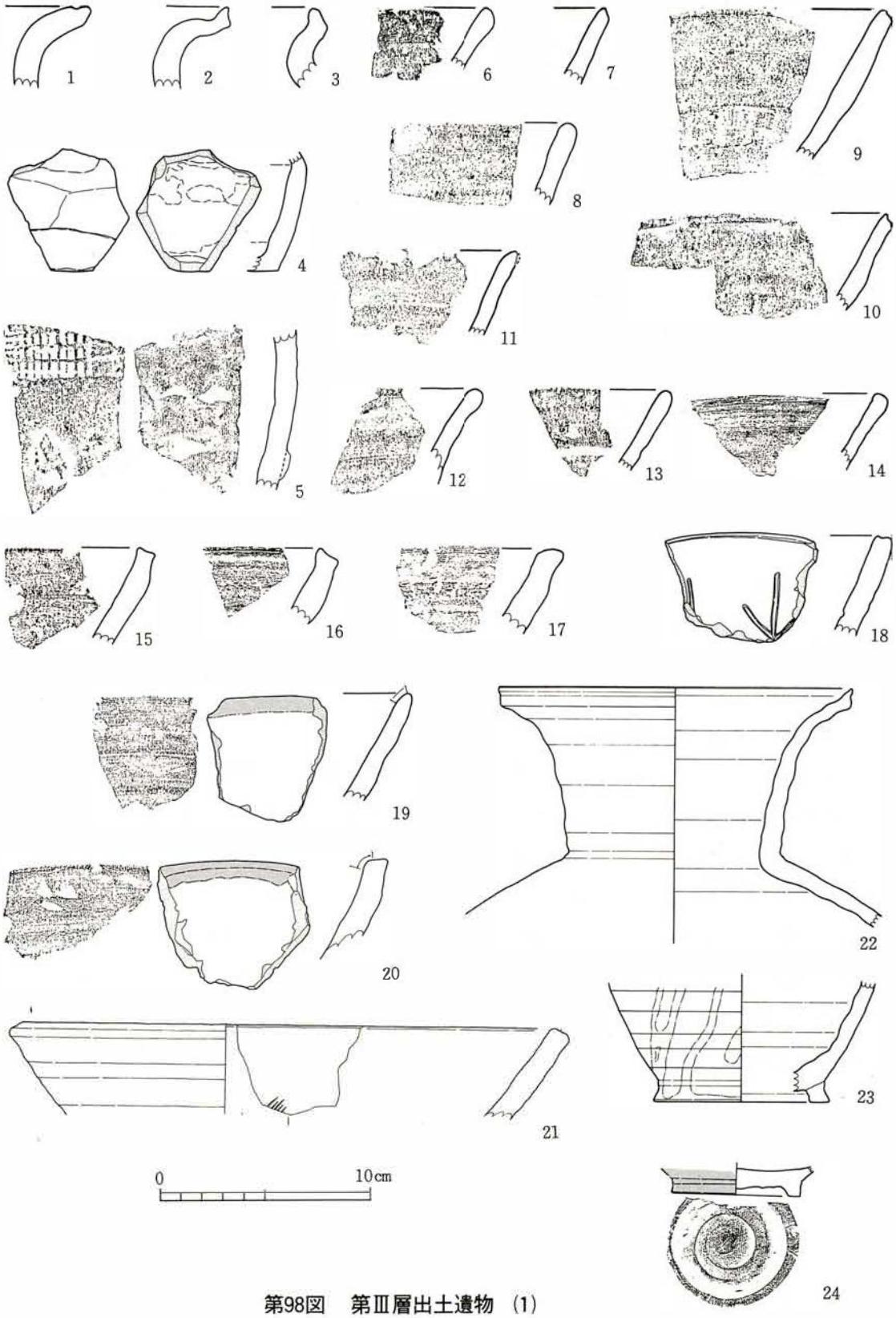
(1) 第Ⅲ層出土の遺物

第Ⅲ層からは無釉陶器甕・壺・擂鉢、青磁椀、白磁四耳壺、施釉陶器壺・香炉・卸皿・深皿、

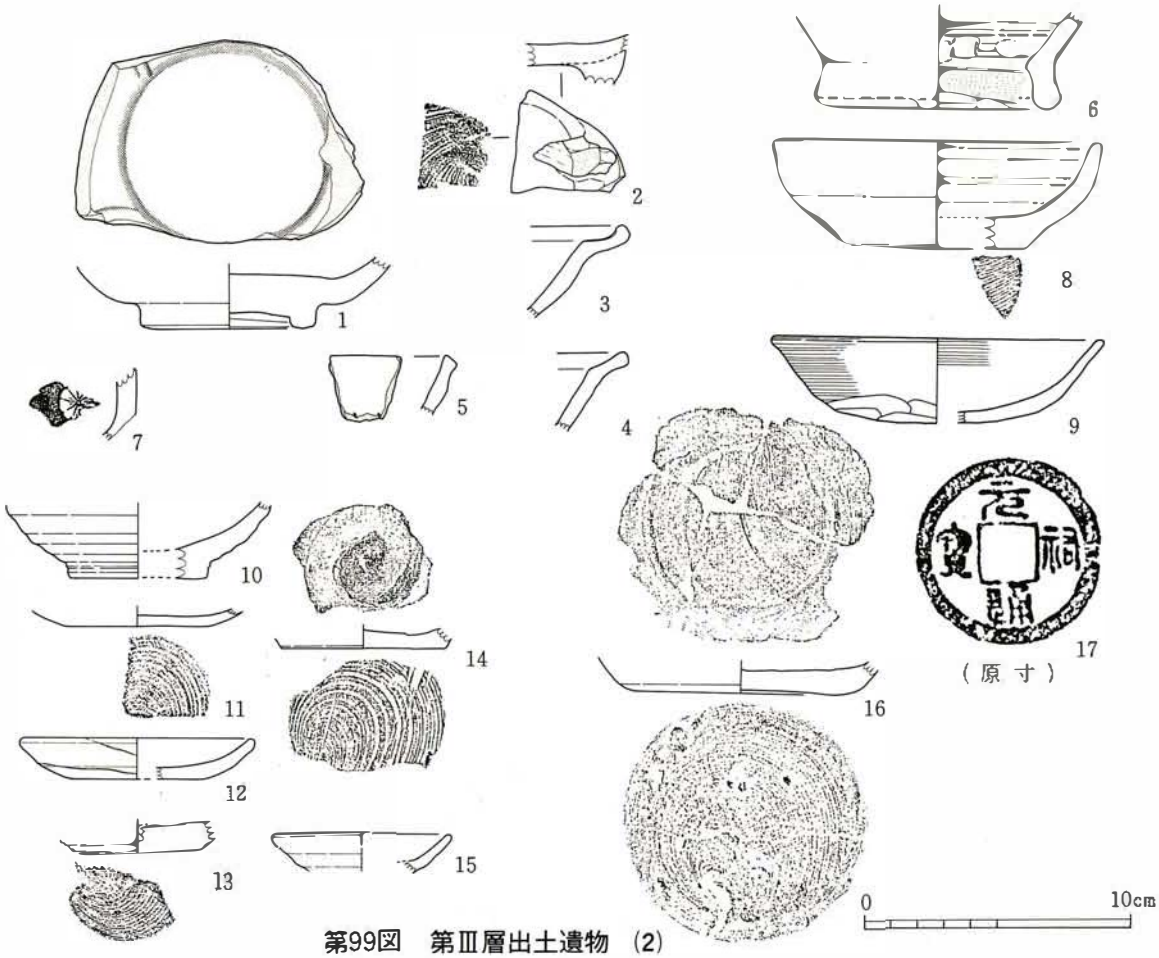
カワラケ、瓦質土器香炉、灰釉陶器広口瓶・長頸瓶、緑釉陶器椀（或は皿か）、古銭〔元祐通宝〕（1086年初鋳）などの他土師器、須恵器、赤焼き土器など多くの遺物が出土している。無釉陶器甕は、口縁部の形態が受口状を呈するもの（第98図3）と外反して先端が若干上方へ立ち上がるもの（第98図1・2）が出土している。前者は地元窯、後者は常滑窯製品に類似している。赤羽一郎氏の編年によれば、1は第Ⅱ段階前半（12世紀後半）、2は第Ⅱ段階後半（13世紀前半）のものと考えられる。無釉陶器壺（第98図4）は体部の小さな破片資料ではあるが、底部のわりには器高が低い形態と見られることから所謂「蔦口壺」のようなタイプの小壺と推定される。内面には酸化鉄が厚く付着しておりお歯黒壺として用いられた可能性がある。無釉陶器擂鉢は内面に筋目がつけられたものとつけられていないものとがあり、後者が圧倒的に多い。第98図21は内面に筋目のつけられているものである。内面に文様の刻まれているものも1点出土している（第98図18）。第98図19・20は研磨面のある陶片である。いずれも無釉陶器擂鉢の口縁部破片を用いたもので、研磨面は口縁端部の内側に口縁に沿って観察される。第98図22・23は灰釉陶器の瓶である。この内22は広口瓶であり、オリーブ褐色の釉がみられる。第98図24は緑釉陶器の椀或は皿の底部破片資料である。灰オリーブ色の釉が見込みと体部・高台の外面に施されている。高台内と畳付きは露胎のままである。高台は削り出しによる輪高台で、高台内にはその際の工具の痕跡が螺旋状に残っている。見込みには釉下にヘラミガキが観察されるが、高台外面は高台削り出し時のヘラケズリのままである。体部外面については残存部僅少のため不明である。見込みには重ね焼きの痕跡が観察される。高台の成形、直接重ね焼の痕跡、胎土、色調などから京都周辺の製品と考えられる。第99図2～5は施釉陶器である。3・4は深皿の口縁部破片資料であり、内外両面に灰釉が施されている。5は卸皿の口縁部破片資料である。卸し目の一部がかろうじて残存しており、薄い灰釉が内外両面に施されている。これらは瀬戸窯製品と考えられ、藤澤良祐氏の編年によれば3・4は中期様式（13世紀末～14世紀）、5は前期様式（12世紀末～13世紀）の前半のものに類似している。図版20－15は褐釉陶器壺である。肩の部分と見られ、厚さは0.65～0.95cmを計る。内面には粘土紐を巻き上げた痕跡が明瞭に残っており、施釉の際に流れ込んだと見られる釉が垂れて、発色せずに光沢のない灰白色を呈している。胎土は赤褐色や白色の小石を含み灰黄色を呈している。焼成良好で堅く焼き締まっている。肩部の破片にすぎないが、所謂「呂宋壺」などと呼ばれる中国産の壺であろう。第99図8～16はカワラケである。大部分がロクロ調整しているものであるが、9は手づくね成形後口縁部をヨコナデ調整し、底部を手持ちヘラケズリしている。

(2) 第Ⅰ・Ⅱ層出土遺物

第Ⅱ層は近・現代の陶磁器を含む層であるため、ここでは第Ⅰ層と一括で扱う。これらの層からは無釉陶器甕・壺・擂鉢、青磁椀・皿、白磁椀・皿・四耳壺・合子・小壺蓋、施釉陶器香



第98図　第Ⅲ層出土遺物（1）



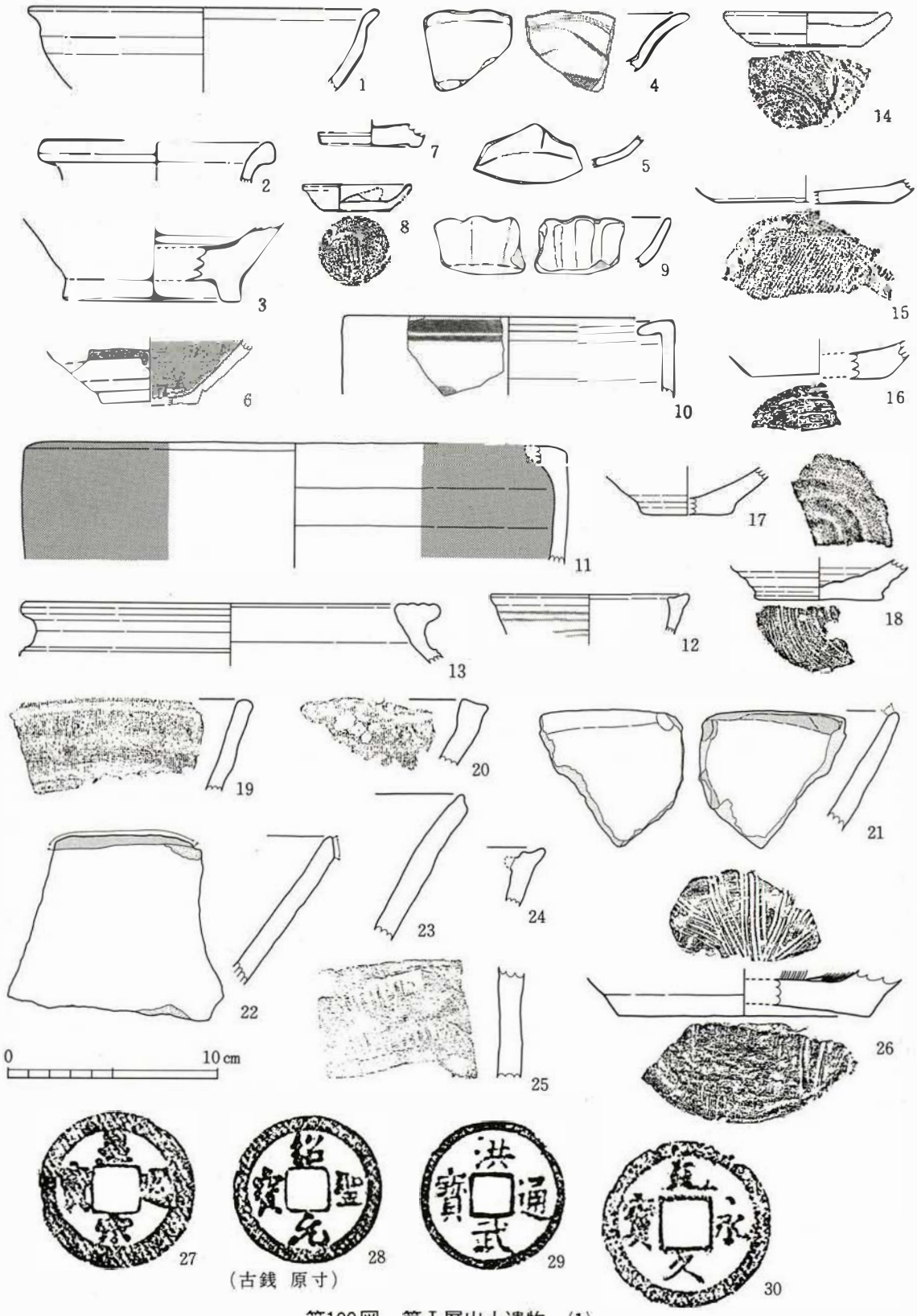
第99図　第Ⅲ層出土遺物（2）

炉・天目茶椀・皿・壺、カワラケ、瓦質土器火鉢、古銭、砥石、金属製品、鉄滓などの他、近世以降の陶磁器、土師器、須恵器、赤焼き土器、瓦などが出土している。第100図5は白磁皿の体部破片資料である。内面には縦に細い隆線がつけられている。外面中頃には明瞭に稜線がめぐっている。図版18—12は白磁合子の蓋である。口縁部から天井部にかけての破片であり、側面を菊座形に型抜きしたタイプと推定される。釉は透明であるが、素地のくぼんだ部分では水色に発色している。図版12—13は白磁小壺の蓋である。花弁を表現した丸いツマミがつけられている。釉は全体にやや青味を帯びている。第100図4は青磁皿の口縁部破片資料である。口縁部を波状に仕上げ、体部には稜がつく所謂「稜花皿」である。内面に片彫りの文様が刻まれている。12は施釉陶器香炉の口縁部破片資料である。口縁端部はやや内側に発達し、広い面を形成している。外面口縁下に二条の沈線がめぐり、その下には文様が刻まれているようだが判然としない。二次的な熱を受けており表面の釉が荒れている。6は天目茶椀の底部破片資料である。高台から体部は削り出しており、体部との境には明瞭な段が形成されている。高台内は浅く削り込まれている。内面及び外面体部には黒褐色の釉が施されている。6と12は瀬戸窯の製品と考えられ、藤澤良祐氏の編年によれば6は後期様式（14世紀末～15世紀）後半、12は

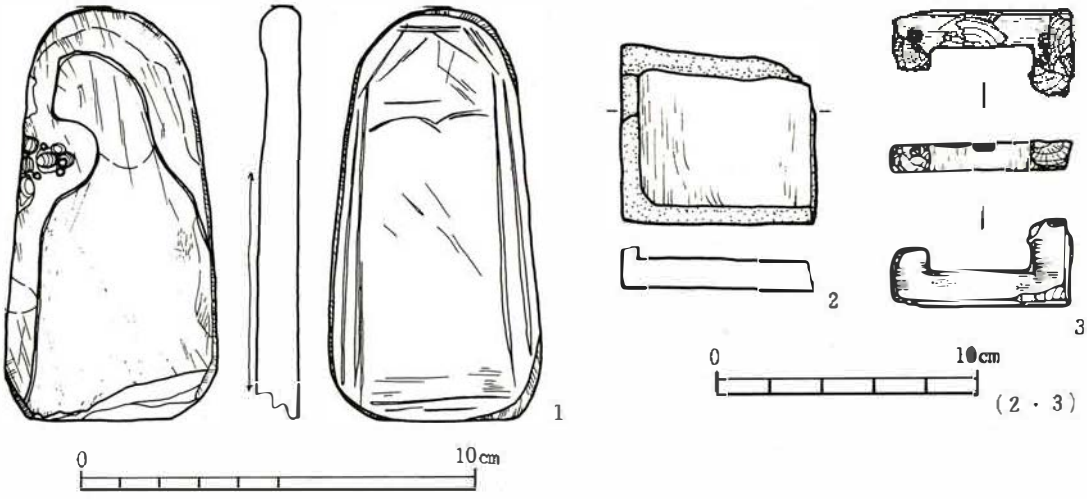
前期様式（13世紀末～14世紀）のものに類似している（註６）。第100図19～21・23は無釉陶器擂鉢の口縁部破片資料である。21は片口付近の破片であり、口を造り出す際に当てたと思われる指の跡が残っている。22は研磨面のある陶片である。無釉陶器擂鉢の口縁部外面を使用したもので、その部分は平滑になっている。24は鉄釉のかけられた擂鉢の底部破片資料である。片口付近の破片と考えられる。26は近代以降の溝跡から出土した擂鉢の底部破片資料である。内面には６条１単位の筋目が施されており、底部には板状の圧痕が観察される。体部外面は丁寧にヨコナデ調整されている。第101図１は石硯である。暗紫灰色を呈し平面形は楕円形に近い形状を呈している。硯頭部と左側面及び右側面上半分に幅の広い縁帯がめぐっている。この縁帯は左側面の小孔が多数あいている部分をかわしているため、海部は不整形を呈している。海部は浅く、浅い縦方向の溝状痕が観察される。陸部と縁帯とは段差がなく、条線で区画されているにすぎない。陸部は使用により磨耗して平滑になっているが、使用痕は左側縁帯の小孔の付近にまで認められる。一方、この硯の裏面にも硯の海・陸部と縁帯を表現したと見られる粗雑な線刻がある。全体に微細な凹凸が多く観察される。表面についてみると、陸部が彫り込まれていないこと、海部をはじめ全体に成形が粗雑な点を考え併せればこの硯は製品とは考えにくい。しかし陸部に使用痕が認められ、縁帯の一部にまで及んでいることを考慮するならばか

番号		種別・器種		出土地区	外面	内面	その他	図版No.	登録No.
第98図	1	無釉陶器	甕	F-10	ヨコナデ	ヨコナデ		23-5	R-235
	2	〃	〃	I-07	頸部ヘラナデ→ヨコナデ	〃		23-2	R-265
	3	〃	〃	F-10	ヨコナデ	〃			R-187
	4	〃	壺	E-16	(体部)ヘラナデ→(下端)横ヘラケズリ	〃	内面に酸化鉄付着	24-12	R-74
	5	〃	甕	H-14	自然釉	〃	押印あり		R-192
	6	〃	擂鉢	G-10	ヨコナデ	〃			R-189
	7	〃	〃	F-02	〃	〃			R-186
	8	〃	〃	D-10	〃	〃	外面に片口を作るための指オサエあり		R-183
	9	〃	〃	D-01	ヨコナデ→(下半)横ヘラケズリ	〃			R-181
	10	〃	〃	G-14	ヨコナデ→(下半)横ヘラケズリ	〃			R-191
	11	〃	〃	G-14	ヨコナデ	〃	断面にタール状の付着物		R-190
	12	〃	〃	F-13	〃	〃			R-188
	13	〃	〃	E-16	〃	〃			R-185
	14	〃	〃	B-15	〃	〃		27-10	R-176
	15	〃	〃	B-16	〃	〃			R-177
	16	〃	〃	B-01	〃	〃			R-292
	17	〃	〃	C-11	〃	〃			R-180
	18	〃	〃	F-10	〃	〃	内面に「Ψ」のヘラガキあり	28-6	R-40
	19	〃	〃	A-06	〃	〃	口縁部内面に擦痕	25-6	R-173
	20	〃	〃	E-12	〃	〃	〃		R-184
	21	〃	〃	A-06	ロクロナデ 釉:オリーブ褐色 2.5Y4/3)	ヨコナデ	内面に５条(?)１単位の筋目	28-4	R-172
	22	灰釉陶器	広口瓶	D-04 E-16 H-11	(高台～高台内)回転ヘラケズリ	ロクロナデ	ロクロナデ SD631(2～2)と接合		R-295
	23	〃	瓶	NaSトレンチ	回転ヘラケズリ→高台貼付	〃		17-2	R-296
	24	緑釉陶器	椀(或は皿)	C-04	(高台～高台内)回転ヘ	(内面)ヘラミガキ	内面～高台外面に施釉 釉:暗オリーブ色(7.5Y5/3)	17-3	R-14
第99図	1	青磁	椀	H-07	(体部)全面施釉	全面施釉 劃花文を描く	釉:オリーブ黄色(7.5Y6/3)	19-7	R-8
	2	施釉陶器	香炉	H-16	(高台内～貫付)回転ヘラケズリ、露胎		(底部)糸切り痕→脚貼付、釉:	21-8	R-60
	3	〃	深皿	E-13	全面施釉	全面施釉	釉:	21-7	R-16
	4	〃	〃	F-10	全面施釉	全面施釉	釉:	21-5	R-55
	5	〃	卸皿	E-05	ロクロナデ	ロクロナデ	釉: 内面に卸目	21-9	R-240
	6	白磁	四耳壺	F-10	(高台下端)横手持ちヘラケズリ		釉:	18-9	R-10
	7	瓦質土器	香炉	D-02	燻べ焼	ヨコナデ	外面に菊花文	30-3	R-232
	8	カワラケ		H-04	ロクロナデ	ロクロナデ	(底部)静止糸切り痕、口縁部黒色を呈す		R-249
	9	〃		H-08	ヨコナデ→(底部)手持ちヘラケズリ	ヨコナデ			R-72
	10	〃		I-06	ロクロナデ	ロクロナデ		32-2	R-243
	11	〃		F-10	〃	〃	(底部)回転糸切り痕		R-244
	12	〃		F-11	〃	〃	(体部外面)粘土紐巻き上げ痕あり		R-247
	13	〃		F-07	〃	〃	(底部)回転糸切り痕		R-246
	14	〃		I-14	〃	〃	(〃) 〃 一棒状の圧痕	32-3	R-250
	15	〃		G-08	〃	〃	内外黒色を呈す		R-248
	16	〃		H-05	〃	ロクロナデ→(内底)一定方向のナデ	(底部)回転糸切り痕	34-1	R-331

表３　第Ⅲ層出土遺物



第100図　第Ⅰ層出土遺物　(1)



第101図　第Ⅰ層出土遺物 (2)

つて硯であったものを一回り小さく作り直したものとも見ることができる。想像をたくましくするならば裏面の線刻は、その際いずれの面を使用するかを選択した際の行為と考えられよう。3は黒色を呈する石製の帯飾りである。下辺と両側辺がいずれもほぼ直角を成すことから巡方と考えられる。下辺近くに長方形の透孔を有するタイプで、裏面のコーナーにはそれぞれ帯本体に縫い付けるための小孔が穿たれている。

註6　第100図12については参考文献中に類例を見出しえなかったため、藤澤良祐氏にご教示いただいた。

番号		種別・器種		出土地区	外面	内面	その他	図版No.	資料No.
第105図	1	白磁	椀	E-09		ロクロナデ	釉：灰白色(N8/　)	18-1	R-9
	2	〃	四耳壺	A-15	全面施釉	全面施釉		18-8	R-19
	3	〃	〃	G-17	体部まで施釉。高台～高台内は露胎	回転ヘラケズリ	壁付き瞬耗	18-10	R-18
	4	青磁	皿		全面施釉	全面施釉、文様あり	『緑花皿』	20-9	R-49
	5	白磁	皿	第3トレンチ	全面施釉	全面施釉		18-6	R-272
	6	施釉陶器	天目茶椀	G-09	回転ヘラケズリ→体部上半に施釉	〃		21-3	R-52
	7	〃	椀		回転ヘラケズリ→鬼板で化粧掛け	〃	釉：		R-230
	8	土器	灯明皿	E-07	ロクロナデ	ロクロナデ	内底に舌状の灯芯受け(底部)回転糸切り痕→調整台の圧痕		R-114
	9	施釉陶器	皿	G-06	(下半)回転ヘラケズリ、(上半)施釉	全面施釉	『菊皿』釉：		R-24
	10	〃	香炉	I-05	全面施釉	ロクロナデ		30-5	R-127
	11	瓦質土器	火鉢	E-11		ヨコナデ		21-12	R-107
	12	施釉陶器	香炉	C-13	全面施釉		外面口縁下に2条の沈線		R-75
	13	〃	壺	C-07		ロクロナデ		32-1	R-67
	14	カワラケ		F-04	ロクロナデ	〃	底部 静止糸切り痕		R-13
	15	〃		G-02	〃	ロクロナデ→(内底)一定方向のナデ	(底部)静止糸切り底→周縁にナデ		R-251
	16	〃		C-15	〃	ロクロナデ	(〃)糸切り痕		R-252
	17	〃		J-02	〃	〃	(〃) 〃	32-6	R-253
	18	〃		第3トレンチ	〃	〃	(〃) 〃	25-8	R-262
	19	無釉陶器	擂鉢	東壁トレンチ	ヨコナデ	ヨコナデ		29-5	R-142
	20	〃	〃	C-03	〃	〃	片口付近か？	25-2	R-178
	21	〃	〃	A-15	〃	〃	内面口縁部に擦痕	27-7	R-175
	22	〃	〃	東壁トレンチ	〃	〃	片口を作るための指オサエあり		R-136
	23	〃	〃	Z	〃	〃	釉：		R-139
	24	施釉陶器	〃	F-03	全面施釉	全面施釉	押印あり		R-61
	25	無釉陶器	壺	SD35	ヘラナデ	ヨコナデ			R-171
	26	〃	擂鉢	SD08	ヨコナデ調整		(内面)6条1単位の櫛目、(底部)調整ナデ	28-2	R-93
第106図	1	石硯		東壁トレンチ				45-2	R-4
	2	〃		Z				45-6	R-2
	3	石帯		I-12			巡方。下辺近くに長方形の透孔	45-8	R-274

表4　第Ⅰ・Ⅱ層出土遺物

第Ⅳ章　第 11 次 調 査

1. 調 査 要 項

(1) 遺跡名　新田遺跡

(2) 所在地　多賀城市山王字北寿福寺19－2他4筆

(3) 調査面積　5,185㎡（対象面積7,000㎡）

(4) 調査期間　平成元年4月17日～9月30日

(5) 調査主体　多賀城市教育委員会

(6) 調査担当　多賀城市埋蔵文化財調査センター

(7) 調査員　埋蔵文化財調査センター　高倉敏明、相沢清利、千葉孝弥
菊池　豊（調査補助員）

(8) 調査参加者　佐々木四郎、芦野しず子、阿部けい子、阿部敏子、阿部米子、遠藤一代、大友良子、大山貞子、菅野恵子、熊谷あつ子、後藤みよ子、桜井エイ子、佐々木君子、菅原絹代、高島節子、高野敏子、武田リキ、角田静子、松浦　正、松本喜一、三浦幸子、水越朝治、渡辺園恵、鈴木武次郎、林　久子（遺物整理員）

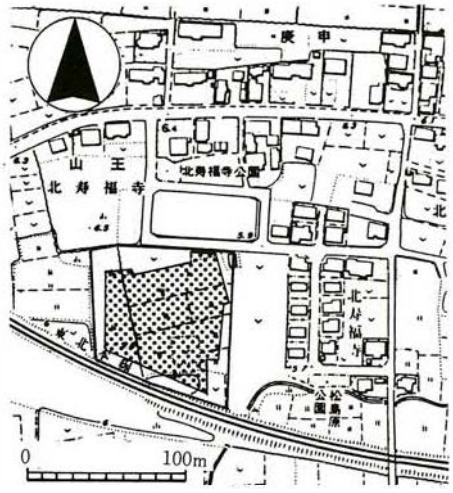
(9) 調査協力　株式会社大東、世紀東急株式会社、宅地開発設計センター、車塚　聡

2. 調査に至る経緯

本件については、昭和63年に株式会社大東（仙台市若林区六丁の目南町9番23号　代表取締役　角田文彦）より開発計画が提示された。山王字北寿福寺19－2に分譲住宅を造成しようとするものである。この場所は、ここ数年休閑地となっていたがかつては水田や畑地として利用されていた所である。この東側は昭和59年に第4次調査を実施しており、古代から中世に及ぶ多くの遺構・遺物を発見している。境を接する本地区についても同様な状況が容易に予想された。しかし、63年度は当方のスケジュールの都合で対応できない旨返答し翌平成元年度の事業として実施することとした。なお、当該地は第4次調査の成果に鑑み、試掘調査は省略してただちに本調査に入ることとした。平成元年3月20日、株式会社大東側より正式に開発計画が提出され、県教育委員会の指導を経て4月2日、株式会社大東と協議を行ない、調査に要する日数及び経費について凡その見通しを説明した。11日、調査に入るための具体的な打ち合わせを行ない、重機等の借り上げ、事務所及び作業員休憩所の設置、飲料水の確保等全面的に協力して頂くこととなった。本件に係る契約は、事務手続上前期と後期に分割して行なうこととし、13日に前期分の契約を行ない、17日に調査を開始した。

3. 調査方法と経過

今回の調査区は、第４次調査区と第８次調査区の中間に位置する約7,000㎡を対象として実施した。両調査区の成果によれば、中世には第４次調査区に小規模な屋敷、第８次調査区に大規模な屋敷とそれに付属する小規模な屋敷が存在したことが判明しており、それらの間に位置する本調査区での遺構の在り方は、中世における武士の屋敷の縁辺の様子を知る上で貴重な成果が得られるものと考えられた。また、調査区南東部には水田化されていない部分があり、遺構や包含層が良好に残っていることが予想された。



第102図　第11次調査区位置図

特に、一辺約18mの方形を呈する部分は明治19年の地籍図でも確認することができ、中世以来の旧地形を残しているものとすれば何か特殊な遺構が存在するのではないかと期待させた。一方古代においては、10世紀前半以前の東西道路跡が第５・６・８次調査区を通過して本調査区の北端までのびてくることが予想されたため、それを確認する必要があった。更に第８次調査区では、その南側において、埋土中に10世紀前半頃の火山灰を含み平行して走る溝跡を発見しており、新しい段階の道路跡である可能性が考えられたため、今回の調査で検討することとした。このように調査対象地区全体にわたって遺構の在り方を把握することが必要となった。但し、南側が東北本線と接し、他は住宅地域が迫っているため、安全性を考慮して周囲とは十分距離をおいて調査区域を設定した。また、排土の処理は現場内で行なうことになっていたため、調査区を東西に二分し、前後２回に分けて西側から調査を行なうこととした。以下、西半部をⅠ区、東半部の内北側半分をⅡ区、その南側の方形に残っている部分をⅢ区、更にその南側で東北本線に接している部分をⅣ区と称する。

４月17日、調査区域を縄張りし、Ⅰ区の調査に着手した。まず西側よりバックホーを使用して表土剥離を開始した（～22日）。Ⅰ区はかつて水田であったため、周囲より一段低く削平されており、表土の下は周辺一帯の基盤である黄褐色の砂層（第Ⅳ層）となっている。４月19日より作業員約20名が参加し、バックホーによる粗掘り後の清掃と排水溝の掘削などを行なった。25日、西側から遺構検出作業を開始した（～５月24日）。遺構はほぼ全域に分布するものの、あまり集中してはいない。すべて黄褐色の砂層（第Ⅳ層）上で検出している。５月24日から遺構の掘り込みを開始した。必要に応じて20分の１のスケールで断面図を作成した。６月６日、中世の遺構ＳＤ1202から竹製のカゴが出土し、７日に東北歴史資料館の村山斌夫氏の指導を得

て土ごと切り取りを行なった。9日、測量基準点から測量原点の移動を行ない、調査区内を3m方眼に割り付けた。水準点からのレベル移動は、これに先立ち5月13日に行なっている。6月14日、100分の1のスケールで遺構略図作成を開始した。なお、今年の梅雨の時期は雨天の日が多く、調査が遅れ気味であったため、遺構の上にテントを張っての調査も行なった。第8次調査区からのびてきた10世紀前半頃の火山灰を含む2条の溝は、本調査区にも平行してのびてきており、道路跡である可能性が高まった。6月末になり、遺構全体についてある程度の見通しが得られたので、29日に調査区内の清掃を行ない、翌30日、曇天ではあったがリモコン付ヘリコプターにより航空写真を撮影した。7月3日、20分の1のスケールで遺構平面図作成を開始した。Ⅰ区の調査がほぼ終了までこぎつけたため、25日からバックホーを用いてⅢ区の表土剝離を行ない、26日からはⅠ区の埋め戻しと並行してⅡ区の表土剝離を開始した。これに先立ち、7月19日、第5・6・8次調査区で検出した10世紀前半以前の東西道路跡を確認するため、調査区北側に南北9m、東西4mのトレンチを設定した。このトレンチの調査は断続的に行なわざるをえなかったが、28日、道路跡南側溝想定位置に東西溝跡1条を発見し、埋土の状況等から一連の側溝跡である可能性が大きいと判断した。Ⅱ・Ⅲ区は8月23日から遺構検出作業を開始した。Ⅱ区はⅠ区と同様に第Ⅳ層上面まで削平されていたが、Ⅲ区では中世の包含層である第Ⅲ層が残っており、それを掘り込んだ遺構とそれにおおわれる遺構があることを確認した。しかし、Ⅲ区が方形の区画を呈していることについては、その周囲をめぐっていた溝が近代以降のものである可能性が非常に高いことから、中世までさかのぼるものではないと判断した。調査区北東隅で発見した南北溝跡は位置や方向などから、第4次調査で検出した屋敷の西辺を画する溝跡と一連のものであると考えられた。また、第4次調査で検出したSD 654などの東西溝は、調査時には近世以降の溝跡と考えていたが、西辺を画する溝の西側では検出できなかったため屋敷の内部を区画する溝であると考え

Ⅱ区調査風景

現地説明会風景

るに至り、屋敷の構造を考える上で新たな手がかりを得ることができた。8月26日、Ⅰ～Ⅳ区に測量原点を移動し、3m方眼の割り付けを行なった。Ⅱ・Ⅲ区においては遺構の掘り込みと並行して遺構断面図・平面図を作成していった。終了期日が迫ったため、素掘りの井戸跡や土壙などは堆積状況を把握した後、断面図を作成せず掘り上げていった。しかし、調査終了予定日である9月14日には間に合わないと判断し、9月12日、工事原因者である株式会社大東と協議し、調査の進行状況と今後の仕事量を考慮して30日まで延期することの承諾を得た。時間的な余裕がないため、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区の航空写真撮影は断念し、Ⅳ区は第Ⅲ層上面で遺構確認したのみで第Ⅳ層までの掘り下げは行なわなかった。9月27日、Ⅰ～Ⅳ区の成果について報道機関を通じて公表し、30日に一般の人々を対象とした現地説明会を開催した（参加者約200名）。調査は10月7日まで行ない、同日午後、雨の中現場から器材の撤収を行ない、すべての調査を終了した。

4. 発見した遺構と遺物

第11次調査で発見した遺構には、掘立柱建物跡11棟、柱列跡8条、井戸跡31基、土壙57基、溝跡31条、道路跡2条などがある。以下、はじめに主な遺構とその出土遺物について概要を述べ、その後に堆積層出土の遺物について説明する。

なお、今回の調査区における層序は第4次調査区と同様である。

A．掘立柱建物跡

今回の調査で11棟発見している。すべて南半部で検出しており、東壁際に7棟集中している他は各地点に1棟ずつ散在している。平面の調査にとどめたため、柱穴の断ち割りは行なっていない。以下、廂が取り付けられた2棟について詳述し、他は表にまとめる。

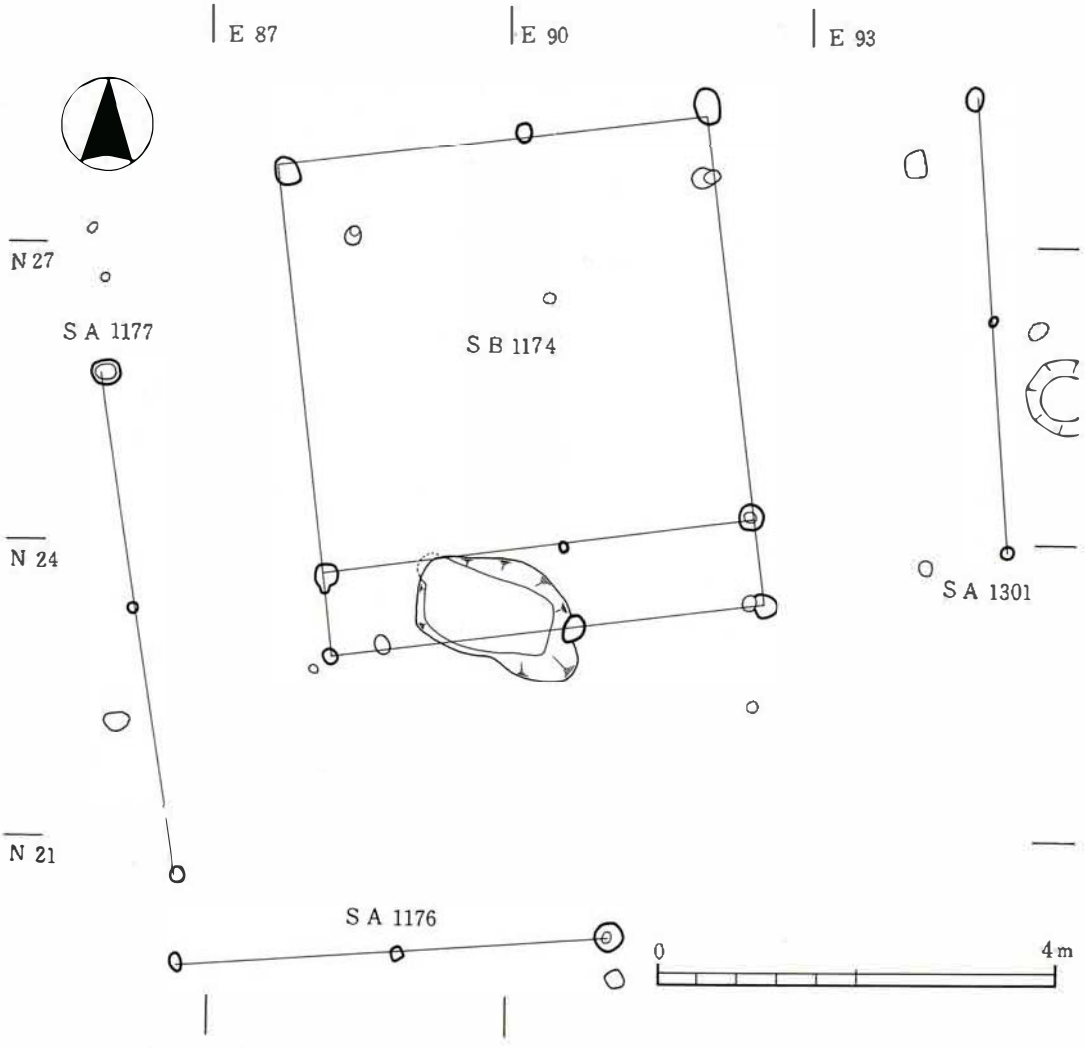
(1) ＳＢ1169建物跡

東西3間、南北3間の東西棟掘立柱建物跡である。南北二面に廂が付けられている。調査区東端部の第Ⅳ層上で検出した。身舎北側柱列の西から1間目は柱穴を検出できなかったが、柱筋のやや北側で17cm×14cmの上面が平坦な石を検出している。建物跡全体が削平を受けていることを考え併せると、この石は柱穴の底面に据えられていたもので、柱穴の大部分が削平されながらかろうじて残存したものと見ることができる。この他の柱穴はすべて検出しており、その内7個の柱穴で柱痕跡も確認している。ＳＢ1167・1168建物跡、ＳＥ1274井戸跡と重複しているが新旧関係は不明である。本建物跡の方向は、柱痕跡を検出できなかった柱穴が多いので明確ではないが、各側柱列でみると概ね東で約21度北に偏している。桁行については、北側柱列で総長約6.7m、柱間は西より4.39m（2間分）、約2.3m、北入側柱列で総長約6.9m、

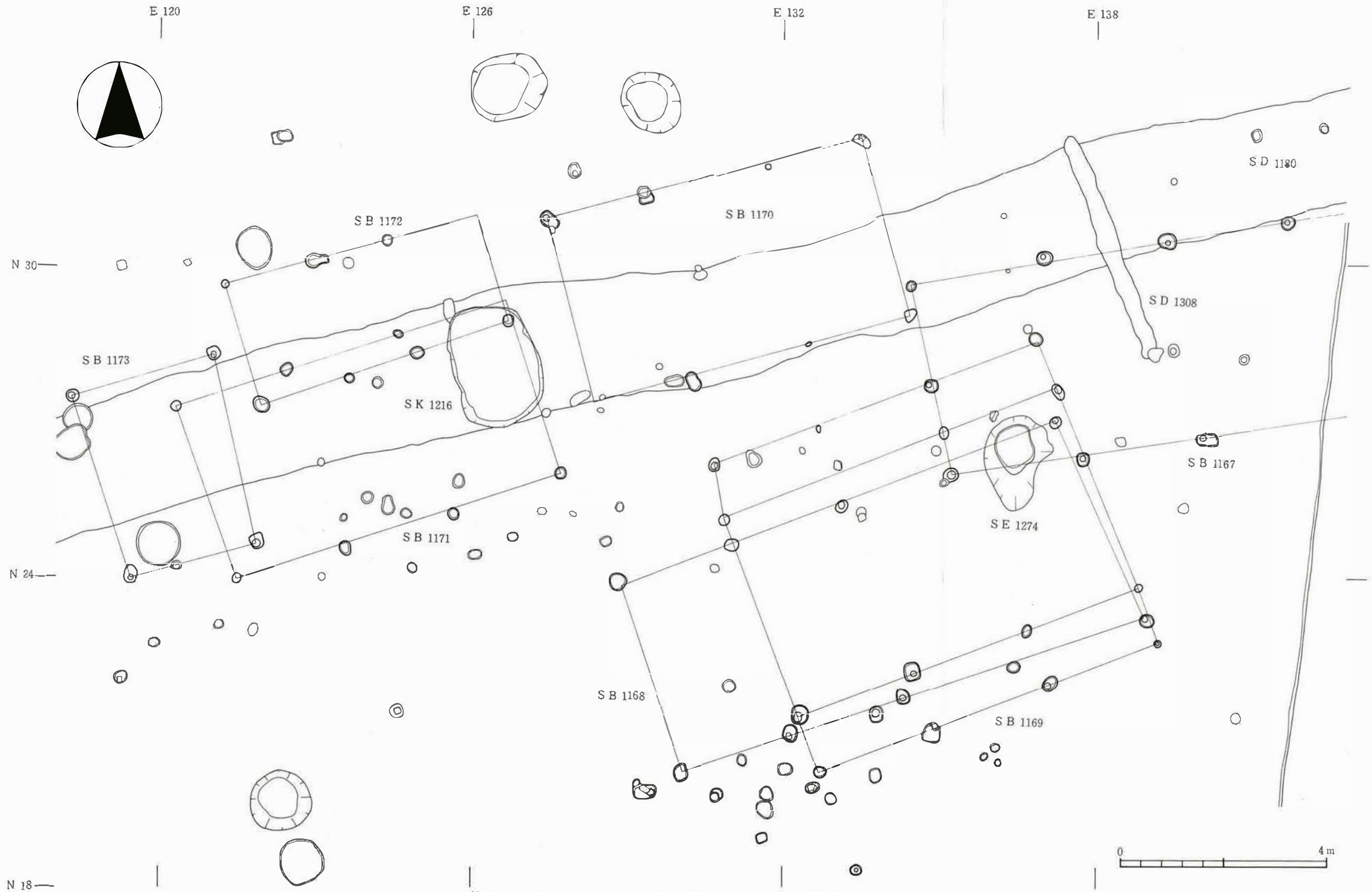
柱間は西より約2.4ｍ、約2.1ｍ、約2.3ｍである。南側柱列では総長約6.9ｍ、柱間は西より約2.4ｍ、約2.3ｍ、2.25ｍ、南入側柱列で約長約7.1ｍ、柱間は西より約2.4ｍ、約2.4ｍ、約2.3ｍである。梁行については、東妻で総長約6.0ｍ、柱間は北より約1.0ｍ、約3.8ｍ、約1.1ｍであり、西妻で総長約6.3ｍ、柱間は北より約1.1ｍ、約4.1ｍ、約1.1ｍである。柱穴は径28～15cmの円形を呈するものや、長辺35cm、短辺30cmの隅丸方形を呈するものなどがある。柱は柱痕跡より径17～11cmである。遺物は出土していない。

(2) ＳＢ1174建物跡

東西２間、南北１間の東西棟掘立柱建物跡である。南側には廂が取り付けられている。調査区西半部の第Ⅳ層上で検出した。柱穴はすべて検出しているが、柱痕跡の確認ができたものは南東隅の柱穴のみである。本建物跡の方向は、北側柱列でみると東で約11度北に偏しており、南側柱列でみると東で約９～７度北に偏している。桁行については、北側柱列で総長約4.2ｍ、

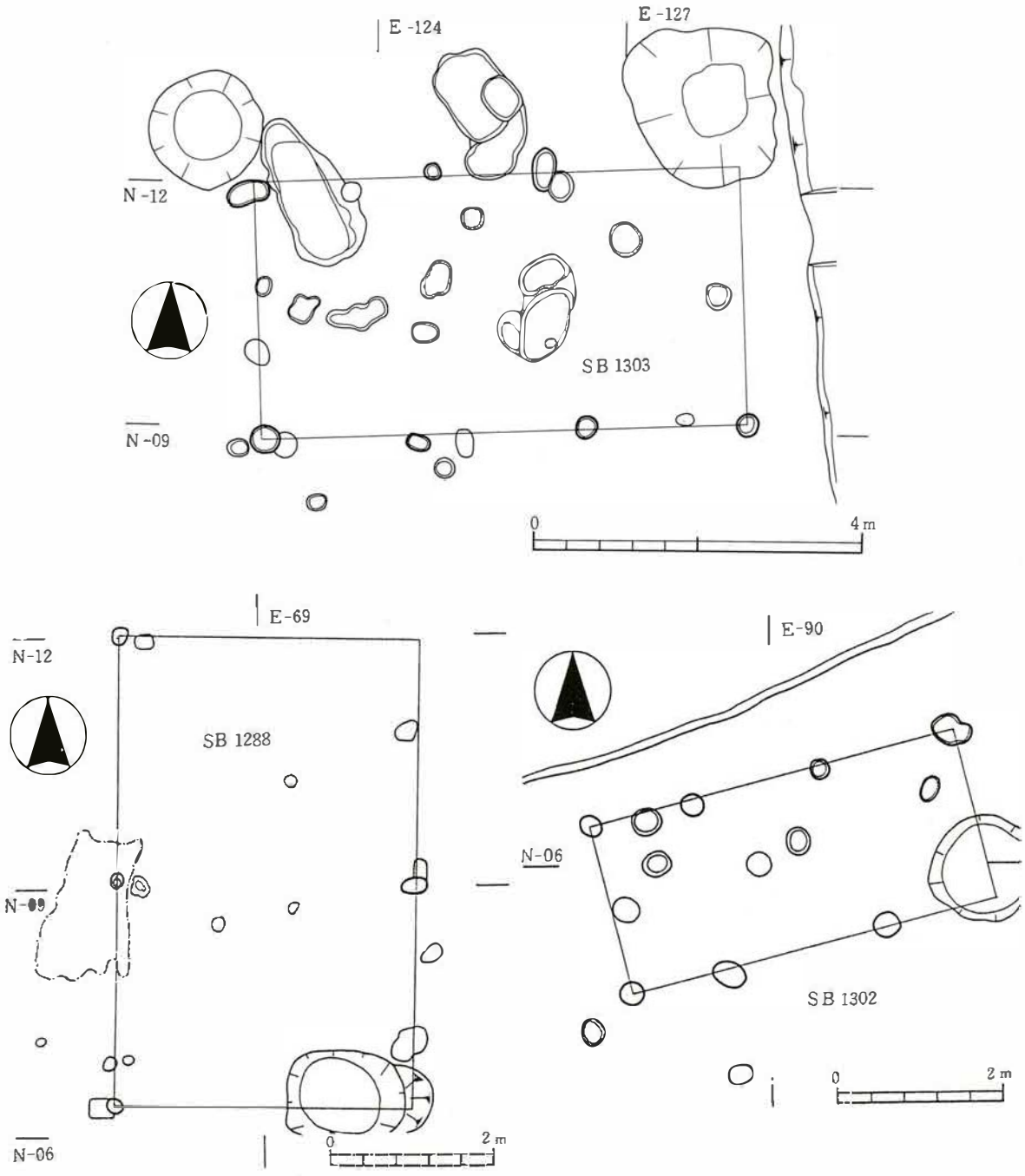


第103図　ＳＢ 1174建物跡、ＳＡ 1176・1177・1301柱列跡



第104図　SB 1167・1168・1169・1170・1171・1172・1173建物跡
SE 1274井戸跡・SK 1216土壙、SD 1180・1308溝跡

柱間は西より約2.4m、約1.9m、南側柱列で総長約4.3m、柱間は西より約2.4m、約1.9m、南入側柱列で総長約4.2m、柱間は西より約2.4m、約1.9mである。梁行については、東妻で総長約5.0m、柱間は北より約4.1m、約0.9mであり、西妻で総長約4.9m、柱間は北より約4.1m、約0.8mである。柱穴は径25cmの円形を呈するものや長径37cm、短径23cmの楕円形を呈するものなどがある。柱は柱痕跡より径10cmである。遺物は出土していない。



第105図　SB 1288・1302・1303建物跡

遺構名	規模	形態	方向	柱間 桁行	柱間 梁行
SB－1167	3間以上×1間	東西棟	北側柱列 E－9°－N 南側柱列 E－8°－N	北側柱列 約2.6m＋2.60m＋2.35m＝総長約7.5m以上 南側柱列 2.43m＋2.36m＝総長 約4.79m	西要 約3.7m
SB－1168	4間×1間	東西棟	北側柱列 E－20°－N 南側柱列 E－19°－N	北側柱列 約2.3m＋約2.2m＋二間分4.41m＝総長約8.96 南側柱列 約2.2m＋2.31m＋約2.2m＋約2.7m＝総長約9.4m	西要 約3.9m 東要 4.17m
SB－1170	3間×1間	東西棟	北側柱列 E－17°－N 南側柱列 E－18°－N	北側柱列 約2.0m＋約2.4m＋約1.9m＝総長 約5.3m 南側柱列 不明＋約2.3m＋約2.0m＝総長約4.3m以上	東要 約3.6m
SB－1171	3間×1間	東西棟	北側柱列 E－18°－N 南側柱列 E－18°－N	北側柱列 約2.3 m＋約2.2m＋不明＝総長約4.5 m以上 南側柱列 約2.1m＋約2.2m＋約2.2m＝総長 約6.5m	西要 約3.5m
SB－1172	3間×1間	東西棟	北側柱列 E－15°－N 南側柱列 E－19°－N	北側柱列 約1.8m＋約1.6m＝総長 約3.4m以上 南側柱列 約1.8m＋約1.4m＋約1.9m＝総長 約5.0m以上	西要 約2.4m
SB－1173	1間×1間	南北棟	西側柱列 N－19°－W 北要 E－16°－N	西側柱列 3.66m 東側柱列 3.70m	北要 2.85m 南要 2.38m
SB－1288				西側柱列 約2.9m＋2.69m＝総長約5.6m以上	
SB－1302				北側柱列 約1.2m＋約1.6m＋約1.6m＝総長約4.5m以上 南側柱列 約1.2m＋約2.0m＋不明	西要 約3.1m
SB－1303				北側柱列 約2.2m＋約1.4m＋不明＝総長約3.6m以上 南側柱列 約1.9m＋約2.0m＋約2.0m＝総長約5.8m	西要 約3.0m

表5　その他の建物跡

B．柱列跡

調査区南半部で8条発見している。大部分が3個の柱から成る小規模なものである。以下、主なものについて詳述し、他は表にまとめる。

(1)　SA1299柱列跡

東西2間の柱列跡である。調査区西端部において、SD1179溝跡の埋土上面で検出した。SD1188・1189溝跡と重複し、それらより古い。本柱列跡の方向は、東で1度21分北に偏している。柱間は、西より3.10m、2.80m、総長5.90mである。柱穴は、長辺22cm、短辺19cmの隅丸方形、或は長径31cm、短径23cmの楕円形を呈し、柱は柱痕跡より径10cmである。遺物は出土していない。

なお、本柱列跡は、約3.5m南に位置するSA1175柱列跡と組み合って建物跡となる可能性もあるが、東端から1間分の柱間が大きく異なるため別個の遺構として把えておきたい。

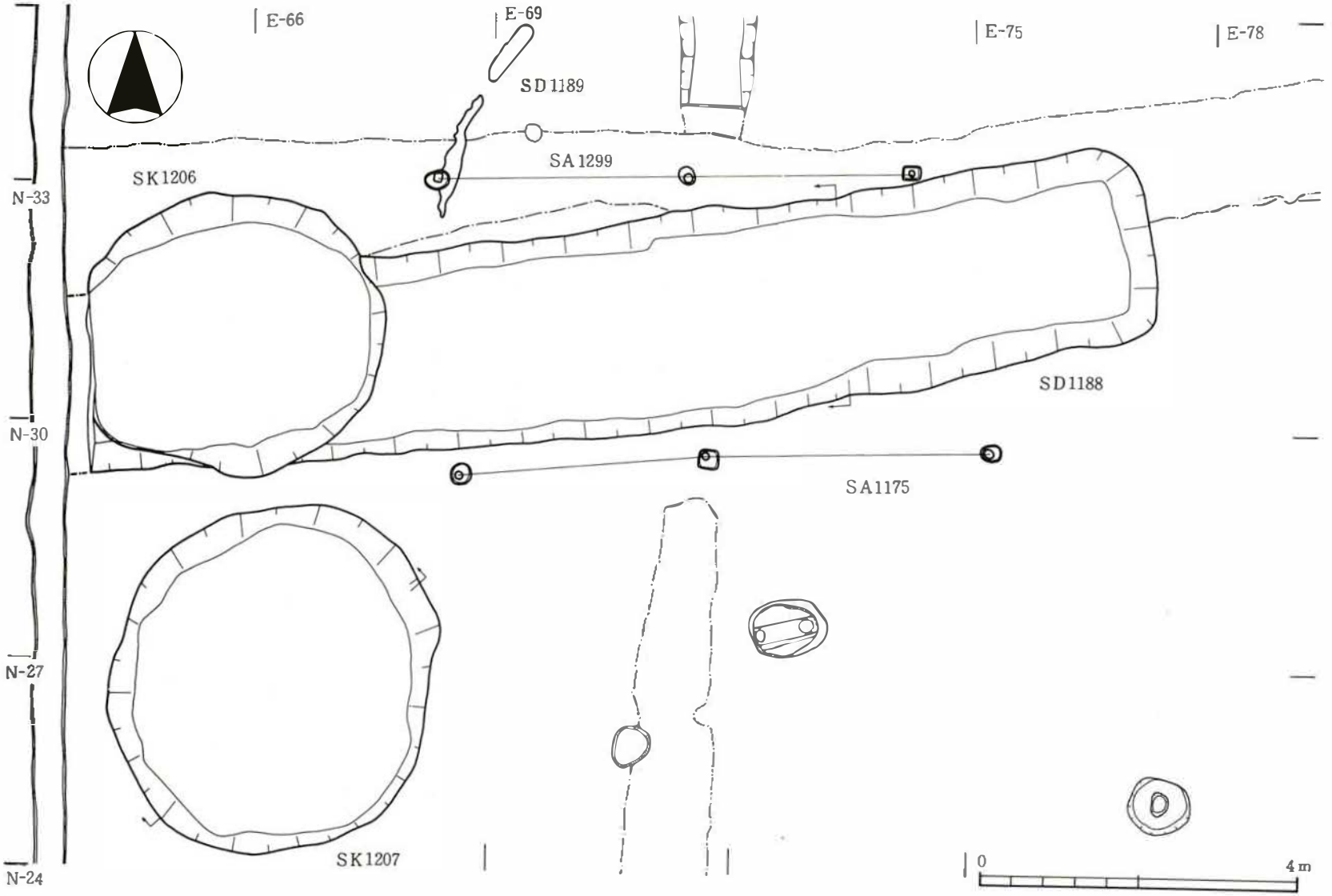
(2)　SA1176柱列跡

東西2間の柱列跡である。調査区西半部の第Ⅳ層上で検出した。1個の柱穴で柱痕跡も確認している。本柱列跡の方向は、東で約4度北に偏している。柱間は、約2.1m等間であり、総長は約4.2mである。柱穴は、径27cmの円形、或は長径18cm、短径11cmの楕円形を呈しており、柱は柱痕跡より径9cmである。

本柱列跡の西端はSA1177柱列跡の南延長線とほぼ一致し、東端はSB1174建物跡両側柱列の中央の柱穴を結んだ線のほぼ延長線上に位置する。これらのことから、方向等にややばらつきは認められるが、SA1177・1301柱列跡とともにSB1174建物跡に係る遺構と推定される。

遺構名	方向	柱間
SA－1175	東西 E－3°－N	(西より) 3.10m＋3.54m＝総長6.61m
SA－1176	東西 E－4°－N	(西より) 約2.1＋約2.1m＝総長約4.2m
SA－1177	南北 N－9°－W	(北より) 約2.4m＋約2.7m＝総長約5.1m
SA－1287	東西 E－5°－S	(西より) 約2.3m＋約2.4m＝総長約4.7m以上
SA－1299	東西 E－1°－N	(西より) 3.10m＋2.80m＝総長5.90m
SA－1300	南北 N－20°－W	(北より) 約2.1m＋約1.9m＋約2.5m＝総長約6.5m
SA－1301	南北 N－4°－W	(北より) 約2.2m＋約2.3m＝総長約4.5m
SA－1305	東西 E－16°－N	(西より) 約2.8m＋約3.1m＝総長約5.9m以上

表6　その他の柱列跡



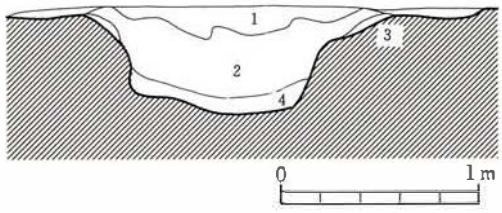
第106図　SA 1175・1299柱列跡、SD 1188・1189溝跡、SK 1206・1207土壙

C．溝　跡

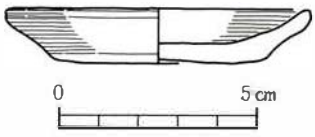
調査区全体に亘って33条検出した。年代別にみると、古墳時代のものが1条、平安時代のものが9条、中世のものが12条、その他不明のものが11条である。それらの中には、完掘せず、規模や埋土の状況を把握する段階にとどめたものもある。

(1)　SD1201溝跡

調査区南東部において、東から南へ斜めに走る溝跡である。第Ⅲ層に覆われ、第Ⅳ層から掘り込んでいる。SD1200・1202溝跡、SA1305柱列跡と重複し、それらより古い。約37mに亘って検出し、SD1200溝跡の北側についてのみ完掘した。方向は東で約34度北に偏している。規模は、上幅2.4～1.1m、下幅0.9～0.5m、深さ53cmを計る。埋土は、最下層に自然堆積層と見られるしまりのない黒色土がみられるが、その上は、地山ブロックを多量に含む黒褐色土で一度に埋められたような様相を呈している。遺物は、無釉陶器甕の体部破片1点、手づくね成形のカワラケ1点、古銭〔元祐通宝〕（1086年初鋳）1点の他、砥石や礫数点が出土している。



層位	土色	土性	備考
1	灰黄褐色（10YR 4/2）	砂質土	炭化物、白色粒を含む
2	黒褐色（10YR 3/2）	砂質土	地山ブロックを大量に含む
3	灰黄褐色（10YR 4/2）	砂質土	均質
4	黒色（10YR 2/1）	砂質土	地山ブロック含む、グライ化して軟かい。



（原寸）

番号	遺物名	層位	備考	図版	登録No.
1	カワラケ	6～2	手づくね成形	33－9	R-288
2	古銭（元豊通宝）	〃	1078年初鋳	44－26	

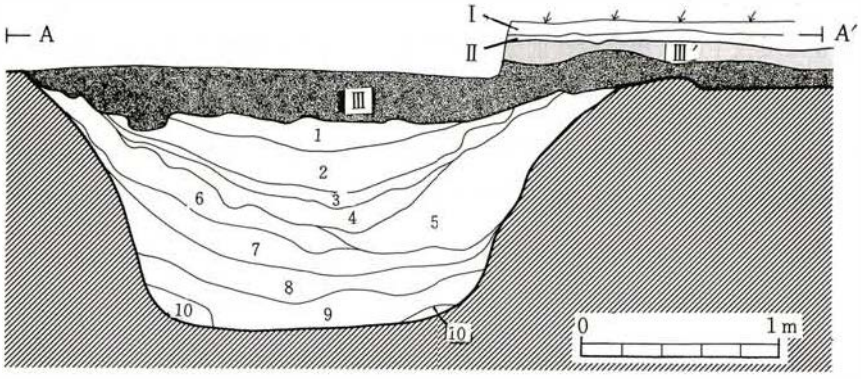
第107図　SD 1201溝跡断面図・出土遺物

(2)　SD1200溝跡

調査区南東部で検出した東西溝跡である。第Ⅲ層に覆われ、第Ⅳ層から掘り込んでいる。SD1201・1202溝跡と重複し、前者より新しいが後者より古い。調査区東壁から14.2mのびたところで止まり、先端部には東西約1.3m、南北約4.7m、深さ約10cmの低いテラスが造り出されている。本溝跡の方向は東で約16度南に偏している。断面の形状は概ね逆台形を呈し、上方へ向けて緩やかに開いている。規模は、上幅3.3～2.3m、下幅1.6～1.1m、深さ125cmを計る。埋土についてみると、6～9層は木の根、枝、細い木片等が多量に入る粘質土であり、5層は地山ブロックを主体とする厚い層で南側から入り込んでいる。この層の上には、炭化物層、腐蝕土層、炭化物を多く含む砂質土層などがレンズ状に堆積している。

なお、本溝跡は、第4次調査区で発見したSD 643溝跡と方向や位置関係から一連の遺構と

考えられる。ＳＤ643溝跡は東端が判明しているところから、全長約44mの溝跡と見ることができる。



層位	土色	土性	備考	層位	土色	土性	備考
I	にぶい黄褐色(10YR 4/3)	砂質土		4	黒 (10YR 1.7/1)		炭化物層、しまり緩やか
II	にぶい黄褐色(10YR 4/3)	砂質土	I層よりやや明るい	5	黄褐色 (2.5Y 5/3)	砂質土	地山ブロックが主体
III′	灰褐色 (10YR 4/3)	砂質土	にぶい黄褐色(10YR 4/3) ブロック	6	黒褐色 (10YR 3/1)	粘土	ゴミ(植物遺体・木片)の入る
III	灰褐色 (10YR 4/3)	砂質土		7	黒 (10YR 3/1)	粘土	多量のゴミ(植物遺体・木片)などを
1	黒 (10YR 1.7/1)		灰化物層	8	オリーブ黒(5Y 3/1)	粘土	灰オリーブ(7.5Y 5/3)粘土ブロックを含
2	黒 (10YR 1.7/1)	砂質土	灰化物混入層 黄褐色(2.5Y 5/3)ブロック	9	オリーブ黒 (5Y 3/1)	粘土	灰白色(10Y 7/1)粘土ブロックを含
3	黒褐色 (10YR 3/3)		細かい植物片層	10	暗オリーブ灰(2.5GY 4/1)	粘土	砂粒を含む

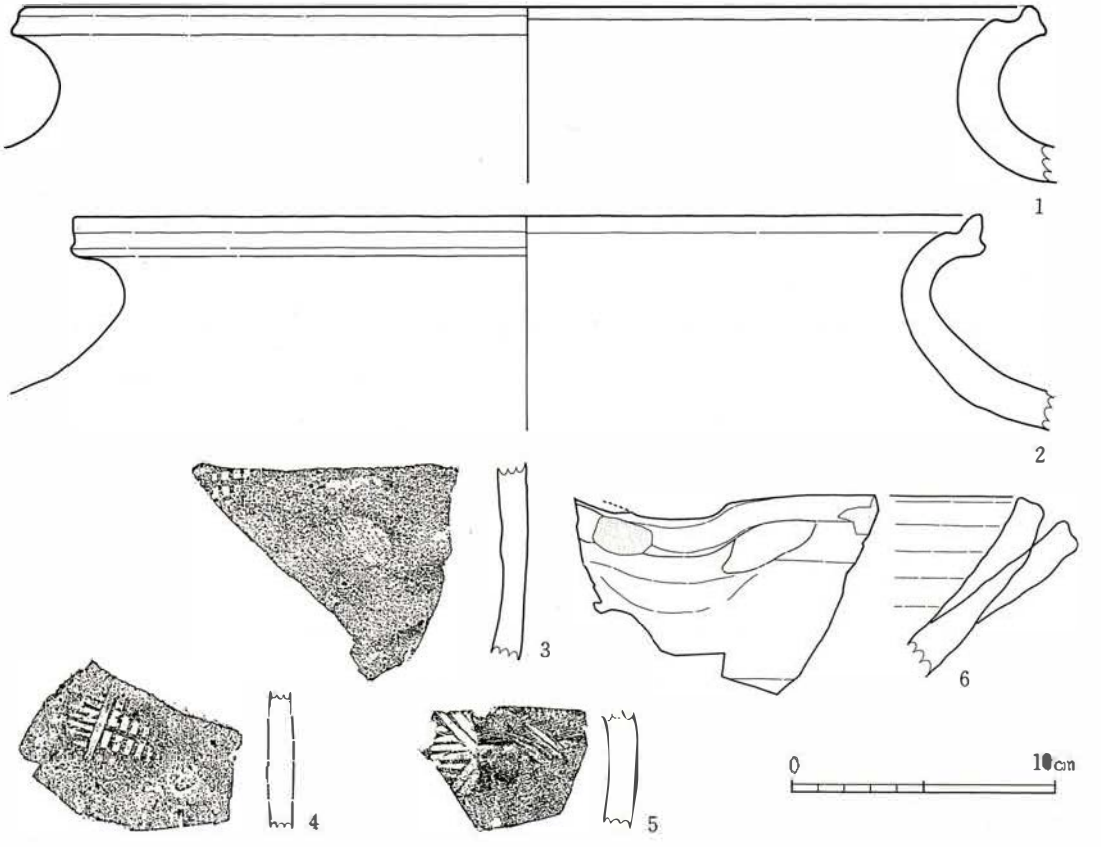
第108図 ＳＤ1200溝跡断面図

遺物は、無釉陶器甕・擂鉢、白磁合子・椀、青磁椀、カワラケ、礫、砥石、鉄滓、下駄、板草履、将棋の駒、箸、漆器椀・皿、曲物、糸車、柄杓、角材、杭などが出土している。それらの内訳については表７の通りである。

第109図１～５は無釉陶器甕である。１は口縁端部の内側に太い沈線をめぐらし、先端をやや角張らせることによって幅の狭い口縁帯を形成している。内外ともヨコナデ調整し、色調は灰色を呈している。胎土は褐灰色で黒色粒や白色細粒を多く含んでいる。１層出土のものと５層出土のものが接合しており、前者は断面の一部に研磨痕が観察される。後者は二次的に火を受けて黒変した部分が観察される。２も口縁端部の内側に太い沈線をめぐらし、先端は上方に立ち上がっている。黒褐色を呈し、外面には灰オリーブ色の自然釉がかかっている。胎土は褐灰色を呈し、黒色粒と多量の白色細粒を含んでいる。３～５は押印の施された体部破片資料である。１、２とも常滑窯の製品に類例が見られる。第109図５、第110図23～26は無釉陶器擂鉢である。第109図５は口縁部のやや下が肥厚するという特徴が地元窯の製品に類似している。片口部は矩形を呈し、しっかりと造り出されている。第110図23は体部外面に成形時の凹凸を残し、口縁部と内面をヨコナデ調整している。口縁端部には浅い沈線がめぐっている。24は口縁部が肥厚し、端部を丸く仕上げている。23、24とも口縁部の形態が常滑窯製品に類似している。26は高台が付けられ、堅く焼き締められて灰色を出している点などから常滑窯など東海地方の製品と推定できる。25も灰色に堅く焼き締められており、内外とも丁寧にヨコナデ調整されている。胎土には砂粒などあまり含まず均質であることから渥美窯の製品と推定される。口縁部

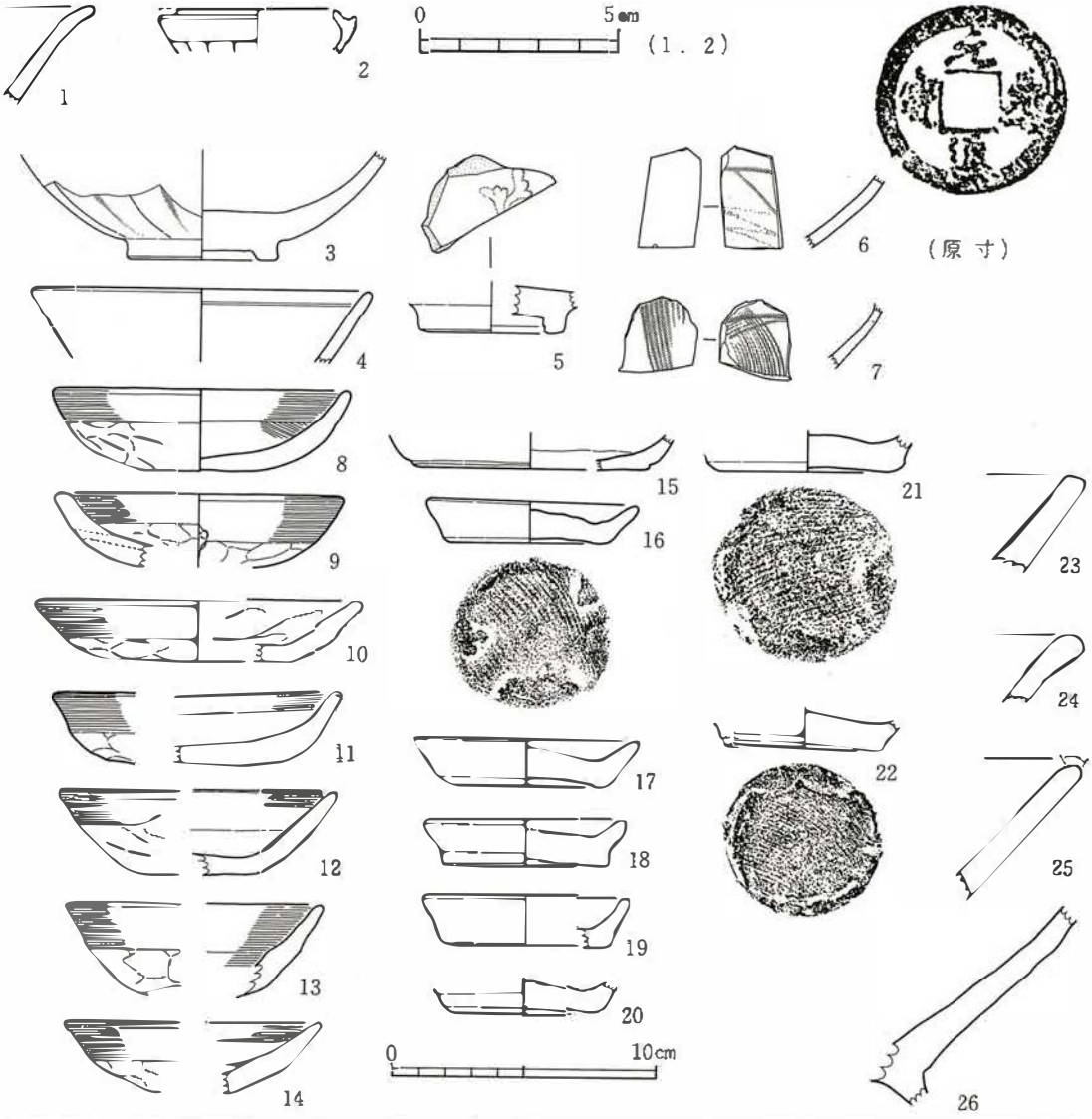
に研磨痕が観察される。常滑窯或は東海地方の製品と推定したものは、赤羽氏の編年によると、第109図1の甕は第Ⅱ段階後半（13世紀前半）、2の甕は第Ⅲ段階前半（13世紀後半）、第110図24・26は第Ⅱ段階後半から第Ⅲ段階前半（13世紀）のものに類似している。第110図23については赤羽氏より13世紀後半から14世紀前半頃のものであるとのご教示を得た。

第110図8～14は手づくね成形のカワラケである。小片が多く器体の歪みも著しいが良好な資料が乏しいため敢えて図化した。図化できなかったが、8～14より大型で底径約10cmを計るものも出土している。8～14は手づくね成形後、口縁部のみをヨコナデ調整したものが多く、体部下半には成形時の指の圧痕がそのまま残っている。しかし、内面の調整については、下半に斜めのナデが施されているもの（8）や比較的下方までヨコナデが及んでいるもの（13）もあるが、指で強く押しならした痕跡をそのままとどめているもの（10）もある。器形についてもあまりまとまりは見られない。胎土については、砂が多く混入しているという共通点が指摘で



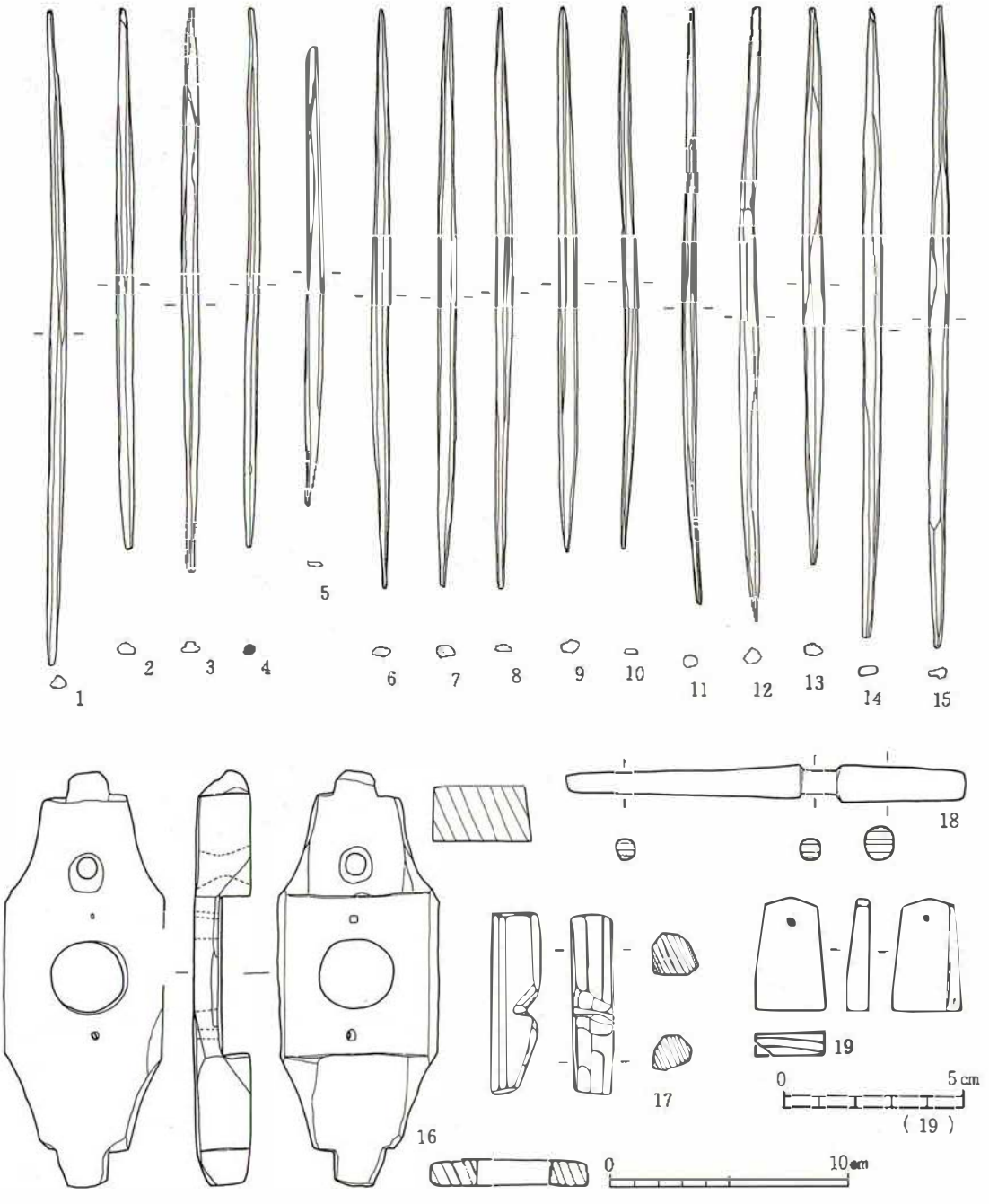
番号	遺物名	層位	外面調整	内面調整	備考	図版	登録No.
1	無釉陶器 甕	ℓ～5	ヨコナデ	ヨコナデ	割れ口の一部を研磨	23－4	R－50
2	〃 〃	ℓ～3	〃	〃	〃	23－6	R－49
3	〃 〃	ℓ～5	ヘラナデ	ヘラナデ	押印あり		R－385
4	〃 〃	ℓ～5	〃	ヨコナデ	〃		R－58
5	〃 〃	ℓ～1	〃	〃	〃		R－57
6	〃 擂鉢	ℓ～1	ヨコナデ	〃	片口あり	27－3	R－51

第109図　ＳＤ1200溝跡出土遺物（1）



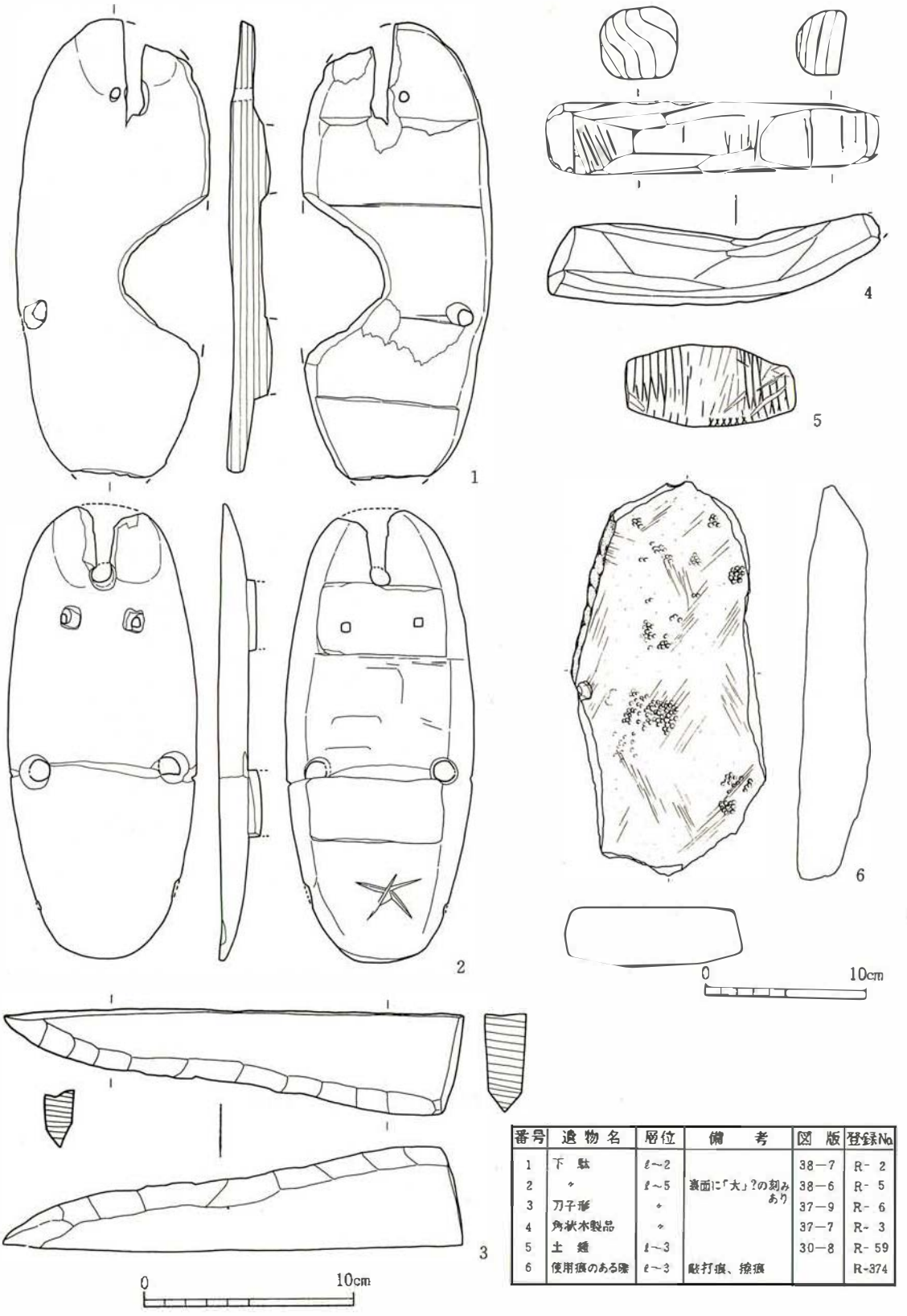
番号	遺物名	層位	外面調整	内面調整	備考	図版	登録No.
1	白磁 椀	ℓ～4			口禿げ		R- 46
2	〃 合子	ℓ～2	体部下半無釉			18—17	R-48
3	青磁 椀	ℓ～1				20—1	R- 41
4	〃 〃	ℓ～5				20—3	R-42
5	〃 〃	ℓ～1				20—11	R- 43
6	〃 〃	ℓ～4	櫛描き文様	櫛描き文様		19—6	R- 44
7	〃 〃	ℓ～1	〃	〃		19—5	R- 45
8	カワラケ	ℓ～2	ヨコナデ	ヨコナデ	手づくね成形	33—5	R- 34
9	〃	〃	〃	〃	〃		R- 36
10	〃	ℓ～1	〃	ナデツケ	〃	33—3	R- 37
11	〃	ℓ～3	〃	ヨコナデ	〃	33—2	R- 40
12	〃	ℓ～5	〃	〃	〃	33—6	R- 35
13	〃	ℓ～3	〃	〃	〃	33—7	R- 38
14	〃	ℓ～2	〃	〃	〃	33—4	R- 39
15	〃	ℓ～1	ロクロナデ	ロクロナデ			R- 32
16	〃	ℓ～3	〃	〃	静止糸切り	33—1	R-270
17	〃	ℓ～2	〃	〃	〃		R- 25
18	〃	〃	〃	〃	〃		R- 29
19	〃	〃	〃	〃			R-31
20	〃	ℓ～3	〃	〃	静止糸切り		R- 28
21	〃	ℓ～2	〃	〃	〃		R-26
22	〃	ℓ～1	〃	〃	〃		R- 27
23	無釉陶器 擂鉢	ℓ～3	ヨコナデ	ヨコナデ			R-199
24	〃 〃	ℓ～2	〃	〃			R- 55
25	〃 〃	ℓ～4	〃	〃	口縁部を研磨		R- 53
26	〃 〃	ℓ～5	ヨコナデ→ヘラケズリ	〃			R- 52
27	古銭（元豊通宝）	ℓ～1			1078年初鋳	44—19	

第110図　SD 1200溝跡出土遺物（2）



番号	遺物名	層位	備考	図版	登録No.
1 ～15	箸状木製品	ℓ ～ 3		40－1	R－20
16	糸車	Z		40－8	R－11
17	えぐりのある棒	ℓ ～ 3			R－81
18	ペン状木製品	ℓ ～ 5	全体を平滑に加工	40－11	R－4
19	将棋の駒	ℓ ～ 3	両面に墨痕、種類不明	37－2	R－1

第111図 ｜ＳＤ1200溝跡出土遺物 (3)



番号	遺物名	層位	備考	図版	登録No.
1	下駄	ℓ～2		38－7	R－ 2
2	〃	ℓ～5	裏面に「大」?の刻みあり	38－6	R－ 5
3	刀子形	〃		37－9	R－ 6
4	角状木製品	〃		37－7	R－ 3
5	土錘	ℓ～3		30－8	R－ 59
6	使用痕のある礫	ℓ～3	敲打痕、擦痕		R-374

第112図　ＳＤ1200溝跡出土遺物（4）

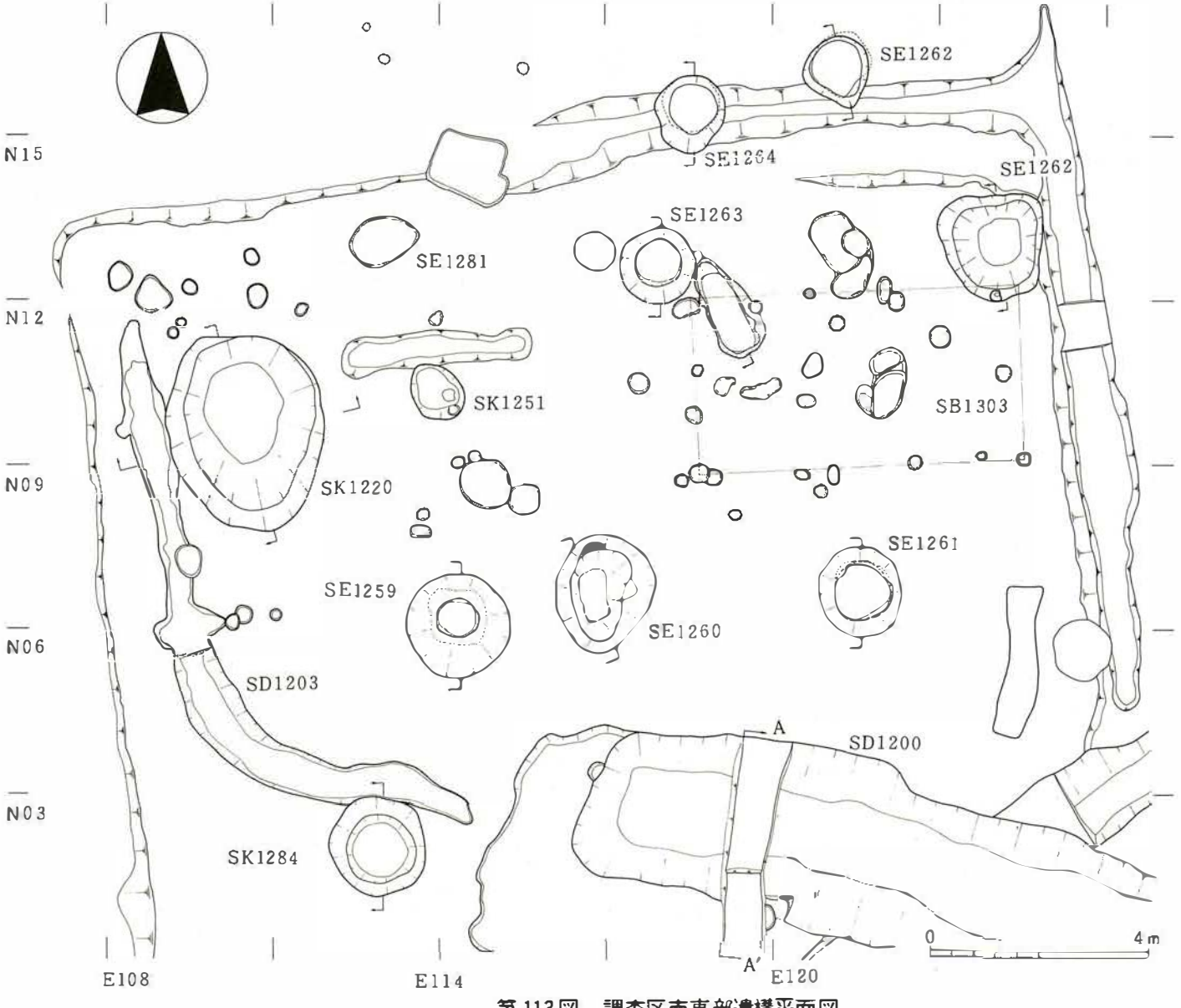
きる。9は体部に小孔が穿たれている。16〜22はロクロ調整のカワラケである。16〜18は器高が低く内底中央部と口縁部との比較差はほとんどない。20〜22もそれらと同様の形態を呈するものである可能性が大きい。内外ともロクロ調整された後、再調整は一切施されない。ロクロからの切り離しはすべて静止糸切りである。

第111図1〜15は箸状木製品である。破損しているものまで含めると211点出土している。全体に端部は尖り気味に削り出している。

	無釉陶器			白磁	青磁	施釉陶器	カワラケ		礫	木製品	その他
ℓ〜1	甕 口(1) 甕 体(10)	擂鉢A 口(1) 擂鉢B 口(1)			椀 体(1) 椀 底(2)		ロクロ 底(3) 口(1)	手づくね 口(6) 底(2)	礫 (9)		鉄滓 (1) 砥石 (4) 楕形滓(1) 碁石 (1) 粘板岩(1) 土師器(1)
ℓ〜2	甕 体(4)	擂鉢 口(1)		合子 体(1)			底(6) 口(1)	口(5) 体(1) 底(2)	円 (1) 礫 (16)	下駄 (1) 加工痕のある柱材 (1)	
ℓ〜3	甕 体(2) 甕 口(1)	擂鉢 口(1)		椀 体(1)			底(1) 全(1) 不明 体(1) 口(1)	底(2) 口(1)	礫 (6) 円 (4)	将棋の駒 (1) 板草履 (4) 箸状木製品 (211) 柄杓の柄 (1) 加工痕のある竹 (1) 竹製の把手 (1) (1) 漆器椀 (1) えぐりのある棒 (1) ヘラ状の木製品 (1) 加工痕のある柱材 (2) ノコギリ痕のある角材(2) 杭 (1) 曲物側板 (1) 漆器皿 (1) 両端加工の丸棒 (1) 不明 (1)	
ℓ〜4	甕 体(1)	擂鉢 口(1)	その他	椀 口(1)	椀 体(1)		ロクロ	手づくね 底(1)	礫 (2)		鉄滓 (1) 土師器(1)
ℓ〜5	甕 体(2) 甕 口(1)	擂鉢 底(1)			椀 口(1)			口(2)	礫 (4)	角状木製品 (1) ペン状木製品 (1)	
Z										糸車 (1)	

擂鉢A：体部下半に横ケズリのあるもの　　円　：円礫
擂鉢B：体部下半に横ケズリのないもの　　（ ）内は点数を示す

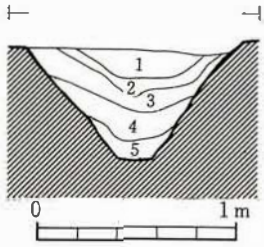
表7　SD1200溝跡層位別出土遺物一覧表



第113図　調査区南東部遺構平面図

(3)　ＳＤ1202溝跡

調査区南半部において検出した東西溝跡である。第Ⅲ層に覆われ、第Ⅳ層上から掘り込んでいる。ＳＤ1201・1200溝跡と重複し、それらより新しい。42.6mに亘って検出しており、それぞれ調査区外へとのびている。方向は、概ね東で約５度北に偏しているが、調査区東壁付近では南側へ緩やかに湾曲している。規模は、上幅1.5～0.9ｍ、下幅0.7～0.4ｍ、深さ0.6ｍを計る。底面はほぼ平坦であるが、調査区東壁から西側へ約７ｍ離れた地点では、ブリッジ状に掘り残した部分がある。幅37cm、溝底面との比高差は東側で37cm、西側で41cmを計る。埋土についてみると、５層は壁の崩壊土と見られ、３・４層は砂質土から成る薄層が顕著であることから自然堆積層と見られる。



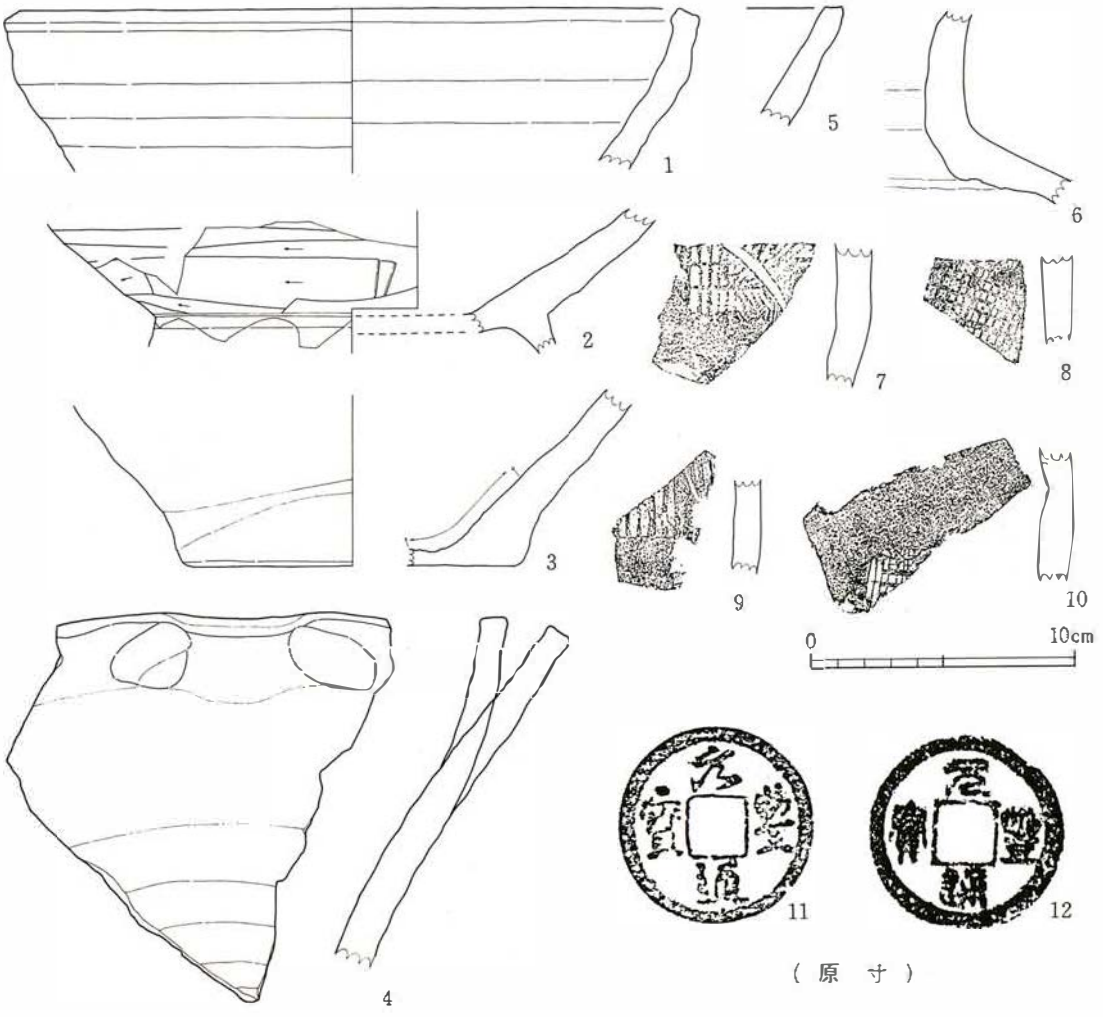
層位	土　色	土性	備　考
1	黒褐色(10YR3/1)	砂質土	地山土粒若干含む、しまりあり
2	〃（〃）	〃	〃　にぶい黄褐色砂質土を含む しまりややあり
3	〃（〃）	〃	〃　〃にぶい黄褐色砂質土を多量に含み 黄橙色黄橙色、細砂が層状に入る
4	黒　色(10YR2/1)	砂質土	地山粒、ブロックを含み、にぶい黄褐色砂を粗く層状に含む
5	黒褐色(10YR3/1)	〃	地山ブロック、砂を多量に含む

第114図　ＳＤ1202溝跡断面図

遺物は、無釉陶器壺・甕・擂鉢、施釉陶器広口壺蓋、青磁椀、カワラケ、礫、羽口、砥石、漆器椀、板草履、柱材などが出土している。それらの内訳については表８に示した。無釉陶器擂鉢は、すべて内面に筋目のないものであり、口縁部のやや下方が肥厚するという特徴から地元窯産と推定されるもの（第115図１・４）と、体部下半を横方向に手持ヘラケズリし、硬く焼き締められて灰色を呈する東海地方産と推定されるもの（第115図２）などがある。第115図５は外面体部に、成形時の凹凸をそのまま残し、口縁部と体部内面を丁寧にヨコナデ調整したものである。胎土は灰白色で白色の細粒を含み、外面は茶褐色を呈している。赤羽一郎氏によれば、常滑窯製品であり、13世紀後半から14世紀前半頃のものであるとのご教示を得た。

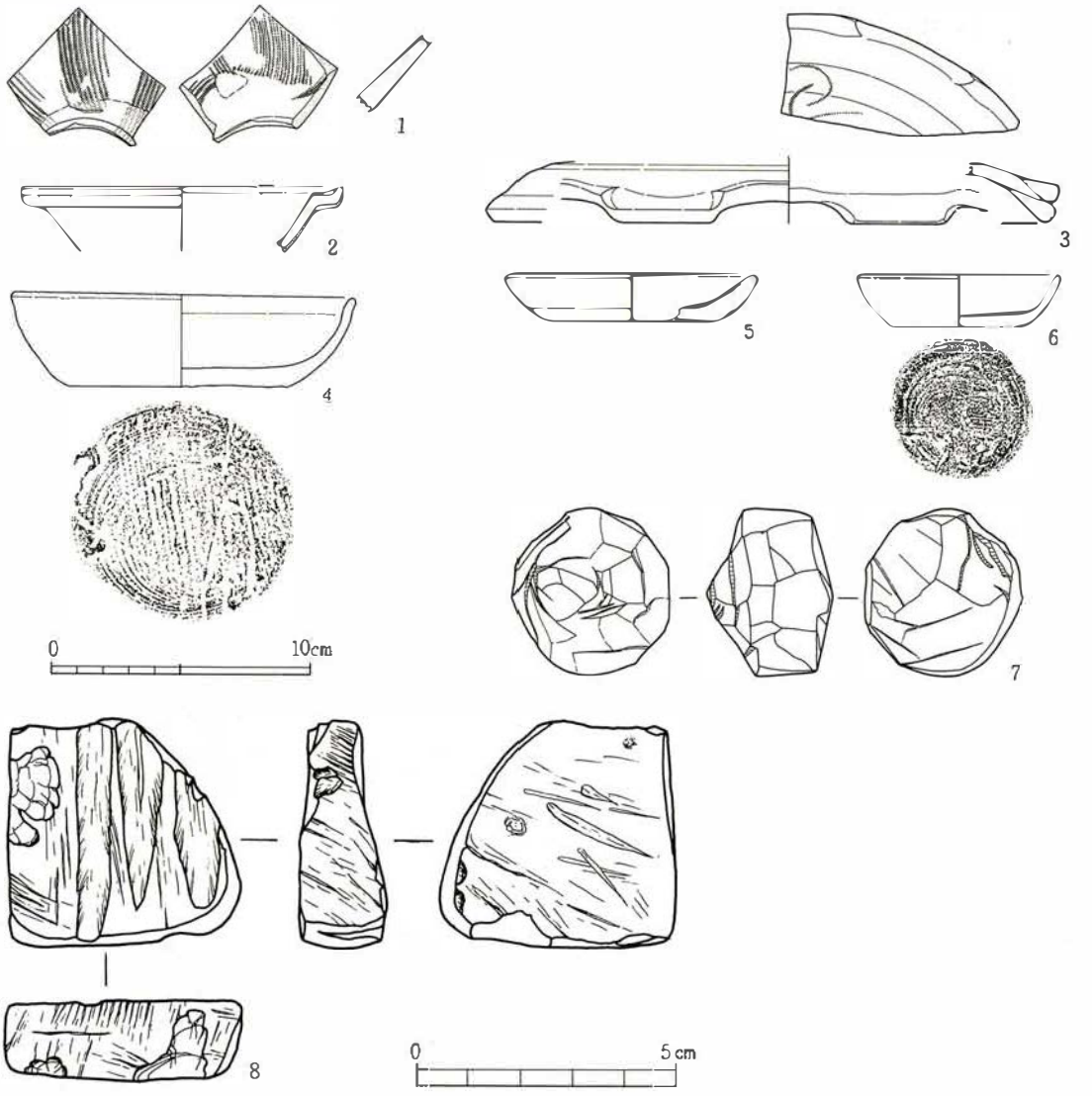
第115図６は無釉陶器壺の頸部から肩部にかけての破片資料である。頸部は丁寧にヨコナデ調整されている。胎土は白色の微粒をわずかに含み、暗赤褐色を呈している。割れ口は凹凸があるものの、個々の面には滑らかな部分が見られる。硬く焼き締められており、外面は黒褐色を呈している。肩部にはオリーブ色の自然釉がかかっている。特徴的な胎土や外面の色調などから石巻市の水沼窯製品と考えられる。第116図４～６はロクロ調整されたカワラケである。４は体部上半部がほぼ直立し、器壁も薄く仕上げられている。ロクロからの切り離しは回転糸切りである。ロクロ調整後、見込みに一定方向のナデ調整が施されている。外底には、ロクロから切り離した後についた板状圧痕が観察される。第116図６は、法量が異なるものの器形や調整手法が４と同一である。第116図３は施釉陶器広口壺の蓋である。口縁部は波状に折り曲げられ、体部には文様が陰刻されている。カエリは確認できない。釉薬は鉄釉である。第４次調査ＳＫ661土壙出土の蓋（第48図１）とは接合しないが、釉調や胎土、文様等が類似し、同一個体である可能性が大きい。第117図１は、人間或は猿かと思われるものの顔を墨で描い

た扁平な円礫である。裏面に擦痕が観察できる。第117図1、第118図1～3は使用痕のある礫である。擦痕、敲打痕、焦痕などがそれぞれ観察され、縄文時代の磨石、敲石と呼ばれているものと同様の内容をもつものである。



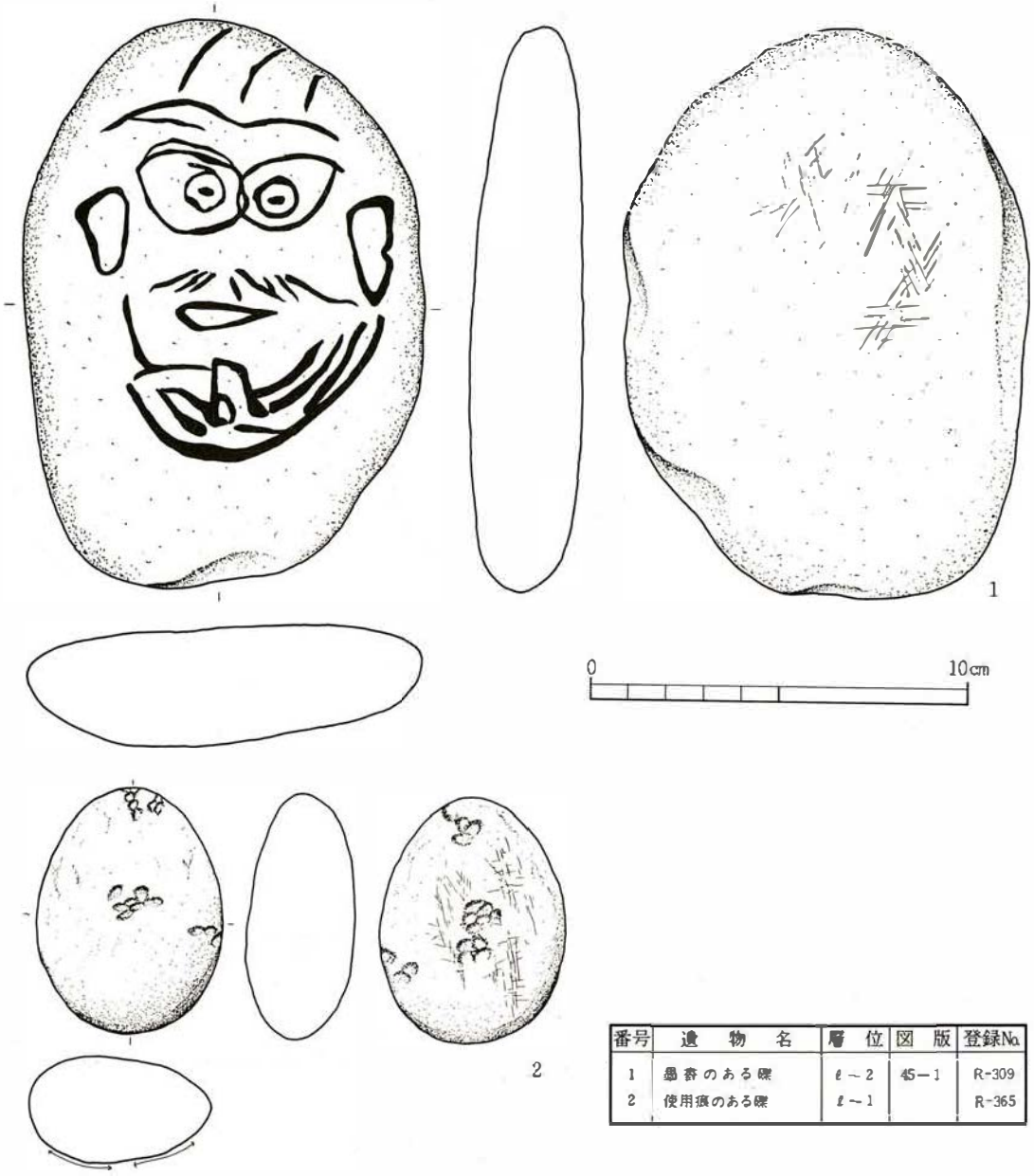
番号	遺物名	層位	外面調整	内面調整	備考	図版	登録No.
1	無釉陶器　擂鉢	ℓ～1	ヨコナデ	ヨコナデ		26—15	R-162
2	〃　〃	ℓ～2	ヨコナデ、ヘラケズリ	〃		26—6	R-134
3	〃　〃	ℓ～1	ヨコナデ	〃		27—18	R-195
4	〃　〃	ℓ～2	〃	〃		26—9	R-163
5	〃　〃	ℓ～1	〃	〃			R-198
6	〃　壺	ℓ～2	〃	〃			R-123
7	〃　甕	ℓ～1		〃	押印あり		R-105
8	〃　〃	〃		〃	〃		R-118
9	〃　〃	ℓ～3		〃	〃		R-115
10	〃　〃	ℓ～1		〃	〃		R- 75
11	古銭（元豊通宝）	〃			1078年初鋳	44—18	
12	〃（　〃　）	〃			〃	44—21	

第115図　ＳＤ1202溝跡出土遺物（1）



番号	遺物名	層位	外面調整	内面調整	備考	図版	登録No.
1	青磁 椀	ℓ～1	櫛描き文様	櫛描き文様		19－4	R-204
2	〃 鉢	〃				20－2	R-236
3	施釉陶器 壺	〃				22－4	R-293
4	カワラケ	〃	ロクロナデ	ロクロナデ、見込みヨコナデ	回転糸切り、板状圧痕	31－6	R-265
5	〃	ℓ～2	〃	ロクロナデ			R-284
6	〃	ℓ～3	〃	〃	回転糸切り、板状圧痕	31－5	R-269
7	不明木製品	ℓ～1			全面を面取り	41－17	R- 97
8	砥石	〃				46－2	R-331

第116図 ＳＤ1202溝跡出土遺物 (2)



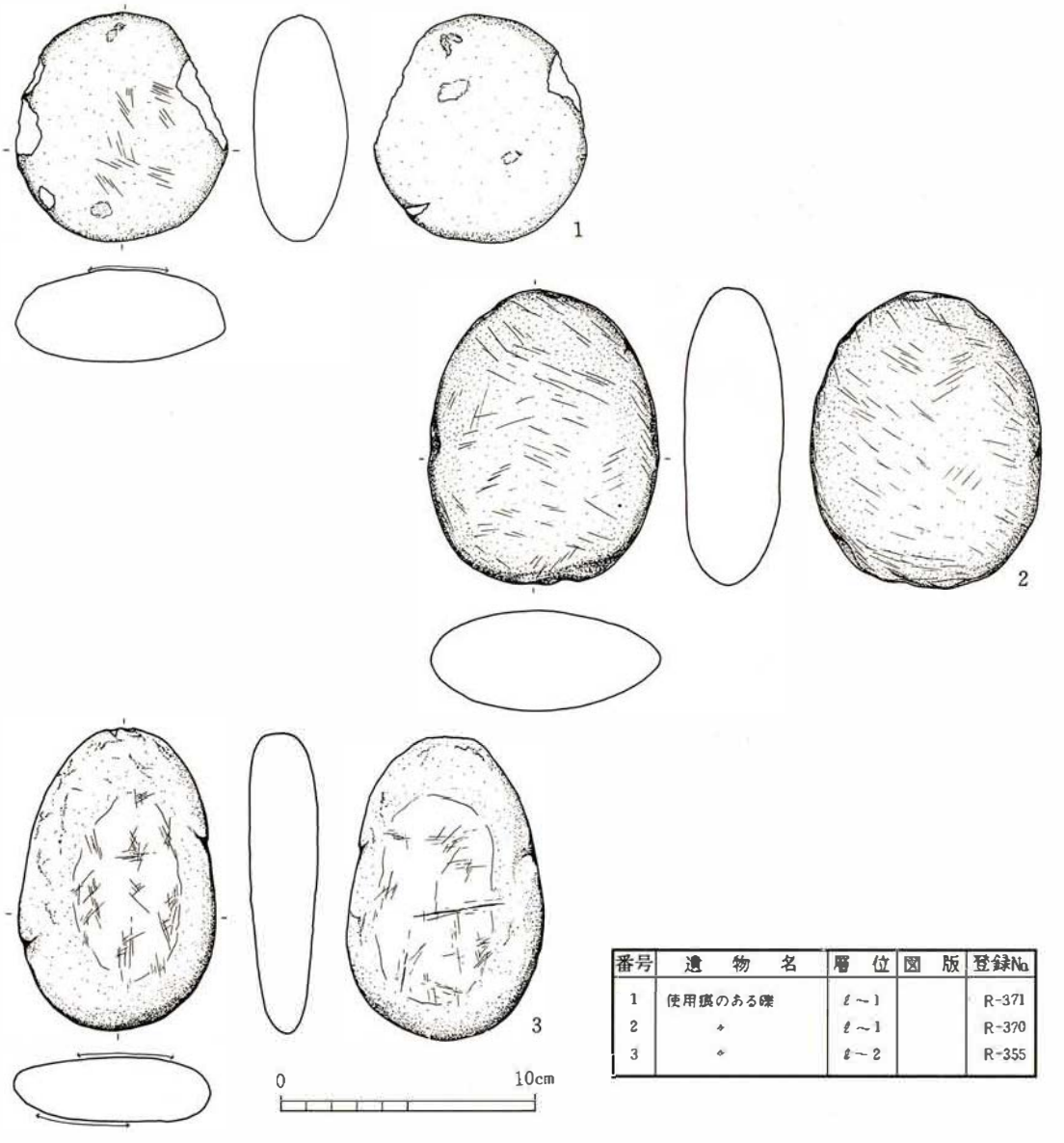
番号	遺物名	層位	図版	登録No.
1	墨書のある礫	ℓ－2	45－1	R-309
2	使用痕のある礫	ℓ－1		R-365

第117図　ＳＤ1202溝跡出土遺物（3）

	無釉陶器			白磁	青磁	施釉陶器	カワラケ		礫	木製品	その他
							ロクロ	手づくね			
ℓ－1	甕 体(9) 甕 底(1)	擂鉢B 底(1) 擂鉢B 口(1)	擂鉢その他 底(1) 口(1) 体(1)		椀 口(1) 椀 体(2)	鉄釉広口壺(1)	皿(1) 底(4)	口(1)	円 (22) 敲 (1) 磨 (2) その他 (9)	斑紋状 (1)	羽口 (1) 砥石 (3)
ℓ－2	甕 体(2) 壺 体(1)	擂鉢A 底(1) 擂鉢B 口(2) 擂鉢B B底(2) 擂鉢B 体(1)			椀 体(1)		底(3) 口(2)		粘板岩 (1) 磨 (1) 礫 (6) 墨書 (1)	板状履 (5)	
ℓ－3	甕 体(7)	擂鉢B 底(1)					底(3)		円 (9)	ヘギ板 (1) 墨書のある板材 (1) 柱 (1) 漆器 (1)	砥石 (2)

擂鉢A、横ケズリのあるもの　　円　円礫
擂鉢B、横ケズリのないもの　　敲　敲打痕あり
　　磨　磨耗痕あり

表8　ＳＤ1202溝跡層位別出土遺物一覧表

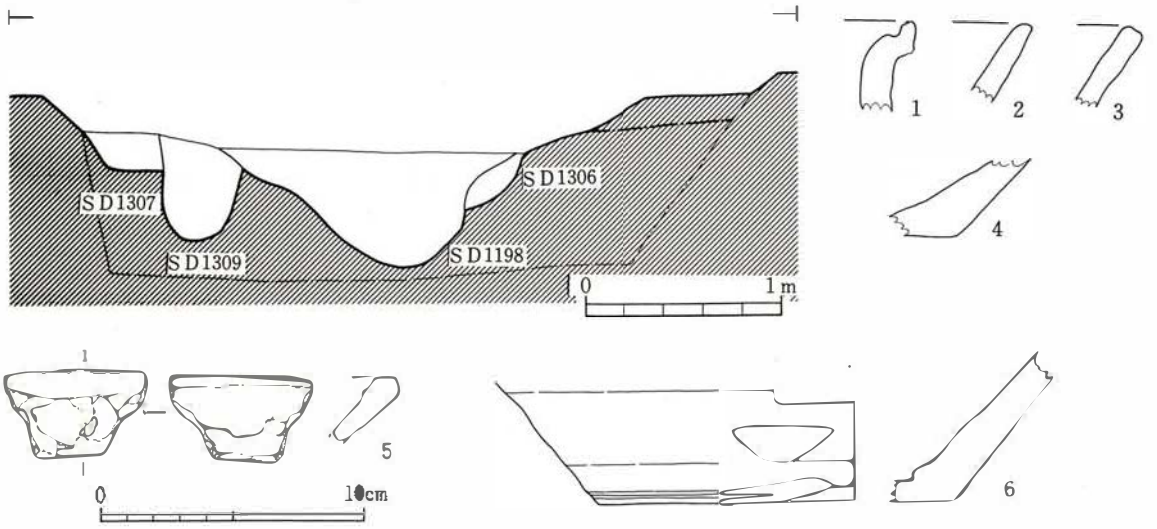


番号	遺物名	層位	図版	登録No.
1	使用痕のある礫	ℓ～1		R-371
2	〃	ℓ～1		R-370
3	〃	ℓ～2		R-355

第118図　ＳＤ1202溝跡出土遺物 (4)

(4)　ＳＤ1198・1199・1204溝跡

調査区北東隅の第Ⅳ層上で検出した溝跡である。ＳＤ1198溝跡は、調査区北壁の東端部から東壁へ向かって大きく蛇行しながらのびている。本溝跡の東壁にはＳＤ1199・1204東西溝跡が取り付いている。ＳＤ1198溝跡はほぼ同位置でＳＤ1306・1307・1309溝跡と重複しており、本溝跡が最も新しく規模も大きい。また、ＳＫ1215、1278土壙、ＳＤ1178・1179・1185・1195・1304溝跡とも重複しており、ＳＫ1215土壙より古いが他のものより新しい。本溝跡については完掘せず、平面的な調査にとどめた。規模は、上幅2.7～1.1ｍ、下幅0.3ｍ、深さ0.9ｍを計る。本溝跡は、位置関係や方向、同位置で他の溝跡と重複していることなどを考え併せると、



番号	遺物名	層位	外面調整	内面調整	備考	図版	登録No
1	無釉陶器 甕	SD1198・ℓ—1	ヨコナデ	ヨコナデ			R-120
2	〃 擂鉢	〃 〃	〃	〃			R-148
3	〃 〃	〃 〃	〃	〃			R-171
4	〃 〃	〃 〃	〃	〃			R-186
5	鉄鍋	〃 〃				43—6	
6	無釉陶器 擂鉢	SD1199 〃	ヨコナデ	ヨコナデ	体部二か所研磨	27—16	R-193

第119図　SD 1198・1199溝跡出土遺物

第4次調査区で発見したSD 638・ 637溝跡などと一連の遺構である可能性が高い。

遺物は無釉陶器甕・擂鉢、鉄鍋、砥石、礫、加工痕のある泥岩などが出土している。また、最上層からは近世以降の染付椀や陶器椀・香炉などが出土している。第119図5は鉄鍋の口縁部破片である。

本溝跡に付属するSD1199、1204溝跡については部分的な検出にとどまり、ほぼ同位置で重複するSD1306・1307・1309溝跡については、最も新しく規模の大きな本溝跡によって大きく破壊を受けているため詳細については不明である。知り得た部分についてのみ表9に示す。

遺構名	上幅	深さ	遺構名	上幅	深さ
SD1199	1.80～0.82m	0.14m	SD1307	0.60m以上	0.38m
SD1204	0.40～0.28m	——	SD1309	0.42m	0.74m
SD1306	3.20m	0.60m			

表9　SD 1199・1204・1306・1307・1309溝跡

(5)　SD1304溝跡

調査区北東隅の第Ⅳ層上で検出した南北溝跡である。SX1290・1289道路跡及びSD1199溝跡と重複しており、前者より新しく後者より古い。13mに亘って検出し、ほぼ完掘した。方向は北で西へやや湾曲している。規模は、上幅1.5～1.1m、下幅0.9m、深さ約0.2mを計る。断面の形態は逆台形を呈し、底面は平坦であるが一段深くなっている部分もある。本溝跡は、第Ⅲ層との関係は明らかでないが、位置関係及び方向などから第4次調査区で発見したSD631

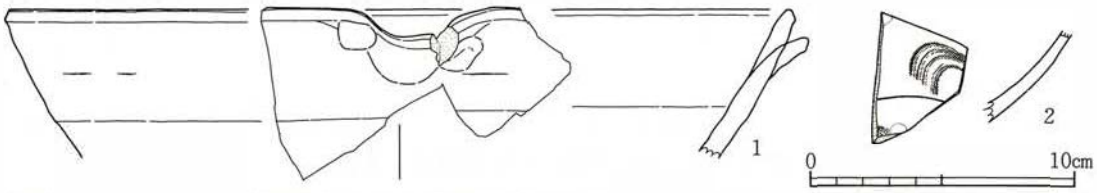
溝跡と一連の遺構であると考えられる。

遺物は無釉陶器甕の破片と古代の土器数点が出土している。

(6) ＳＤ1203溝跡

調査区南半部で検出したＬ字形に屈曲する溝跡である。第Ⅲ層におおわれ、第Ⅳ層上から掘り込んでいる。ＳＫ1220土壙、ＳＥ1284井戸跡と重複し、それらより古い。規模は上幅1.3～0.2ｍ、下幅0.7～0.3ｍ、深さ14cmを計る。埋土は黒褐色砂質土である。

遺物は、無釉陶器甕・擂鉢、白磁椀、カワラケなどが出土している。第120図１は無釉陶器擂鉢である。丁寧にヨコナデ調整され、口縁部はシャープに仕上げられている。胎土及び表面の色調は灰色を呈しており、東海地方の製品と考えられる。赤羽一郎氏の編年によれば、第Ⅱ段階前半（12世紀後半）のものに類似している。カワラケは小片であるがロクロ調整されたものである。



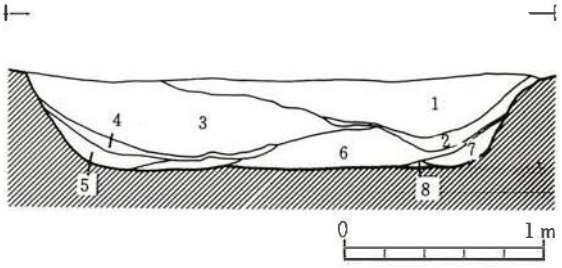
番号	遺物名	層位	外面調整	内面調整	備考	図版	登録No.
1	無釉陶器　擂鉢	ℓ～1	ヨコナデ	ヨコナデ		25－11	R-136
2	白磁　椀	ℓ～1	釉（下端部のぞく）	釉（全面）	内面に櫛描き文様	18－7	R-237

第120図　ＳＤ1203溝跡出土遺物

(7) ＳＤ1188溝跡

調査区西端部の第Ⅳ層上で検出した東西溝跡である。調査区西壁から約14ｍのところで止まっている。ＳＡ1299柱列跡、ＳＫ1206土壙、ＳＤ1179溝跡と重複し、それらより新しい。方向は東で約10度北に偏している。規模は、上幅2.8～2.2ｍ、下幅2.2～1.5ｍ、深さ0.5ｍを計る。埋土についてみると、地山ブロックを多く含む厚い層と、薄い自然堆積層とが交互に見られ、何回かに分けて埋められたような状況を呈している。

遺物は、白磁梅瓶（図版18－14）や古銭〔景徳元宝〕（1004～1007年鋳造）な



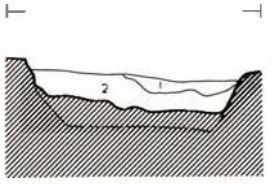
層位	土色	土性	備考
1	黒褐色　(10YR2/2)	砂質土	白色粒を多量に含み地山ブロックを含む。
2	灰黄褐色　(10YR4/2)	〃	軟かくしまりなし、地山粒を少し含む、層状堆積
3	にぶい黄色　(2.5Y6/4)	〃	地山ブロックを多く含む
4	灰黄褐色　(10YR4/2)	〃	軟かくしまりなし、地山粒を少し含む、層状堆積
5	にぶい黄橙色　(10YR6/3)	〃	灰黄褐色土が斑状に堆積、下部は地山ブロックの層
6	にぶい黄色　(2.5Y6/4)	〃	細かい地山ブロック主体、下部はグライ化
7	オリーブ黒色　(5Y3/1)	〃	層状堆積、明るめの層をしま状に含む
8	暗オリーブ灰色　(5GY4/1)	〃	

第121図　ＳＤ1188溝跡断面図及び出土遺物

どが出土している。

(8) SD1184溝跡

調査区北半部で検出した東西溝跡である。SD1185・1187溝跡と重複し、それらより新しい。規模は、全長17.7m、上幅1.3m、深さ0.3mを計る。方向は、東で約10度北に偏している。底面の状況は、南側が一段深くなっている。遺物は出土していない。



番号	土色	土性	備考
1	黒褐色 (10 YR 3/2)	砂質土	
2	黒褐色 (10 YR 3/2)	砂質土	

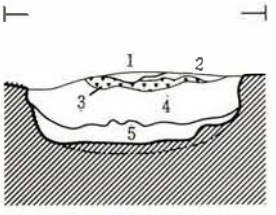
0 1m

第122図 SD1184溝跡断面図

(9) SD1178・1196溝跡

SD1178は、調査区北端部の第Ⅳ層上で検出した東西溝跡である。西端部及び中央部ではそれぞれほぼ直線的にのびているが、東端部ではやや北側へ弯曲し、調査区東壁から西へ約5mの地点でSD1196南北溝跡とほぼ直角に連結している。SD1185・1186・1198溝跡、SK1243土壙と重複しており、SD1185・1186溝跡より新しいが他のものより古い。本溝跡はほぼ同位置で3時期の重複が認められる（古い順にA→B→C）。但し、C期については、E120～132間では明瞭に確認できたが、E120以西については埋土が痕跡的にしか残っておらず、不明瞭である。方向は、B期でみると、西端部が東で約3度北に、中央部が東で約9度北に偏している。規模は、A期のものが上幅1.1m、深さ0.4m、B期のものが上幅1.8～1.1m、深さ0.3m、C期のものが上幅1.1～0.6m、深さ0.3mを計る。埋土は、A～C期とも自然に堆積した様相を呈しており、B期の埋土上層には10世紀前半に降下したと言われている灰白色火山灰が約10cmの厚さで堆積している。遺物は、B期の埋土から土師器杯・甕、須恵器甕、C期の埋土より赤焼き土器杯が出土している（第124図）。

SD1196溝跡は、平面的な調査にとどめ、一部断ち割りを行なった。規模は、上幅0.4～0.3m、深さ14～9cmを計る。SD1178溝跡と共通する変遷は確認できなかった。



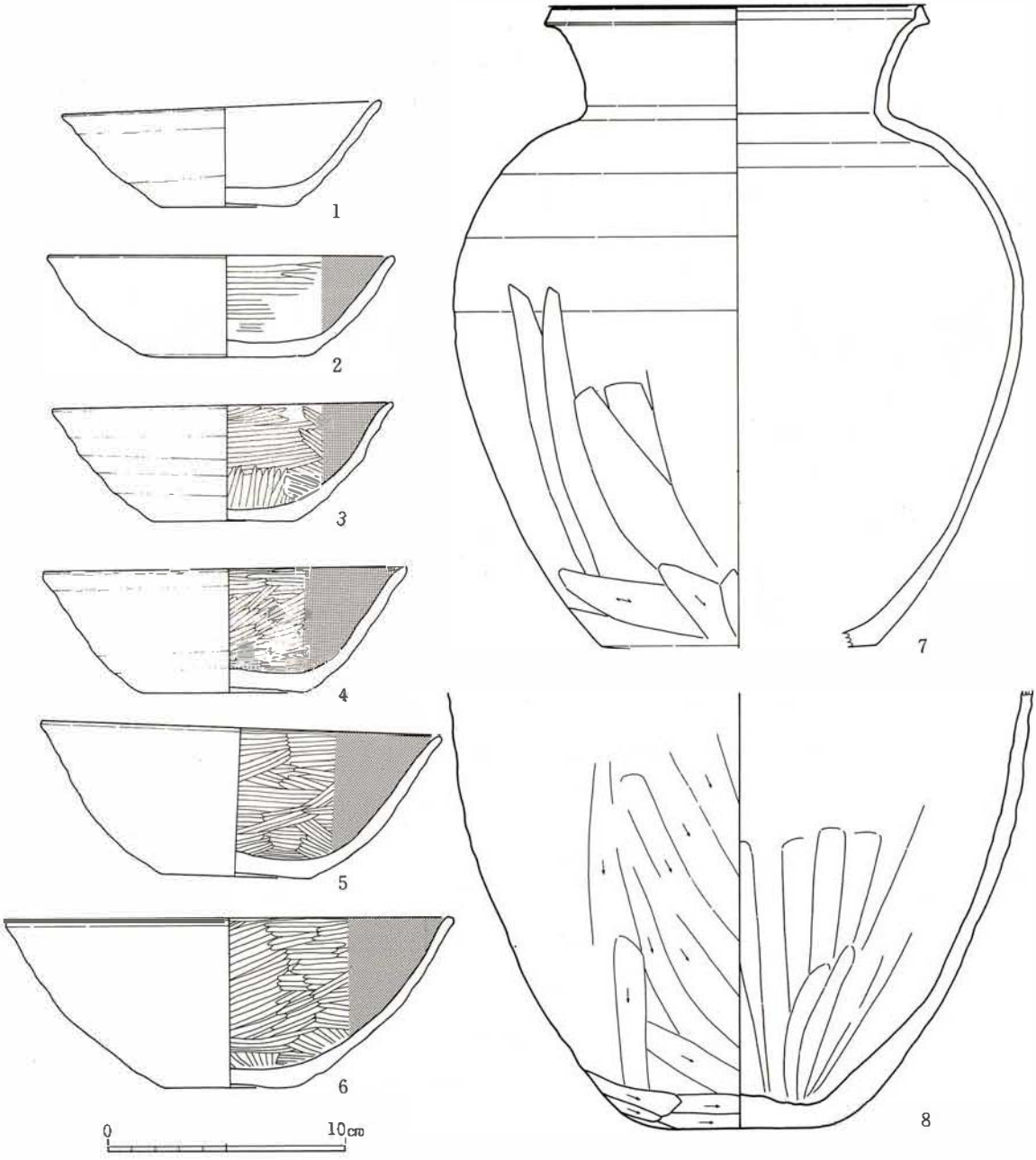
番号	土色	土性	備考
1	灰黄褐色 (10YR 5/2)	砂質土	C期
2	灰黄褐色 (10YR 5/2)	砂質土	B期
3	灰白色		B期 火山灰層
4	黒褐色 (10YR 3/1)	粘質土	B期
5	にぶい黄色(2.5Y 6/2)	砂質土	A期

0 1m

第123図 SD1178溝跡断面図

(10) SD1179・1181・1182溝跡

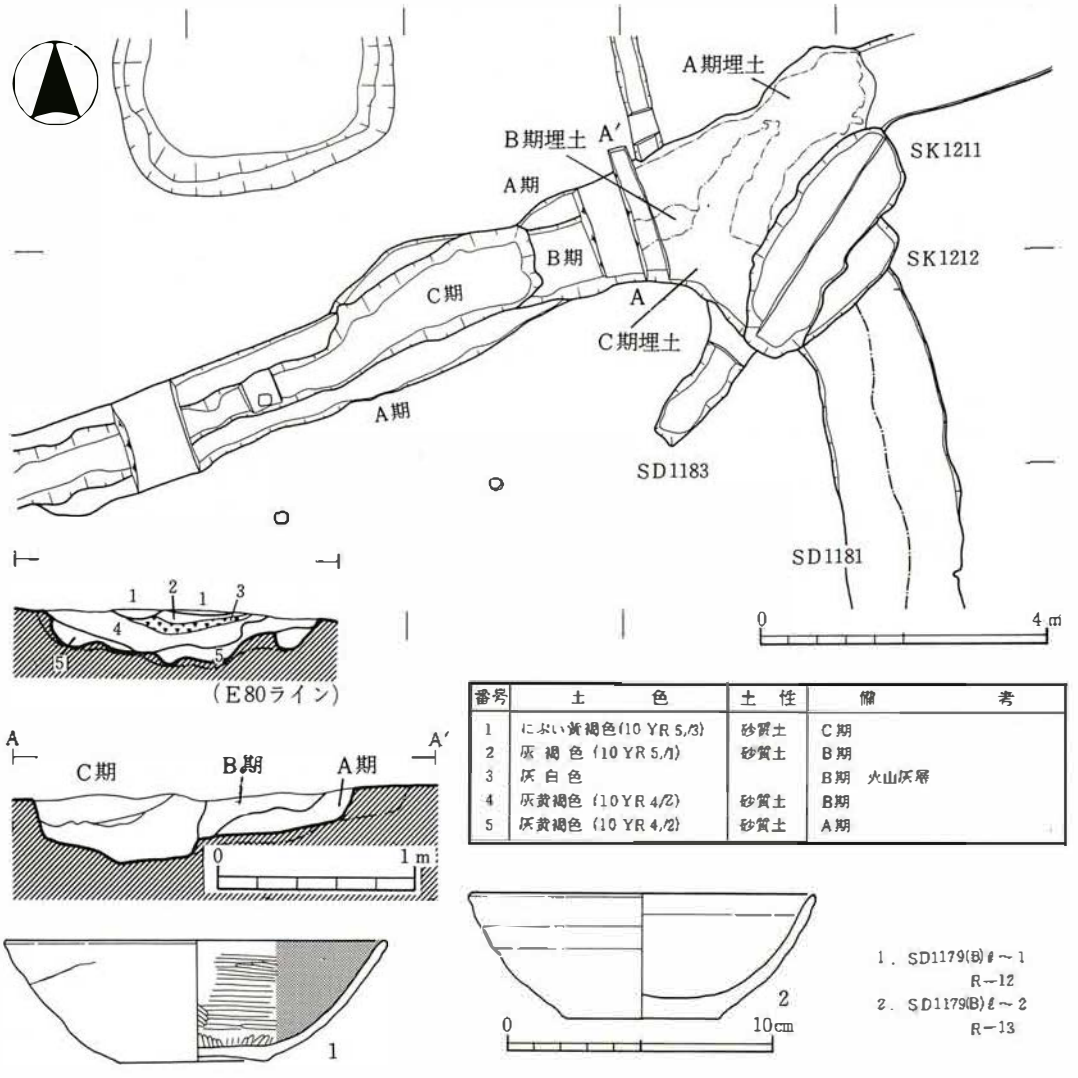
SD1179は、調査区北半部の第Ⅳ層上で検出した東西溝跡である。約82mに亘って検出しており、両端はいずれも調査区外へとのびている。SD1185・1190・1198・1306溝跡、SK1206・1211・1223・1241・1246・1248・1278土壙と重複しており、SD1185・1190溝跡より新しいが



番号	遺物名	遺構・層位	外面調整	内面調整	底部	図版	登録No.
1	赤焼き土器 杯	SD 1178 B	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り痕	16—8	R-9
2	土師器 杯	SD 1178 B	ロクロナデ	ヘラミガキ、黒色処理	〃	16—2	R-7
3	土師器 杯	SD 1178 B	ロクロナデ	〃	〃	16—5	R-3
4	土師器 杯	SD 1178 B	ロクロナデ	〃	〃	16—6	R-4
5	土師器 杯	SD 1178 B	ロクロナデ	〃	〃	16—3	R-6
6	土師器 杯	SD 1178 B	ロクロナデ	〃	〃	16—1	R-8
7	須恵器 甕	SD 1178 B	ロクロナデ、手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	〃	16—7	R-10
8	土師器 甕	SD 1178 B	手持ちヘラケズリ	指によるナデツケ		16—4	R-11

第124図　SD 1178溝跡出土遺物

他のものより古い。ほぼ同位置で3時期の変遷が認められた（古い順にA→B→C）。しかし、E102ライン以東は残存状況が悪く、E78ライン以西は精査を行なっていないため。3時期の変遷を把握できたのは西半部の内の20mに満たない範囲に限られる。緩やかに蛇行しているため方向は計り難いが、東西両端を結んだ線でみると東で約15度北に偏している。規模は、A期が上幅1.4m、深さ0.3m、B期が上幅1.2m、深さ0.3m、C期が上幅0.7～0.6m、深さ15～5cmを計る。遺物は、B期の埋土から土師器杯（第125図1）赤焼き土器杯(2)が出土している。



番号	土色	土性	備考
1	にぶい黄褐色(10YR 5/3)	砂質土	C期
2	灰褐色(10YR 5/1)	砂質土	B期
3	灰白色		B期　火山灰層
4	灰黄褐色(10YR 4/2)	砂質土	B期
5	灰黄褐色(10YR 4/2)	砂質土	A期

第125図　SD 1179．1181溝跡平面図・断面図及び出土遺物

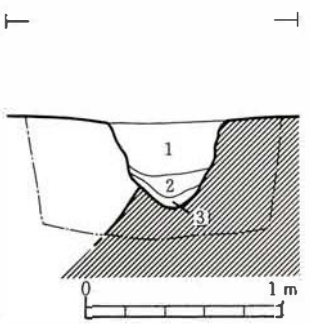
SD 1181は、SD 1179の南壁に連結する南北溝跡である。SK1224土壙と重複しており、それより古い。規模は、上幅約0.9m、深さ約5cmを計る。残存状況は悪い。埋土の様子は、東壁際と西壁際で異なっており、2時期以上の重複があると見られるが詳細は不明である。また、本溝跡の南延長線上でSD1182南北溝跡を発見している。両者は直接連続しないが、一連の溝

であった可能性がある。平面的に検出したにすぎないが、埋土には10世紀前半に降下したと言われている灰白色火山灰のブロックが多く含まれている。

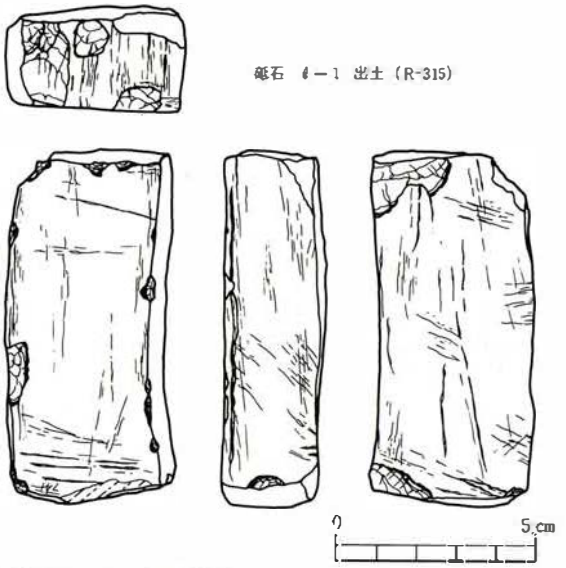
(11) SD1187・1190溝跡

SD1187は、調査区北半部の第Ⅳ層上で検出した東西溝跡である。西端は調査区外へとのびているが、東端は西壁から42mの地点で止まっている。SD1184・1185・1186溝跡、SK1236土壙と重複しており、SD1185・1186溝跡より新しく、他のものより古い。方向は、東で約11度北に偏している。規模は、上幅1.0～0.6m、下幅0.6～0.2m、深さ0.7～0.3mを計る。

SD1190は、SD1187溝跡の南壁に連結する南北溝跡である。南端部をSD1179溝跡によって破壊されており、検出できたのは13.5mである。方向は、北で約2度東に偏している。規模は、上幅1.2～0.7m、下幅0.9～0.6m、深さ0.3～0.1mを計る。SD1187溝跡より底面が高く、連結部では約22cmの比高差がある。遺物は、SD1190溝跡の埋土より砥石が1点出土している。



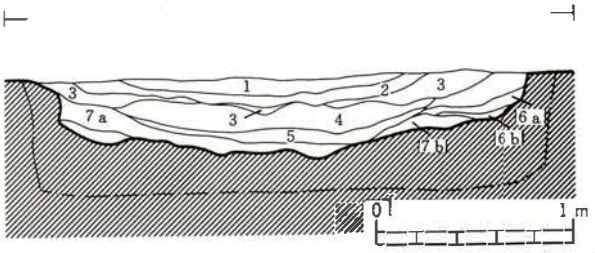
番号	土色	土性	備考
1	にぶい黄色(2.5Y6/3)	砂質土	灰黄褐色土のブロックを含む。
2	にぶい黄色(2.5Y6/3)	砂質土	灰黄褐色土の粗い層あり。
3	にぶい黄色(2.5Y6/3)	砂質土	



第126図 SD1190溝跡断面図・出土遺物

(12) SD1180溝跡

調査区中央部の第Ⅳ層上で検出した東西溝跡である。調査区東壁のほぼ中頃から調査区南西隅にかけて緩やかに蛇行してのびている。約80mに亘って検出しており、両端はそれぞれ調査



番号	土色	土性
1	にぶい黄色 (2.5Y6/3)	砂質土
2	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘質土
3	浅黄色 (2.5Y7/3)	砂質土
4	黄褐色 (2.5Y5/3)	砂
5	にぶい黄色 (2.5Y6/3)	砂質土
6a	にぶい黄色 (2.5Y6/3)	砂質土
6b	にぶい黄色 (2.5Y6/3)	砂質土
7a	暗灰黄色 (2.5Y5/2)	砂質土
7b	黄灰色 (2.5Y4/1)	砂
8	黄灰色 (2.5Y4/2)	砂質土

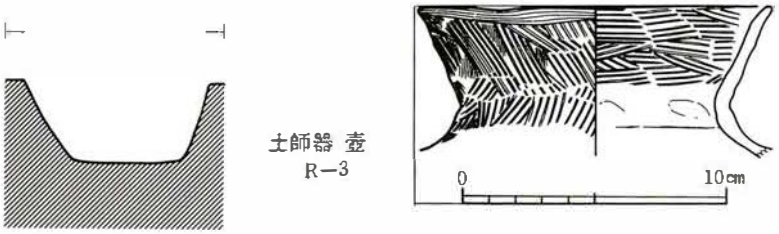
第127図 SD1180溝跡断面図

区外へとのびている。建物跡や井戸跡など多くの遺構と重複しているが、それらのものより古い。平面的な調査にとどめたため、細部については不明であるが、西端部近くの断ち割り部分でみると、規模は、上幅4.0m、下幅1.9m、深さ0.4mを計る。埋土は、砂や砂質土が自然に堆積した様相を呈しており、全体に締まっている。遺物は、土師器の細片が数点出土している。

なお、本溝跡は、位置関係や埋土の状況から、第4次調査区のSD 653溝跡と一連のものとみられる。両者の底面レベルはほぼ一致している。

(13) SD1186溝跡

調査区北半部の第Ⅳ層上で検出した東西溝跡である。調査区西壁から北壁にかけて、約60mに亘って検出した。SD1178・1185・1187・1190・1205溝跡、SK1242・1243土壙と重複している。SD1185溝跡との関係は不明であるが、他のものより古い。方向は、西半部が東で約16度北に偏しており、東半部が東で約22度北に偏している。底面まで掘り下げた部分は少ないが規模は、上幅1.3～1.0m、下幅0.6～0.4m、深さ0.6mを計る。埋土は、均質なにぶい黄色の砂質土であり、地山との識別が困難である。遺物は、土師器壺・甕が小量出土している。第128図は1層から出土した土師器壺である。外面口縁部から頸部にかけて、また内面口縁部をハケメ調整しており、外面口縁部の先端をヨコナデ調整している。塩釜式に属するものであろう。



第127図　SD 1186溝跡断面図・出土遺物

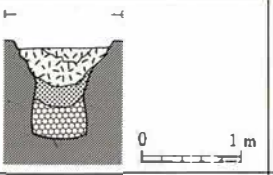
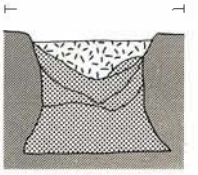
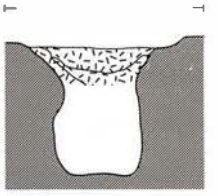
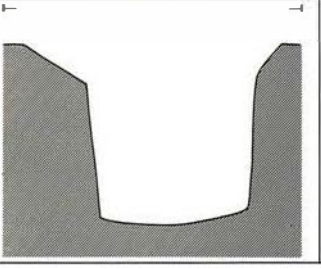
(14) SD1185溝跡

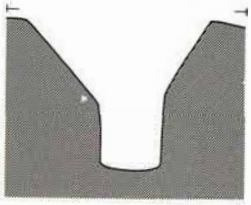
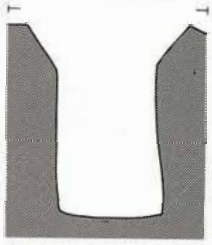
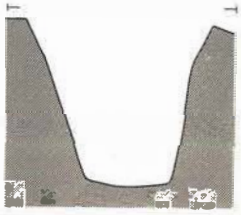
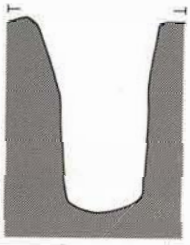
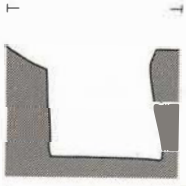
調査区北半部の第Ⅳ層上で検出した東西溝跡である。SD1178・1179・1184・1198・1306溝跡、SK1214土壙と重複しており、それらより古い。SD1186溝跡との新旧関係は明らかにできなかった。約55mに亘って検出しており、両端とも調査区外へとのびている。規模は、上幅0.8m、深さ0.3mを計る。方向は、東で約9度南に偏している。遺物は、土師器の小片が数点出土している。

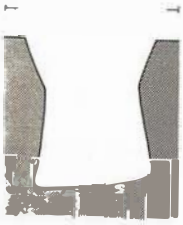
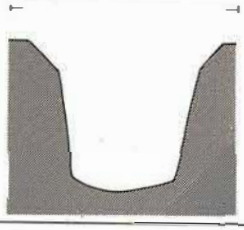
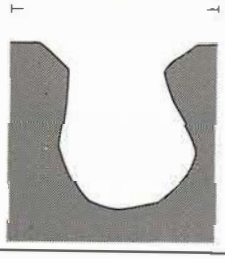
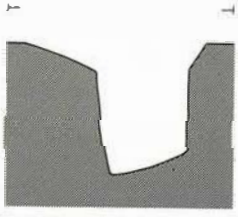
なお、本溝跡は、位置関係からみて第4次調査区のSD 654溝跡と一連のものである可能性が高い。

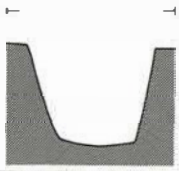
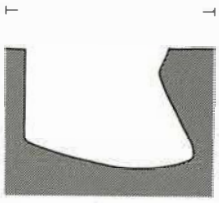
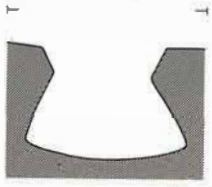
D．井戸跡

調査区南半部を中心に分布しており、31基検出した。内部に井戸側を備えたものはなく、すべて素掘りである。以下、それらの規模、形態、出土遺物について、概要を表にまとめる。

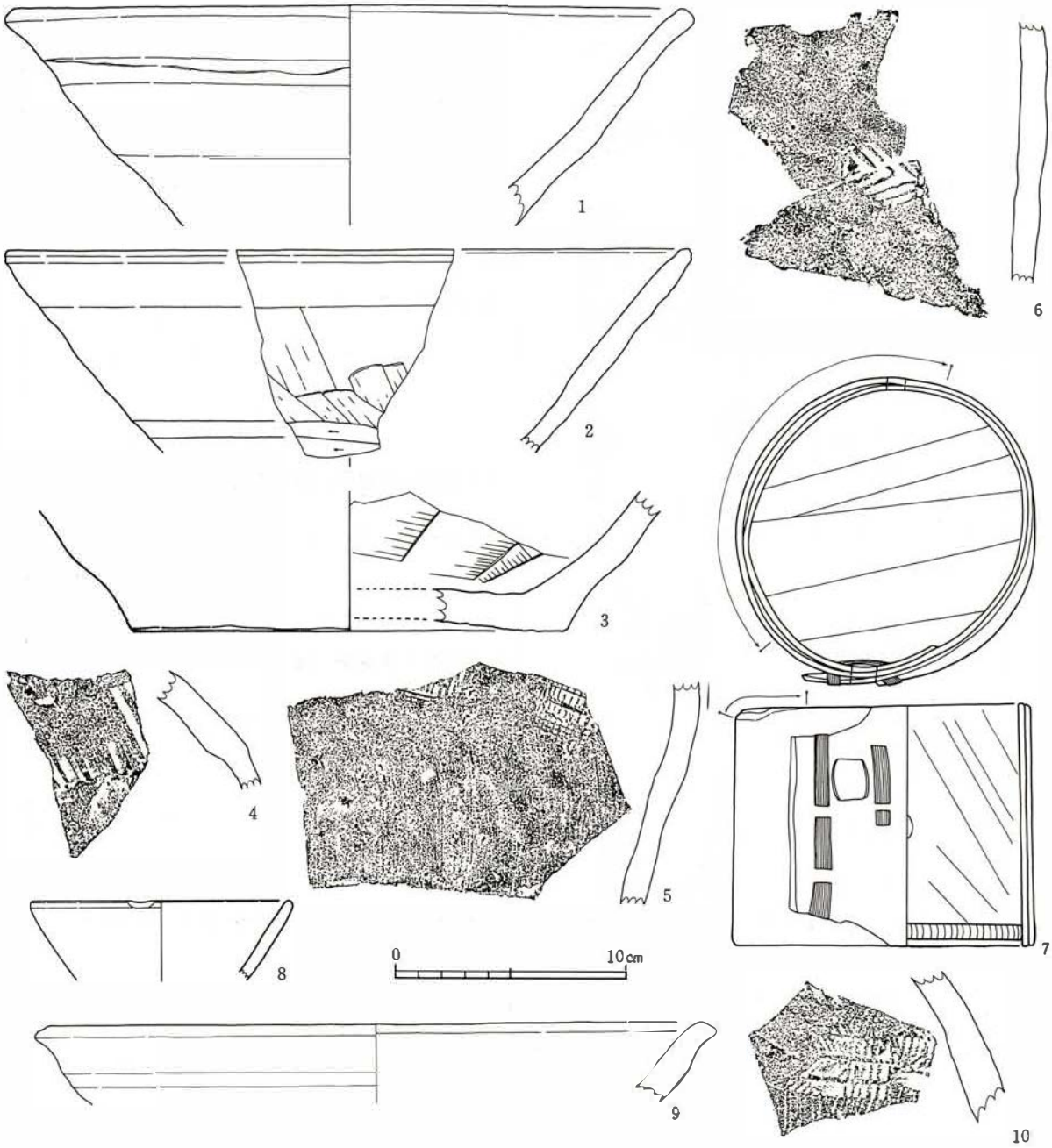
	遺構名 平面規模 深さ	断面図（S:1/8）	概要・出土遺物
1	SE1252 長径1.18m 短径1.10m 深さ1.03m		出土遺物：無釉陶器甕・擂鉢、板碑?
2	SE1253 直径1.23m 深さ1.21m		出土遺物：無釉陶器擂鉢、カワラケ、鉄滓、砥石、礫
3	SE1254 長径1.64m 短径1.36m 深さ1.27m		出土遺物：青磁椀、無釉陶器甕、カワラケ、瓦質土器、礫
4	SE1255 直径0.95m 深さ1.10m		出土遺物：なし
5	SE1256 長径1.55m 短径1.12m 深さ1.48m		出土遺物：カワラケ、瓦質土器、礫、茹入粘土
6	SE1257 長径1.06m 短径0.94m 深さ1.53m		出土遺物：カワラケ、礫
7	SE1258 長径2.53m 短径2.20m 深さ1.86m		出土遺物：無釉陶器甕、礫

8	SE1259 直径1.90m 深さ1.52m		出土遺物：カワラケ、礫
9	SE1261 長径1.64m 短径1.46m 深さ1.94m		出土遺物：青磁椀、無釉陶器甕・擂鉢、礫、柄杓
10	SE1262 長径1.94m 短径1.76m 深さ1.69m		出土遺物：無釉陶器甕・擂鉢、カワラケ、礫
11	SE1263 長径1.42m 短径1.32m 深さ1.96m		出土遺物：無釉陶器甕、砥石、円礫、磨石
12	SE1265 直径1.16m 深さ1.11m		出土遺物：青磁椀
13	SE1266 直径1.17m 深さ1.26m		出土遺物：無釉陶器甕
14	SE1267 長径1.13m 短径0.88m 深さ1.26m		出土遺物：礫

15	SE1268 直径1.20m 深さ1.27m		出土遺物：無釉陶器擂鉢
16	SE1269 直径1.38m 深さ1.34m		出土遺物：無釉陶器甕・擂鉢、カワラケ、鉄滓、礫、円礫
17	SE1270 長径1.55m 短径1.42m 深さ1.63m		出土遺物：無釉陶器甕・壺、カワラケ、砥石、円礫
18	SE1271 長径2.32m 短径1.60m 深さ1.50m		出土遺物：無釉陶器甕、カワラケ、礫
19	SE1272 長径2.30m 短径1.94m 深さ1.53m		出土遺物：無釉陶器甕・擂鉢、カワラケ、砥石、礫、円礫、漆塗りの小石
20	SE1273 長径1.70m 以上 短径1.68m 深さ1.70m		出土遺物：無釉陶器甕・壺・擂鉢、カワラケ、礫、円礫
21	SE1274 長径1.82m 短径1.30m 深さ1.24m		出土遺物：カワラケ

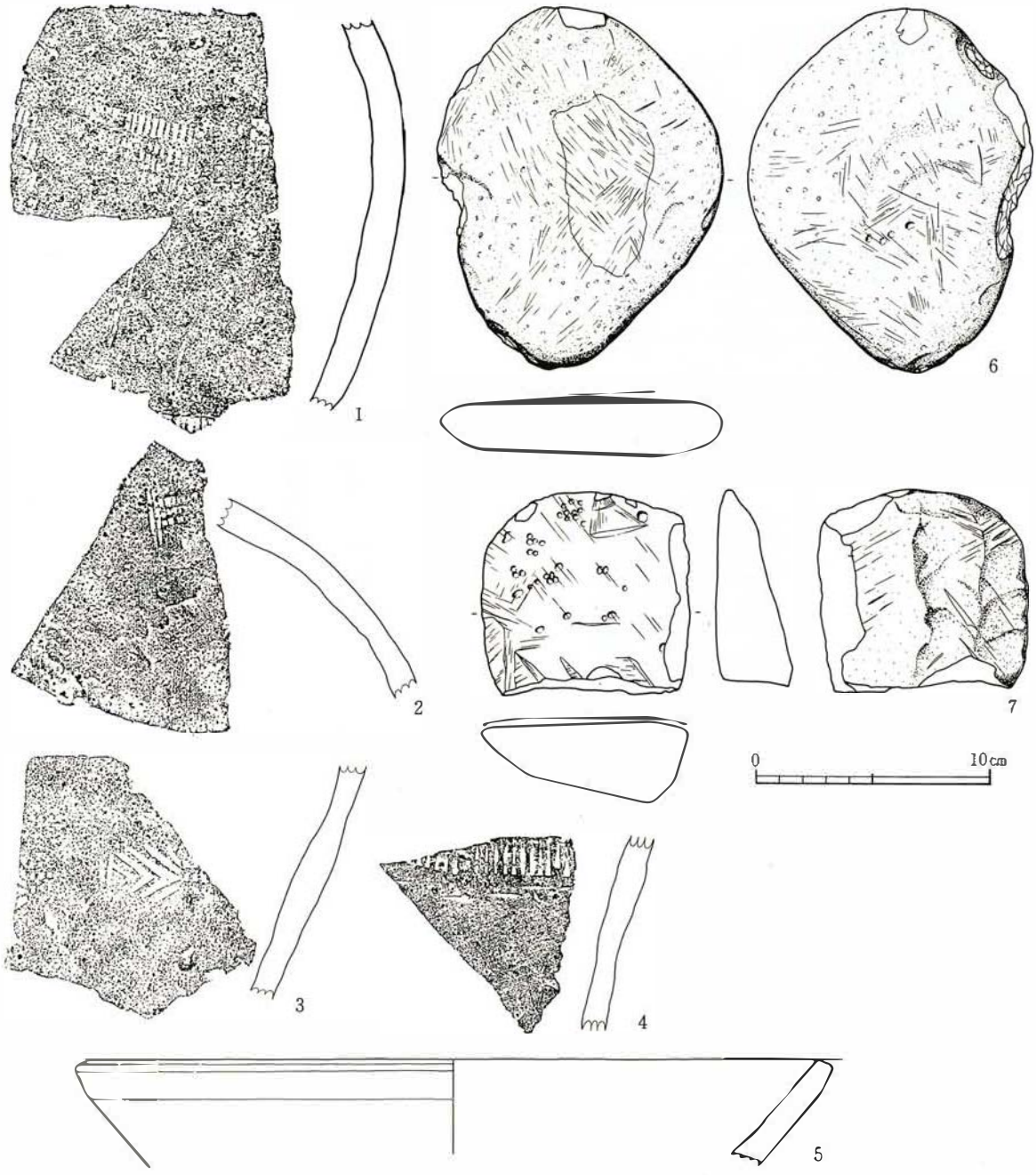
22	SE1275 長径1.28m 短径1.10m 深さ1.03m		出土遺物：なし
23	SE1276 長径1.60m 短径1.26m 深さ1.18m		出土遺物：カワラケ
24	SE1277 長径1.50m 短径1.22m 深さ1.14m		出土遺物：青磁椀、無釉陶器擂鉢
25	SE1293 長径1.00m 短径0.94m 深さ1.04m		出土遺物：青磁椀、礫
26	SE1298 直径1.20m 深さ1.21m		出土遺物：なし

第Ⅲ層上面で検出　　SE1259・1261
第Ⅲ層におおわれ第Ⅳ層上面で検出　　SE1260
他は第Ⅲ層との関係不明



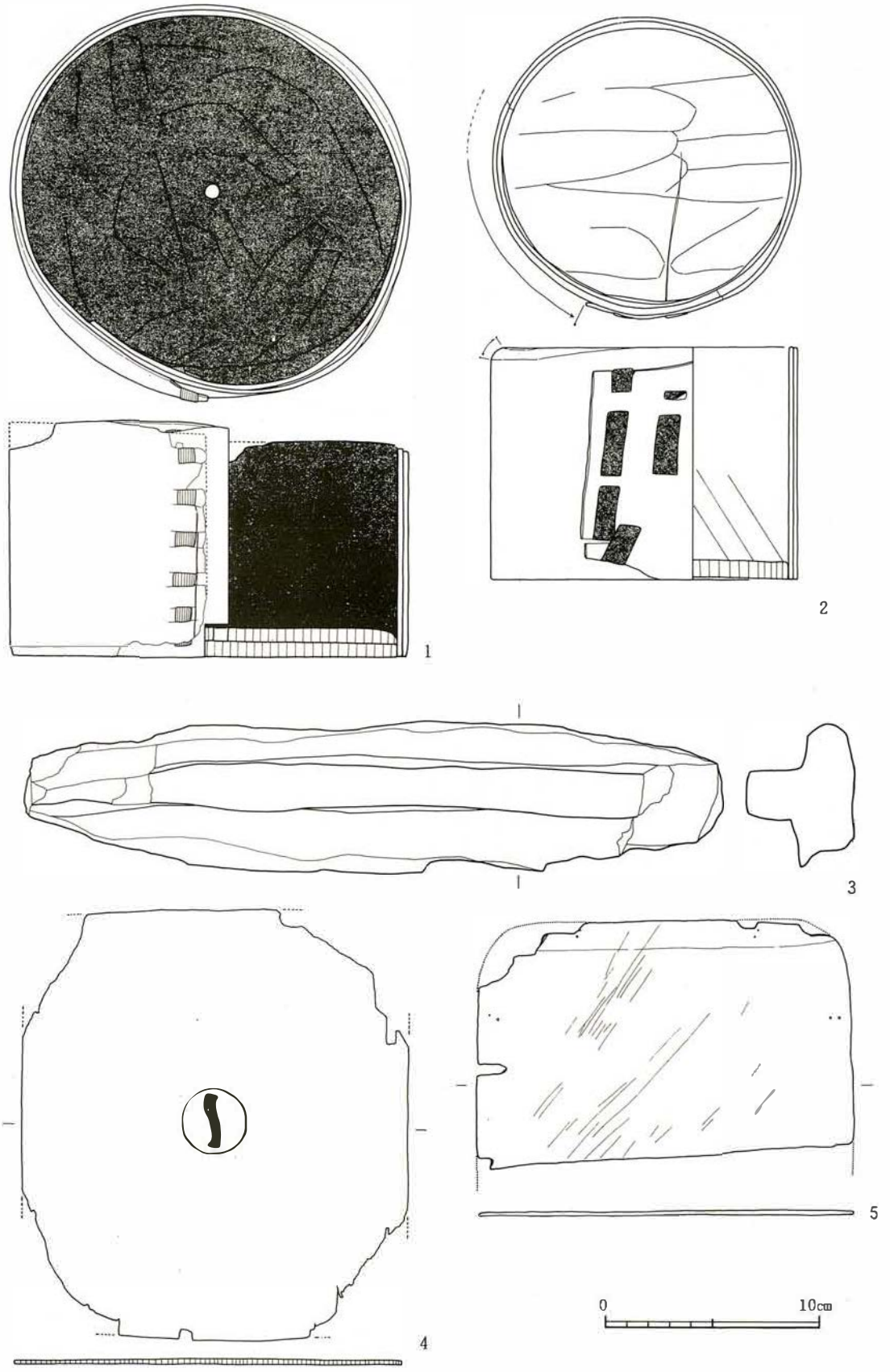
番号	遺物名	遺構・層位	外面調整	内面調整	備考	図版	登録No.
1	無釉陶器 擂鉢	SE 1252 ℓ～3	ヨコナデ	ヨコナデ		26－1	R-191
2	無釉陶器 擂鉢	SE 1252 ℓ～3	ヘラケズリ、ヨコナデ	ヨコナデ		27－2	R-167
3	無釉陶器 擂鉢	SE 1252 ℓ～3		ヘラナデ	底部糸底		R-161
4	無釉陶器 甕	SE 1258 ℓ～1	ヘラナデソケ	ヨコナデ	押印あり		R-104
5	無釉陶器 甕	SE 1258 ℓ～1	ハケメ	ヨコナデ	押印あり		R-101
6	無釉陶器 甕	SE 1261 ℓ～1		ヨコナデ	押印あり		R- 86
7	柄杓	SE 1261 ℓ～3		ヨコナデ	口縁の一部磨耗		R- 65
8	青磁 椀	SE 1282 ℓ～1			口縁輪花		R-203
9	無釉陶器 擂鉢	SE 1269 ℓ～1	ヨコナデ	ヨコナデ			R-196
10	無釉陶器 甕	SE 1269 ℓ～3			押印あり		R-103

第129図　井戸跡出土遺物（1）

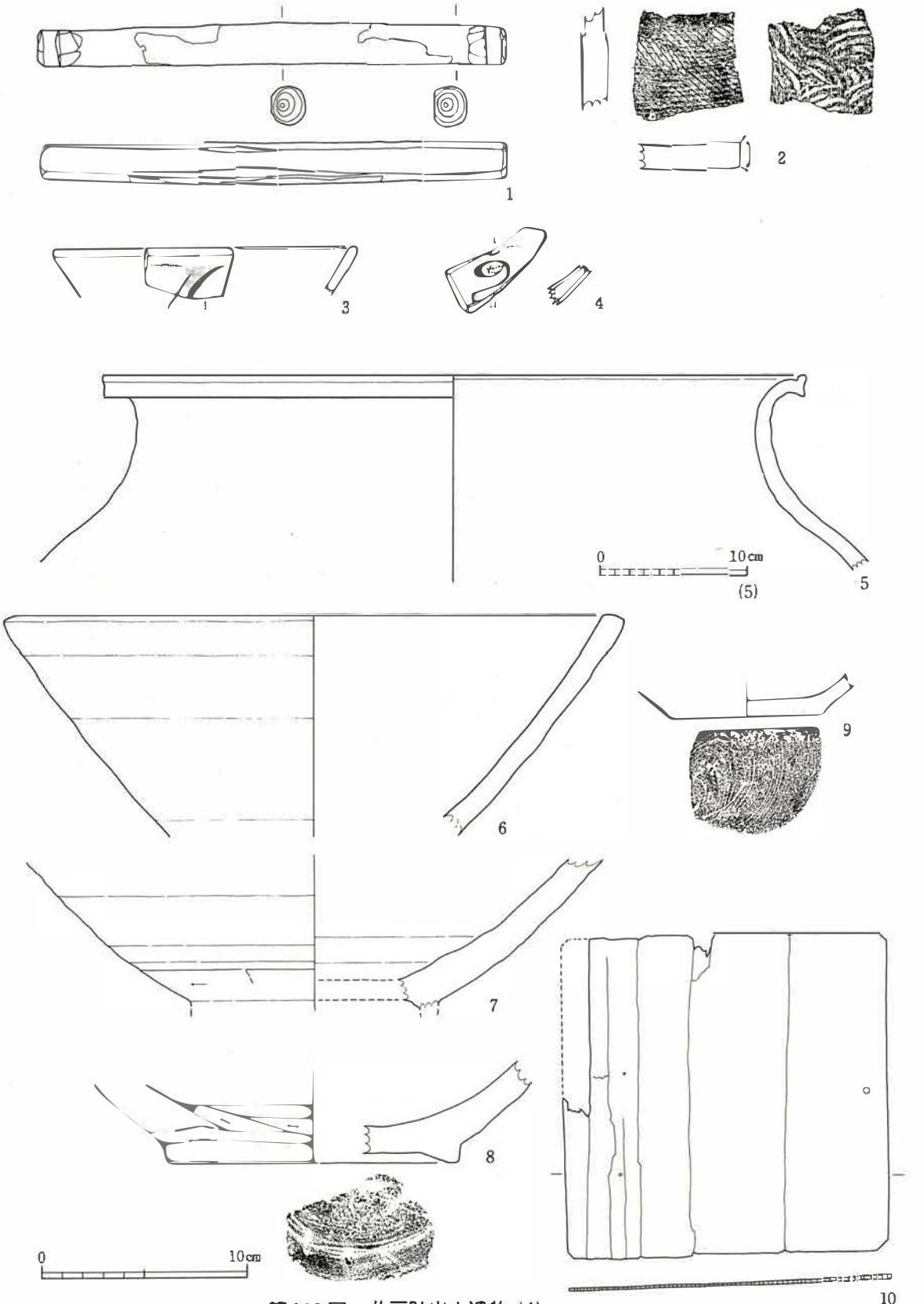


番号	遺物名	遺構・層位	外面調整	内面調整	備考	図版	登録No.
1	無釉陶器 甕	SE 1262 ℓ～2		ヨコナデ	押印あり		R- 87
2	無釉陶器 甕	SE 1262 ℓ～2	ヘラナデツケ	ヨコナデ	押印あり		R- 74
3	無釉陶器 甕	SE 1262 ℓ～2		ヨコナデ	押印あり		R- 85
4	無釉陶器 甕	SE 1262	ヘラナデ	ヨコナデ	押印あり		
5	無釉陶器 擂鉢	SE 1262 ℓ～2	ヨコナデ	ヨコナデ			R-170
6	使用痕のある礫	SE 1260 ℓ～2					R-356
7	使用痕のある礫	SE 1260 ℓ～1					R-354

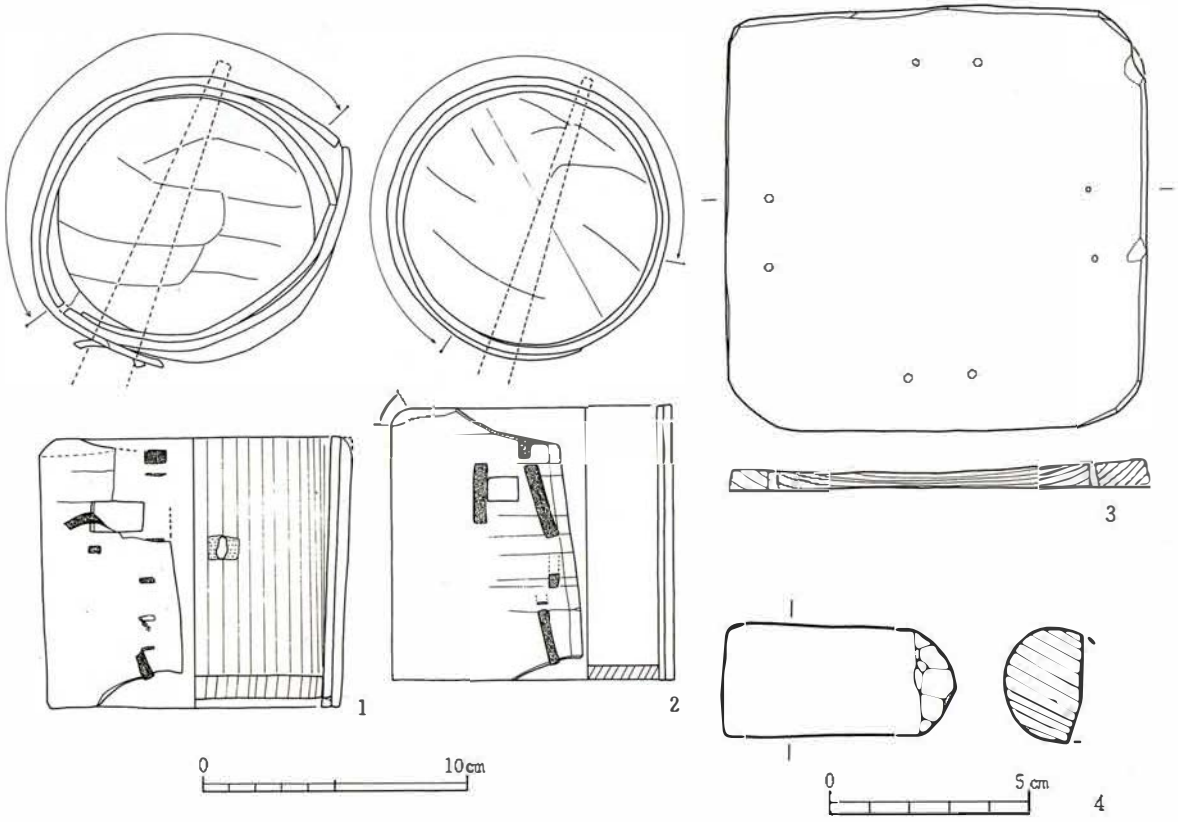
第130図　井戸跡出土遺物 (2)



第131図　井戸跡出土遺物 (3)



第132図　井戸跡出土遺物 (4)



番号	遺物名	遺構・層位	外面調整	内面調整	備考	図版	登録No.
第131図1	蒸籠	SE 1270 ℓ～3		黒漆塗り	底板2枚、1枚に穿孔	36—4	R- 42
2	曲物容器	SE 1270 ℓ～3					R- 27
3	建築部材	SE 1270 ℓ—1				42—3	R-108
4	折敷	SE 1270 ℓ～3			㊀墨書あり		R- 28
5	折敷	SE 1270 ℓ—3					R- 30
第132図1	把手	SE 1270 ℓ～3			樹皮を残す		R- 29
2	研磨痕のある須恵器片	SE 1267 ℓ～2	クダキ	アテ具痕			
3	青磁 椀	SE 1293 ℓ—1			外面に蓮弁文	20—6	R-206
4	青磁 椀	SE 1265 ℓ～1			内面に文様		R-212
5	無釉陶器 甕	SE 1272 ℓ—3	口縁ヨコナデ	ヨコナデ		23—14	R- 91
6	無釉陶器 擂鉢	SE 1272 ℓ～2	ヨコナデ	ヨコナデ	内面下部が細かく綾		R-160
7	無釉陶器 擂鉢	SE 1272 ℓ—1	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ	高台あり	27—12	R-158
8	無釉陶器 擂鉢	SE 1272 ℓ～2	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ	高台あり	25—10	R-139
9	カワラケ	SE 1272 ℓ—1	ロクロナデ	ロクロナデ	底部回転糸切り		R-276
10	折敷	SE 1261 ℓ—3				35—14	R-63
第133図1	柄杓	SE 1263 ℓ～2			口縁の一部磨耗		R- 67
2	柄杓	SE 1274 ℓ～2			口縁の一部磨耗		R- 58
3	折敷	SE 1277 ℓ—2			底板が厚い		R- 57
4	栓	SE 1277 ℓ～2					R- 56

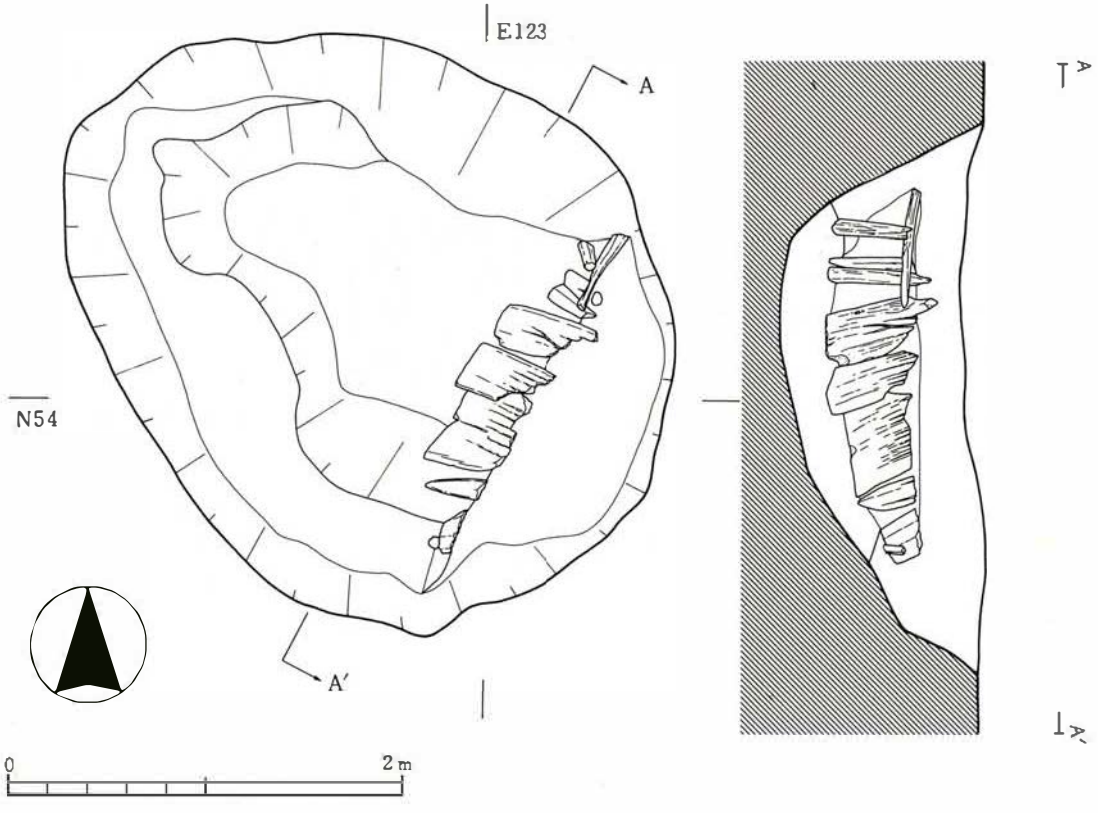
第133図　井戸跡出土遺物 (5)

E．土　壙

調査区全域にわたって分布しており、57基検出した。性格不明のものが大部分であり、中には棄掘りの井戸も含めている恐れがある。以下、内部に施設を伴っているものについて説明を加え、他については「井戸跡」と同様に断面図を示し、規模、堆積土の様子を表にまとめ、次に出土遺物に対して簡単に説明を加える。

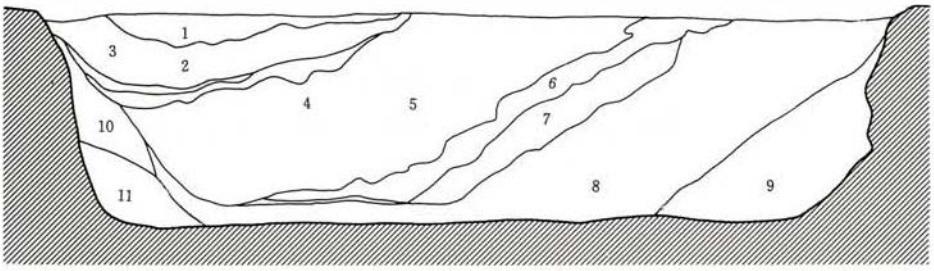
(1)　ＳＫ1213土壙

調査区北東部の第Ⅳ層上で検出した土壙である。平面形は歪んだ楕円形を呈し、規模は長径3.4ｍ、短径2.7ｍ、深さ1.0ｍを計る。長軸方向の東壁には７枚の板を立て並べ、その両端に杭を打ち、それに横木をわたして板を押えた施設が検出された。これらの板組みの施設と土壙東壁との間には地山ブロックを含む黒褐色土が埋め込まれている。遺物は、土師器、赤焼き土器の小片と磨耗痕のある円礫が出土している。本土壙の性格については不明である。



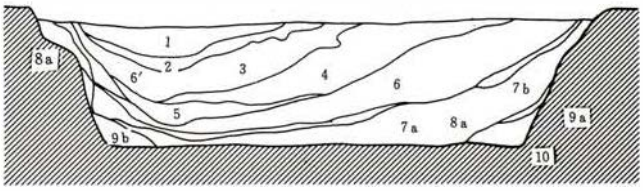
第134図　ＳＫ 1213土壙

⊢— SK 1207 —⊣



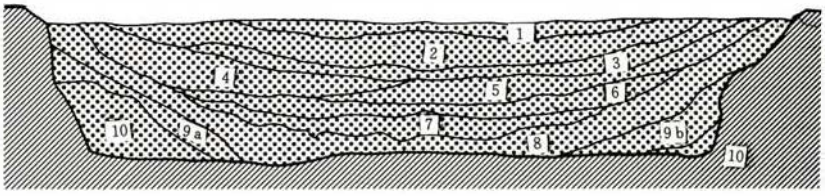
番号	層位	土色	土性	番号	層位	土色	土性	番号	層位	土色	土性
1	ℓ～1	黒褐色（10YR 2/3）	砂質土	5	ℓ～4	黒褐色（2.5Y 3/1）	砂質土	9	ℓ～7	黒褐色（2.5Y 3/1）	砂質土
2	ℓ～2	黒　色（10YR1.7/1）	炭化物層	6	ℓ～5	浅黄色（2.5Y 7/4）	砂質土	10	ℓ～7	黒褐色（2.5Y 3/1）	砂質土
3	ℓ～3	灰黄褐色（10YR 5/2）	粘質土	7	ℓ～5	黒褐色（2.5Y 3/1）	砂質土	11	ℓ～7	黒褐色（2.5Y 3/1）	砂質土
4	ℓ～3	にぶい黄橙色（10YR 6/4）	粗砂	8	ℓ～6	黒褐色（2.5Y 3/1）	砂質土				

⊢— SK 1209 —⊣



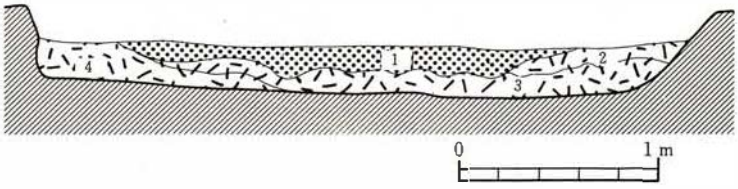
番号	層位	土色	土性
1	ℓ～1	黒褐色（10YR 2/2）	砂質土
2	ℓ～1	黒褐色（10YR 3/2）	砂質土
3	ℓ～1	黒　色（10YR 2/1）	砂質土
4	ℓ～2	黒　色（10YR 1.7/1）	炭化物層
5	ℓ～2	黒褐色（2.5Y 3/1）	砂質土
6	ℓ～3	黒　色（10YR 1.7/1）	炭化物層
6′	ℓ～3	黒褐色（2.5Y 3/1）	砂質土
7a	ℓ～3	黒　色（10YR 3/1）	砂質土
7b	ℓ～3	黒　色（10YR 3/1）	砂質土
8a	ℓ～4	黒　色（10YR 1.7/1）	砂質土
8b	ℓ～4	黒　色（10YR 1.7/1）	炭化物層
9a	ℓ～4	黒褐色（10YR 3/1）	砂質土
9b	ℓ～4	オリーブ黒色（5Y 3/1）	砂質土
10	ℓ～3	黒　色（10YR 3/1）	砂質土

⊢— SK 1210 —⊣



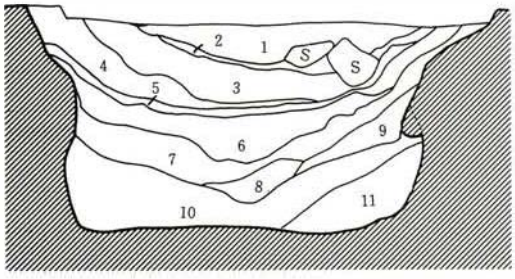
番号	層位	土色	土性
1	ℓ～1	黒褐色（10YR 3/1）	砂質土
2	ℓ～1	黒褐色（10YR 3/1）	砂質土
3	ℓ～1	黒　色（10YR 3/1）	粘質土
4	ℓ～2	灰黄褐色（10YR 5/2）	砂質土
5	ℓ～3	黒褐色（10YR 3/1）	粘質土
6	ℓ～3	オリーブ黒色（5Y ）	粘質土
7	ℓ～3	黒　色（5Y 3/1）	砂質土
8	ℓ～3	オリーブ黒色（5Y 3/1）	粘質土
9a	ℓ～4	オリーブ黒色（5Y 3/1）	粘質土
9b	ℓ～4	オリーブ黒色（5Y 3/1）	粘質土
10	ℓ～4	緑灰色（5G 3/1）	粘質土

⊢— SK 1211 —⊣



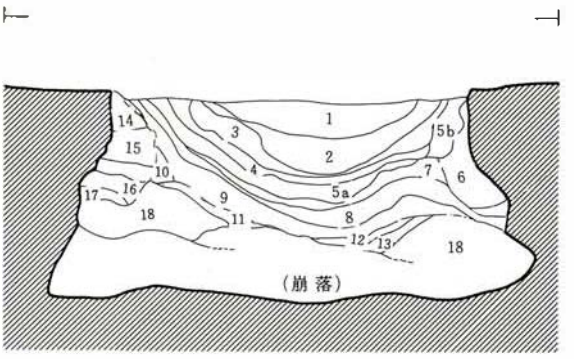
番号	層位	土色	土性
1	ℓ～1	褐灰色（10YR 4/1）	粘質土
2	ℓ～2	褐灰色（10YR 4/1）	粘質土
3	ℓ～2	にぶい黄色（2.5Y 6/3）	砂質土
4	ℓ～2	にぶい黄色（2.5Y 6/3）	砂質土

⊢— SK 1226 —⊣



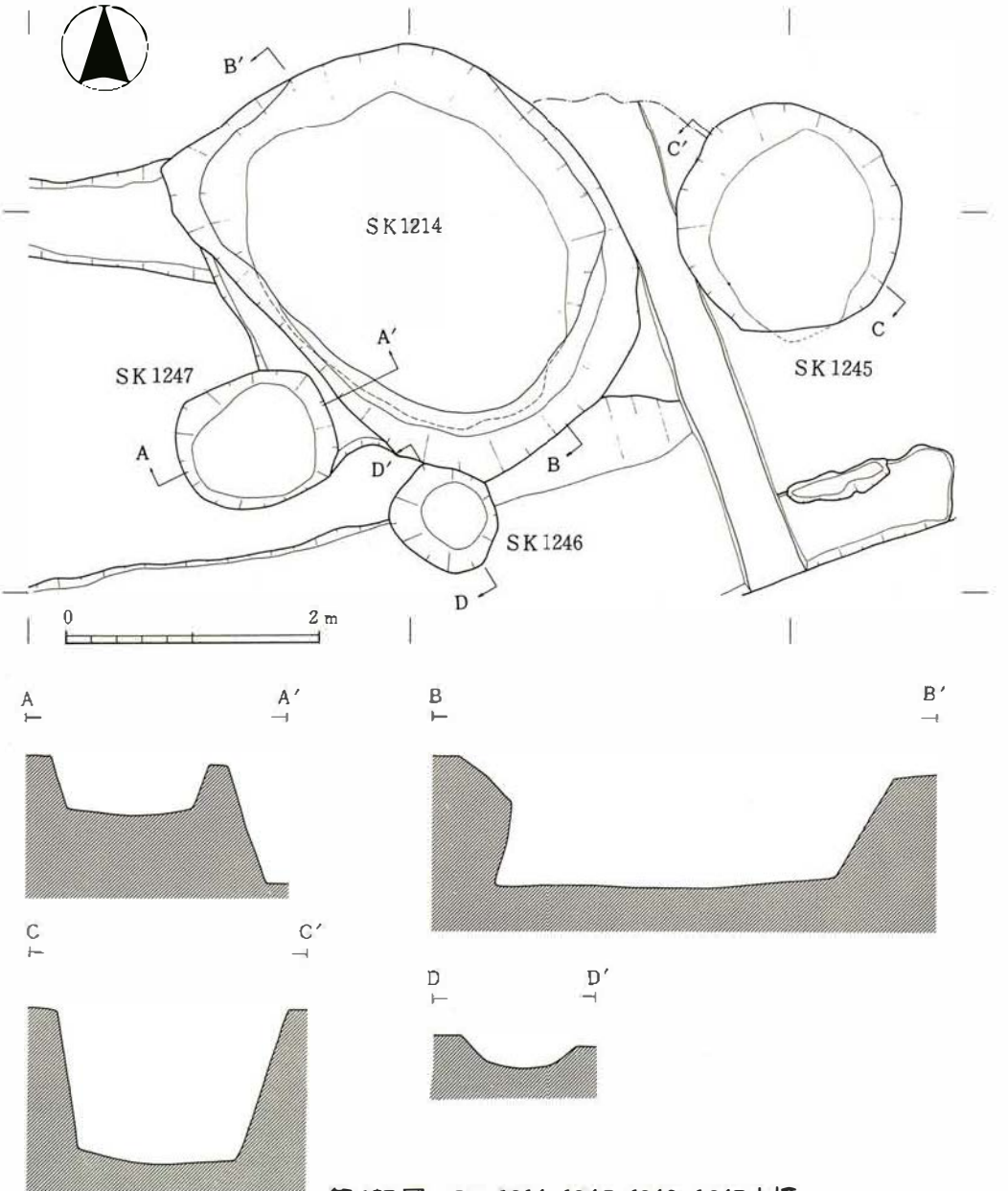
番号	層位	土色	土性
1	ℓ～1	黒褐色（10YR 3/2）	砂質土
2	〃	黒　色（2.5Y 3/1）	炭化物層
3	ℓ～2	黒　色（10YR 3/1）	砂質土
4	〃	黒　色（10YR1.7/1）	砂質土
5	〃	黒褐色（2.5Y 3/1）	砂質土
6	ℓ～3	黒　色（2.5Y 3/1）	砂質土
7	〃	黒褐色（2.5Y 3/1）	砂質土
8	〃	オリーブ黒色（7.5Y 3/1）	砂質土
9	〃	黒　色（10YR1.7/1）	砂質土
10	〃	黒　色（2.5GY 3/1）	砂質土
11	〃	暗緑灰色（7.5GY 4/1）	砂質土

第135図　SK 1207・1209・1210・1211・1226土壙断面図

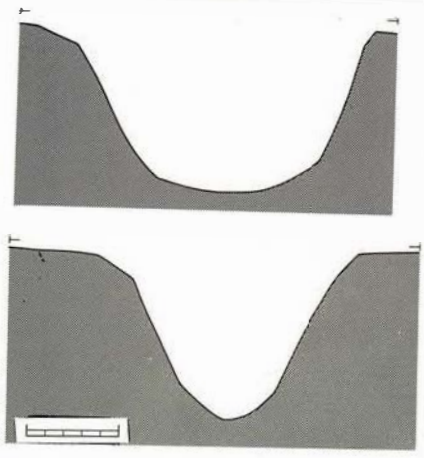


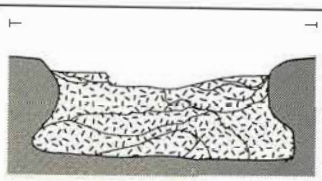
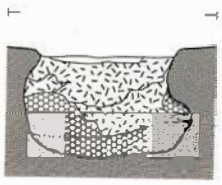
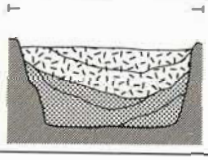
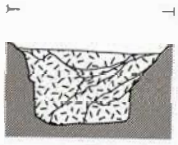
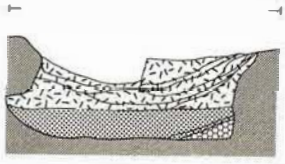
第136図　SK 1241土壙断面図

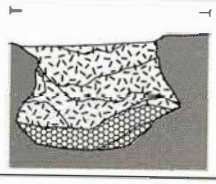
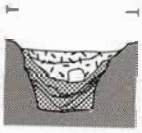
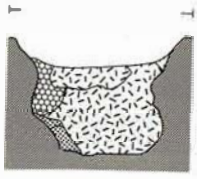
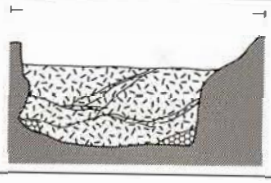
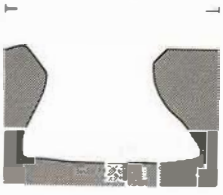
番号	層位	土色	土性
1	ℓ～1	黒色（10YR1.7/1）	炭化物層
2	ℓ～1	黒褐色（10YR2/2）	砂質土
3	ℓ～1	黒色（10YR1.7/1）	炭化物層
4	ℓ～1	黒褐色（10YR2/2）	砂質土
5a	ℓ～1	黒色（10YR1.7/1）	炭化物層
5b	ℓ～1	黒褐色（10YR2/2）	砂質土
6	ℓ～1	浅黄色（5Y7/3）	砂質土
7	ℓ～1	黒色（2.5Y2/1）	砂質土
8	ℓ～1	黒色（10YR1.7/1）	炭化物層
9	ℓ～1	オリーブ黒色（5Y3/2）	砂質土
10	ℓ～1	暗灰黄色（2.5Y5/2）	砂質土
11	ℓ～1	オリーブ黒色（5Y3/2）	砂質土
12	ℓ～1	黒色（10YR1.7/1）	炭化物層
13	ℓ～1	オリーブ黒色（5Y3/1）	砂質土
14	ℓ～2	浅黄色（5Y7/3）	粘質土
15	ℓ～2	浅黄色（5Y7/3）	粘質土
16	ℓ～2	灰色（5Y5/1）	粘質土
17	ℓ～2	灰オリーブ色（5Y5/3）	砂
18	ℓ～3	緑灰色（7.5GY5/1）	砂質土

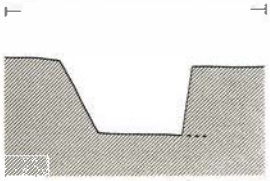
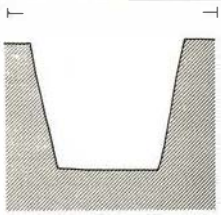


第137図　SK 1214・1245・1246・1247土壙

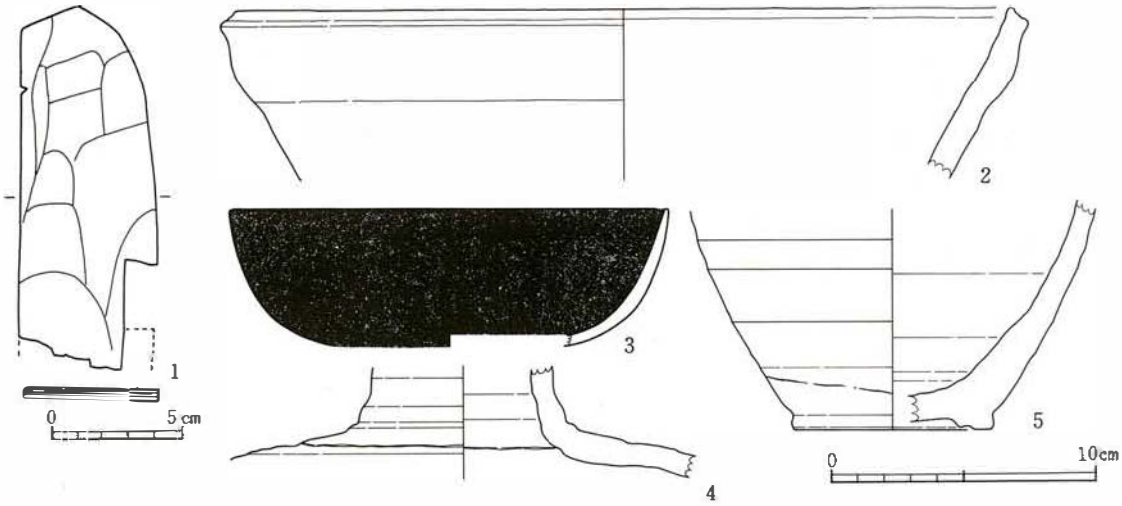
	遺構名 平面規模 深さ	断面図（S：1/60）	概要・出土遺物
1	SK1207 長径4.50m 短径4.00m 深さ1.22m		出土遺物：無釉陶器甕・擂鉢、カワラケ、砥石、礫、円礫、敲石
2	SK1209 長径3.06m 短径2.94m 深さ0.76m		出土遺物：施釉陶器壺、カワラケ、砥石、礫
3	SK1210 長径3.85m 短径3.16m 深さ0.90m		出土遺物：無釉陶器甕・擂鉢、砥石、円礫、礫
4	SK1211 長径3.52m 短径1.10m 深さ0.51m		出土遺物：無釉陶器甕
5	SK1226 直径2.38m 深さ1.42m		出土遺物：無釉陶器甕・擂鉢、カワラケ、円礫
6	SK1241 長径2.18m 短径1.90m 深さ1.19m		出土遺物：青磁椀、カワラケ、泥岩製土製品
7	SK1247 長径1.24m 短径1.03m 深さ0.47m		出土遺物：無釉陶器甕、礫
8	SK1214 長径3.54m 短径2.68m 深さ1.01m		出土遺物：青磁椀、無釉陶器甕・擂鉢、砥石
9	SK1245 長径1.82m 短径1.76m 深さ1.23m		出土遺物：礫
10	SK1246 長径0.92m 短径0.78m 深さ0.27m		出土遺物：なし
11	SK1220 長径3.70m 短径2.82m 深さ1.80m		出土遺物：無釉陶器甕、カワラケ 砥石、礫、磨石、茹入粘土

12	SK1218 長径2.42m 短径1.90m 深さ1.00m		出土遺物：無釉陶器甕、カワラケ、礫
13	SK1221 長径0.60m 短径0.53m 深さ0.40m		出土遺物：なし
14	SK1223 長径1.50m 短径1.27m 深さ1.03m		出土遺物：無釉陶器甕
15	SK1224 長径1.90m 短径1.62m 深さ0.91m		出土遺物：カワラケ、砥石、釘
16	SK1225 長径1.62m 短径1.57m 深さ1.11m		出土遺物：礫
17	SK1227 長径0.98m 短径0.74m 深さ不明		出土遺物：カワラケ、鉄滓、円礫
18	SK1228 長径2.33m 短径2.06m 深さ0.94m		出土遺物：無釉陶器甕・擂鉢、カワラケ、鉄滓、礫、緑釉陶器（古代）
19	SK1230 長径0.86m 短径0.76m 深さ0.80m		出土遺物：礫
20	SK1232 長径0.88m 短径0.83m 深さ0.27m		出土遺物：無釉陶器甕
21	SK1233 長径0.90m 短径0.84m 深さ0.15m		出土遺物：土器小片

22	SK1235 長径1.40m 短径1.10m 深さ1.13m		出土遺物：カワラケ
23	SK1236 長径1.20m 短径1.10m 深さ1.01m		出土遺物：なし
24	SK1237 長径1.32m 短径1.12m 深さ0.73m		出土遺物：無釉陶器擂鉢
25	SK1238 長径1.53m 短径1.10m 深さ1.06m		出土遺物：土器小片
26	SK1240 長径2.70m 短径2.06m 深さ1.20m		出土遺物：白磁椀、青磁椀、無釉陶器甕・擂鉢、土鍋、鉄滓、カワラケ、円礫、礫
27	SK1242 長径1.02m 短径0.92m 深さ0.35m		出土遺物：なし
28	SK1244 長径0.96m 短径0.88m 深さ0.42m		出土遺物：なし
29	SK1248 長径1.38m 短径1.34m 深さ1.15m		出土遺物：無釉陶器甕、カワラケ
30	SK1250 長径2.36m 短径2.20m 深さ1.32m		出土遺物：無釉陶器甕、カワラケ、礫
31	SK1234 長径1.00m 短径0.82m 深さ0.34m		出土遺物：土器小片

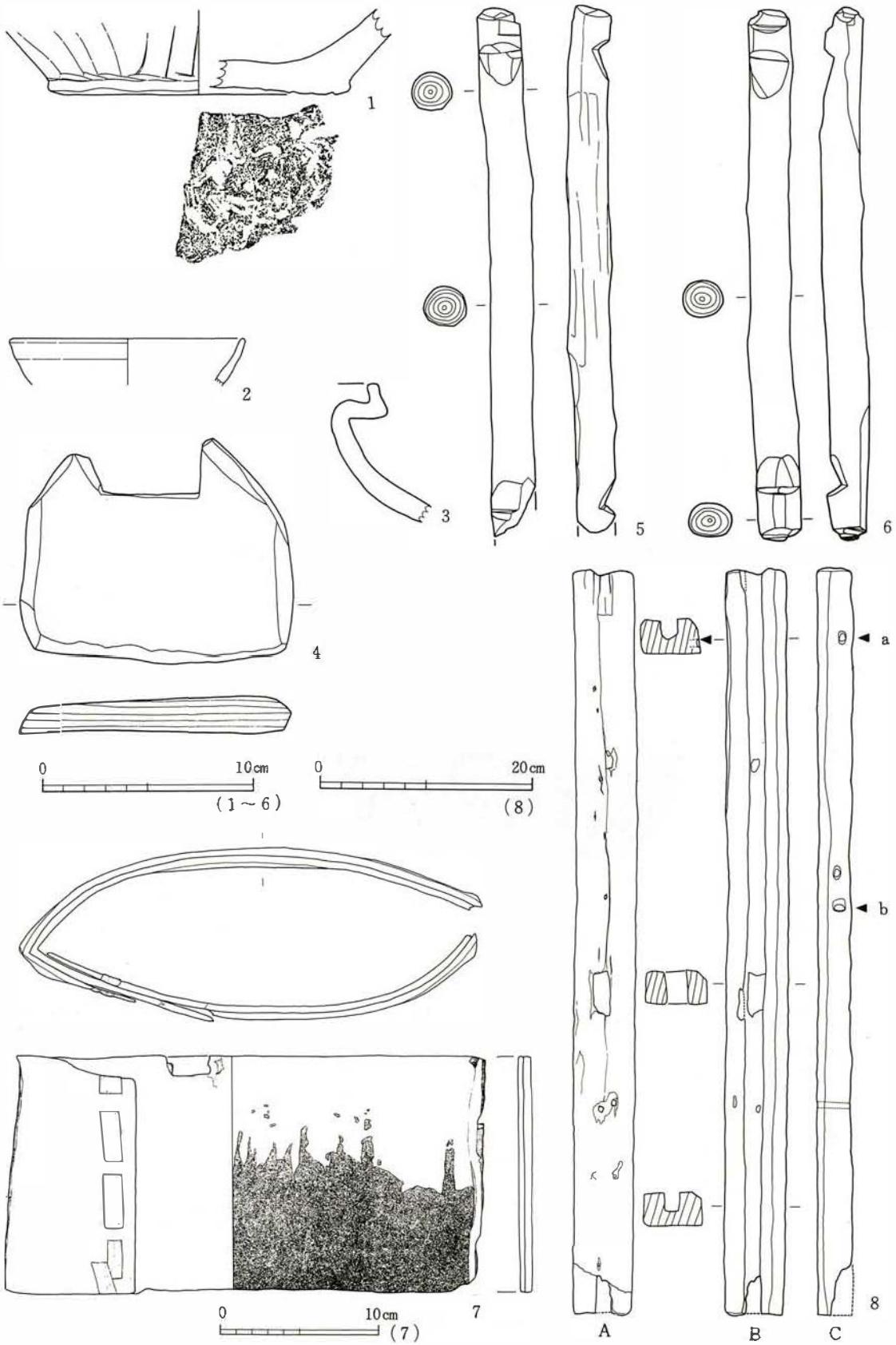
32	SK1278 長径1.72m 短径1.48m 深さ0.71m		出土遺物：無釉陶器擂鉢、不明土製品
33	SK1279 長径1.20m 短径0.98m 深さ0.97m		出土遺物：なし

第Ⅲ層におおわれ第Ⅳ層の上面で検出　　SK1220・1284
他は第Ⅲ層との関係不明

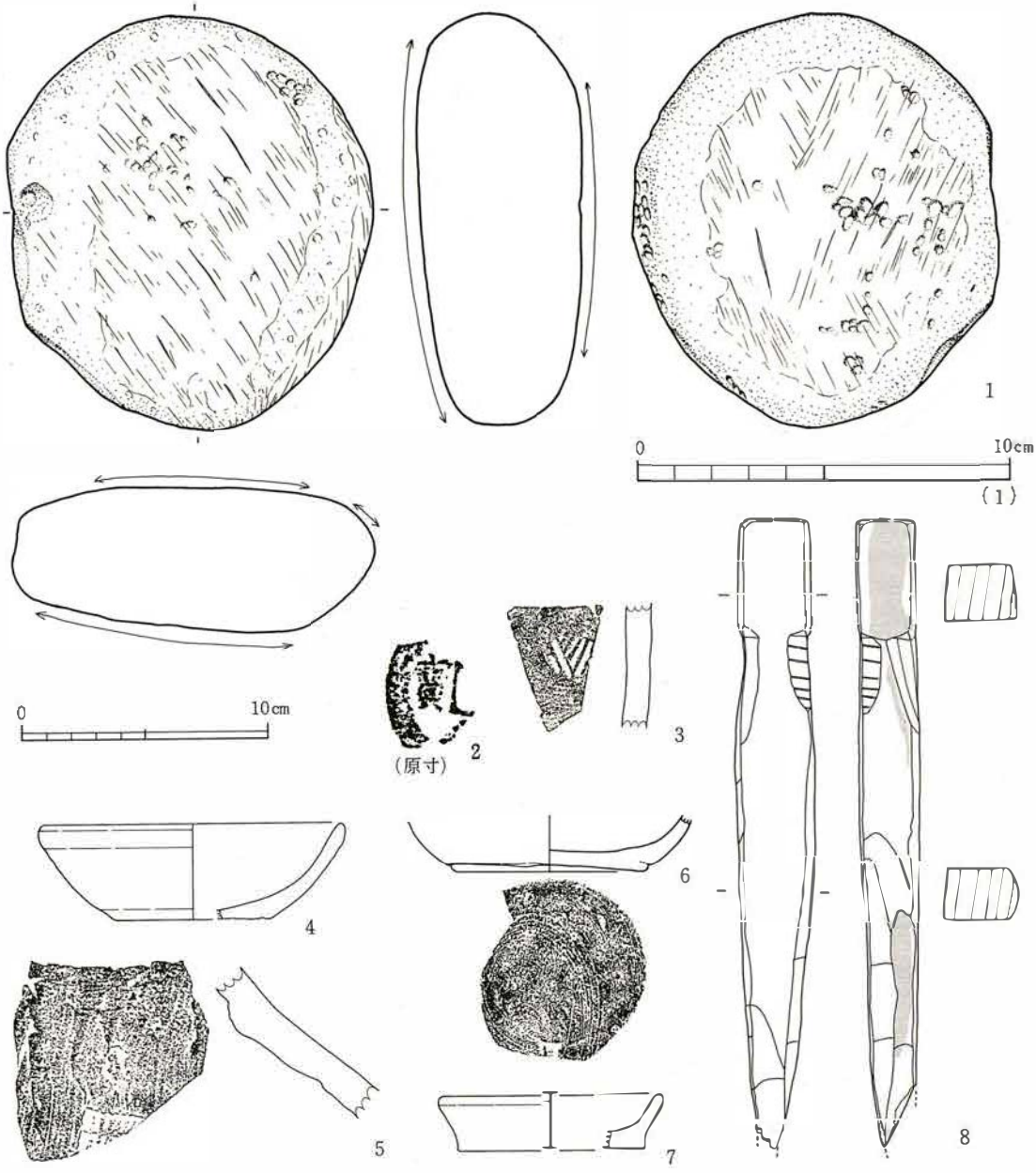


番号	遺物名	遺構・層位	外面調整	内面調整	備考	図版	登録No.
第138図 1	板草履	SK 1208	ℓ～3			39—5	R- 22
2	無釉陶器 擂鉢	SK 1214	ℓ～2	ヨコナデ	ヨコナデ		R-192
3	漆器 椀	SK 1214	ℓ～2	黒漆塗り	黒漆塗り		R- 54
4	須恵器 長頸瓶	SK 1214	ℓ～2	ロクロナデ	ロクロナデ		R- 18
5	須恵器 長頸瓶	SK 1214	ℓ～2	ロクロナデ	ロクロナデ		R- 17
第139図 1	無釉陶器 甕	SK 1207	ℓ～4	ヘラナデ		24—7	R- 89
2	カワラケ	SK 1207	ℓ～2	ロクロナデ	ロクロナデ		R-280
3	無釉陶器 甕	SK 1207	ℓ～4	口縁ヨコナデ	ヨコナデ	23—17	R- 80
4	不明木製品	SK 1207	ℓ～4		周縁を面取り	40—13	R-37
5	把手	SK 1207	ℓ～6		樹皮を削り取っている	36—2	R- 40
6	把手	SK 1207	ℓ～6		樹皮を残す	36—3	R- 41
7	曲物容器	SK 1207	ℓ～6		下半部に黒漆付着	36—1	R- 39
8	農具部品?	SK 1207	ℓ～4		a・b 2ケ所に鉄釘	42—1	R- 36

第138図　土壙出土遺物（1）

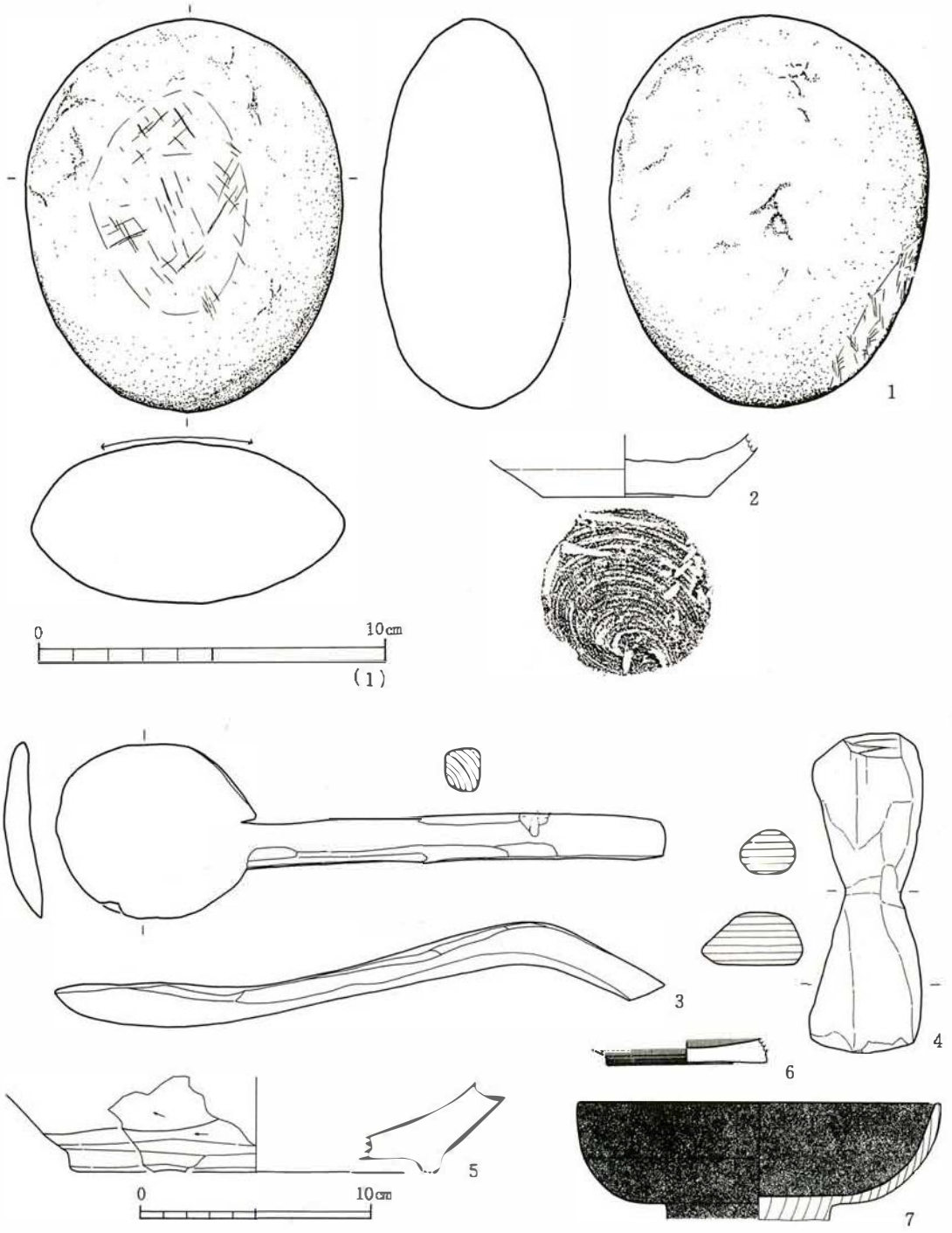


第139図　土壙出土遺物 (2)



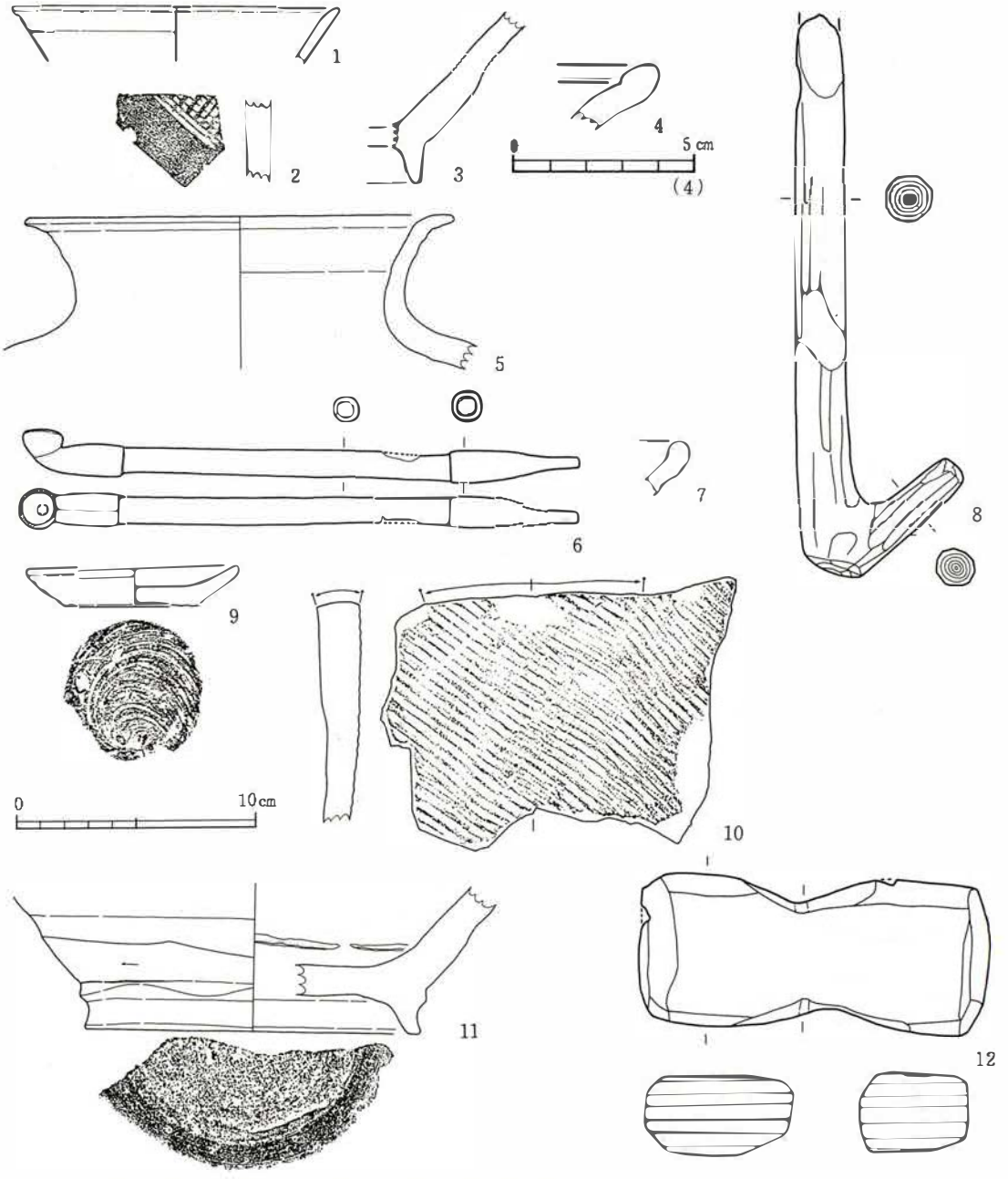
番号	遺物名	遺構・層位	外面調整	内面調整	備考	図版	登録No
1	使用痕のある礫	SK 1207 ℓ～4					R-377
2	古銭	SK 1218			銭種不明		
3	無釉陶器 甕	SK 1218 ℓ～2	ハケメ	ヘラナデ(ハケメ?)	押印あり		R-78
4	カワラケ	SK 1217 ℓ～1	ロクロナデ	ロクロナデ			R-275
5	無釉陶器 甕	SK 1217 ℓ～1	ハケメ	ヨコナデ	押印あり		R-102
6	カワラケ	SK 1224 ℓ～1	ロクロナデ	ロクロナデ	底部回転糸切り		R-268
7	カワラケ	SK 1224 ℓ～1	ロクロナデ	ロクロナデ			R-281
8	不明木製品	SK 1223 ℓ～2				40—7	R- 45

第140図　土壙出土遺物 (3)



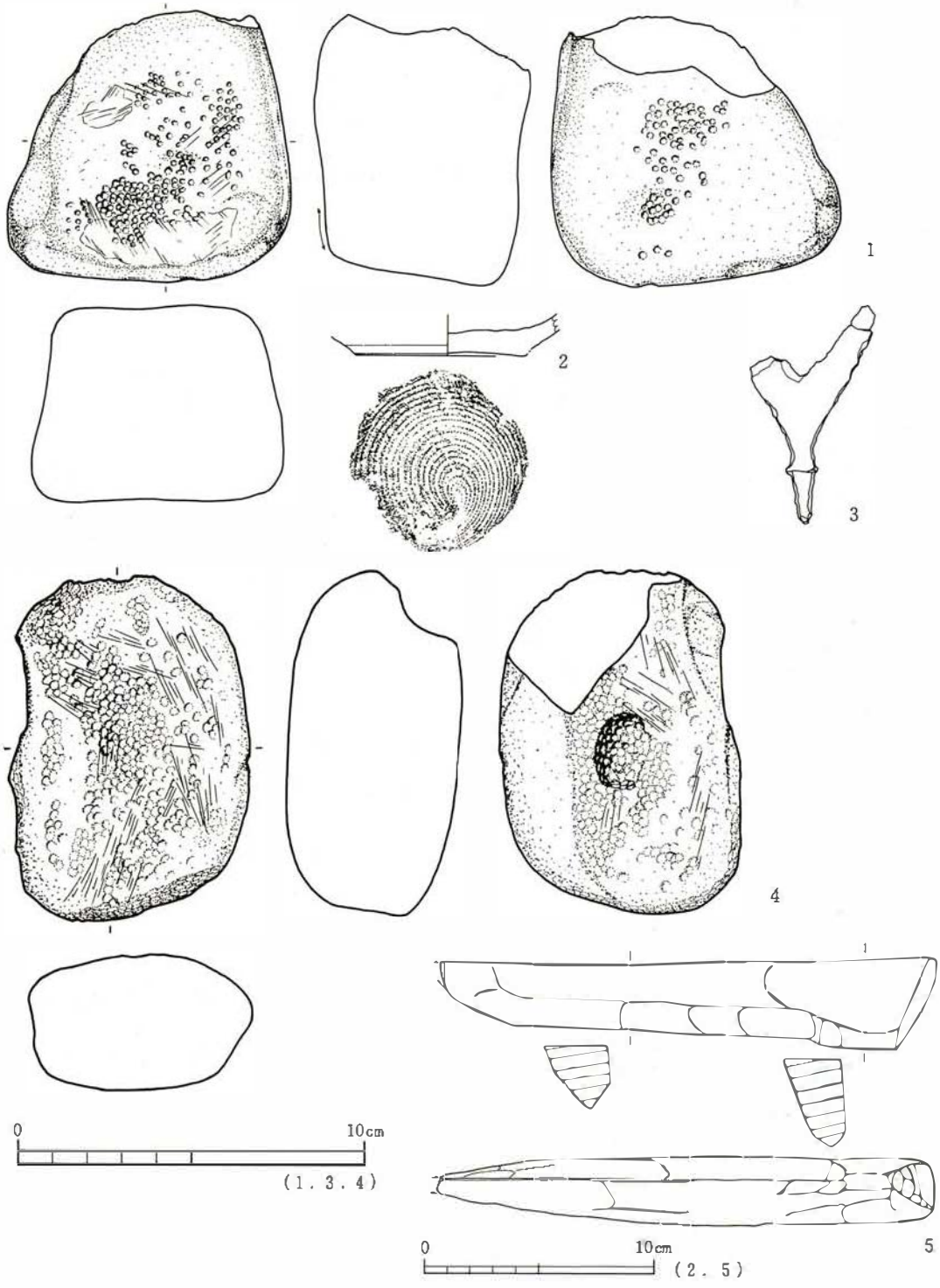
番号	遺物名	遺構・層位	外面調整	内面調整	備考	図版	登録No.
1	使用痕のある礫	SK 1220 ℓ～2					R-364
2	カワラケ	SK 1220 ℓ～2	ロクロナデ	ロクロナデ	底部回転糸切り痕 椀状の床痕あり	32—7	R-266
3	杓子	SK 1228 ℓ～1				35—13	R- 23
4	もじり編み用木製錘	SK 1228 ℓ～2				40—3	R- 25
5	無釉陶器 擂鉢	SK 1228 ℓ～1	ヘラケズリ				R-142
6	緑釉陶器 椀(皿)	SK 1228 ℓ～1	緑釉	緑釉		17—1	R-259
7	漆器 椀	SK 1228 ℓ～2	黒漆塗り	黒漆塗り		35—1	R- 24

第141図 土壙出土遺物 (4)



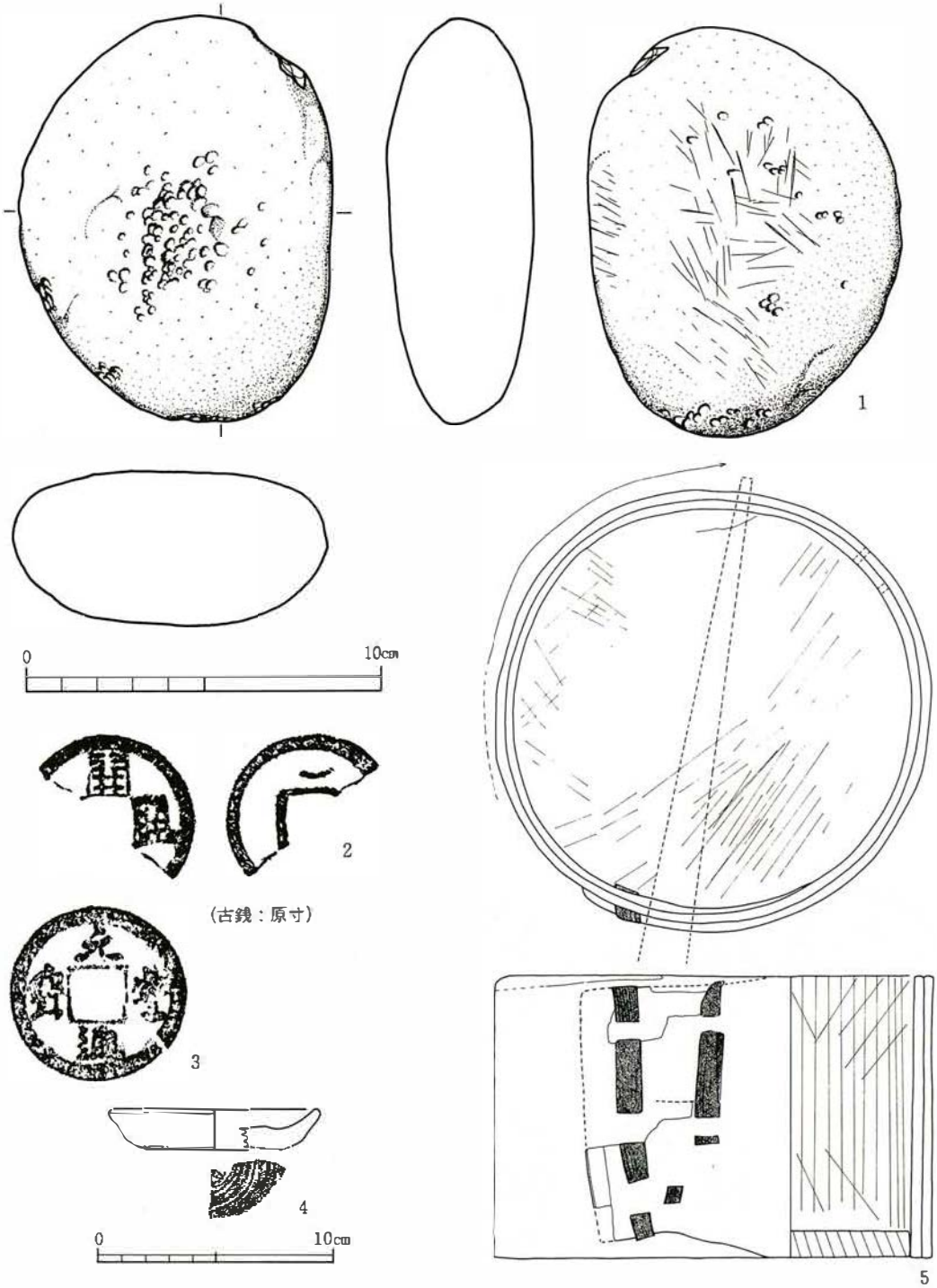
番号	遺物名	遺構・層位	外面調整	内面調整	備考	図版	登録No.
1	白磁 椀	SK1240 ℓ～2			口縁部「口売げ」	18－2	R-238
2	無釉陶器 甕	SK1240 ℓ～1			押印あり		R-76
3	無釉陶器 擂鉢	SK1240 ℓ～1	ヨコナデ、ヘラケズリ			25－17	R-168
4	土鍋	SK1240 ℓ～1	ヨコナデ	ヨコナデ	外面に煤付着	30－7	R-292
5	施釉陶器 壺	SK1209 ℓ～2	ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部に釉ハケ塗り	24－3	R-88
6	煙管	SK1215 ℓ～1				42－4	R-52
7	無釉陶器 擂鉢	SK1215 ℓ～1	ヨコナデ	ヨコナデ			R-152
8	鉤	SK1310 ℓ～1				40－5	R-49
9	カワラケ	SK1235 ℓ～3	ロクロナデ	ロクロナデ	底部回転糸切り痕	31－5	R-272
10	研磨痕のある須恵器片	SK1235 ℓ～3	タタキ	アテ具痕			R-22
11	無釉陶器 擂鉢	SK1237 ℓ～1	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ	外底、高台畳付きに黒色の付着物 底部砂底	26－3	R-128
12	もじり編み用木製錘	SK1245 ℓ～2				40－2	R-61

第142図 土壙出土遺物 (5)



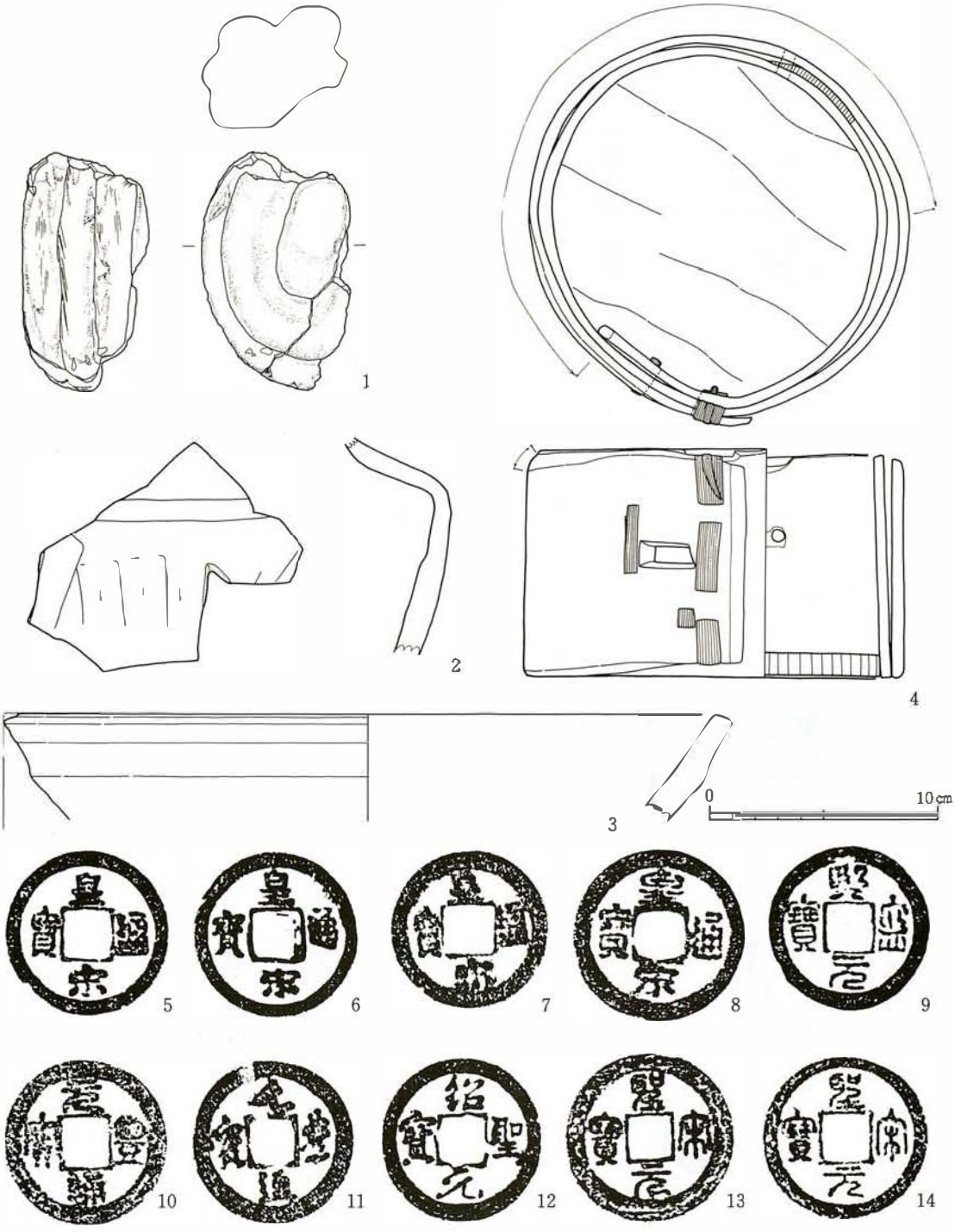
番号	遺物名	遺構・層位		外面調整	内面調整	備考	図版	登録No
1	使用痕のある礫	SK 1250	ℓ～1					R-356
2	カワラケ	SK 1250	ℓ～2	ロクロナデ	ロクロナデ	底部回転糸切り痕	34－4	R-267
3	鉄鏃	SK 1291	ℓ～1				43－10	
4	使用痕のある礫	SK 1241	ℓ～1					R-382
5	刀子形木製品	SK 1241	ℓ～2				37－8	R- 47

第143図　土壙出土遺物 (6)



番号	遺物名	遺構・層位	外面調整	内面調整	備考	図版	登録No.
1	使用痕のある礫	SK 1213 ℓ～2					
2	古 銭（開通元宝）	SK 1280 ℓ～1			621年初鋳	44－1	
3	古 銭（元豊通宝）	SK 1280 ℓ～1			1078年初鋳	44－20	
4	カワラケ	SK 1227 ℓ～1	ロクロナデ	ロクロナデ	底部回転糸切り痕		R-285
5	柄 杓	SK 1227 ℓ～3					R- 48

第144図　土壙出土遺物 (7)



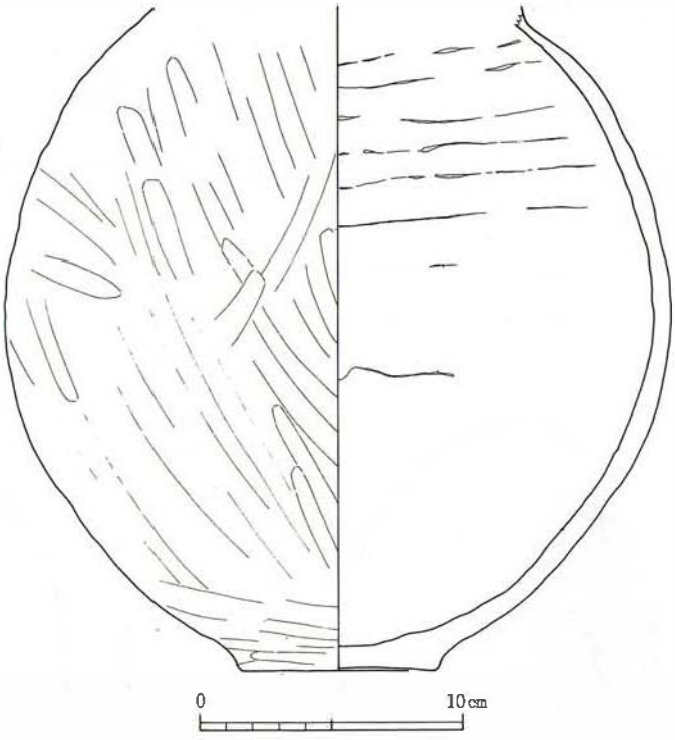
番号	遺物名	遺構・層位	外面調整	内面調整	備考	図版	登録No.
1	不明土製品	SK 1278 1層	ヘラ				R-301
2	無釉陶器 壺	SK 1273 1層	ヘラケズリ	ヨコナデ		24—13	R- 83
3	無釉陶器 擂鉢	SK 1273 1層	ヨコナデ	ヨコナデ		26—16	R-159
4	柄杓	SK 1273 2層			口縁の一部磨耗	36—5	R- 61
5~8	古銭（皇宋通宝）	SK 1206 3層	1038年初鋳	9 古銭（熙寧元宝）	SK 1206 3層	1068年初鋳	
10.11	古銭（元豊通宝）	SK 1206 3層	1078年初鋳	12 古銭（紹聖元宝）	SK 1206 3層	1094年初鋳	
13.14	古銭（聖宋元宝）	SK 1206 3層	1101年初鋳				

第145図　土壙出土遺物（8）

F．遺構外出土の遺物

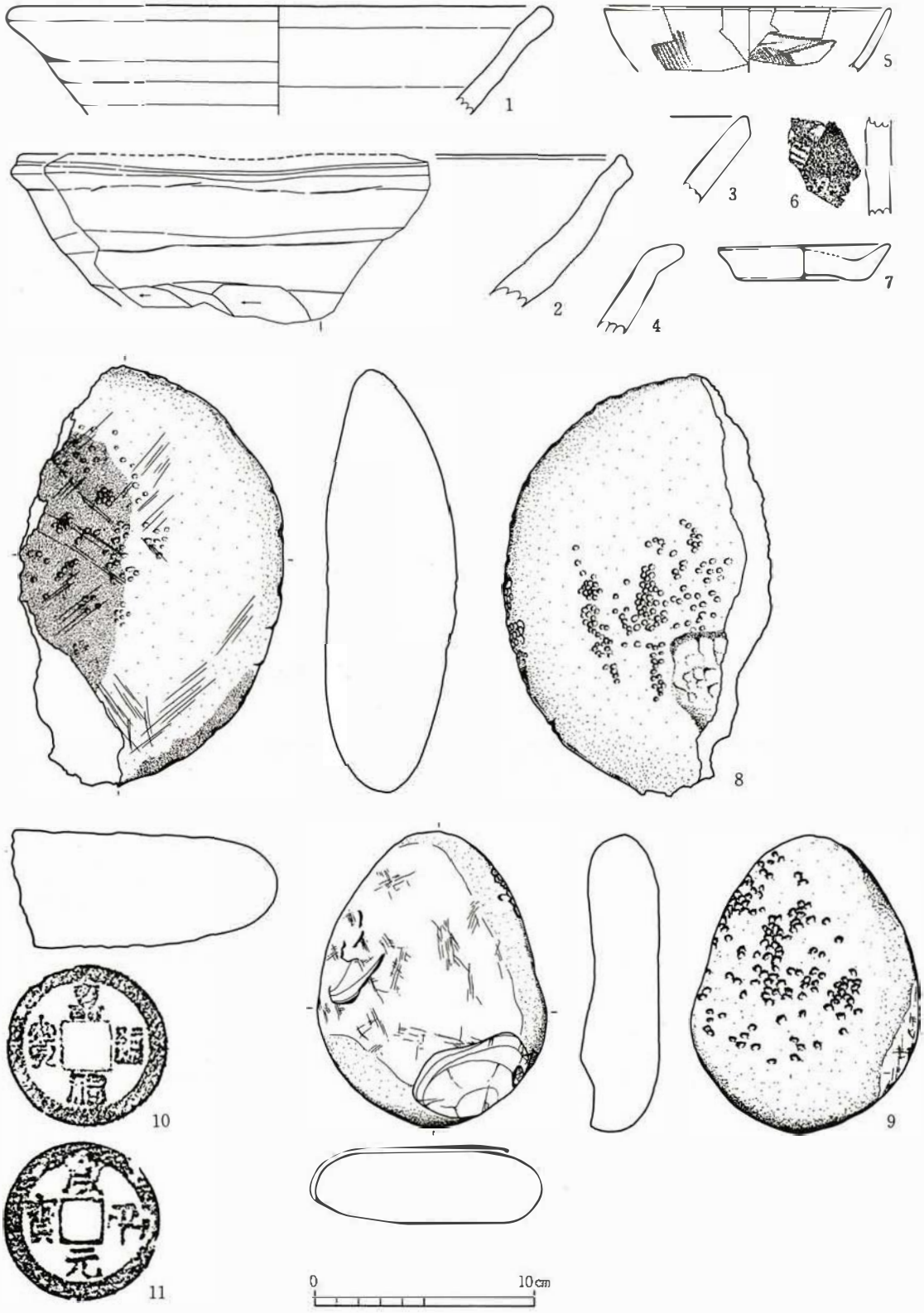
ここでは、各堆積層や表土（第Ⅰ・Ⅱ層）などから出土した遺物の内、主なものについて実測図を掲げ、その概要を表にまとめた。

第Ⅴ層出土遺物：第146図は土師器壺、或は甕である。口縁部は失なわれているが、体部から底部にかけてはほぼ完全に復元することができた。外面の調整は、体部を斜め方向に、底部付近を横方向に粗くヘラミガキしている。内面はヨコナデ調整しているが、成形時の粘土紐巻き上げ痕が明瞭に残っている（登録No R－1）。

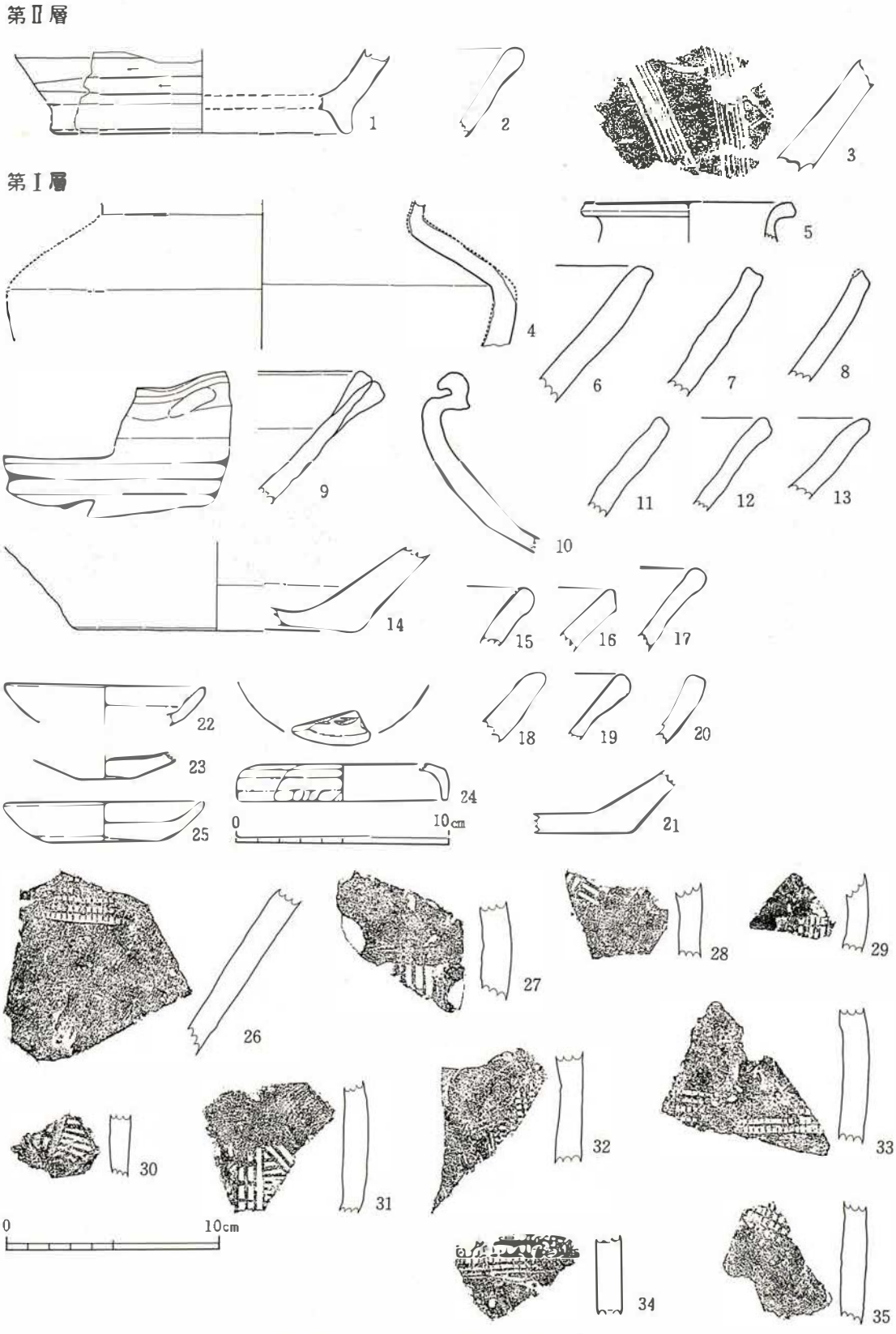


第146図　第Ⅴ層出土遺物

番号	遺物名	層位	外面調整	内面調整	備考	図版	登録No.
第147図 1	無釉陶器　擂鉢	第Ⅲ層	ヘラケズリ	ヨコナデ			R-129
2	無釉陶器　擂鉢	第Ⅲ層	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ		27—1	R-157
3	無釉陶器　擂鉢	第Ⅲ層	ヨコナデ	ヨコナデ			R-132
4	無釉陶器　擂鉢	第Ⅲ層	ヨコナデ	ヨコナデ			R-296
5	青磁　椀	第Ⅲ層			内外面に櫛目文様	19—1	R-205
6	無釉陶器　甕	第Ⅲ層			押印あり		R-119
7	カワラケ	第Ⅲ層	ロクロナデ	ロクロナデ		31—2	R-271
8	使用痕のある礫	第Ⅲ層					R-350
9	使用痕のある礫	第Ⅲ層					R-352
10	古銭（嘉祐通宝）	第Ⅲ層			北宋　1056～1063年初鋳	44—13	
11	古銭（祐平元宝）	第Ⅲ層			北宋　998年初鋳	44—2	
第148図 1	無釉陶器　擂鉢	第Ⅱ層	ヘラケズリ	ヨコナデ			R-144
2	無釉陶器　擂鉢	第Ⅱ層	ヨコナデ	ヨコナデ			R-146
3	無釉陶器　擂鉢	第Ⅱ層	ヨコナデ		1単位6条の筋目あり	28—3	R-189
4	無釉陶器　甕	第Ⅰ層		ヨコナデ	内外面とも表面が細かく剥離		R- 71
5	無釉陶器　甕	第Ⅰ層	ヨコナデ	ヨコナデ	色調や口縁部の形態が猿投窯の製品に類似	24—4	R- 94
6	無釉陶器　擂鉢	第Ⅰ層	ヨコナデ	ヨコナデ			R-197
7	無釉陶器　擂鉢	第Ⅰ層	ヨコナデ	ヨコナデ			R-164
8	無釉陶器　擂鉢	第Ⅰ層	ヨコナデ	ヨコナデ			R-169
9	無釉陶器　擂鉢	第Ⅰ層	ヨコナデ	ヨコナデ		25—9	R-140
10	無釉陶器　甕	第Ⅰ層	ヨコナデ	ヨコナデ			R-70
11	無釉陶器　擂鉢	第Ⅰ層	ヨコナデ	ヨコナデ			R-190
12	無釉陶器　擂鉢	第Ⅰ層	ヨコナデ	ヨコナデ			R-131
13	無釉陶器　擂鉢	第Ⅰ層	ヨコナデ	ヨコナデ		25—14	R-145
14	無釉陶器　擂鉢	第Ⅰ層	ヨコナデ	ヨコナデ			R-165
15	無釉陶器　擂鉢	第Ⅰ層	ヨコナデ	ヨコナデ			R-150
16	無釉陶器　擂鉢	第Ⅰ層	ヨコナデ	ヨコナデ			R-153
17	無釉陶器　擂鉢	第Ⅰ層	ヨコナデ	ヨコナデ			R-147
18	無釉陶器　擂鉢	第Ⅰ層	ヨコナデ	ヨコナデ			R-172

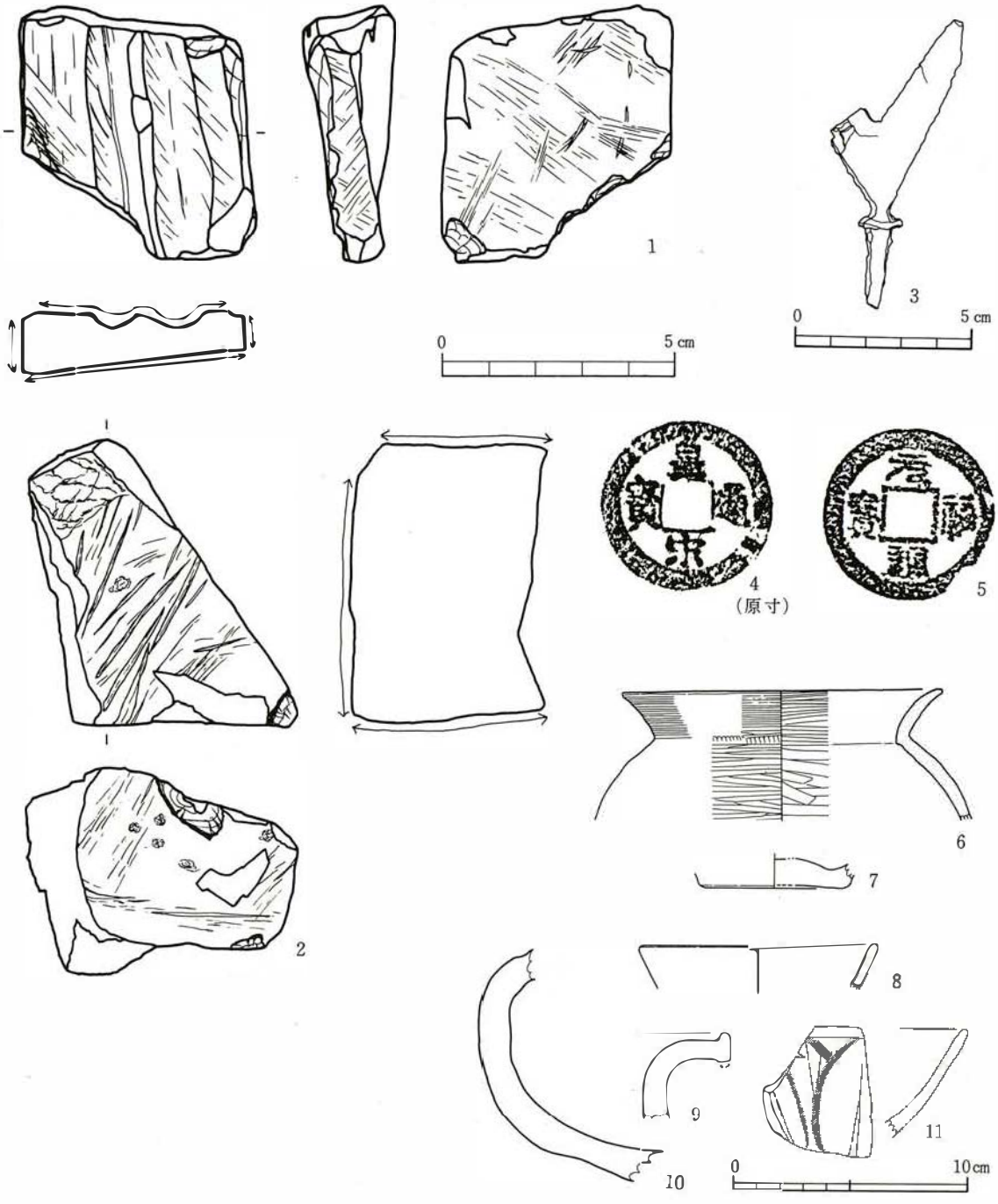


第147図　第Ⅲ層出土遺物



第148図　第Ⅰ・Ⅱ層出土遺物 (1)

第Ⅰ層



第149図　第Ⅰ層出土遺物 (2)

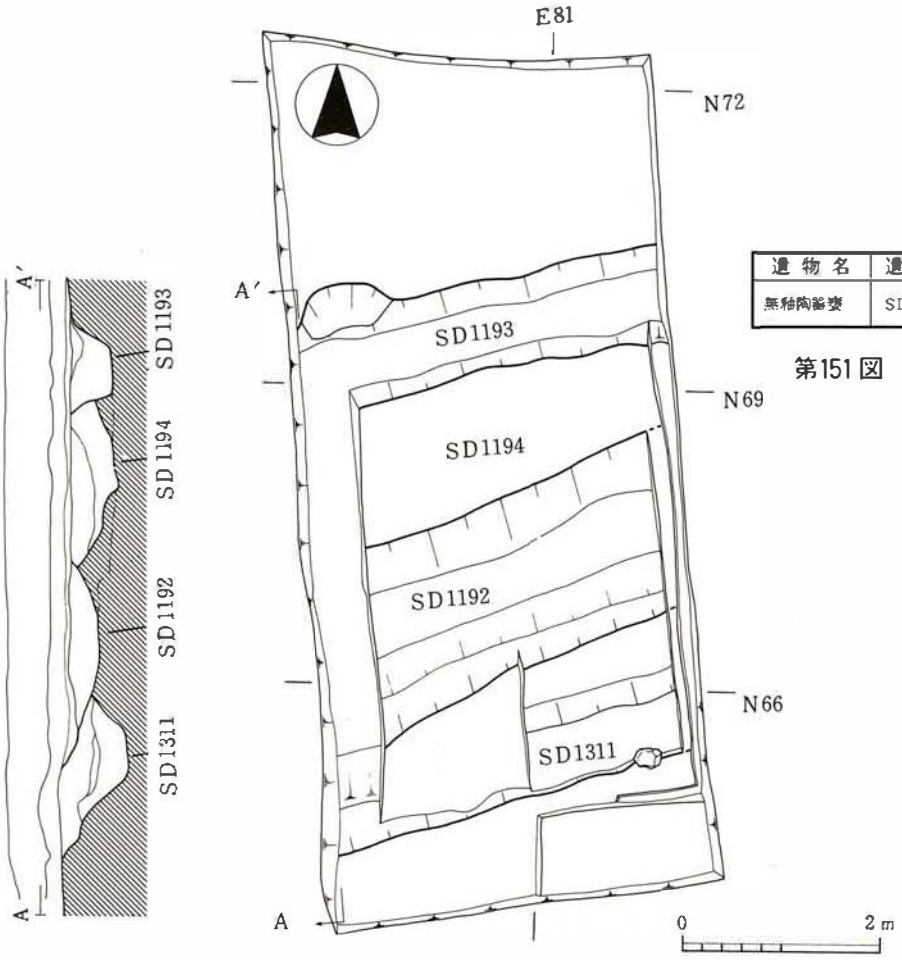
番号	遺物名	層位	外面調整	内面調整	備考	図版	登録No
第148図 9	無釉陶器 擂鉢	第Ⅰ層	ヨコナデ	ヨコナデ			R-149
20	無釉陶器 擂鉢	第Ⅰ層	ヨコナデ	ヨコナデ			R-174
21	無釉陶器 擂鉢	第Ⅰ層	ヨコナデ	ヨコナデ			R-183
22	青磁 皿					19－2	R-233
23	青磁 皿				内面に櫛目文様	19－3	R-235
24	白磁 合子					18－11	R-245
25	カワラケ		ロクロナデ	ロクロナデ			R-274
26	無釉陶器 壺			ヨコナデ	押印あり		R-112
27	無釉陶器 壺			ヨコナデ	押印あり		R-114
28	無釉陶器 壺			ヨコナデ	押印あり		R-110
29	無釉陶器 壺			ヨコナデ	押印あり		R-113
30	無釉陶器 壺			ヨコナデ	押印あり		R-116
31	無釉陶器 壺			ヨコナデ	押印あり		R-106
32	無釉陶器 壺			ヨコナデ	押印あり		R-107
33	無釉陶器 壺			ヨコナデ	押印あり		R-108
34	無釉陶器 壺			ヨコナデ	押印あり		R-117
35	無釉陶器 壺			ヨコナデ	押印あり		R-111
第149図 1	砥石						R-330
2	砥石						R-316
3	鉄鏃					43－9	
4	古銭（北宋通宝）				北宋 1038年初鋳		
5	古銭（元祐通宝）				北宋 1078年初鋳		
6	土師器 甕	表採	ヘラミガキ	ヨコナデ、ヘラミガキ			R-388
7	カワラケ	近代以降の溝	ロクロナデ	ロクロナデ			R-277
8	青磁 椀	表採					R-234
9	無釉陶器 壺	表採	ヨコナデ	ヨコナデ			R- 79
10	無釉陶器 甕	表採	ヨコナデ	ヨコナデ			R- 84
11	青磁 椀	表採			外面に鎬蓮弁文	20－5	

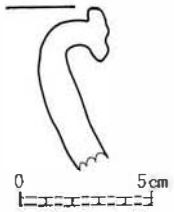
G．北トレンチの調査

第５・６次調査で発見したＳＸ850東西道路跡は、本調査区の西側第８次調査区においても検出することができた（註）。この道路跡は、本調査区の北端部を通過することが予想されたため、その存在を確認することを目的とし、想定位置に南北９ｍ、東西４ｍのトレンチを設定した。その結果、表土の下は古墳時代から中世にかけての遺構検出面である黄褐色の砂層となっており、その層上で重複する東西溝跡４条を発見した。それらの概要は表に示した通りである。これらの溝跡の内ＳＤ1194溝跡は、中世陶器が出土したＳＤ1192溝跡や、それと類似した埋土をもつＳＤ1193溝跡より古く、第６調査区で検出したＳＸ850東西道路跡南側溝と埋土の様子が近似している。小範囲の調査ではあるが、位置関係および埋土の類似性からＳＤ1194溝跡が東西道路跡の南側溝跡と考えておきたい。

	遺構名	上幅	深さ	方向	備考
1	ＳＤ１１９２	1.7ｍ	0.3ｍ	Ｅ－24°－Ｎ	
2	ＳＤ１１９３	1.0ｍ	0.4ｍ	Ｅ－13°－Ｎ	植物の種子を多く出土
3	ＳＤ１１９４	1.7ｍ	0.4ｍ		埋土に砂を多く含む
4	ＳＤ１３１１	1.6ｍ	0.7ｍ	Ｅ－18°－Ｎ	

表10　北トレンチ発見の溝跡の概要





遺物名	遺構・層位	図版	登録No.
無釉陶器甕	SD1192・ℓ～1	23－9	R－73

第151図　SD 1192溝跡出土遺物

第150図　北トレンチ全体図と出土遺物

第V章　考　　察

1.　古墳時代

古代の遺構としては、前期に属するSD 1186溝跡が発見されている。同溝跡から出土した土師器甕は塩釜式に属し、該期の土器を詳細に分析した丹羽茂氏の編年（註1）によると第Ⅱ段階に相当する。本溝跡の性格については不明である。また、第4次調査を実施した時点では無遺物層と見ていた第V層は第11次調査区でも調査区南半部にのみ堆積していた。この層からは、土師器2個体がそれぞれ潰れた状態で出土している（第146図）。口縁部など特徴的な部分が失われているため年代については明らかにできないが、長胴気味で球形の胴部をもち、外面全体をヘラミガキするという特徴は鶴ノ丸遺跡（志波姫町）第6住居跡出土資料に類似するものがある（註2、同書第13図9）。丹羽編年では第ⅡB段階に位置付けられている。また、第11

次調査区のすぐ南側に隣接する第6次調査区の第Ⅴ層からも丹羽氏が第ⅡA段階に位置づけているものと同様の特徴をもつ土師器杯が出土している（未報告）。このようなことから寿福寺地区一帯の第Ⅴ層とした黒褐色粘質土層は古墳時代前期の堆積層と見ることができよう。

第4・11次調査区において古墳時代の遺構の存在は極めて希薄であったと言える。

註1　宮城県教育委員会「今熊野遺跡Ⅰ―古代編―」『宮城県文化財調査報告書』第104集 1985

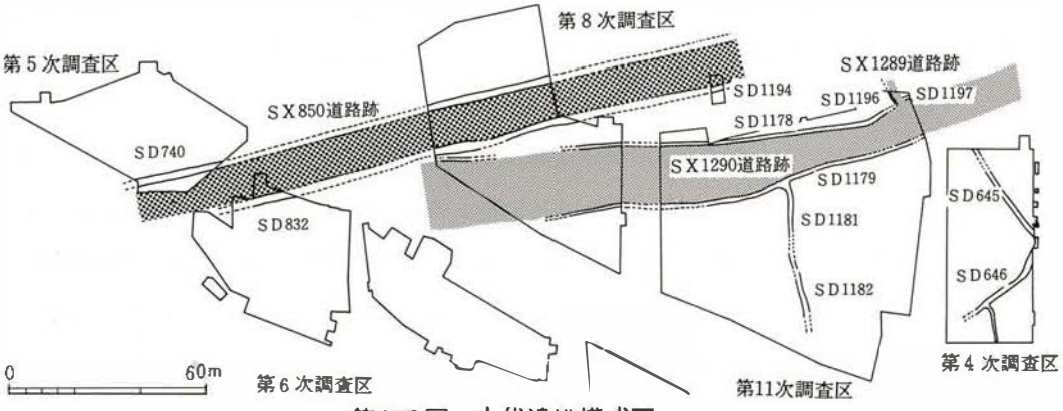
註2　宮城県教育委員会「鶴ノ丸遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第81集　1981

2. 古　代

古代の遺構としては、SD 653・645・646・647溝跡（第4次調査区）、SX 850道路跡、SD1180・1187・1178・1196・1179・1181・1182溝跡（第11次調査区）などが発見されている。これらの溝跡の中には、10世紀前半代に降下したとされている灰白色火山灰が埋土中に自然堆積しているものと、火山灰が堆積していないものとがあり、遺構間に重複関係があるものでみると後者はすべて前者より古いものであることを確認している。後者の溝跡については、出土遺物が少なく、年代は限定できないが、SD 653溝跡からは最上層より黒笹14号窯式の灰釉陶器平瓶が出土しており、その年代観から9世紀頃に埋没したと見られる（註3）。

火山灰が埋土中に自然堆積しているSD 645・646・1178・1179・1181・1182溝跡は、10世紀前半頃同時に存在していたと見ることができる。この内、SD1178溝跡以外の5条の溝跡は、SD1179溝跡を北辺、SD 645溝跡を東辺、SD 646溝跡を南辺、SD1181・1182溝跡を西辺とする区画溝と考えられる。規模は、北辺約55m・南辺約80m、東辺約45m、西辺約65mを計り、南辺の長い歪んだ台形を呈している。区画溝の内側からはそれと同時期の遺構は確認できなかった。

SX 850道路跡（註4）は、路幅10m以上を計る平安時代の大規模な道路跡である。同様の規模をもつ山王遺跡東町浦地区発見の道路跡とともに多賀城周辺における道路のあり方を考える上で注目されているものである。今回の調査でも南側溝の一部（SD1194溝跡）を確認する



第152図　古代遺構模式図

ことができた。これによって、第５次調査区から第11次調査区まで約180ｍにわたって検出したことになる。路幅については、側溝心々で計ると、第５・６次調査区で約13.5m、第８次調査区では12.5～14ｍである。方向は、ＳＤ832溝跡（第６次調査区で検出した南側溝跡）の西端とＳＤ1194溝跡西端のそれぞれ中心を結んだ線でみると、東で約14度北に偏している。

ＳＸ850道路跡と10世紀前半に降下したとされる灰白色火山灰との関係についてみると、第５次調査区のＳＤ740溝跡（北側溝）と第６次調査区のＳＤ832溝跡（南側溝）は降灰時には既に埋没していた状況を確認しており、側溝として機能していなかったと考えられる。また、側溝には改修された形跡は認められなかった。この道路跡を、ほぼ同じ規模をもつ山王遺跡東町浦地区発見の道路跡と比較すると、山王遺跡発見の道路跡は方向が多賀城外郭南辺築地の方向とほぼ一致していること、側溝に２～３回の改修が認められ、火山灰降下後も１～２回の改修が見られることなどいくつかの点で相異している。この内、方向についてみると山王遺跡の道路跡は多賀城とのかかわりを十分にうかがわせるのに対し、ＳＸ850道路跡は多賀城の政庁中軸線、外郭南辺のいずれの方向とも一致していない。しかし、両者の推定ラインをそのまま延長すると第11次調査区のすぐ東側のあたりで交差し更に延長するならば微高地からはずれて低湿地に入り込んでしまうことになる。これらの道路跡が微高地上に立地するためにはそれぞれの方向をそのまま保つのは無理である。現在のところ明確な根拠は示しえないが、山王・新田遺跡で発見した２条の道路跡は方向が異なるものの同一の道路である可能性が高く、多賀城に近い範囲はそれに強く規制され、本遺跡のようにやや離れた地域になると地形に合わせてつくられた、と推定しておきたい。次に存続年代についてみると、灰白色火山灰との関係から、本遺跡の道路跡は山王遺跡のものに比べかなり早い時期から維持されなくなってしまったと見ざるをえない状況である。この問題については第11次調査で発見したＳＤ1178・1179溝跡の在り方をめぐって検討してみる。

第11次調査区では、ＳＸ850道路跡の南側約16ｍの地点でＳＤ1178溝跡、約33ｍの地点でＳＤ1179溝跡を発見している。この２条の溝跡は緩やかに蛇行してはいるがほぼ平行して東西方向にのびている。これらの溝跡には同位置で３回の変遷が認められ、いずれも２時期目の埋土中に灰白色火山灰が自然堆積している。また、これらの溝跡の間にはそれと同時代の遺構は全く存在せず、遺構のない細長い空間が東西に長く続いているという状況である。このような遺構の在り方からＳＤ1178・1179溝跡の間は道路跡であり、両溝跡はその北側溝と南側溝であった可能性が高いと考えられる。また、ＳＤ1178溝跡は調査区東壁から約４ｍの地点で止まり、その先端部に幅0.4～0.3ｍの細いＳＤ1196溝跡がほぼ直角に連結している。ＳＤ1196溝跡の東側については中世の溝跡によって破壊されているため不明であるが、ＳＤ1178・1179溝跡からなる東西道路跡に連結する南北道路跡である可能性がある。ＳＤ1178溝跡の延長線上には約2.5

mの間隔をおいてＳＤ1197溝跡を検出している。平面的に確認したにすぎないが、埋土の様子はＳＤ1178溝跡と類似しており、ＳＤ1178溝跡と同様に東西道路の北側溝と考えられる。これらのことをまとめると、この東西道路跡は、幅約19～10m（側溝心々距離）、南北道路跡は幅1.5ｍ前後である。年代は、Ｂ期（２時期目）の埋土中に灰白色火山灰が自然堆積していることから大体10世紀前半を中心とする頃と考えられる。

このように、規模の大きな東西道路跡（ＳＸ1290）とそれに連結する小規模な南北道路跡（ＳＸ1289）を想定した訳であるが、いくつかの問題点もない訳ではない。第１に路幅が調査区西端部付近では約19m、東端部付近では約10mと一定でないことが挙げられる。第２にＳＸ850道路跡との関係である。灰白色火山灰が降下した時点でＳＸ850道路跡の南北側溝は若干のくぼみとしてしか残っていなかったこと、今回発見の道路跡ではこの火山灰におおわれるのは２時期目の側溝であることはこれまで述べた通りである。とすれば最も古いＡ期の段階ではＳＸ850道路跡の側溝は埋まりきらずに残っていた可能性もあり、廃絶していたとは言い切れない状況である。また、両側溝間にそれと同じ時期の遺構が存在しないという点についても、調査区全体にわたって少ないという状況のもとでは必ずしも道路跡と認定する際の決め手とはなりえないかもしれない。

第11次調査の結果から、ＳＸ850廃絶後、その南側に新しい道路の存在を考えた。その結果、新田遺跡の道路跡も山王遺跡のものと同様に灰白色火山灰降下後まで存続していた可能性がでてきたと言えよう。先に述べた問題点については今後の調査によって検証していきたい。

註３　櫓崎彰一「猿投窯の編年について」『愛知県古窯跡群分布調査報告（Ⅲ）』1983

註４　ＳＸ850という遺構番号は第５・６次調査区において付したものであり、第11次調査区においては別の番号を用いるべきところであるが、今回はその一部を確認したにすぎないため同番号を用いた。側溝については各調査区で異なる番号を付している。

3. 中　　世

第４・11次調査で発見した中世の遺構は、建物跡41棟、柱列跡８条、井戸跡46基、土壙75基、溝跡44条などであり、その他多くの小柱穴を発見している。以下、それらの変遷、年代などを検討し、本地区の性格について考える。

(1) 重複関係の整理

これまで述べたように、今回の調査区には第Ⅲ層とした堆積層が広範囲に分布している。発見した遺構には、この層におおわれるもの（Ａ期）とその上面から掘り込んだもの（Ｂ期）、更にその層との関係を把握できなかったものとがある。以下、第Ⅲ層との関係が明らかなものを中心として他の遺構との重複関係を整理すると次の通りである。

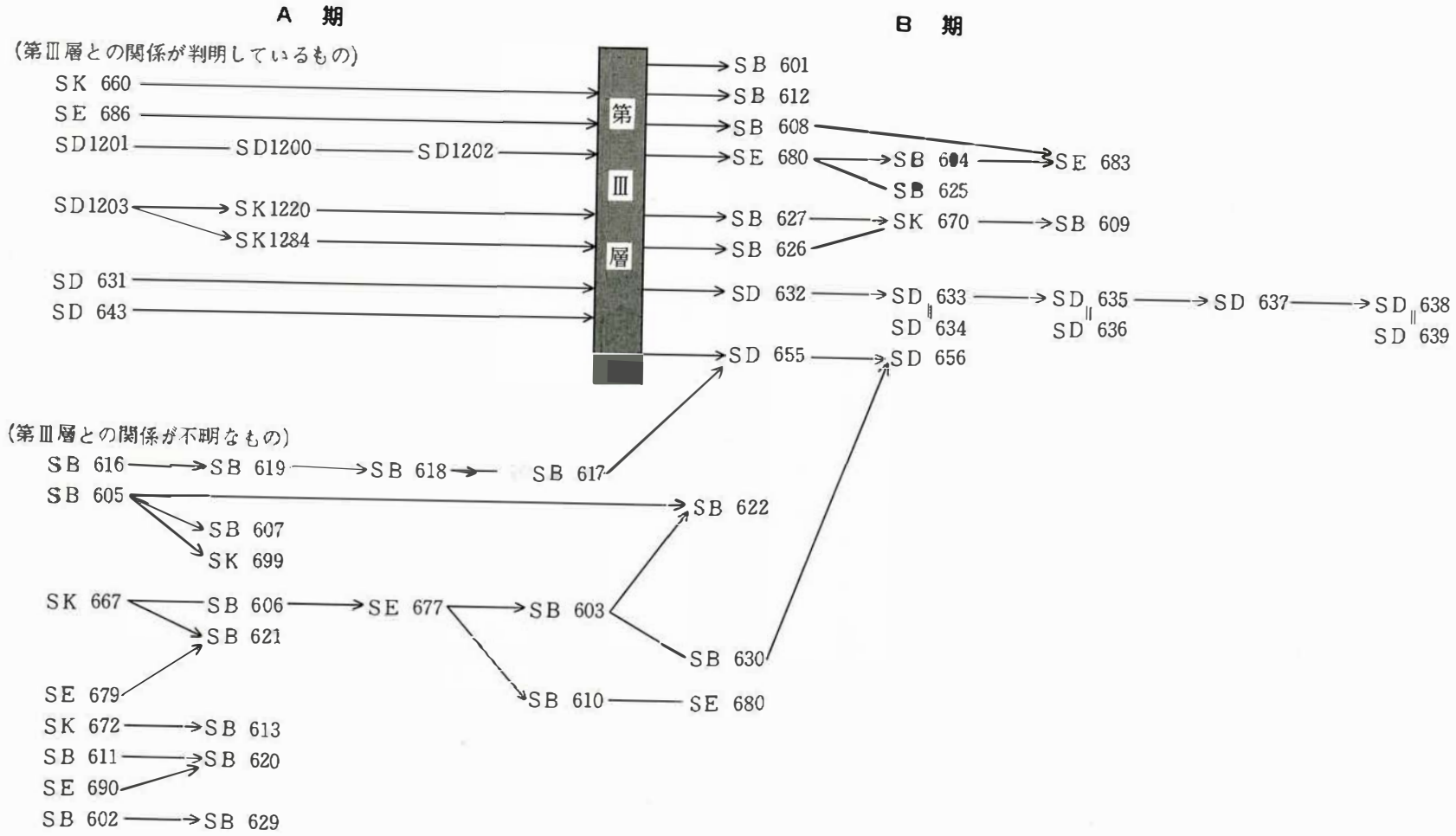

A 期
B 期
(第Ⅲ層との関係が判明しているもの)
SK 660
SE 686
SD1201
SD1200
SD1202
SD1203
SK1220
SK1284
SD 631
SD 643
第
Ⅲ
層
SB 601
SB 612
SB 608
SE 680
SB 604
SE 683
SB 625
SB 627
SK 670
SB 609
SB 626
SD 632
SD 633
SD 634
SD 635
SD 636
SD 637
SD 638
SD 639
SD 655
SD 656
(第Ⅲ層との関係が不明なもの)
SB 616
SB 619
SB 618
SB 617
SB 605
SB 622
SB 607
SK 699
SK 667
SB 606
SE 677
SB 603
SB 621
SB 630
SE 679
SB 610
SE 680
SK 672
SB 613
SB 611
SB 620
SE 690
SB 602
SB 629

表11　遺構の重複関係

建物跡についてみると、第Ⅲ層との関係を確認できたものはすべてB期のものであり、A期のものはない。溝跡については、第4次調査区の西側及び南側で検出したSD632～639 溝跡はB期のものであり、新しいものが順次南側及び西側へと位置がずれているが、おおよそ同じ形態をとっており、それらの間に他の遺構は入り込んでいないため連続して変遷したものと見ることができる。

次に第Ⅲ層との関係が把握できなかったもの、特に建物跡について検討を加える。第4次調査区の建物跡は、ある一定の範囲に集中し、複雑に重複しているが、方向についてみると次の3つのグループに大別することが可能である（註5）。

Ⅰ群：東西発掘基準線にほぼ一致するもの、及びE－3度～8度－Nの範囲にあるものを含む
　SB 606・607・605・604・602・610・601・603・608建物跡

Ⅱ群：E－2度～22度－Nの範囲にあるもの
　SB 615・616・611・614・612・613建物跡

Ⅲ群：E－7度～40度－Sの範囲にあるもの、及びE－38度～40度－Nの方位をとるもの
　SB 618・627・625・620・626・617・622・628・630・621・629建物跡
　SB623・624 建物跡

この内、Ⅰ群については、細かくみるとSB 605・607・606建物跡は0°前後、SB 604・602・610・601建物跡は3度～4度、SB603・608建物跡は6度～8度とかなり近接した数値を示していることが指摘できる。

第11次調査区の建物跡については柱痕跡を検出できた建物跡が少ないため細かな分類は難しい。第4次調査区の分類を参考にすると次の通りである。

Ⅰ群に近いもの：SB1167・1174・1288・1303建物跡

Ⅱ群に近いもの：SB1168・1169・1170・1171・1172・1173建物跡

Ⅱ群に近いものの内、SB1170・1173建物跡、SB1169・1171建物跡はそれぞれ近似した数値を示している。

次に、Ⅰ～Ⅲ群に分類した建物跡の重複関係についてみると次の通りである。

SB 603（Ⅰ群）→ SB 622・630（Ⅲ群）

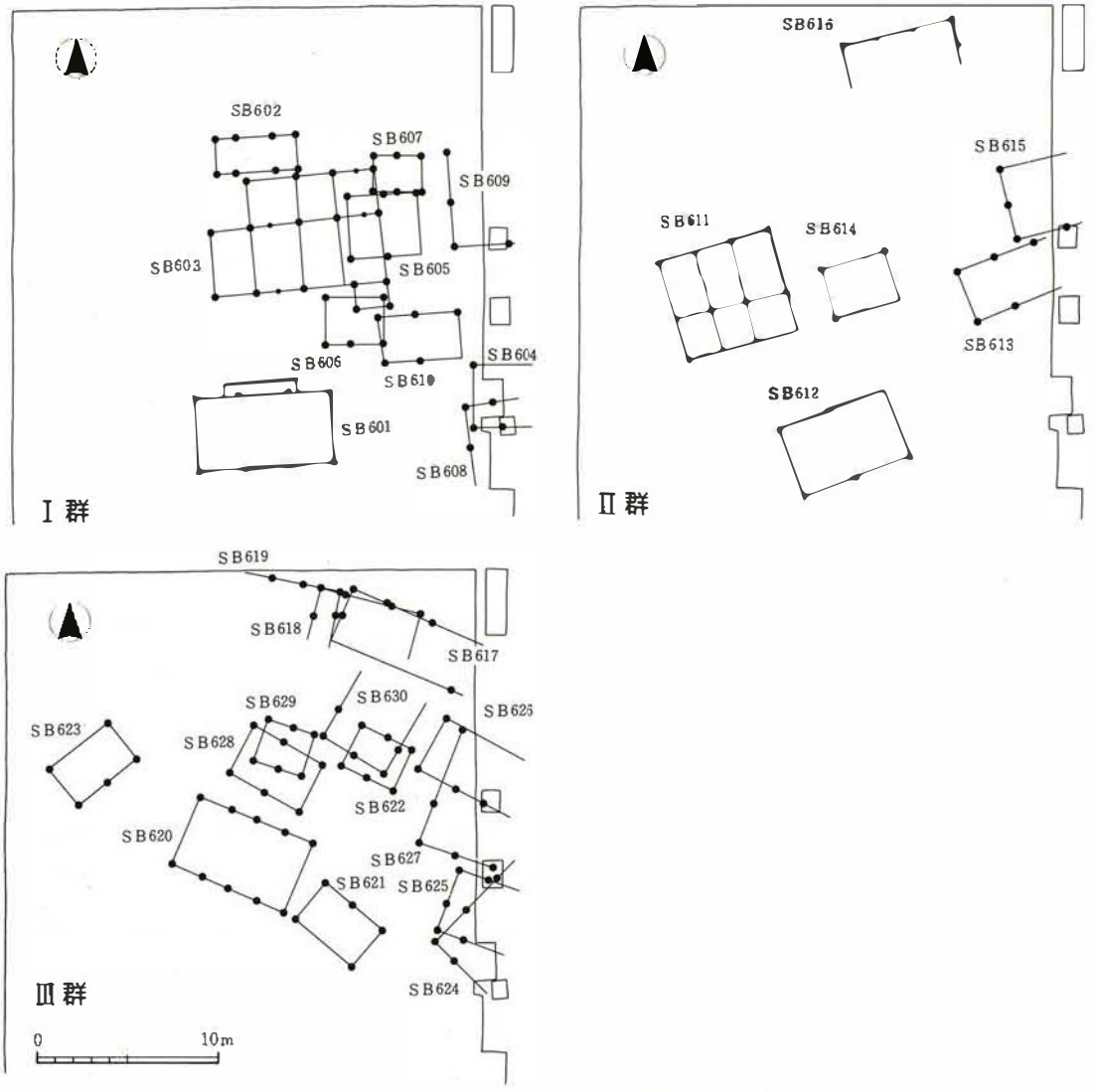
SB 605（Ⅰ群）→ SB 607（Ⅰ群）　　SB 603・605（Ⅰ群）→ SB 622（Ⅲ群）

SB 611（Ⅱ群）→ SB 620（Ⅱ群）　　SB 603（Ⅰ群）→ SB 630（Ⅲ群）

SB 605（Ⅰ群）→ SB 622（Ⅲ群）　　SB 602（Ⅰ群）→ SB 629（Ⅲ群）

以上のことから、Ⅰ群とⅢ群とではⅢ群の方が新しく、Ⅱ群とⅢ群とでもⅢ群が新しいという関係が読みとれる。Ⅰ群とⅡ群との間では重複関係はあるものの新旧関係は明らかにできなかった。これについてはⅠ群とⅡ群の建物のあり方を手がかりとして考えてみよう。調査区北

端部では類似した形態をとるＳＢ616・617・618・619建物跡を発見している。この内、最も古いＳＢ616建物跡のみがⅡ群で他はすべてⅢ群である。Ⅱ群とⅢ群との関係については先に見た通りであるから、この地点における建物はⅡ群の段階で出現し、Ⅲ群の段階へ連続していると見ることができる。このように遺構の連続性を考慮するならばⅠ群よりⅡ群の方が新しいと見ることができる。また、Ⅲ群とした建物跡からは近世以降の陶器や古銭が出土したものがあり、近世へ続いていく傾向をうかがうことができる。以上のことからⅠ群→Ⅱ群→Ⅲ群という変遷が成立する。Ⅰ群としたＳＢ602・604・608・609建物跡、Ⅱ群としたＳＢ612建物跡、Ⅲ群としたＳＢ625・626・627建物跡はＢ期に属することは先に見たところであるから（表11）、建物跡はすべてＢ期のものとすることができる。



第153図　建物跡変遷図

第４次調査区の西端部及び南半部で検出した溝跡についてはＳＤ632→ＳＤ634・633→ＳＤ635・636→ＳＤ637→ＳＤ638・639という変遷を確認している。この内、ＳＤ634とＳＤ633・ＳＤ635とＳＤ636、ＳＤ638とＳＤ639はそれぞれ一連の南北溝と東西溝であり、区画溝と考えられる。ＳＤ632・637についても新しい段階のもので破壊されてはいる　、それらと同様に区画溝の一部と見られ（註６）、ほぼ同位置における５時期の変遷とすることができる（古い順に１段階→２段階→３段階→４段階→５段階）。ところで、それらはすべて第Ⅲ層より新しい遺構であるが、第Ⅲ層より古いＳＤ631もほぼ同位置で検出されており、１段階に先行する区画溝の可能性がある。

建物跡Ⅰ～Ⅲ群と区画溝１～５段階の組み合わせについては明らかにできなかった。

(2) 遺構の年代

前節で整理したことをふまえ、遺構の年代を検討する。はじめに第Ⅲ層におおわれるＡ期の遺構、次いで第Ⅲ層の年代を明らかにし、その上で前時期の混入物が多いＢ期の遺構の年代を考える。

Ａ期に属することが明確な遺構の内、比較的遺物が多く出土したのはＳＤ631・1200・1202溝跡である。

ＳＤ631溝跡：底面に掘り込まれたＳＫ665土壙から13世紀後半の無釉陶器擂鉢が１点、２層からは14世紀前半の施釉陶器香炉が１点、１層からは13世紀前半の無釉陶器甕及びそれと同一個体と思われるものの破片約20点が出土している。

ＳＤ1200溝跡：無釉陶器甕・擂鉢は大部分が13世紀代のものである。擂鉢の中には14世紀前半まで降るタイプのものが３層から１点のみ出土している。中国陶磁器の中には口禿げの白磁椀や外面に鎬蓮弁文のある青磁椀などが出土している。これらは13世紀から14世紀前半に多く見られるようである（註7）。

ＳＤ1202溝跡：13世紀から14世紀にかけての無釉陶器擂鉢や14世紀前半の施釉陶器広口壺蓋が出土している。

ＳＤ631・1200・1202溝跡からは13世紀から14世紀前半の遺物が出土している。構築年代がどこまでさかのぼるかについては明確にし難いが、出土遺物の大部分がその時期のものであり、後述する第Ⅲ層によって下限が定まっていることから、概ね13世紀から14世紀前半にかけて機能していたと考えておきたい。また、ＳＤ1203溝跡からは12世紀後半の無釉陶器擂鉢と内面に櫛描き文様のある白磁椀が出土している。白磁椀は京都や鎌倉などでは12世紀後半の年代が与えられているものである。本溝跡は、出土点数は少ないものの本遺跡における中世の遺構の中では比較的古い段階に位置づけることができる。ＳＤ1201溝跡についてはＳＤ1200溝跡より古

いことは判明しているが詳しい年代は不明である。

次に第Ⅲ層から出土したものについてみると、12世紀から14世紀前半のものまで混在している。第99図２の施釉陶器香炉は14世紀後半以降の可能性があるが、15世紀まで降る確実な資料は１点も出土していない。隣接する第６次調査区においては、14世紀後半の施釉陶器深皿や瓦質土器火鉢が出土している（註８）。これらのことから第Ⅲ層の年代は14世紀代におさまると見られ、14世紀前半の遺構より新しいことから、おおよそ14世紀後半頃と考えておきたい。

Ｂ期の遺構については第Ⅲ層の年代を上限とすることができる。この時期の遺構は、建物跡Ⅰ～Ⅲ群やＳＤ632～639溝跡のようにほぼ同位置で重複し、連続性のうかがえるものが多い。それらの遺構の内、ＳＤ632～639溝跡からは近世以降の遺物は１点も出土していない。一方建物跡ではⅢ群の中に数棟ではあるが近世に属するものが存在する。しかし、それらについては、同じⅢ群の中でも方向がまとまっており、他とは明確に区別できるものである。このように、Ｂ期の遺構の中にはわずかに近世のものも存在するが、大部分は中世の範囲に含められるものであり、おおよそ15・16世紀という年代でとらえておきたい。

(3) 遺構の性格

新田遺跡の寿福寺地区は昭和58年以降９回にわたって調査が実施されており、各地区ごとに数多くの遺構や遺物が発見されている。第４、11次調査区の性格について述べる前に、他の調査区の成果を概観し、その上で今回の調査地区の性格について考えてみたい。

寿福寺地区における中世の遺構として特筆すべきものは第６・７・８次調査で発見した一連の大溝跡である。これは、幅約８ｍを計る大規模なものでほぼ同位置で４～５時期の重複が認められている。この大溝跡は現在でも周囲の畑地より一段低いくぼみとして帯状に残っている。また、表面観察ではほとんど痕跡をとどめていない部分についても明治19年作成の地籍図（多賀城市役所税務課保管）や昭和36年撮影の航空写真等を参考にするとおおよその推定ラインを描くことができる。それによって囲まれる範囲は溝跡の内側で計ると南北約280m、東西約190ｍ以上に及ぶ広大なものである（第154図）。この大溝に囲まれた内側は幅３～５ｍの溝によって区画され、一辺60～50mの方形の区画が形成されている。その内部からは、主屋と見られる大型の建物跡や副屋或は倉庫のような建物跡、井戸跡などが発見されており、一つ一つが独立した居住空間＝屋敷となっている。居住者については、建物跡の規模が大きいこと、出土遺物の中で中国産陶磁器や瀬戸・美濃産の施釉陶器の占める割合が大きいことから武士階級と考えている。このような屋敷は、現在のところ４つ確認されている。一方、それらの外側においても溝をめぐらした方形の区画が発見されており、その内部からは建物跡や井戸跡などが検出されている。この区画についても、建物には中心的なものと小規模なものの両者が見られ、井戸を伴っていることから屋敷と見られる。このような屋敷は現在のところ２つ確認されている。

大溝を巡らした屋敷群の西辺から約50m西の地区においても建物跡や井戸跡が集中するブロックが発見されている。調査区が小範囲であったため明らかにはできなかったがこれも溝を巡らした屋敷であった可能性が高い（註9）。このように、寿福寺地区には大溝を巡らした屋敷群と、その外側に営まれた屋敷群とが存在した（第154図）この地区における屋敷の出現は12世紀後半までさかのぼり、以来16世紀に至るまで連綿と屋敷として使用されたようである。区画施設としては、土塁や柵などは現在のところ確認されておらず、一貫して溝であったと考えている。第154図にみられるような幅8mの大溝による区画は15世紀になってから出現したと見ているが、それよりさかのぼる可能性もある。

第4・11次調査区における遺構のあり方についてみると、第4次調査区については周囲に溝を巡らした屋敷跡と見られる。屋敷全体の内の南西隅にあたり、屋敷地自体は更に北と東に広がっていると考えられる。明治19年作成の地籍図を参考にすると、SD638溝跡のつづき及び北辺をなす溝のラインをたどることができ、それによるとこの屋敷は南北約120m、東西80m以上の範囲に及ぶと見られる。

屋敷内の建物についてみると、Ⅰ～Ⅲ群の各時期の中で、比較的規模が大きく中心的なものが発見されている。Ⅰ群におけるSB601・603、Ⅱ群におけるSB611、Ⅲ群におけるSB620の各建物跡である。Ⅰ群のSB601とSB603については、同時期に存在したものか否かは明らかにし難い。Ⅰ群としてまとめた建物群も更に細分されて可能性があり、SB601とSB603はそれぞれある段階の中心建物であったことも考えられる。このような中心的な建物跡に近接した位置で桁行2間、梁行1間の比較的小規模な建物跡がいくつか発見されている。Ⅰ群のSB605・606・607、Ⅱ群のSB614、Ⅲ群のSB629などであり、桁行の狭いもので平面形は概ね正方形に近い形態をとっているものが多い。明確な根拠は示しえないが小規模である点に着目すれば、居住の施設とするより倉庫のような性格が考えられるのではなかろうか。

この他、屋敷の施設としては、区画溝の5段階の時期に南辺において土橋の通路が発見されている。寿福寺地区の屋敷跡においてこのような通路が発見された例は多くない。

なお、この屋敷の居住者については、中心的な建物跡の規模が大溝を巡らした屋敷群のものよりやや小さい程度であること、中国産陶磁器や瀬戸・美濃産施釉陶器が多く出土していることより武士階級と考えられる。これまでの調査では更に限定できるような資料は発見されていないが、本遺跡の立地するところが留守氏の支配するところであった「高用名」に含まれる地域であることから留守氏にかかわりのある武士とすることができよう。

次に、第11次調査区についてみると、大溝を巡らした屋敷群と第4次調査区発見の屋敷の中間に位置している。この地区では建物跡が少なく、逆に井戸跡や土壙が非常に多いという状況

である。建物は第4次調査区の屋敷に近いところで7棟重複して発見されており、この地点が一貫して建物のスペースとして利用されていたようである。中には廂のついた建物も見られる。居住域として使用されていたと見られるがそれに伴う溝や柵などの区画については検出できなかった。他にも数棟の建物が発見されているがいずれも小規模あり、各地点に1棟ずつ点在している状況である。建物跡の存在から居住の場であったことは事実であるが、溝を巡らした屋敷の内部とは明らかに様相を異にするものである。性格については明確にしえないが屋敷の居住者より低い階級の人々の住いと見ることはできそうである。

第4・11次調査地区の性格については、他の調査地区との厳密なる比較を通して検討されるべきである。建物跡の規模や構造、配置などは屋敷の居住者の性格などを大いに反映していると考えられるからである。また出土遺物についても、高級品と見られる中国産陶磁器や瀬戸・美濃産施釉陶器の占める割合は居住者の階層によって異っていると考えられ、調査地区ごとの比較からは興味深い結果が得られそうである。しかし、他調査区の成果がほとんど未報告という現状の中では本章の如く簡単な記述にせざるをえなかった。

また、出土遺物については考察の中でほとんど取り上げることができなかった。これについては、より良好な資料が出土している他の調査区の報告書の中で併せて検討していきたい。

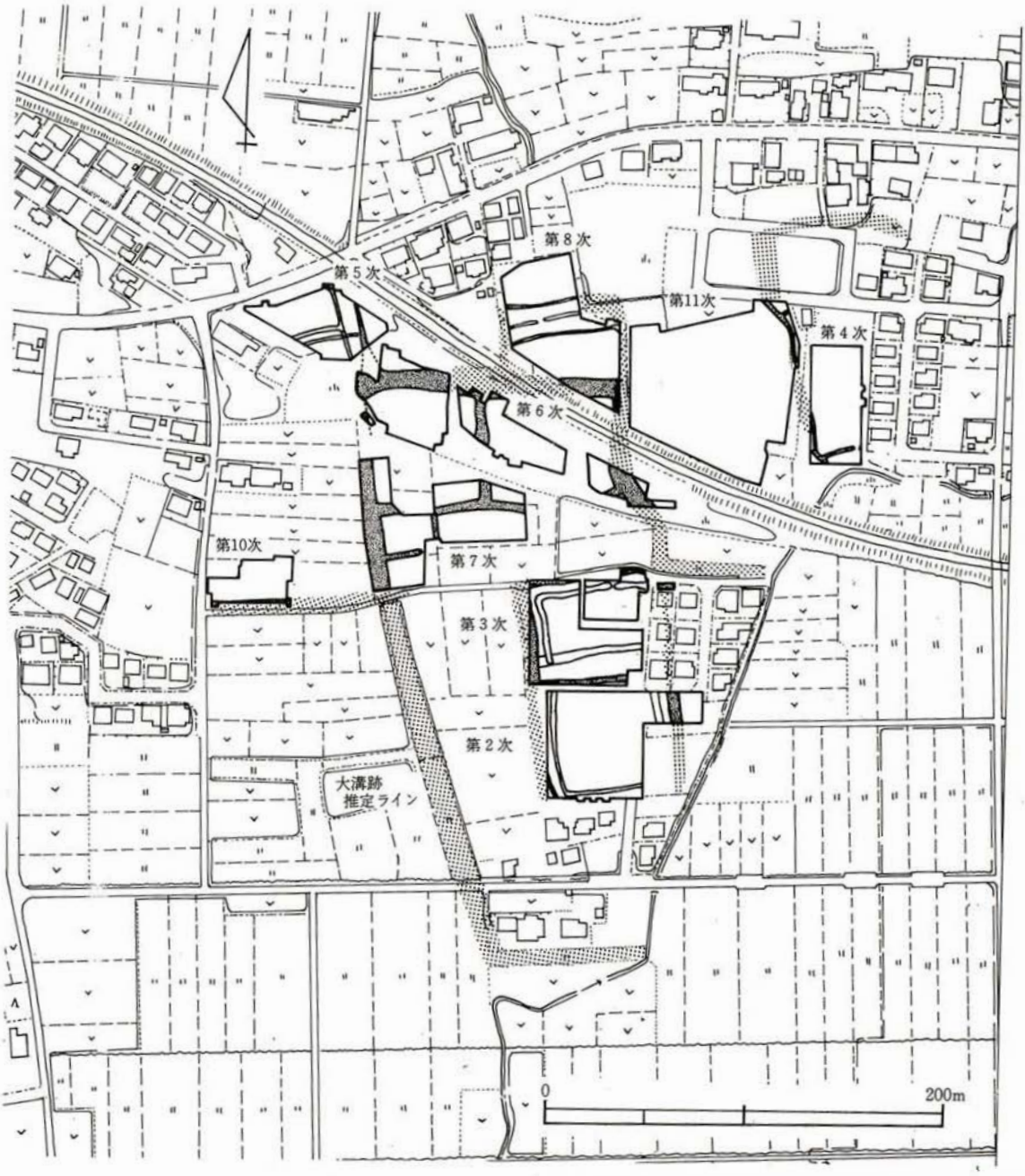
註5　方向の表示については、ほとんどの建物跡が東西棟であるため、側柱の方向で示しているが、一部90度折り返して表示したものもある。

註6　ＳＤ632溝跡と連結すると見られる南北溝跡については、平面的に検出してはいないがSX 693がそれに相当すると考えている（第76図）。

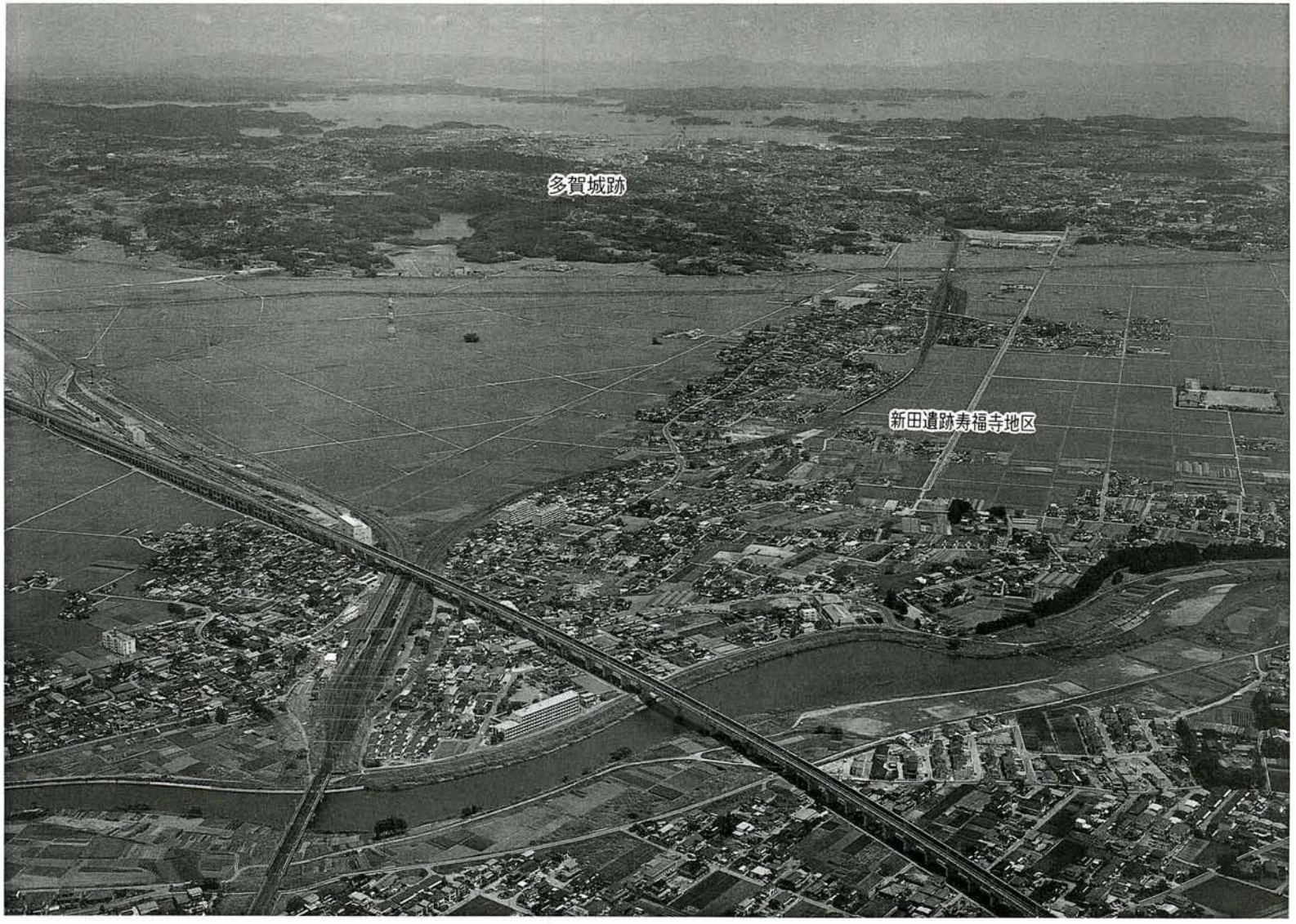
註7　亀井明徳「14・15世紀の貿易陶磁ーとくに日本出土の中国陶磁」『貿易陶磁研究』No.1　1981

註8　多賀城市埋蔵文化財調査センター「年報2ー昭和62年度（新田遺跡第6次調査）」『多賀城市文化財調査報告書』第16集　1988

註9　多賀城市埋蔵文化財調査センター「新田遺跡」『多賀城市文化財調査報告書』第18集　1989



第154図　寿福寺地区中世遺構概略図



図版１　新田遺跡遠景（西より）

新田遺跡遠景
（東より）

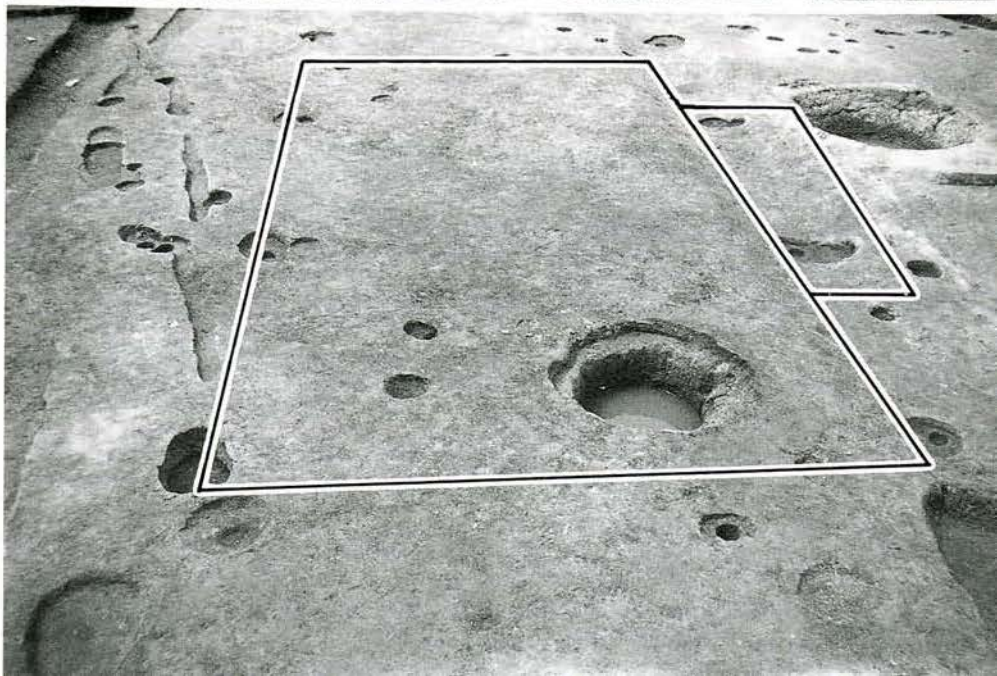
調査前の状況
（南より）

調査区全景
（北より）

図版２　第４次調査

北半部遺構検出状況
（南より）

同　上
（東より）



ＳＢ 601 建物跡
（東より）

図版３　第４次調査

ＳＤ 643溝跡
（東より）

調査区南半部溝跡重複状況
（南より）

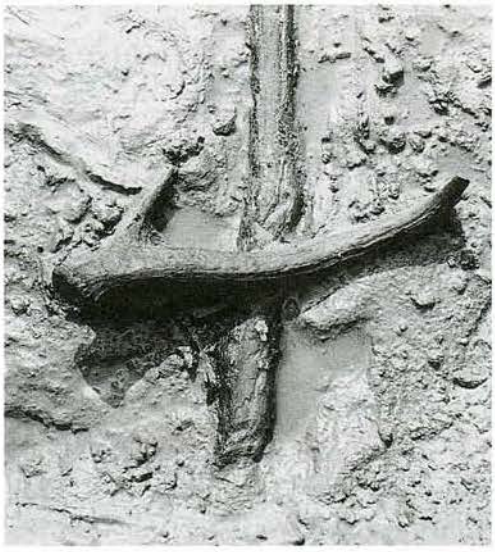
調査区南半部
（北より）

図版４　第４次調査

左　ＳＤ 631 溝跡とＳＫ
665・666土坑
（南より）

右　ＳＤ 639溝跡と
ＳＸ 657 土橋
（東より）

ＳＤ 632・633溝跡
（東より）

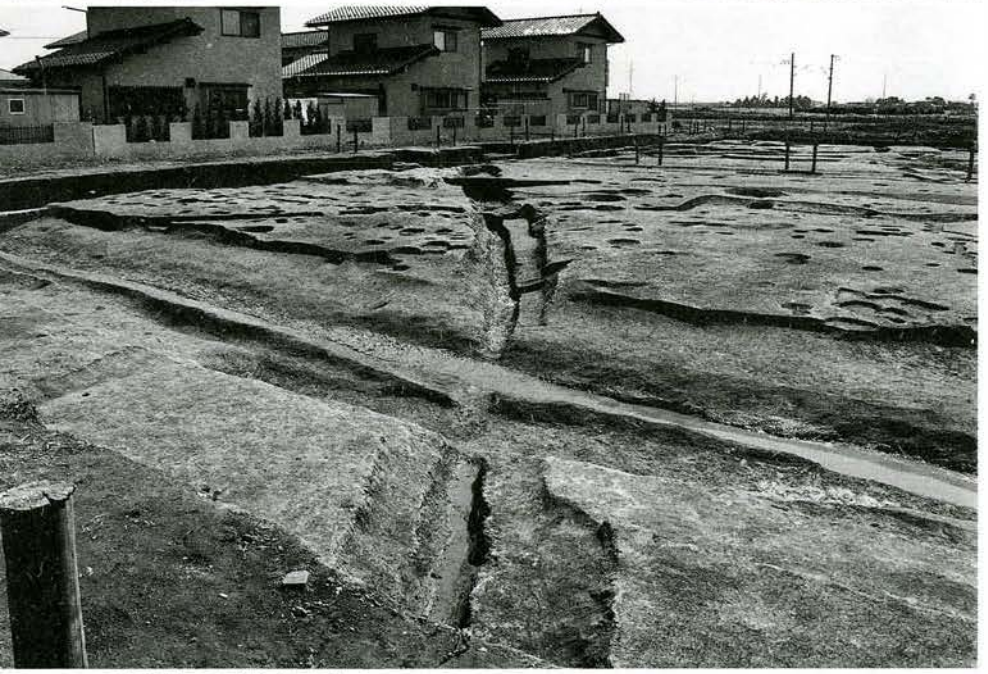


左　鹿角出土状況
ＳＤ 632溝跡

右　ＳＤ 654・655
656 溝跡

図版５　第４次調査

SD 653溝跡
(西より)



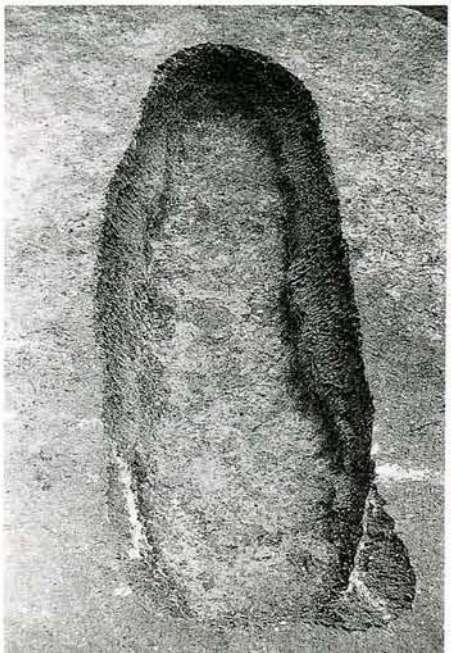
SD 645溝跡
(北より)

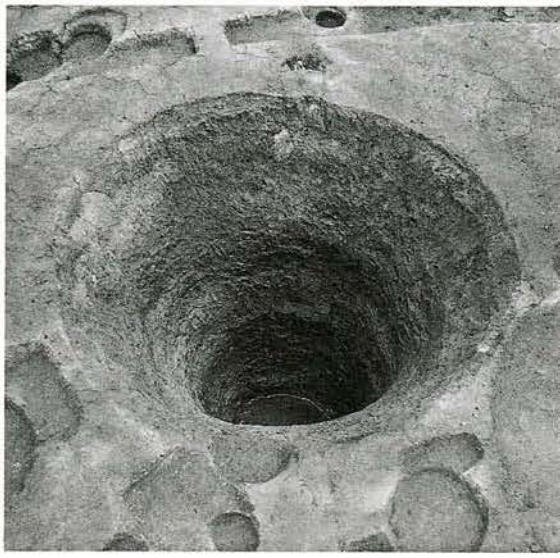
SD 644溝跡
(西より)

図版6　第4次調査

ＳＸ 658焼土遺構
（南より）

ＳＸ 659 貝殻出土状況





左　ＳＫ 660土坑
（北より）

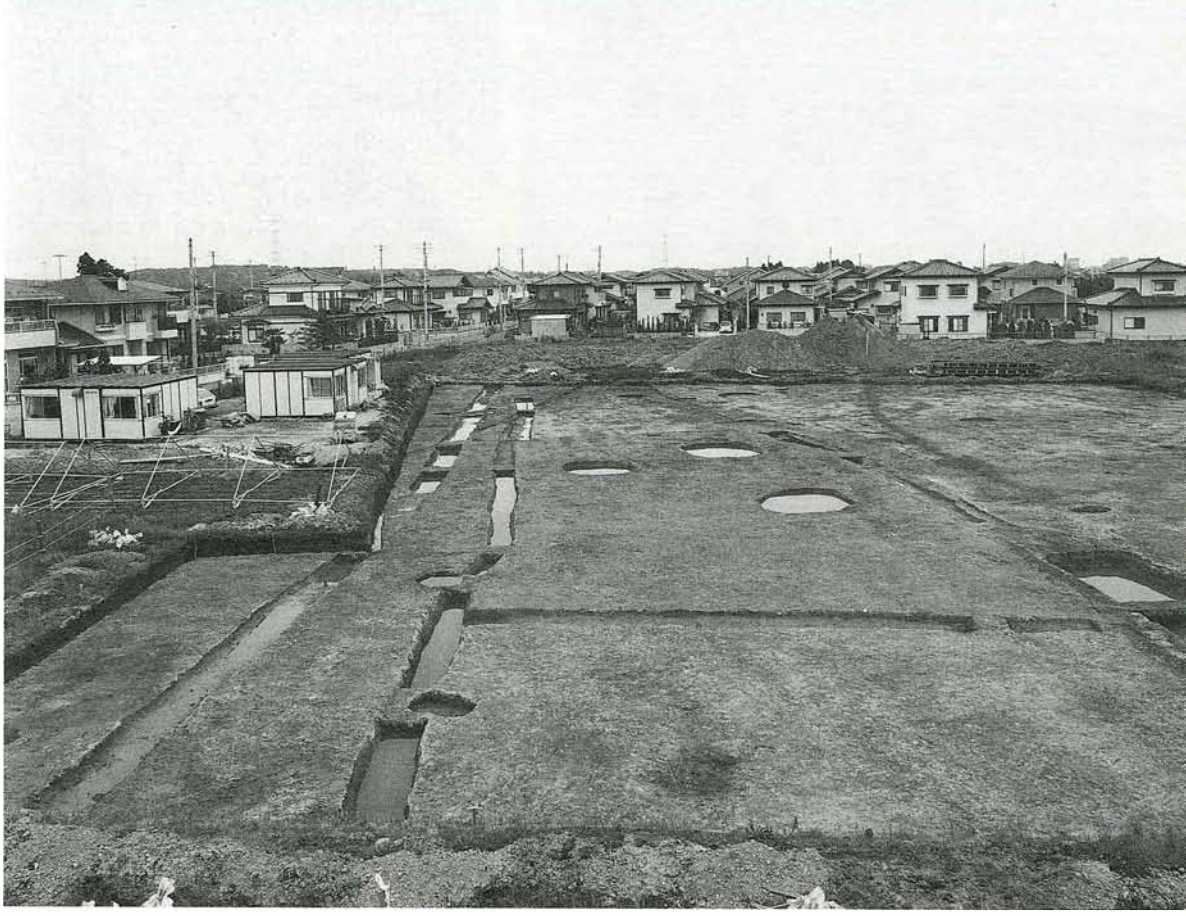
右　ＳＥ 678井戸跡
（西より）

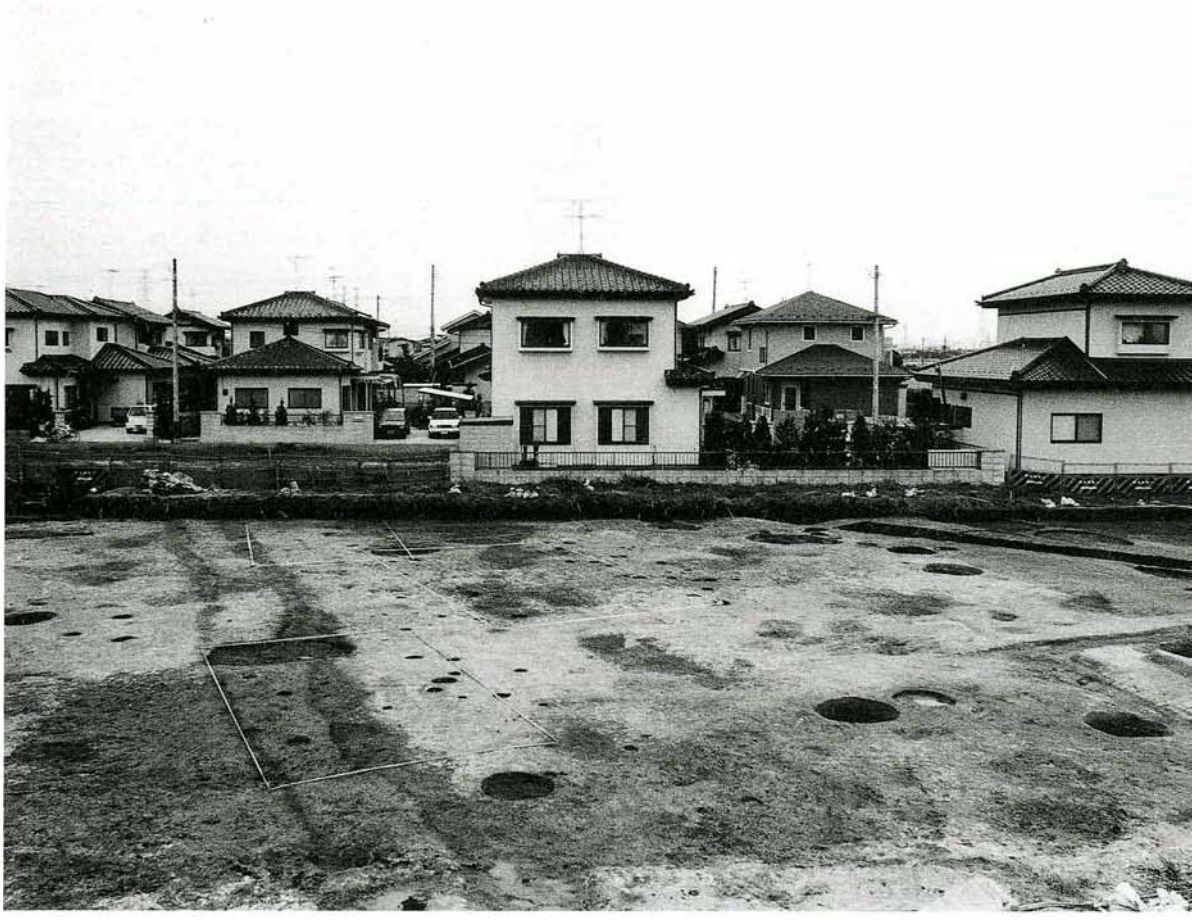
図版７　第４次調査

上　調査前の状況ー昭和61年ー(北より)

図版8　第11次調査

下　調査区西半部遠景（西より）

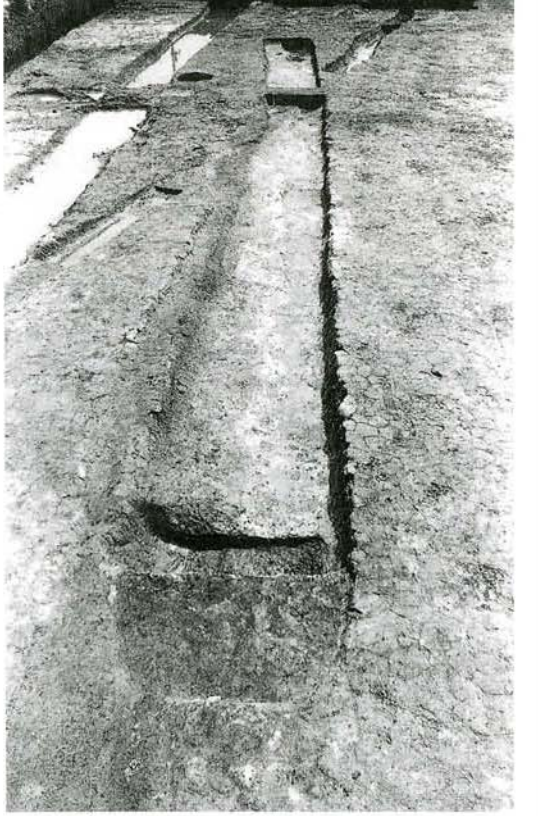




上　調査区西半部全景（西より）
下　調査区東半部遺構検出状況（西より）

図版９　第11次調査

ＳＤ1188溝跡（東より）

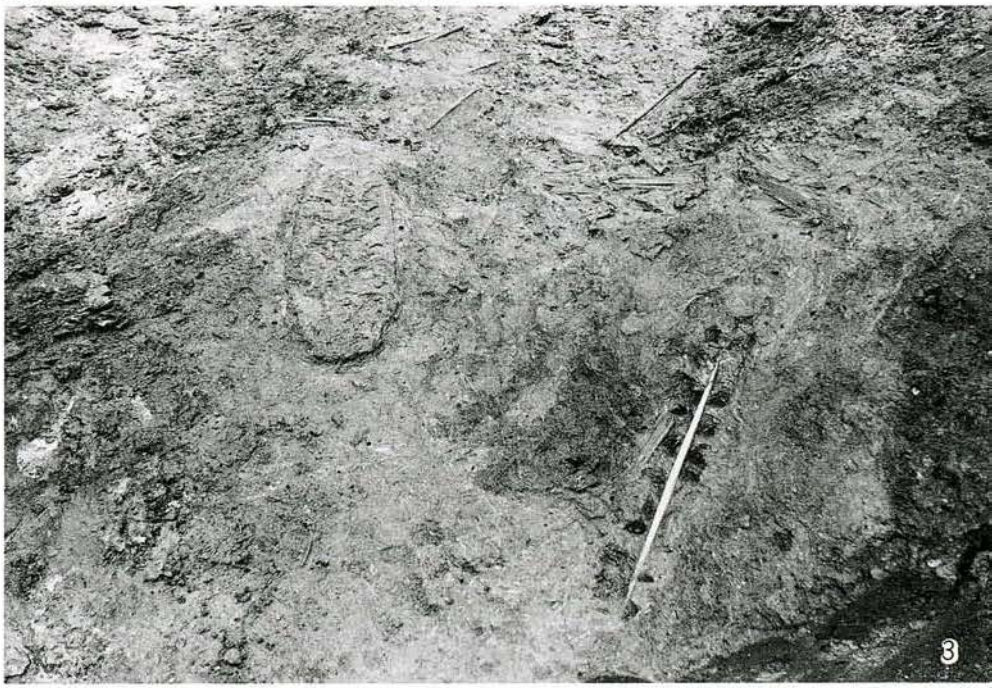


ＳＤ1184溝跡（西より）

左 ＳＤ1202溝跡（東より）
右　同上　板草履出土状況

図版10　第11次調査

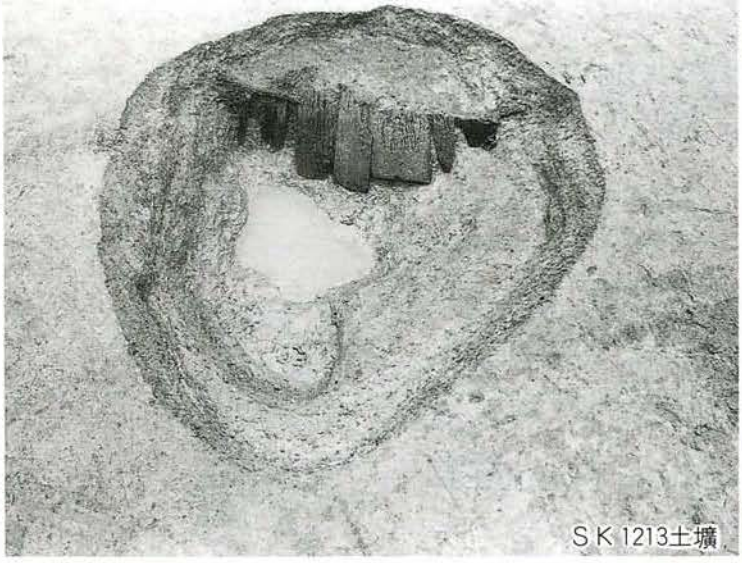
1　SD 1200溝跡(右)　SD 1202溝跡(左)　東より
2　SD 1200溝跡　木根等出土状況
3　同上　遺物出土状況
4　同上　土層堆積状況



図版11　第11次調査

上　ＳＤ1201溝跡（東より）
下　ＳＤ1198溝跡（北より）

図版12　第11次調査

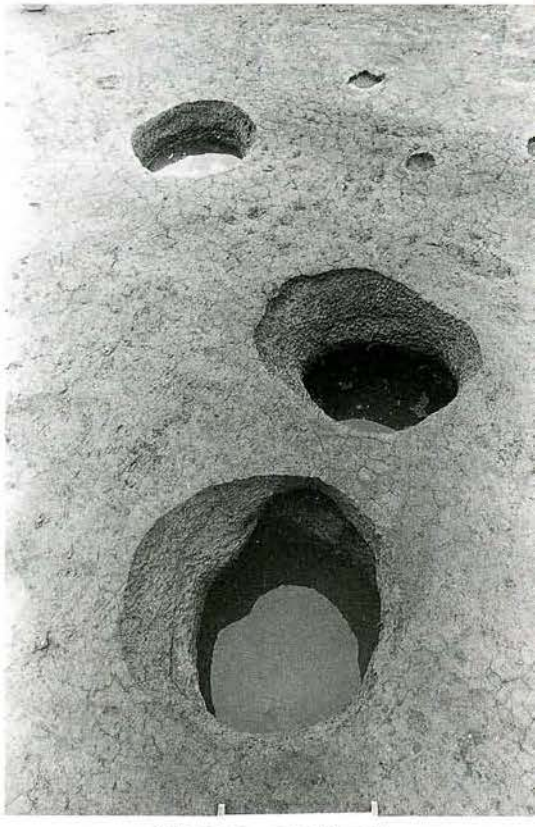

SK 1213土壙

SK 1213土壙(部分)

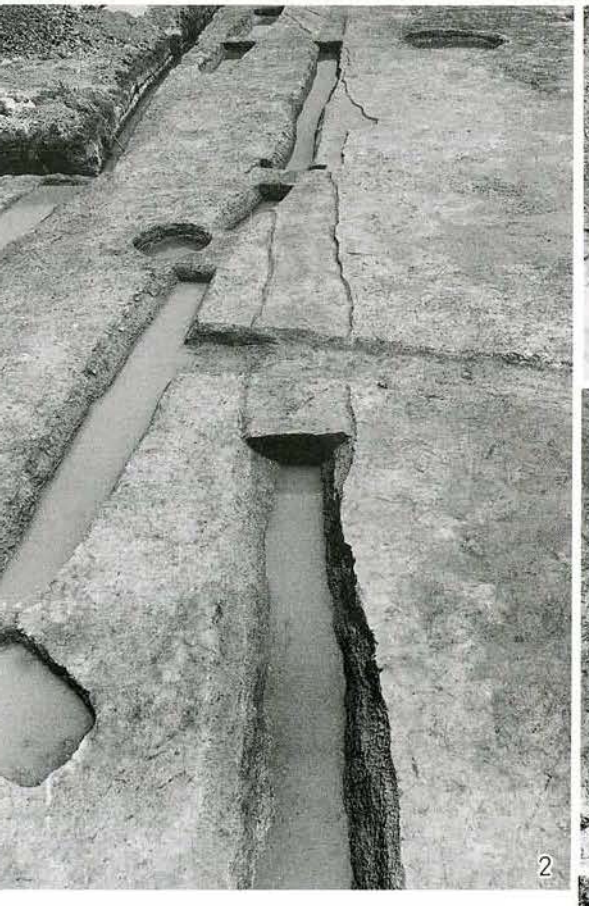
SE 1216井戸跡

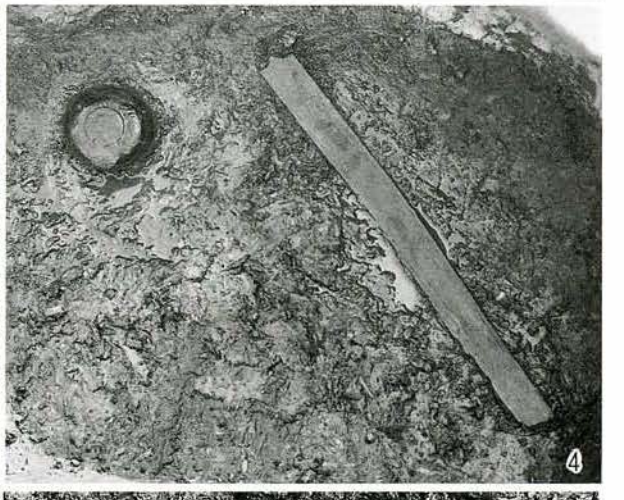
SE 1262井戸跡

SK 1250土壙


SE 1276. 1277井戸跡
(北より)

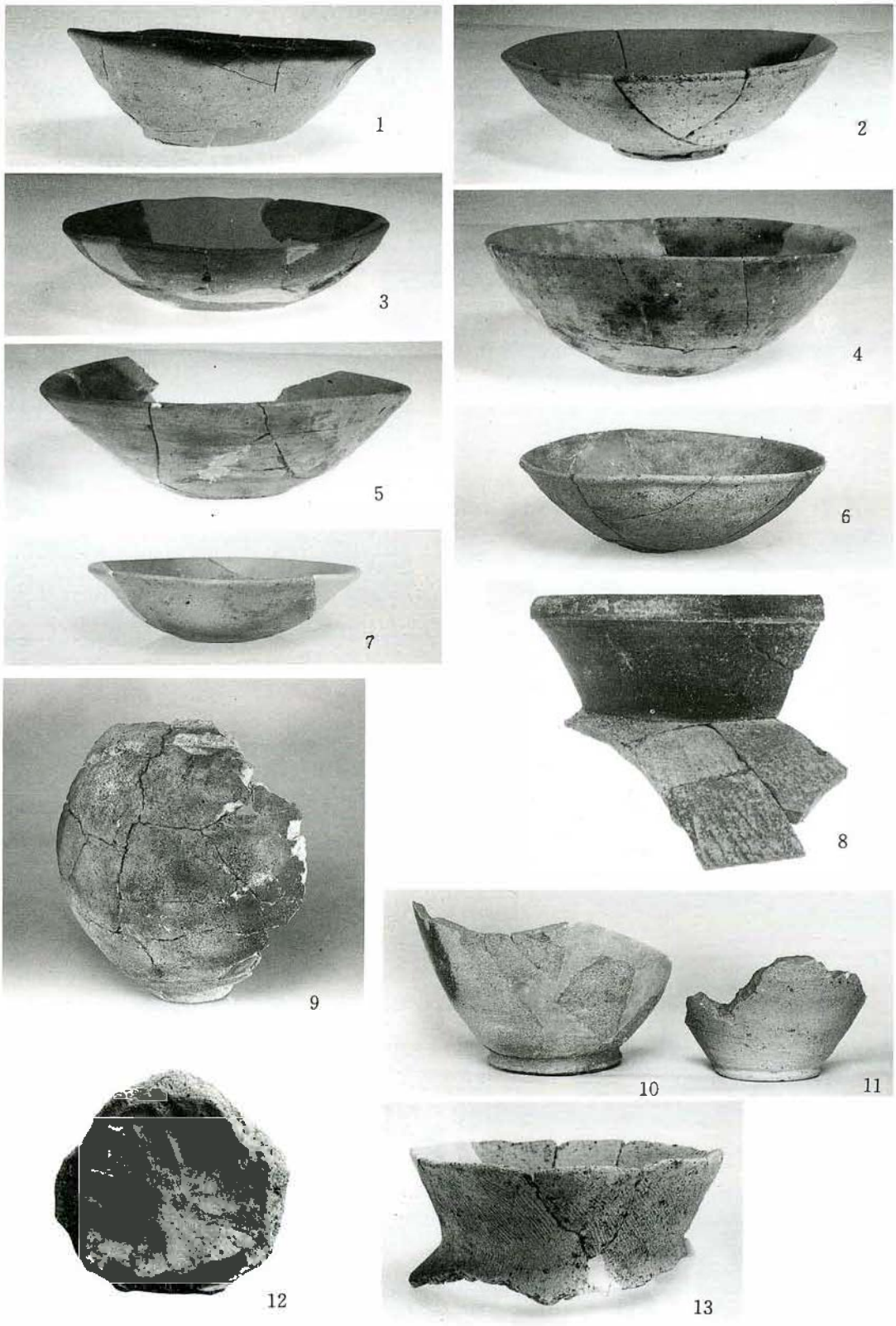
図版13　第11次調査





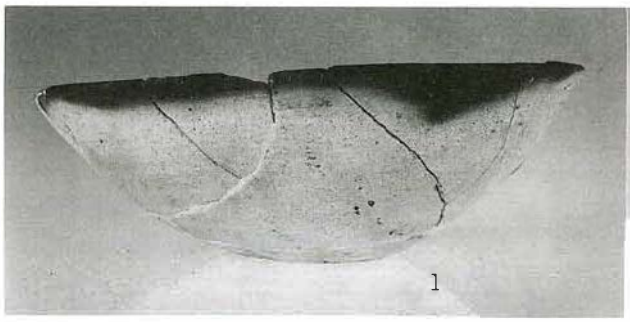
1　ＳＤ1180溝跡検出状況（東より）
2　ＳＤ1186溝跡（西より）
3　ＳＥ1270井戸跡 曲物出土状況
4　ＳＫ'1228土壙 曲物・漆器出土状況
5　　同上　　獣骨出土状況

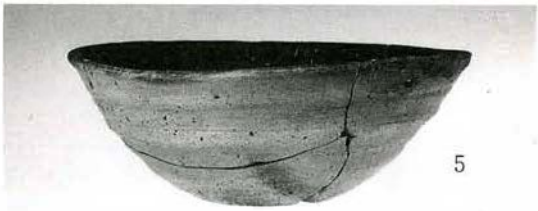
図版14　第11次調査

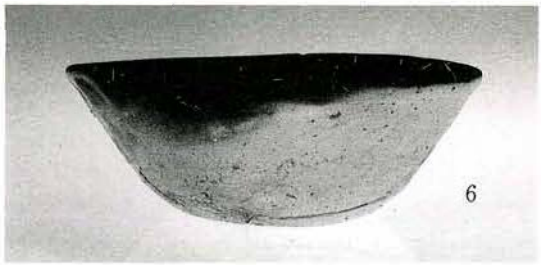


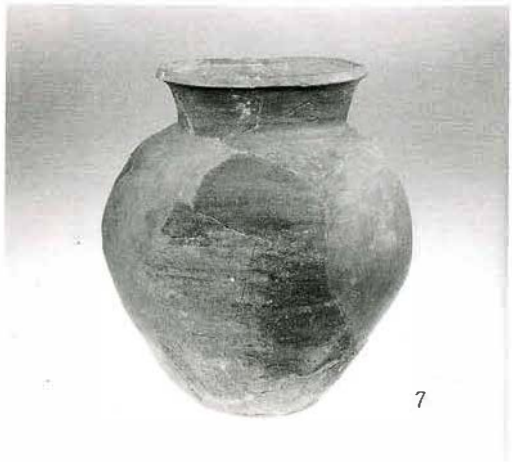
1	土師器杯	SD-646 ℓ-1 R-21	6	赤焼き土器杯	4区(F-07) L-Ⅲ R-64	11	須恵器長頸瓶	SK-1214 ℓ-1 R-17
2	土師器杯	SD-676 ℓ-1 R-29	7	赤焼き土器杯	4区(F-09) L-Ⅲ R-85	12	手づくね土器	SD-1193 ℓ-1 R-14
3	赤焼き土器杯	SD-646 ℓ-1 R-109	8	須恵器甕	SD-645 ℓ-2 R-89	13	土師器壺	SD-1186 ℓ-1 R-3
4	須恵器杯	pit76 ℓ-1 R-84	9	土師器甕	11区 L-Ⅴ R-1			
5	須恵器杯	SD-645 ℓ-2 R-3	10	須恵器長頸瓶	SD-645 ℓ-2 R-80			

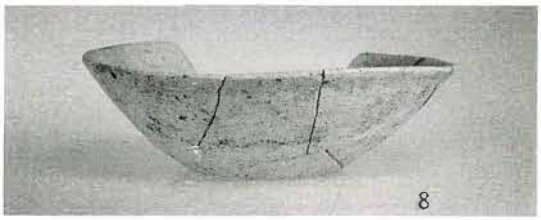
図版15　土師器・須恵器

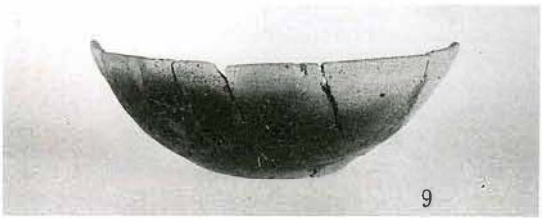






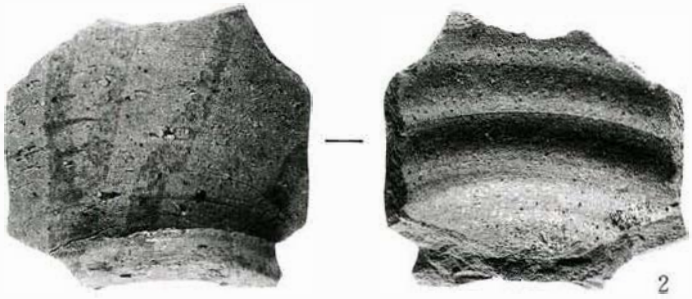


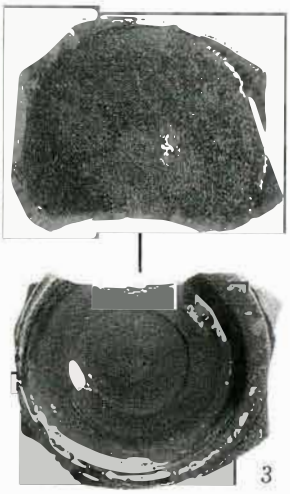


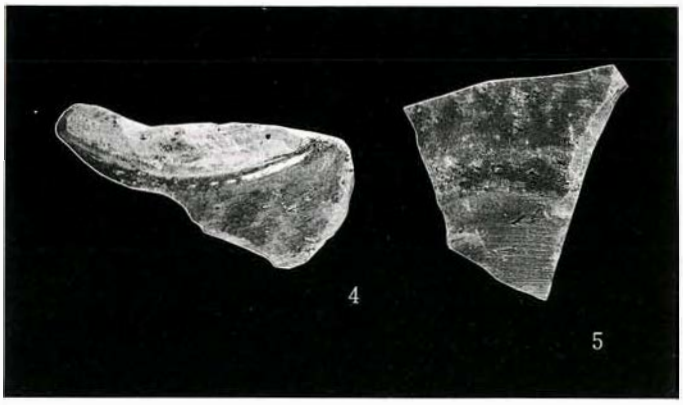


1 土師器杯　SD-1178B R-8
2 土師器杯　SD-1178B R-7
3 土師器杯　SD-1178B R-6
4 土師器甕　SD-1178B R-11
5 土師器杯　SD-1178B R-3
6 土師器杯　SD-1178B R-4
7 須恵器壺　SD-1178B R-10
8 赤焼き土器杯　SD-1178B R-9
9 赤焼き土器杯　SD-1179B R-13
10 土師器杯　SD-1179B R-12

図版16　土師器・須恵器

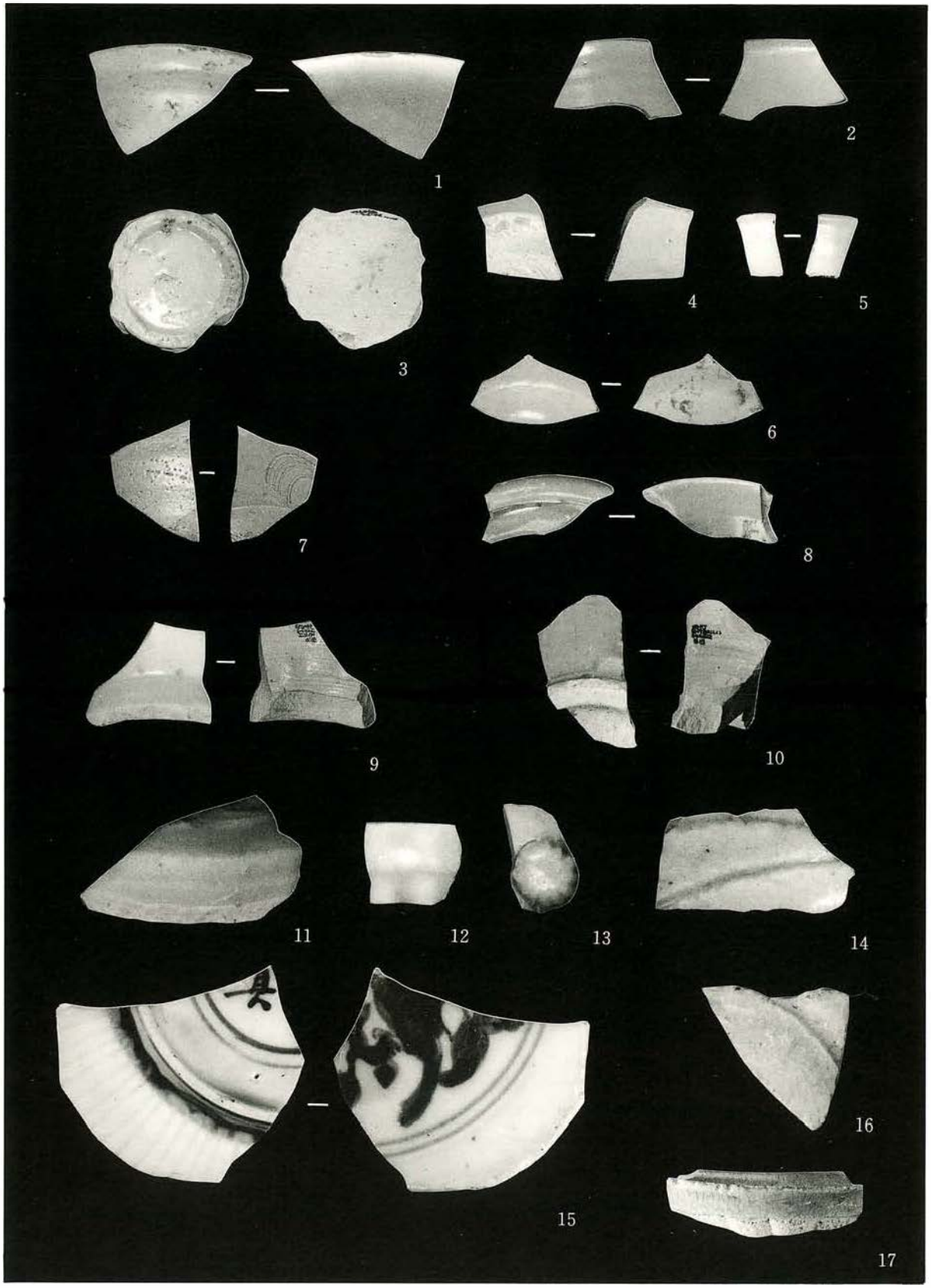






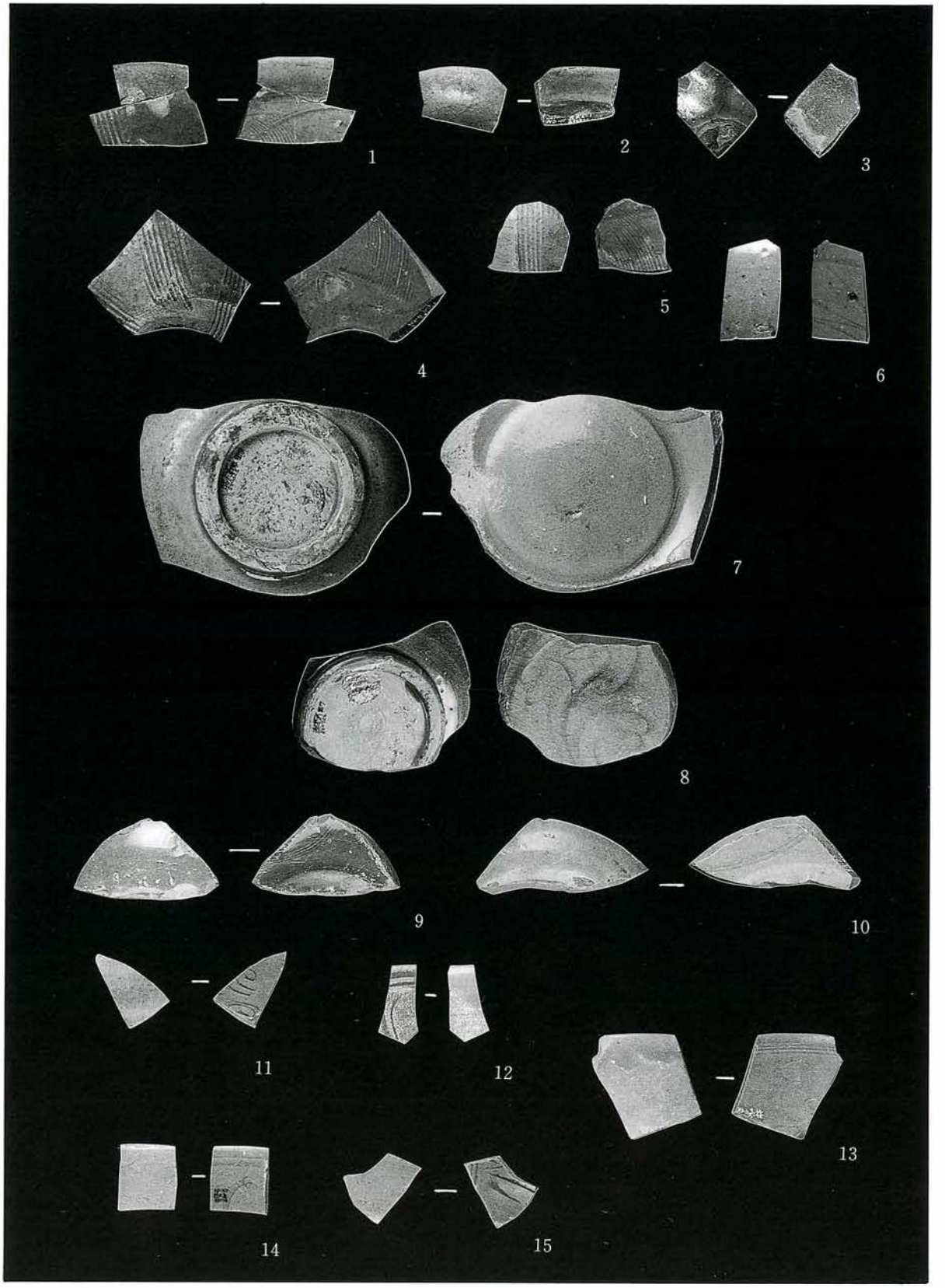
1 緑釉陶器椀 SK-1228 ℓ-1 R-259
2 灰釉陶器瓶 4ｹ 溝NO5T R-296
3 緑釉陶器椀 4ｹ(G-04) L-Ⅱ R-014
4 灰釉陶器瓶 11ｹ L-1 R-261
5 灰釉陶器椀 11ｹ L-1 R-264
6 灰釉陶器皿 4ｹ(E-04) L-Ⅱ R-299
7 灰釉陶器平瓶 SD-653 ℓ-1 R-43

図版17 陶 器



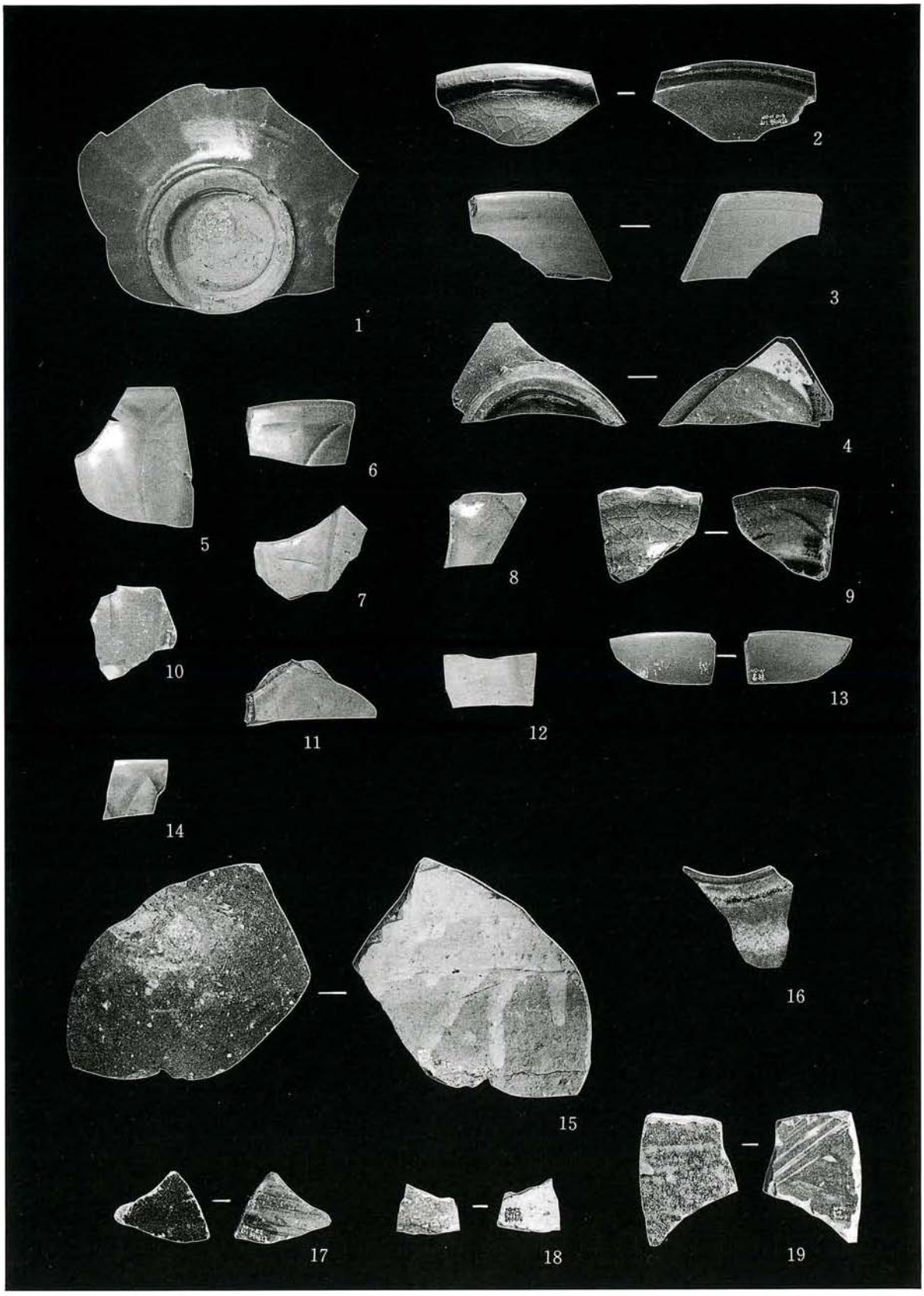
1 椀　4次(E-09) L-Ⅲ R-09
2 椀 SK-1240 ℓ-2 R-238
3 椀　SD-651 ℓ-1 R-120
4 皿　SD-1178① R-247
5 椀　11次 Ⅲ区 L-Ⅲ R-239
6 皿　4次 試掘NO3T R-300
7 椀　SD-1203 ℓ-1 R-237
8 四耳壺 4次(A-15) L-Ⅰ R-19
9 四耳壺 4次(F-10) L-Ⅲ R-10
10 四耳壺 4次(G-17) L-Ⅰ R-18
11 合子　11次 Ⅱ区 L-Ⅰ R-245
12 合子 4次(H-14) L-Ⅰ R-301
13 広口壺蓋 4次(G-05) L-Ⅱ R-333
14 梅瓶　SD-1188 ℓ-Ⅰ R-249
15 染付皿　SK679 ℓ-1 R-25
16 梅瓶　11次 Ⅱ区 L-Ⅰ R-250
17 合子 SD1200 ℓ-2 R-048

図版18　白　磁



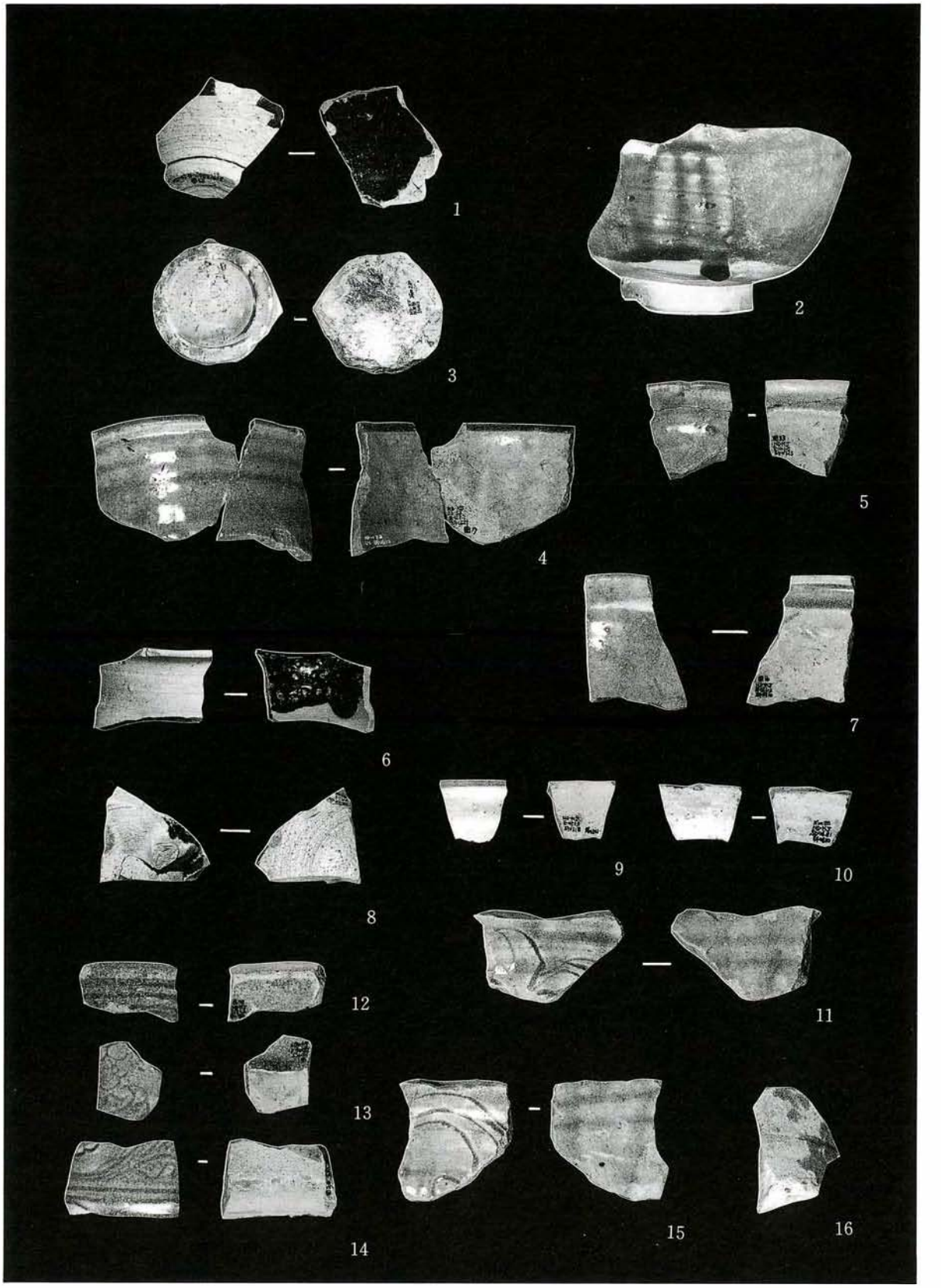
1 椀　SK-1261　ℓ-1 R-205
2 皿　11区 Ⅲ区 L-1 R-233
3 椀　11区 Ⅲ区 L-1 R-235
4 椀　SD-1202　ℓ-1 R-204
5 椀　SD-1200　ℓ-1 R-045
6 椀　SD-1200　ℓ-4 R-044
7 椀　4区(H-07) L-Ⅱ R-08
8 椀　SK-698　ℓ-1 R-07
9 椀　11区 Ⅲ区 L-1 R-216
10 椀　SD-637　ℓ-3 R-302
11 椀　11区 Ⅲ区 L-1 R-214
12 椀　11区 Ⅲ区 L-1 R-217
13 椀　11区 Z R-211
14 椀　4区 L-1 R-303
15 椀　SD-635　ℓ-1 R-304

図版19　青　磁



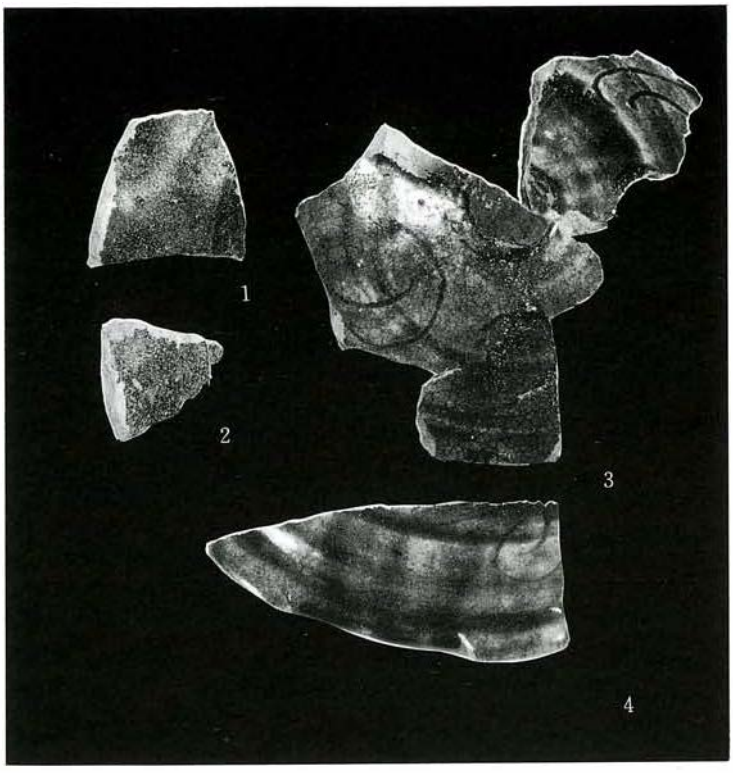
1 椀 SD-1200 ℓ-1 R-041
2 鉢 SD-1202 ℓ-1 R-236
3 椀 SD-1200 ℓ-5 R-042
4 椀 SD-637 ℓ-2 R-073
5 椀 SD-638 ℓ-5 R-255
6 椀 SK-1293 ℓ-1 R-206
7 椀 4次 Z R-310
8 椀 4次(C-03) L-Ⅰ R-309
9 皿 4次(G-07) R-045
10 椀 4次(H-11) L-Ⅱ R-307
11 椀 SD-1200 ℓ-1 R-043
12 椀 SK-1208 ℓ-1 R-207
13 椀 11次 Z R-234
14 椀 4次(E-0)3 L-Ⅰ R-308
15 壺(鉄釉) 4次(I-12) L-Ⅲ R-305
16 茶入(鉄釉)SD-656 ℓ-1 R-06
17 壺(鉄釉) 11次 ⅢE I-1 R-254
18 壺(鉄釉)4次(E-07) L-Ⅱ R-311
19 壺(鉄釉)11次(E-03) L-Ⅰ R-306

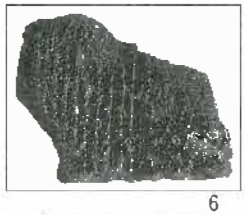
図版20　青磁(1～14)・施釉陶器(15～19)

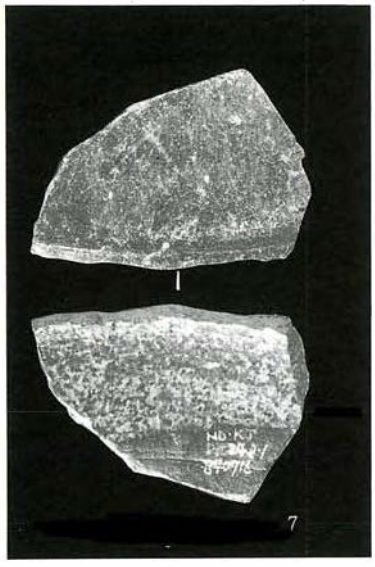


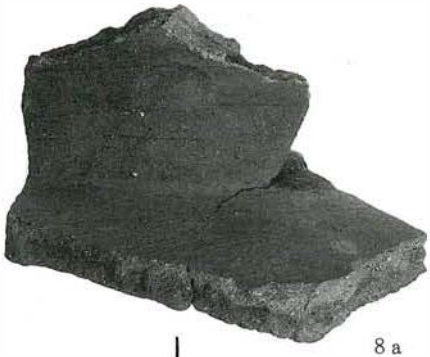
1 天目茶椀(鉄釉) 4次(G-09) R-52
2 丸椀(銅緑釉) SE-679 R-106
3 椀(銅緑釉?) 4次 L-Ⅰ R-230
4 鉢(灰釉) SD-634 ℓ-2 R-17
5 折縁深皿(灰釉) 4次(F-10) L-Ⅲ R-55
6 香炉(鉄釉) SD-655 ℓ-1 R-47
7 折縁深皿(灰釉) 4次(E-13) L-Ⅱ R-16
8 香炉(鉄釉) 4次(H-16) L-Ⅱ R-60
9 卸皿(灰釉) 4次(E-05) L-Ⅱ R-241
10 卸皿(灰釉) 4次(H-14) L-Ⅰ R-150
11 壺(灰釉) SD-656 ℓ-1 R-313
12 香炉(灰釉) 4次(C-13) L-Ⅱ R-75
13 香炉(灰釉) SD-655 ℓ-1 R-66
14 香炉(灰釉) SD-631 ℓ-2 R-26
15 壺(灰釉) SD-656 ℓ-2 R-312
16 瓶子(灰釉) 4次(B-17) L-Ⅰ R-332

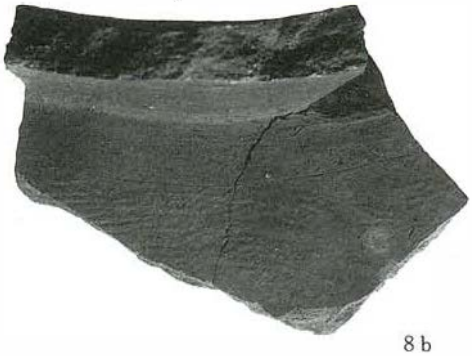
図版21 施釉陶器

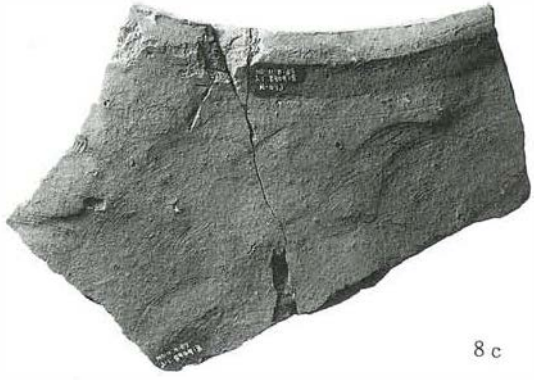






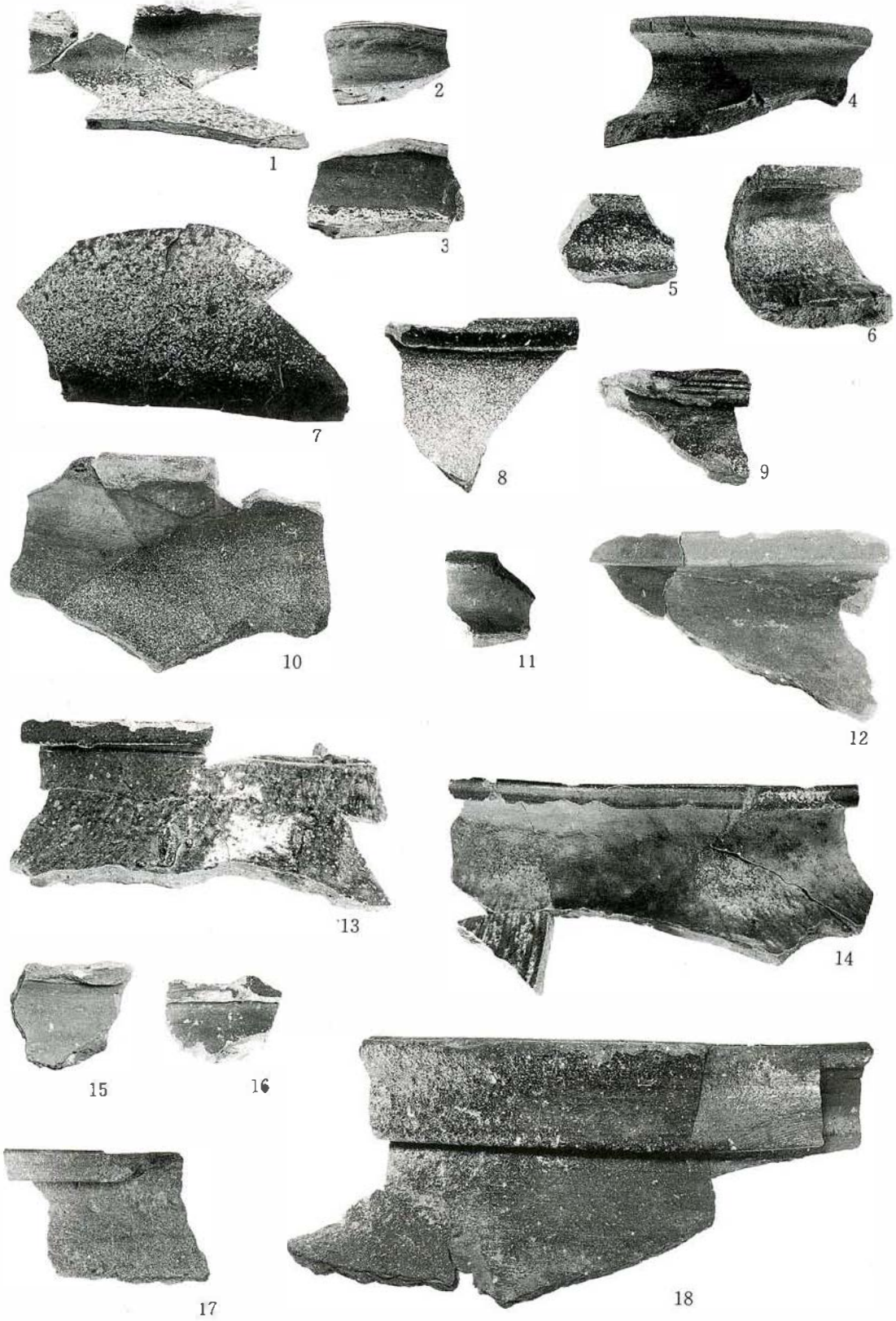






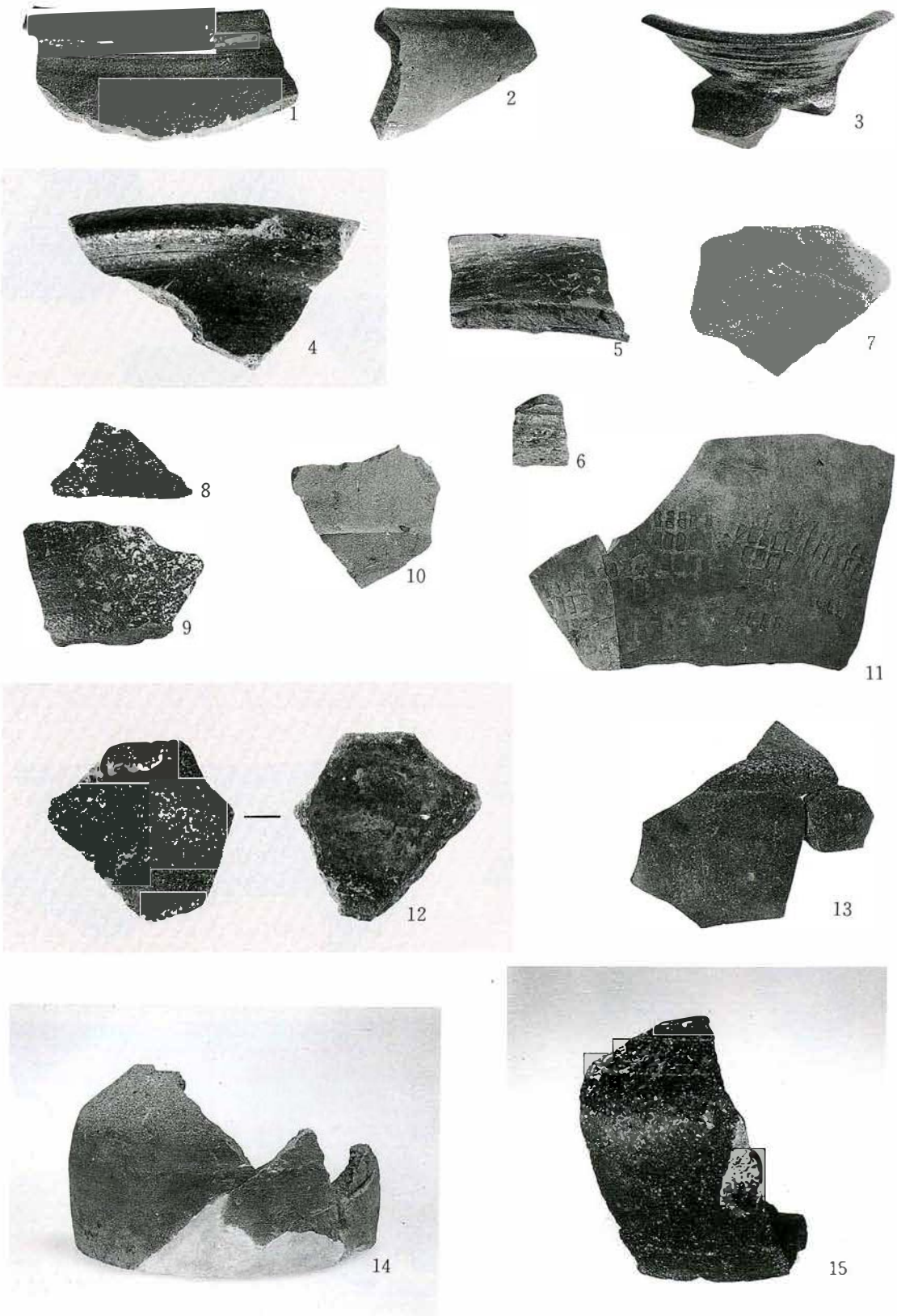
1 広口壺蓋 4次(I-13) L-Ⅱ R-318
2 広口壺蓋 4次(D-02) L-Ⅰ R-319
3 広口壺蓋 SK-661 ℓ-3 R-36
4 広口壺蓋 SD-1202 ℓ-1 R-293
5 擂鉢(鉄釉) 4次(F-03) L-Ⅱ R-61
6 擂鉢(鉄釉) 4次(E-03) L-1 R-320
7 蓋? SB-623 R-321
8 甕 SK-1220 ℓ-1 R-93
9 鉢 SD-644 ℓ-1 R-42

図版22 施釉陶器(1～7)・須恵器(8・9)



1	SD-631	R-92	6	SD-1200	ℓ-3	R-49	11	11区 Z	R-79	16	SD-1198 ℓ-1 R-120
2	4区(I-07)	L-Ⅱ R-314	7	SD-651	ℓ-1	R-317	12	SD-1198	ℓ-1 R-96	17	SK-1207 ℓ-4 R-80
3	4区(E-11)	L-Ⅱ R-316	8	11区 E	L-1	R-70	13	SD-634	ℓ-2 R-54	18	SK-677 ℓ-1 R-39
4	SD-1200	ℓ-5 R-50	9	SD-1192	ℓ-1	R-73	14	SE-1272	ℓ-3 R-91		
5	4区(F-10)	L-Ⅱ R-235	10	SD-634	ℓ-2	R-84	15	SD-634	ℓ-2 R-237		

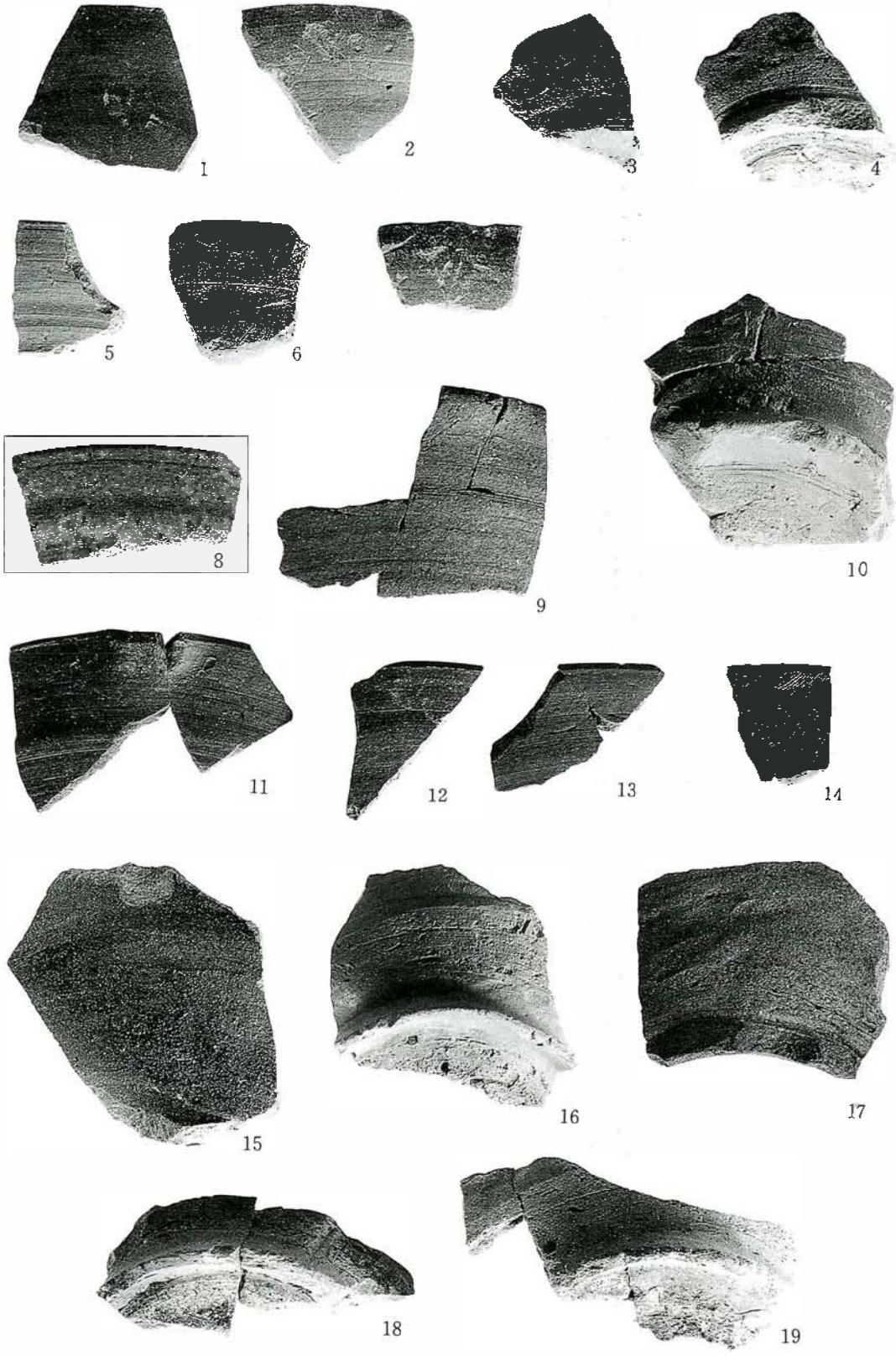
図版23　無釉陶器 甕



1	甕	SK-660	ℓ-4	R-46	6	甕	11次 L-Ⅰ	R-390
2	甕	SK-634	ℓ-2	R-50	7	壺	SK-1207	ℓ-4 R-89
3	壺	SK-1209	ℓ-2	R-88	8	壺	SD-631	ℓ-1 R-231
4	壺	11次 ⅡE	L-Ⅰ	R-94	9	壺	4次(E-01)	L-1 R-315
5	甕	SD-634	ℓ-1	R-56	10	壺	SK-1207	ℓ-2 R-389

11	壺	SD-631	ℓ-1	R-129
12	壺	4次(E-16)	L-Ⅱ	R-74
13	壺	SE-1273	ℓ-1	R-83
14	壺	SD-631	ℓ-3	R-58
15	壺	SD-634	ℓ-5	R-48

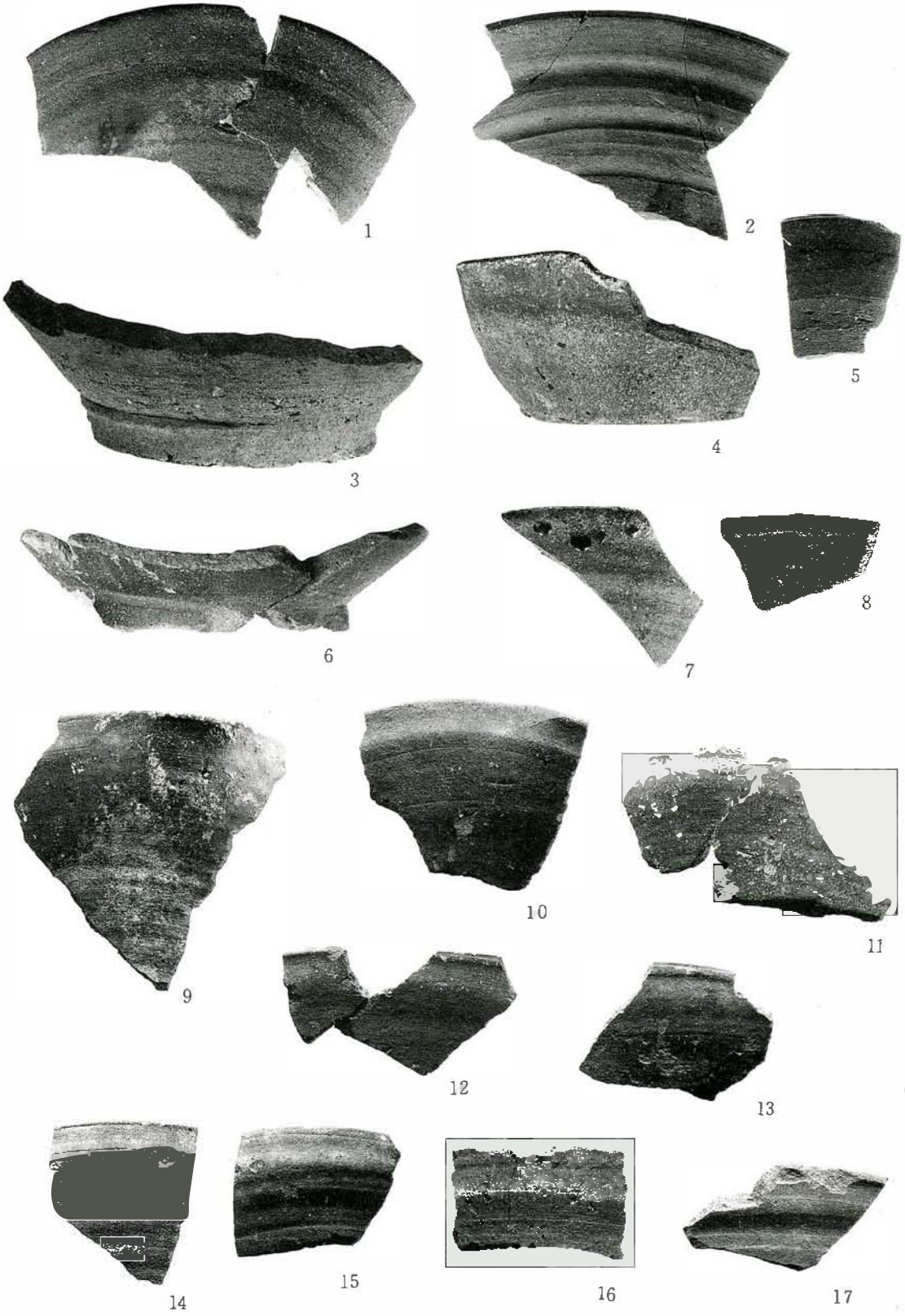
図版24　無釉陶器(1.2.4.7～15)
施釉陶器(3.5.6)



1	SD-1200	ℓ-4	R-53	6	4次(A-06)	L-Ⅲ	R-173	11	SD-1203	ℓ-1	R-136
2	4次(A-15)	L-Ⅰ	R-175	7	SD-1198	ℓ-1	R-148	12	11次 Ⅲ区	L-Ⅰ	R-138
3	11次 Ⅲ区	L-Ⅲ	R-391	8	4次 [illegible]		R-142	13	11次 Ⅲ区	L-Ⅲ	R-137
4	SK-1228	ℓ-1	R-142	9	11次 Ⅰ区	L-Ⅰ	R-140	14	11次 Ⅲ区	L-Ⅰ	R-145
5	SD-631	ℓ-1	R-162	10	SE-1272	ℓ-2	R-139	15	SD-1200	ℓ-5	R-52

16	SK-662	ℓ-2	R-51
17	SK-1240	ℓ-1	R-168
18	SD-631	ℓ-1	R-100
19	SK-1240	ℓ-1	R-141

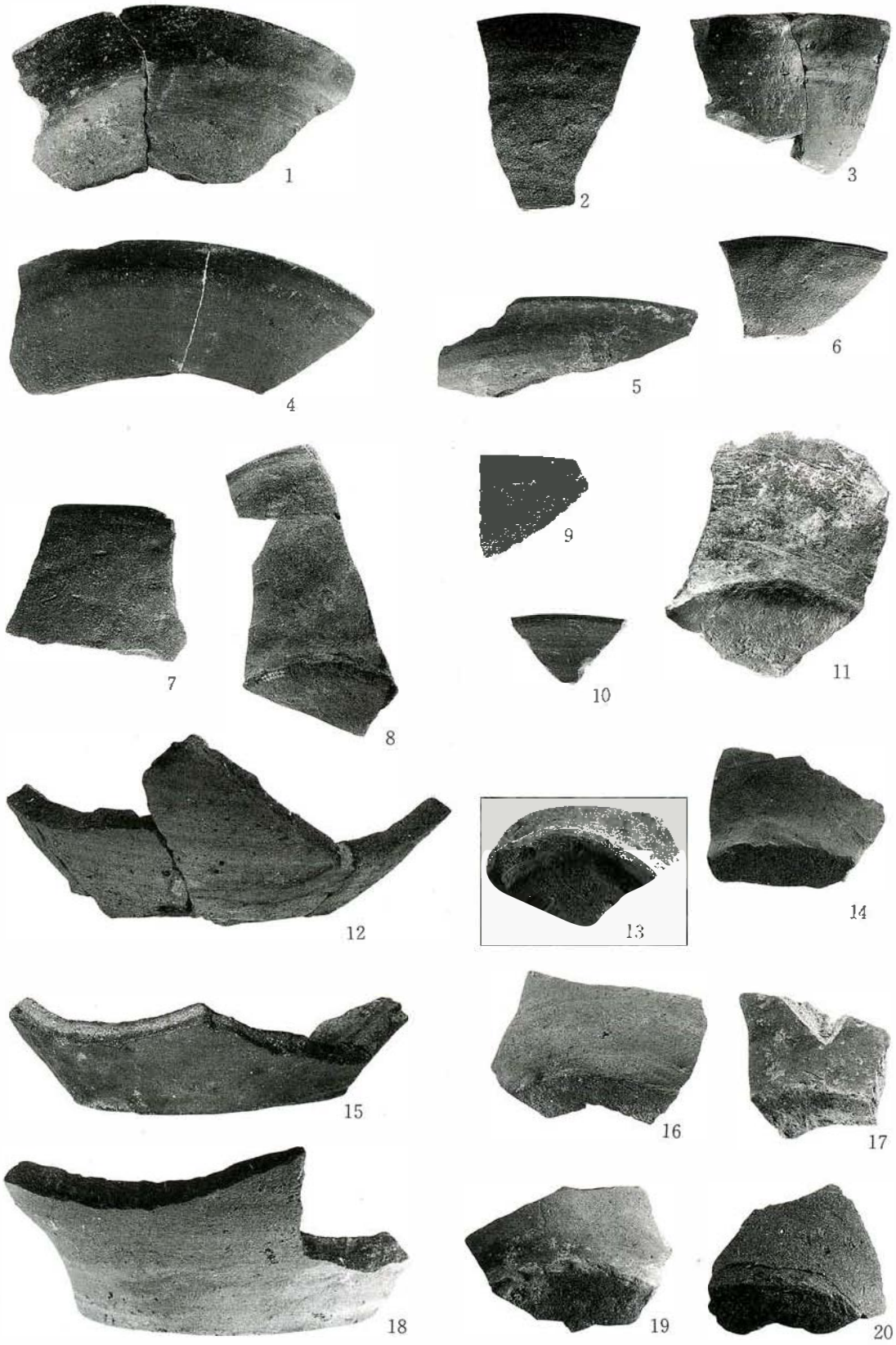
図版25　無釉陶器　擂鉢



1	SE-1252	ℓ-3	R-191	6	SD-1202	ℓ-2	R-134	11	SD-634	ℓ-1	R-167
2	SD-637	ℓ-1	R-41	7	11次	旧 L-Ⅱ	R-129	12	SK-1214	ℓ-2	R-192
3	SK-1237	ℓ-1	R-128	8	SX-695	ℓ-1	R-141	13	11次	旧 L-1	R-164
4	SD-637	ℓ-3	R-59	9	SD-1202	ℓ-2	R-163	14	SD-637	ℓ-5	R-38
5	4次	L-Ⅲ	R-181	10	11次	Z	R-166	15	SD-1202	ℓ-1	R-162

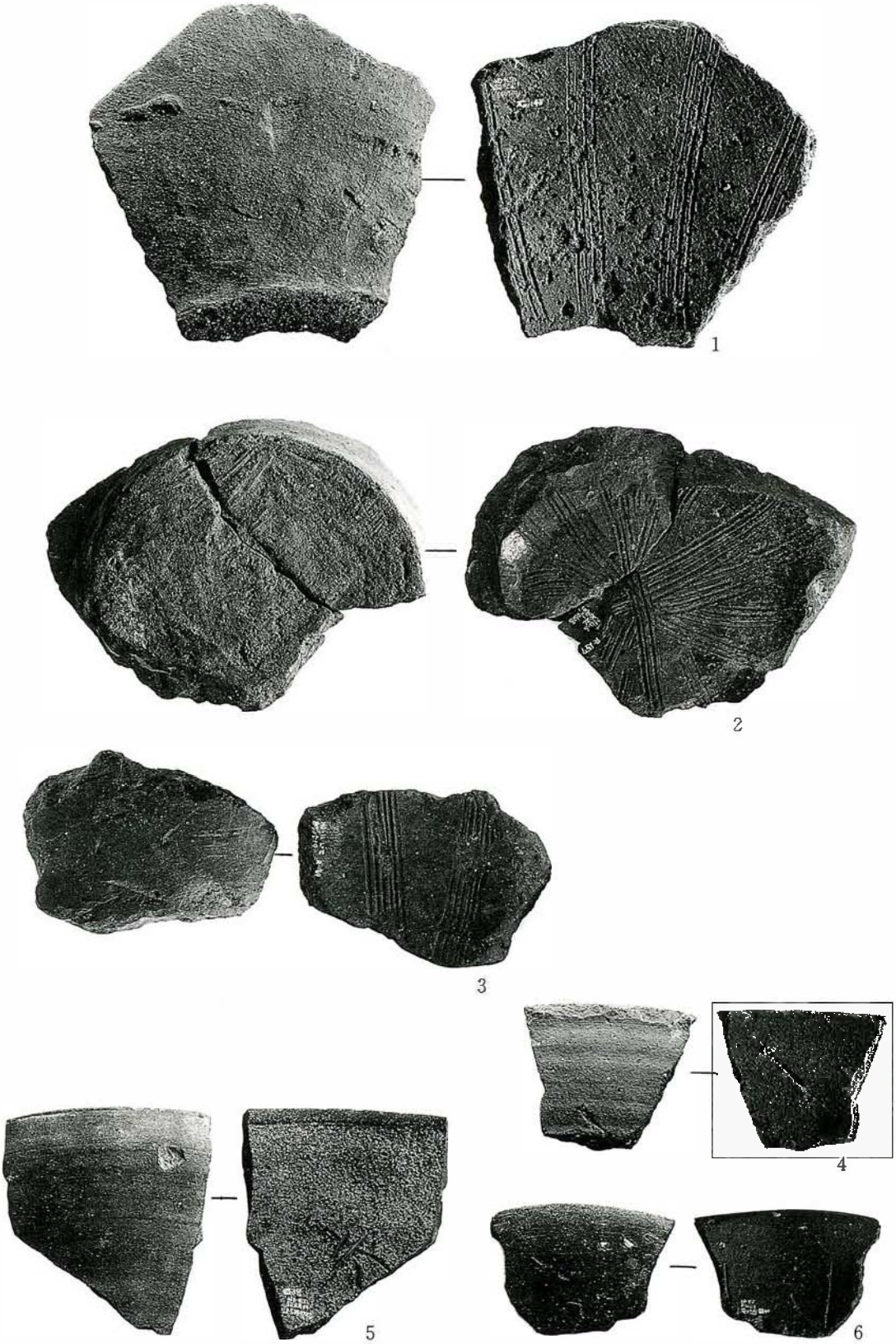
16	SE-1273	ℓ-1	R-159
17	SD-632	ℓ-2	R-138

図版26　無釉陶器　擂鉢



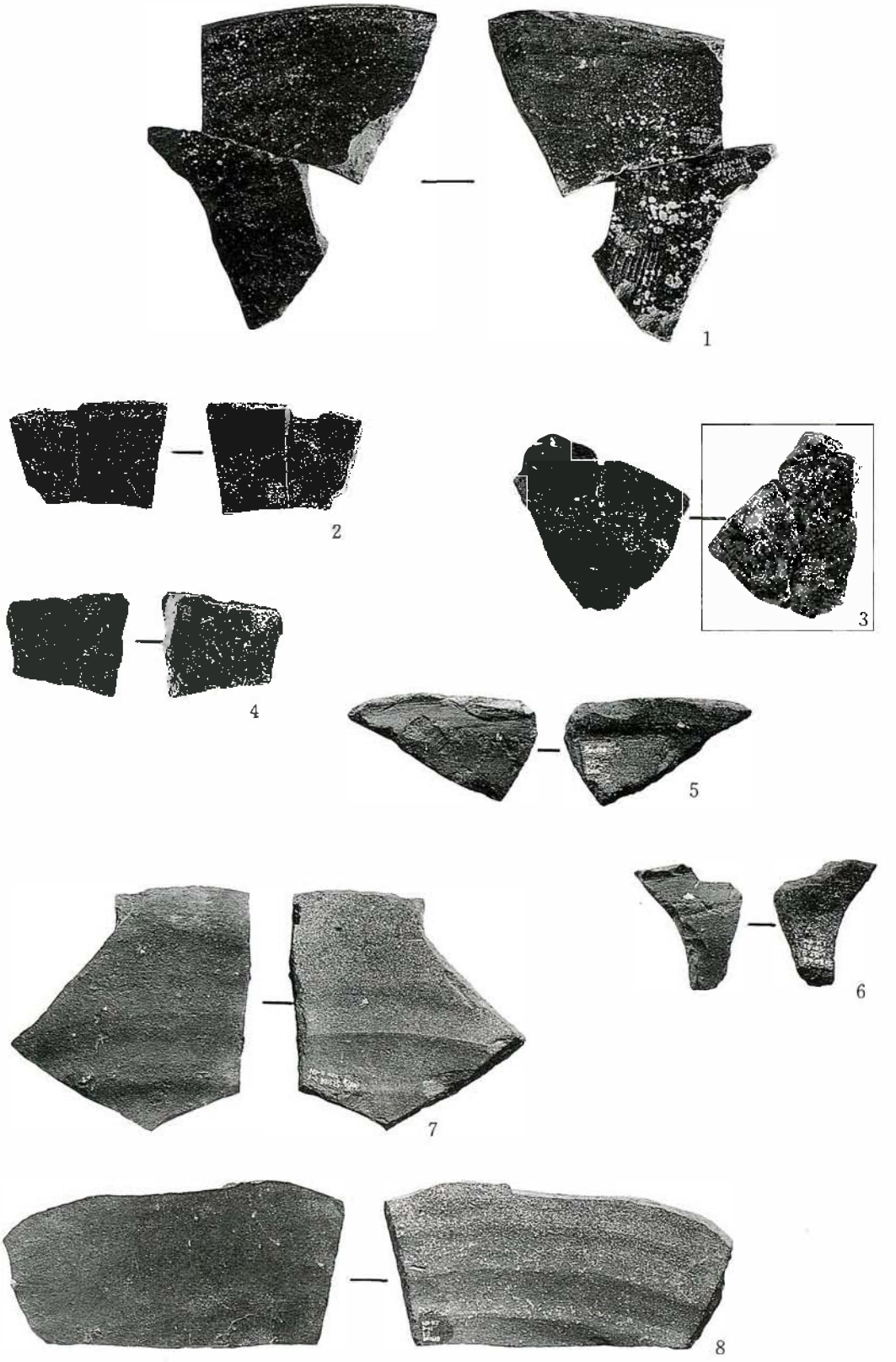
1	11ｔ NE L-Ⅲ	R-157	6	SE-1262 ℓ-2	R-170	11	SE-677 ℓ-1	R-95	16	SD-1199 ℓ-1	R-193
2	SE-1252 ℓ-3	R-167	7	4ｔ 東壁T	R-136	12	SE-1272 ℓ-1	R-158	17	SD-637 ℓ-3	R-282
3	SD-1200 ℓ-1	R-51	8	SE-686 ℓ-2	R-77	13	SD-633 ℓ-2	R-115	18	SD-1202 ℓ-1	R-195
4	SE-1272 ℓ-1	R-201	9	SD-1202 ℓ-1	R-198	14	SD-638 ℓ-1	R-322	19	11ｔ L-Ⅰ	R-165
5	SE-1269 ℓ-1	R-196	10	4ｔ(B-15) L-Ⅲ	R-176	15	4ｔ L-Ⅲ	R-44	20	SD-632 ℓ-4	R-117

図版27　無釉陶器　擂鉢



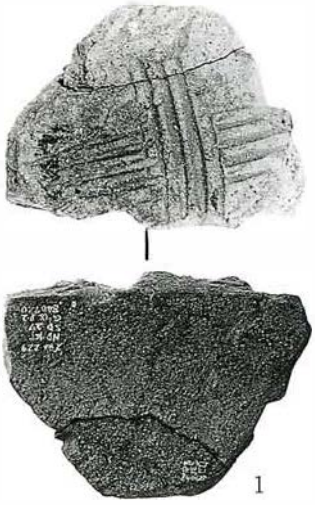
1 SD-633 ℓ-1 R-143
2 4区 L-1 R-93
3 11区 L-Ⅱ R-189
4 4区(A-06) L-Ⅲ R-172
5 SD-637 ℓ-5 R-38
6 4区 L-Ⅲ R-40

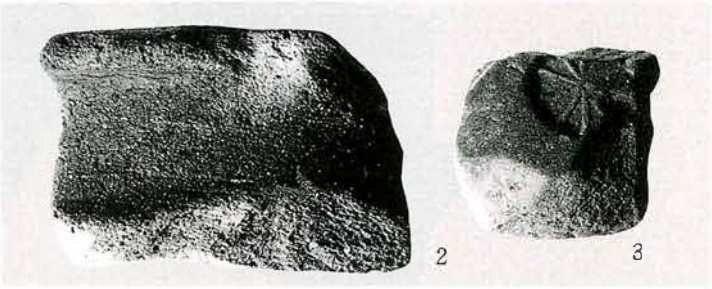
図版28 無釉陶器 擂鉢

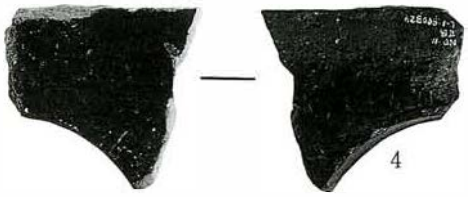


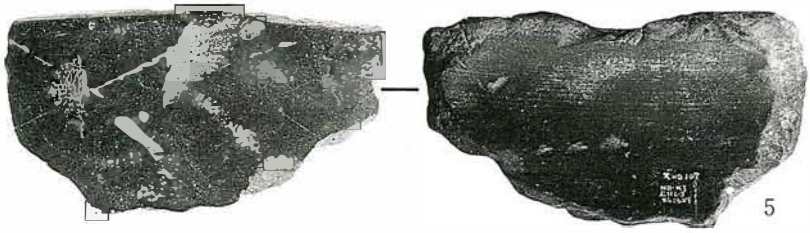
1 SD-655 ℓ-1 R-20
2 4次(C-12) L-Ⅲ R-293
3 SD-656 ℓ-1 R-323
4 4次(C-03) L-1 R-324
5 4次(C-03) L-1 R-178
6 SD-656 ℓ-1 R-325
7 SK-1210 ℓ-2 R-200
8 4次(D-01) L-Ⅲ R-326

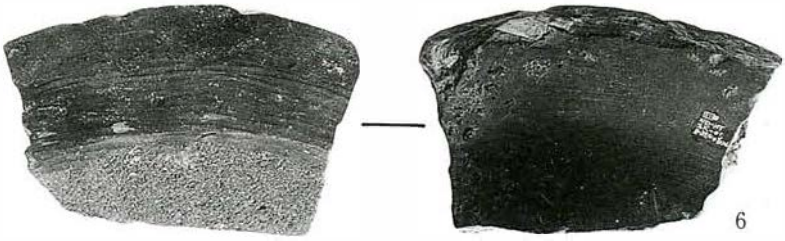
図版29 無釉陶器 擂鉢

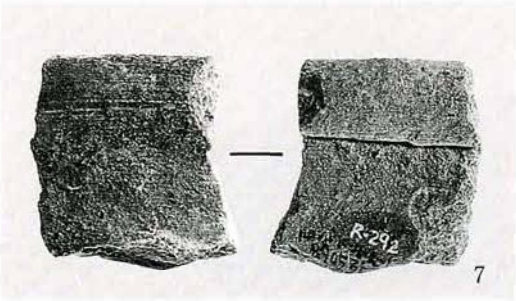






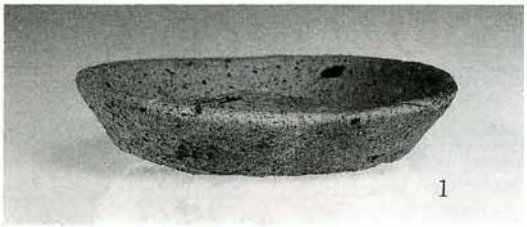


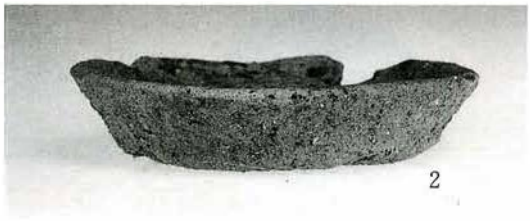


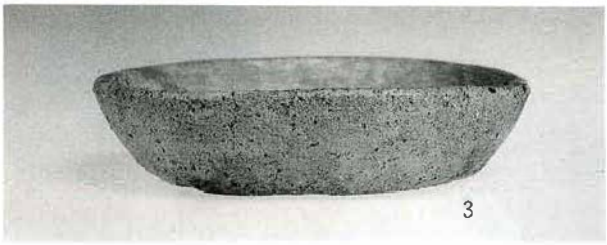


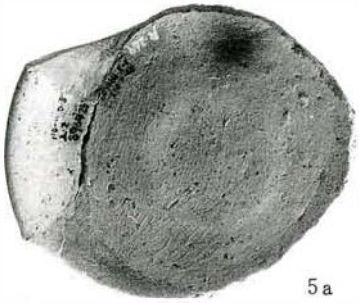
1 擂鉢　SD-639 ℓ-2 R-229
2 香炉　11ｆ L-Ⅰ R-295
3 香炉　4ｆ(D-02) L-Ⅱ R-232
4 火鉢　11ｆ Ⅱ区 L-Ⅰ R-329
5 火鉢　4ｆ(E-11) L-Ⅲ R-107
6 火鉢　SE-679 ℓ-3 R-30
7 土鍋　SK-1240 ℓ-1 R-292
8 土錘　SD-1200 ℓ-3 R-59

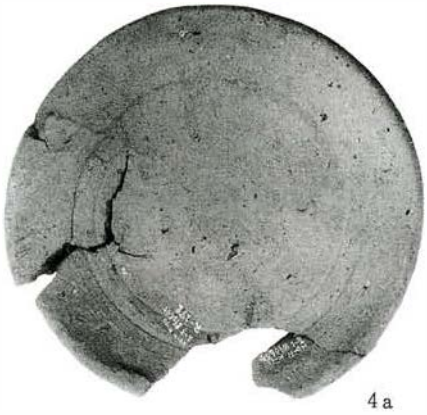
図版30　瓦質土器(1～6)・他

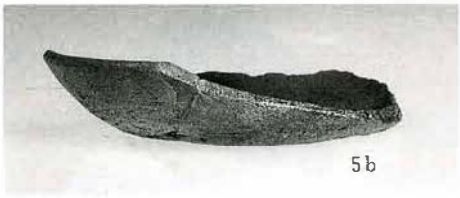


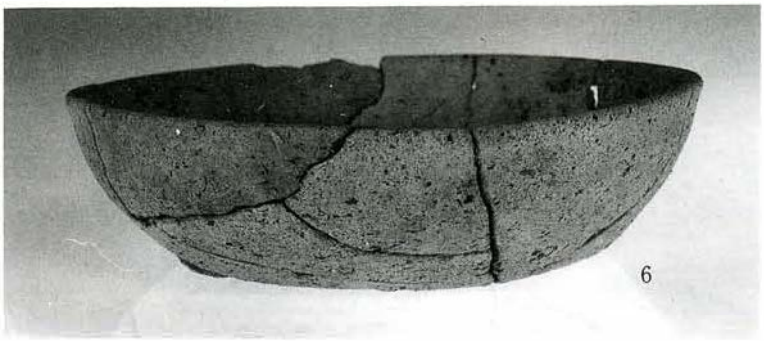






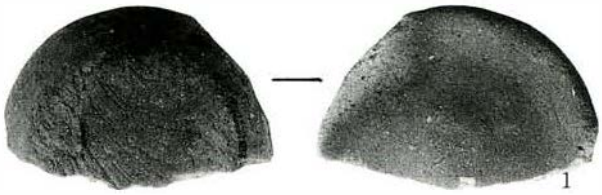


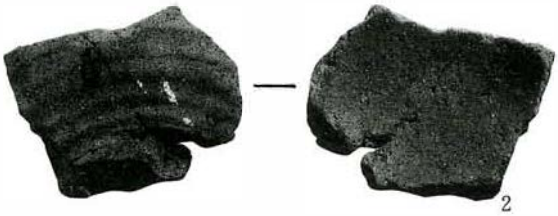


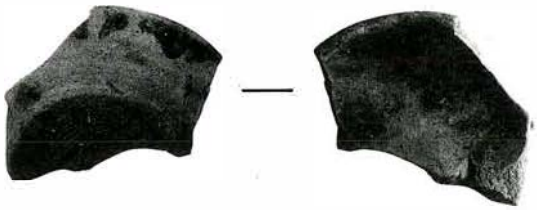


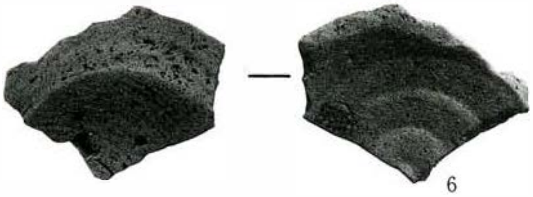
1　SD-1200 ℓ-3 R-270
2　11次 ■区 1-■　R-271
3　SD-655 ℓ-1　R-15
4　SK-1235 ℓ-3 R-272
5　SD-1202 ℓ-3 R-269
6　SD-1202 ℓ-1 R-265

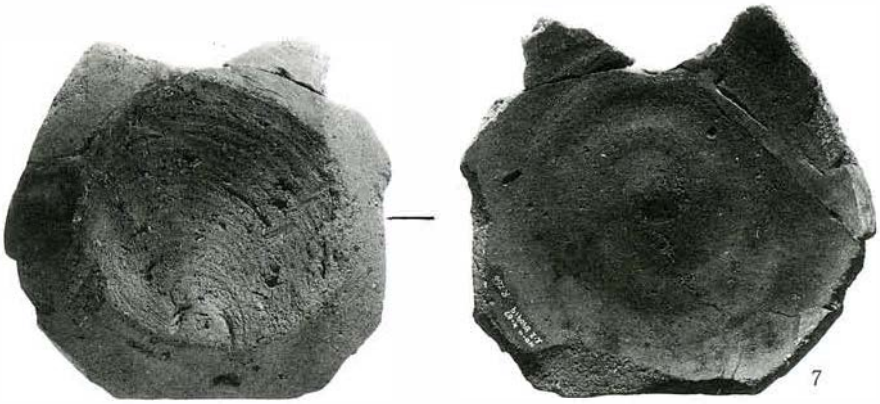
図版31　カワラケ





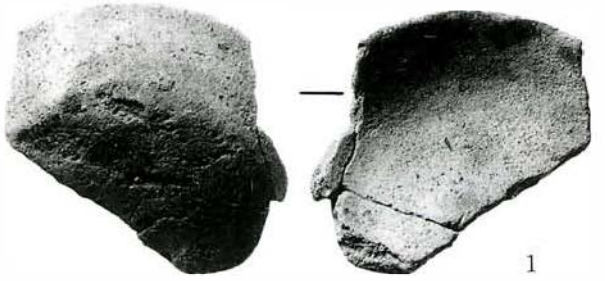


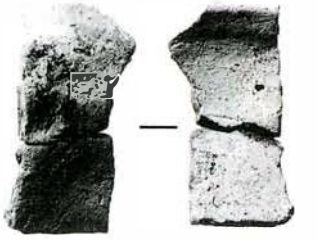


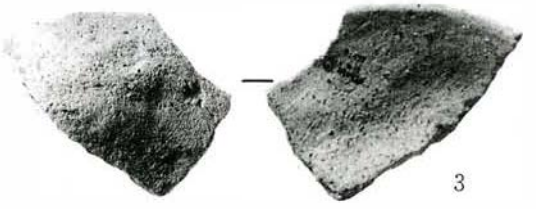


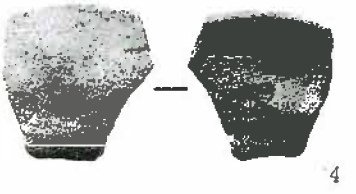
1　4次(F-04) L-Ⅱ　R-271
2　4次(I-06) L-Ⅲ　R-328
3　4次(I-14) L-Ⅲ　R-327
4　SX-694　ℓ-1　R-31
5　SE-676　ℓ-2　R-329
6　4次試掘 NO3T　R-330
7　SK-1220　ℓ-2　R-266

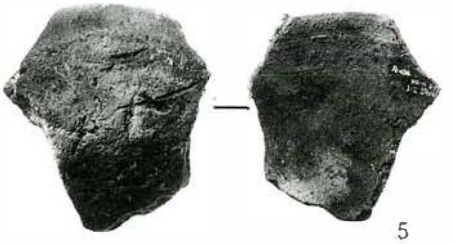
図版32　カワラケ

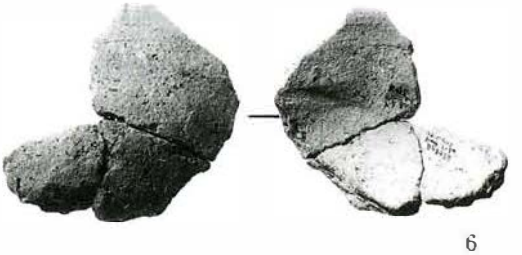


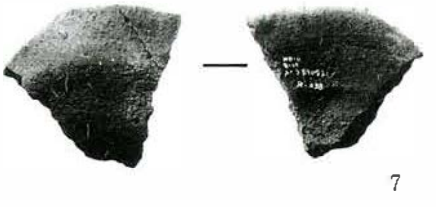


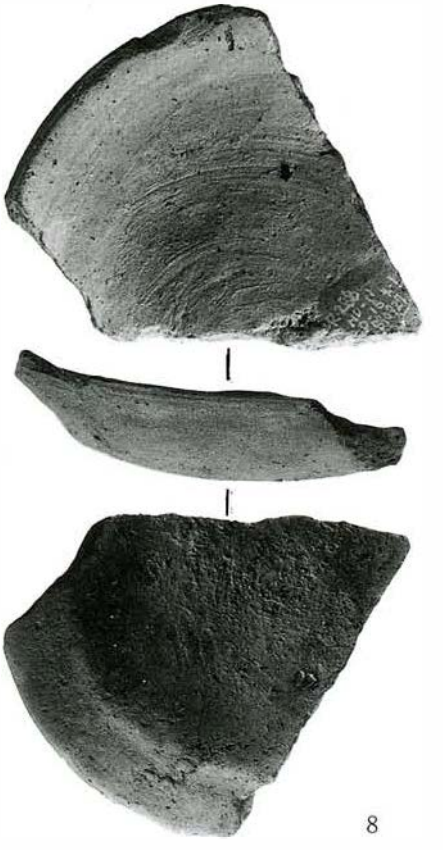






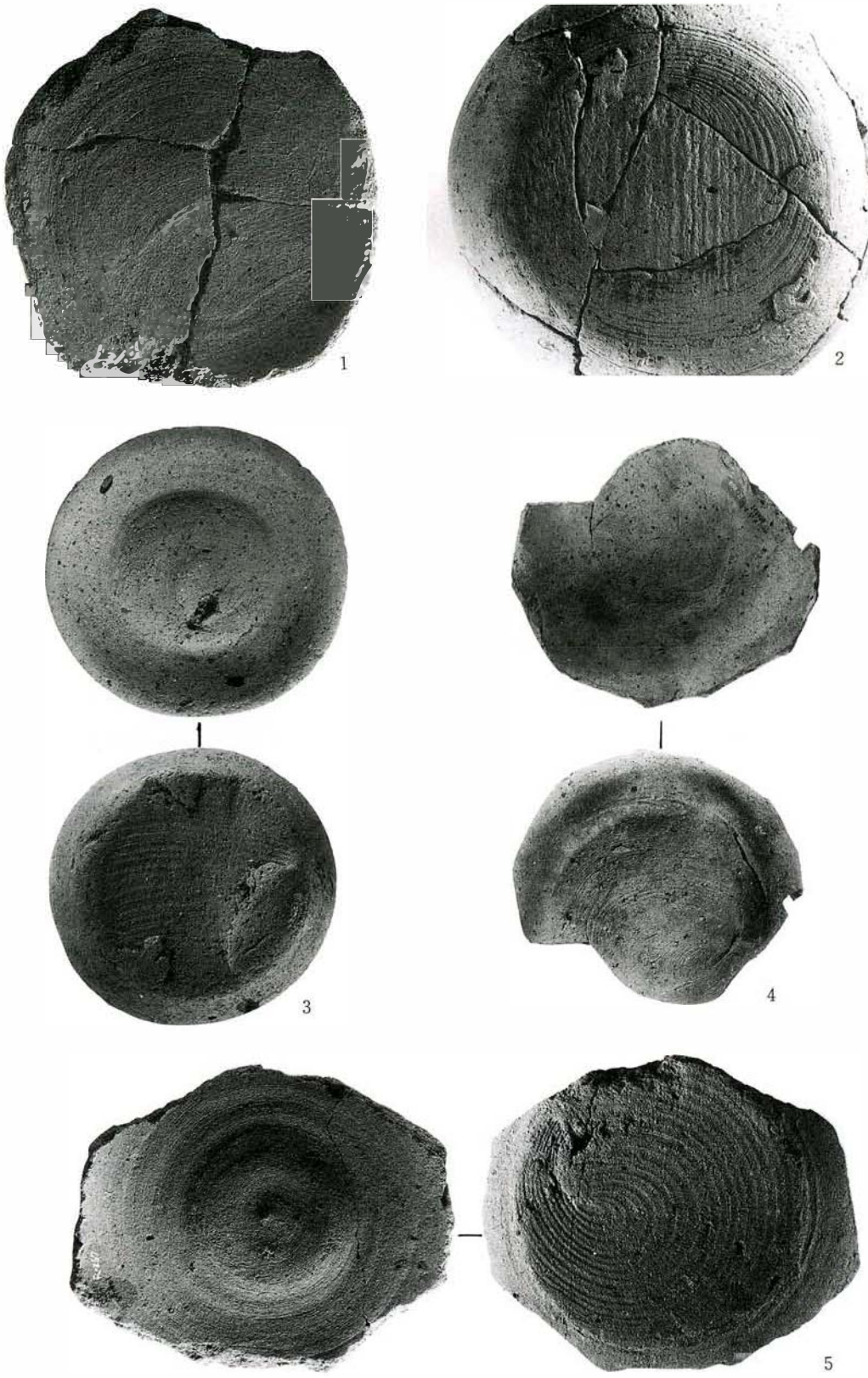






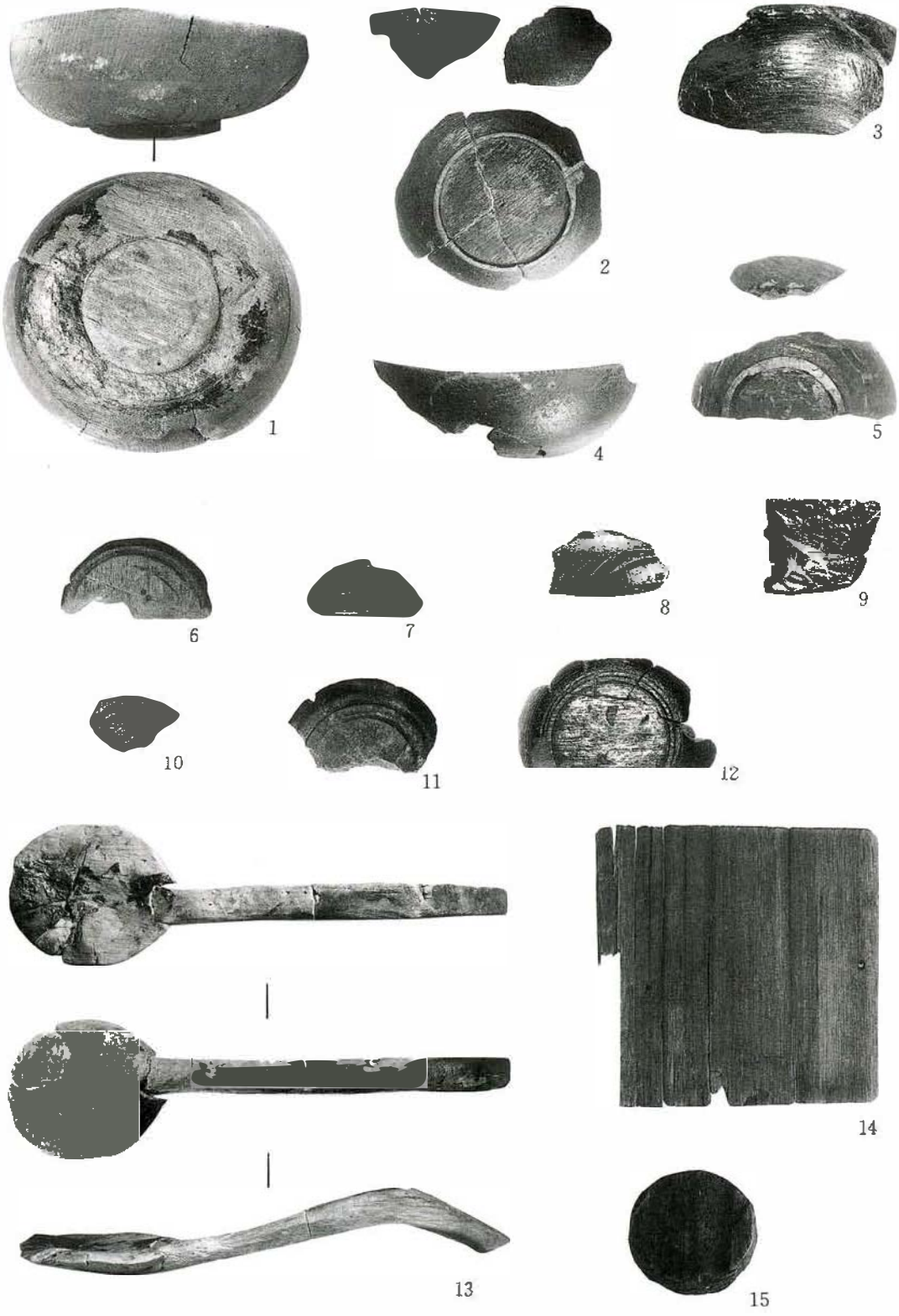
1　4区(H-08)　L-Ⅲ R-72
2　SD-1200　ℓ-3 R-040
3　SD-1200　ℓ-3 R-037
4　SD-1200　ℓ-2 R-039
5　SD-1200　ℓ-2 R-034
6　SD-1200　ℓ-5 R-035
7　SD-1200　ℓ-3 R-038
8　SD-1201　ℓ-1 R-288

図版33　カワラケ



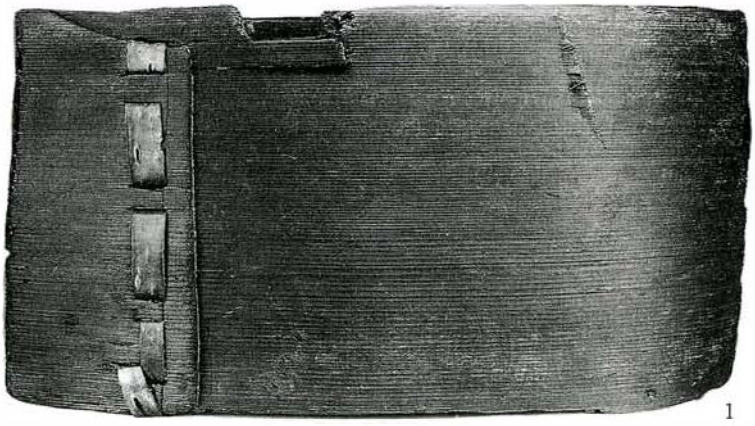
1　4区(H-05)L-■　R-331
2　SD-1202　ℓ-1　R-265
3　SD-1200　ℓ-3　R-270
4　SK-1224　ℓ-1　R-268
5　SK-1250　ℓ-2　R-267

図版34　カワラケ



1 漆器椀 SK-1228 ℓ-2 R-24
2 漆器椀 SB-679 ℓ-3 R-9
3 漆器椀 SD-1200 ℓ-5 R-7
4 漆器椀 SK-1214 ℓ-2 R-54
5 漆器椀 SD-637 ℓ-3 R-8
6 漆器 SD-1200 ℓ-3 R-80
7 漆器 4次 Z
8 漆器椀 SK-1207 ℓ-4 R-38
9 漆器 SD-1202 ℓ-3 R-105
10 漆器 SB-1271 ℓ-2 R-59
11 漆器 SD-1200 ℓ-3 R-104
12 漆器椀 SD-634 ℓ-2 R-6
13 杓子 SK-1228 ℓ-1 R-23
14 折敷底板 SB-1261 ℓ-1 R-63
15 円板 11次 Z

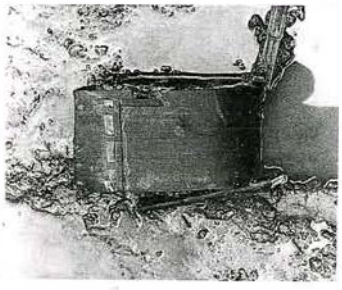
図版35 木製品

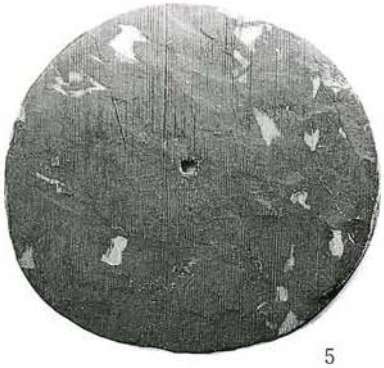

1

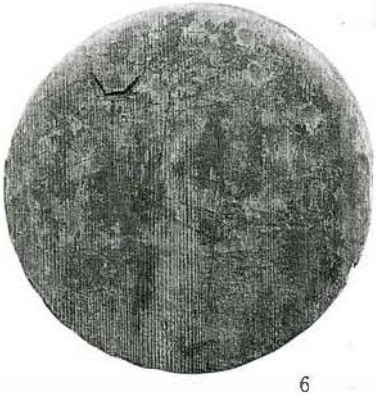
2

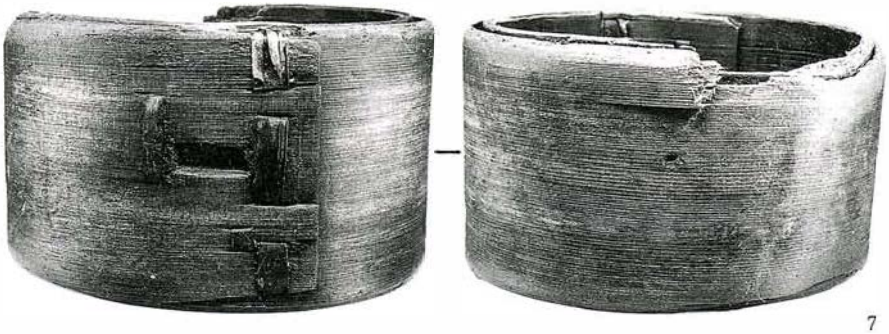
3

4



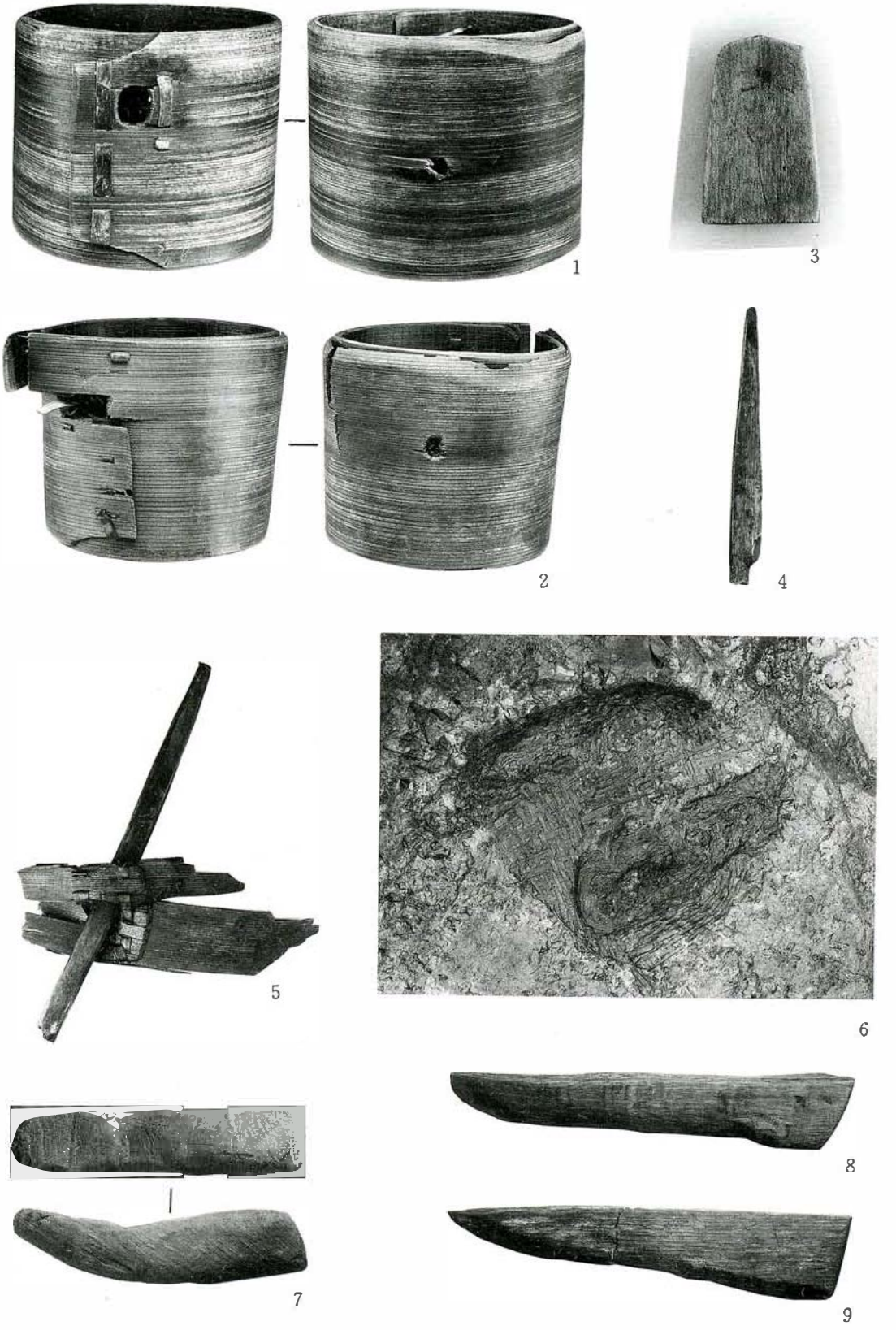

5


6


7

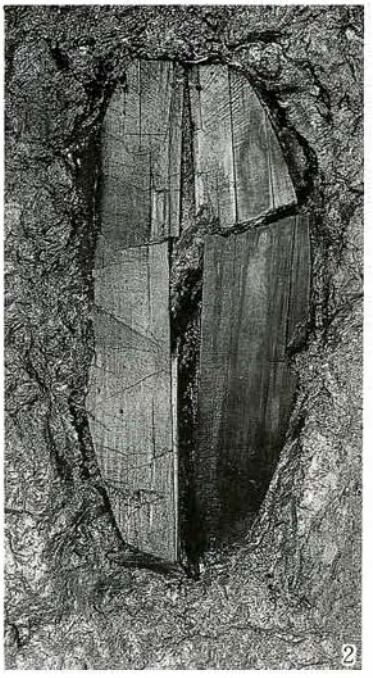
1 曲物	SK-1207	ℓ-6 R-39	4 蒸籠	SE-1270	ℓ-3 R-42	7 柄杓	SE-1273	ℓ-2 R-51
2 把手	SK-1207	ℓ-6 R-40	5 蒸籠底板(下)	SE-1270	ℓ-3 R-42			
3 把手	SK-1207	ℓ-6 R-41	6 蒸籠底板(上)	SE-1270	ℓ-3 R-42			

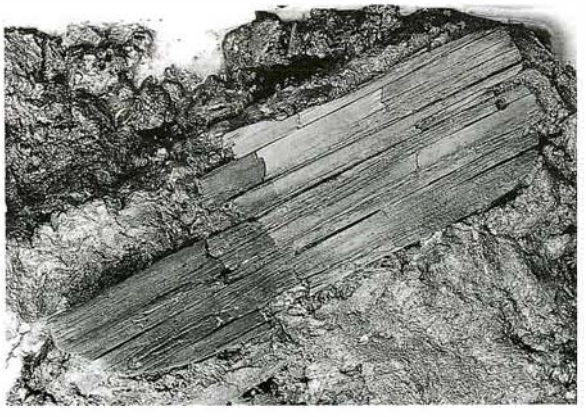
図版36　木製品



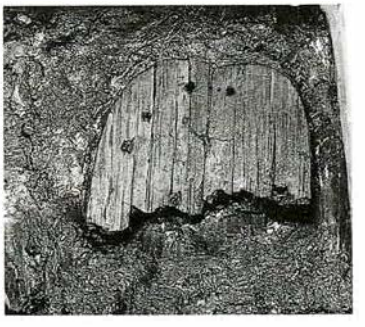
1 柄杓　SE-1261 ℓ-3 R-65
2 柄杓　SE-1263 ℓ-2 R-67
3 将棋駒　SD-1200 ℓ-3 R-1
4 柄杓の柄　SD-1200 ℓ-3 R-72
5 柄杓　SK-1248 ℓ-1 R-53
6 竹製カゴ　SD-1202 ℓ-3 R-18
7 角状木製品　SD-1200 ℓ-5 R-3
8 刀子形　SK-1241 ℓ-2 R-47
9 刀子形　SD-1200 ℓ-5 R-6

図版37　木製品





4



5

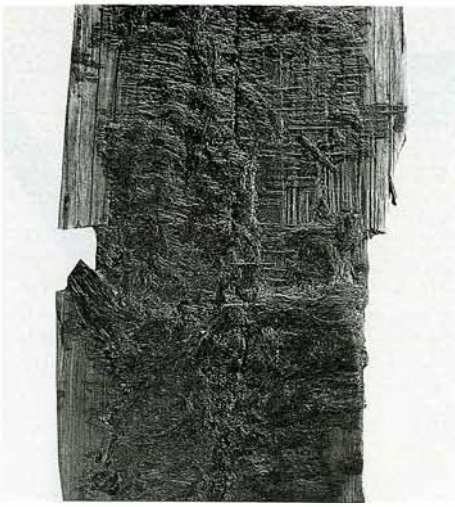
6

7

1 SD-1200 ℓ-3 R-10
2 SD-1200 ℓ-3 R-19
3 SD-1202 ℓ-2 R-16
4 SD-1202 ℓ-2 R-15
5 SD-1202 ℓ-2 R-14
6 SD-1200 ℓ-5 R-5
7 SD-1200 ℓ-2 R-2

図版38　木製品

1



（1部分）

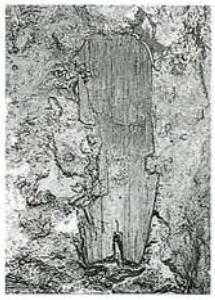
3

4

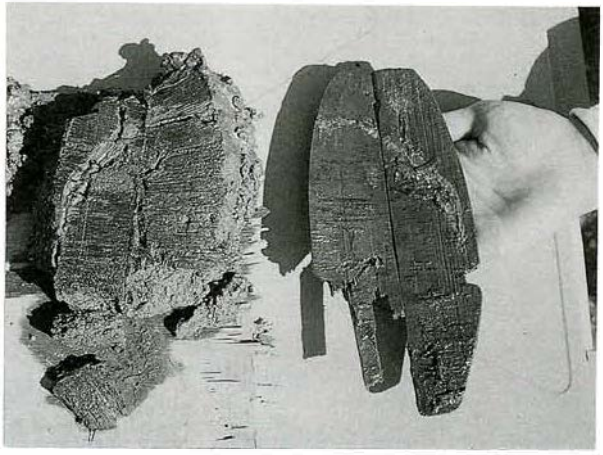
5

2

（2部分）

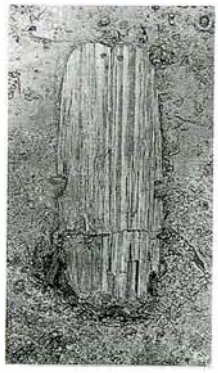


8



7

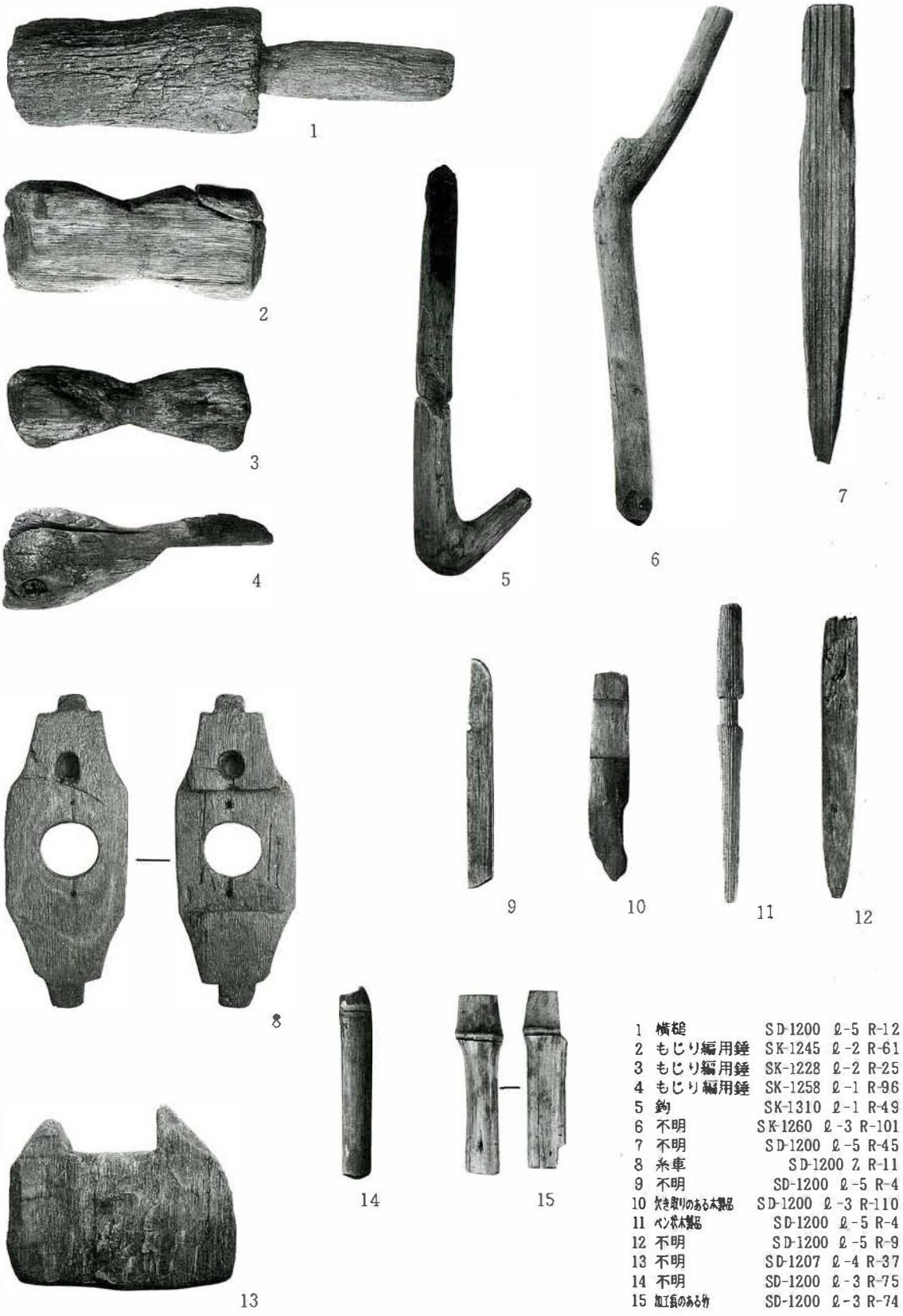
6



9

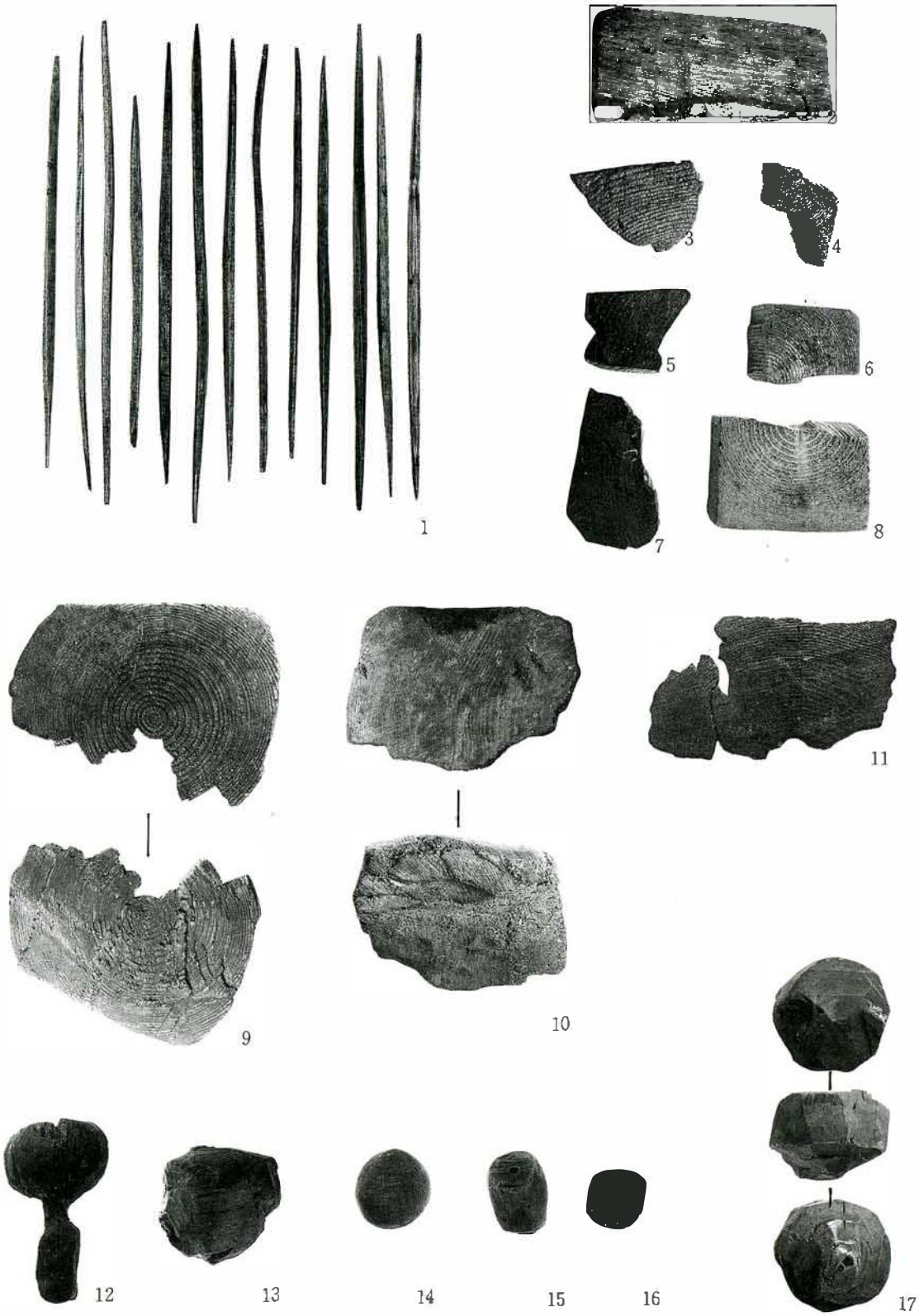
1　SK-1208 ℓ-3 R-21
2　SE-1252 ℓ-3 R-43
3　SD-635 ℓ-3　R-3
4　SD-634 ℓ-5　R-14
5　SK-1208 ℓ-3 R-22
6　SD-643 ℓ-2　R-5
7　6の出土状況
8　SD-1202 ℓ-2
9　SD-1202 ℓ-2

図版39　木製品



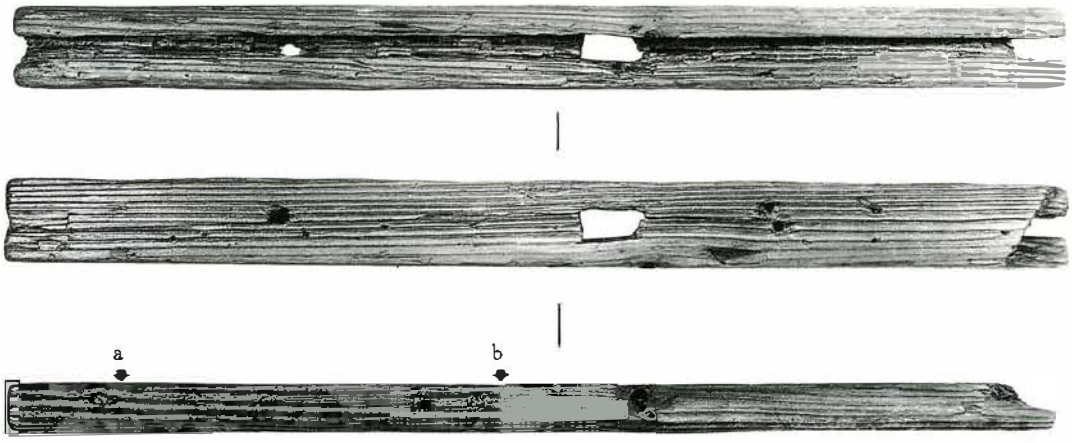
1	横槌	SD-1200	ℓ-5 R-12
2	もじり編用錘	SK-1245	ℓ-2 R-61
3	もじり編用錘	SK-1228	ℓ-2 R-25
4	もじり編用錘	SK-1258	ℓ-1 R-96
5	鉤	SK-1310	ℓ-1 R-49
6	不明	SK-1260	ℓ-3 R-101
7	不明	SD-1200	ℓ-5 R-45
8	糸車	SD-1200	Z R-11
9	不明	SD-1200	ℓ-5 R-4
10	欠き取りのある木製品	SD-1200	ℓ-3 R-110
11	ペン状木製品	SD-1200	ℓ-5 R-4
12	不明	SD-1200	ℓ-5 R-9
13	不明	SD-1207	ℓ-4 R-37
14	不明	SD-1200	ℓ-3 R-75
15	加工痕のある竹	SD-1200	ℓ-3 R-74

図版40　木製品

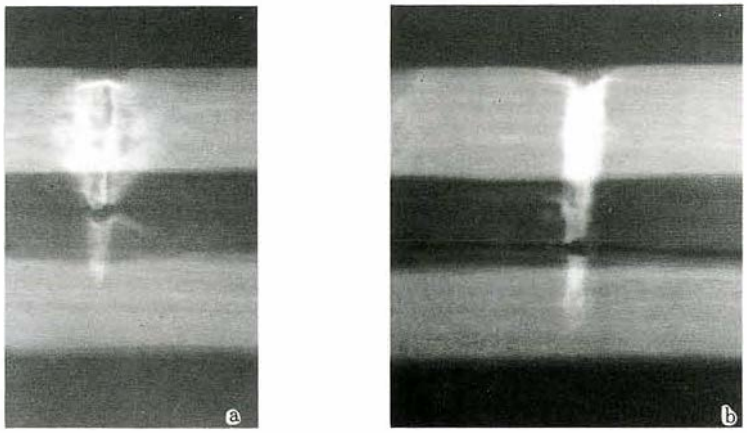


1	箸	SD-1200	ℓ-3 R-20	7	ノコギリ痕のある柱材	SD-1200	ℓ-3 R-90	13 錘？	SK-699 ℓ-1 R-11
2	加工痕のある柱材	SD-1200	ℓ-2 R-76	8	ノコギリ痕のある柱材	SD-1200	ℓ-3 R-90	14 毬	SD-633 ℓ-1 R-19
3	ノコギリ痕のある柱材	SD-1200	ℓ-3 R-90	9	ノコギリ痕のある柱材	SD-1200	ℓ-3 R-90	15 錘？	Z R-18
4	ノコギリ痕のある柱材	SD-1200	ℓ-3 R-90	10	ノコギリ痕のある柱材	SD-1200	ℓ-3 R-90	16 毬？	Z
5	ノコギリ痕のある柱材	SD-1200	ℓ-3 R-90	11	ノコギリ痕のある柱材	SD-1200	ℓ-3 R-90	17 錘？	SD-1200 ℓ-3 R-110
6	ノコギリ痕のある柱材	SD-1200	ℓ-3 R-90	12	不明	SD-634	ℓ-2 R-4		

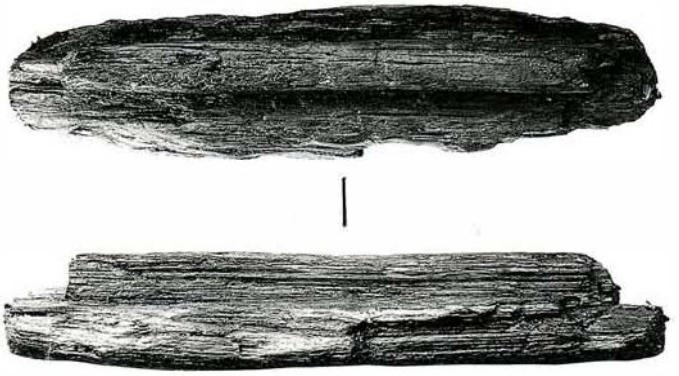
図版41　木製品



1



2

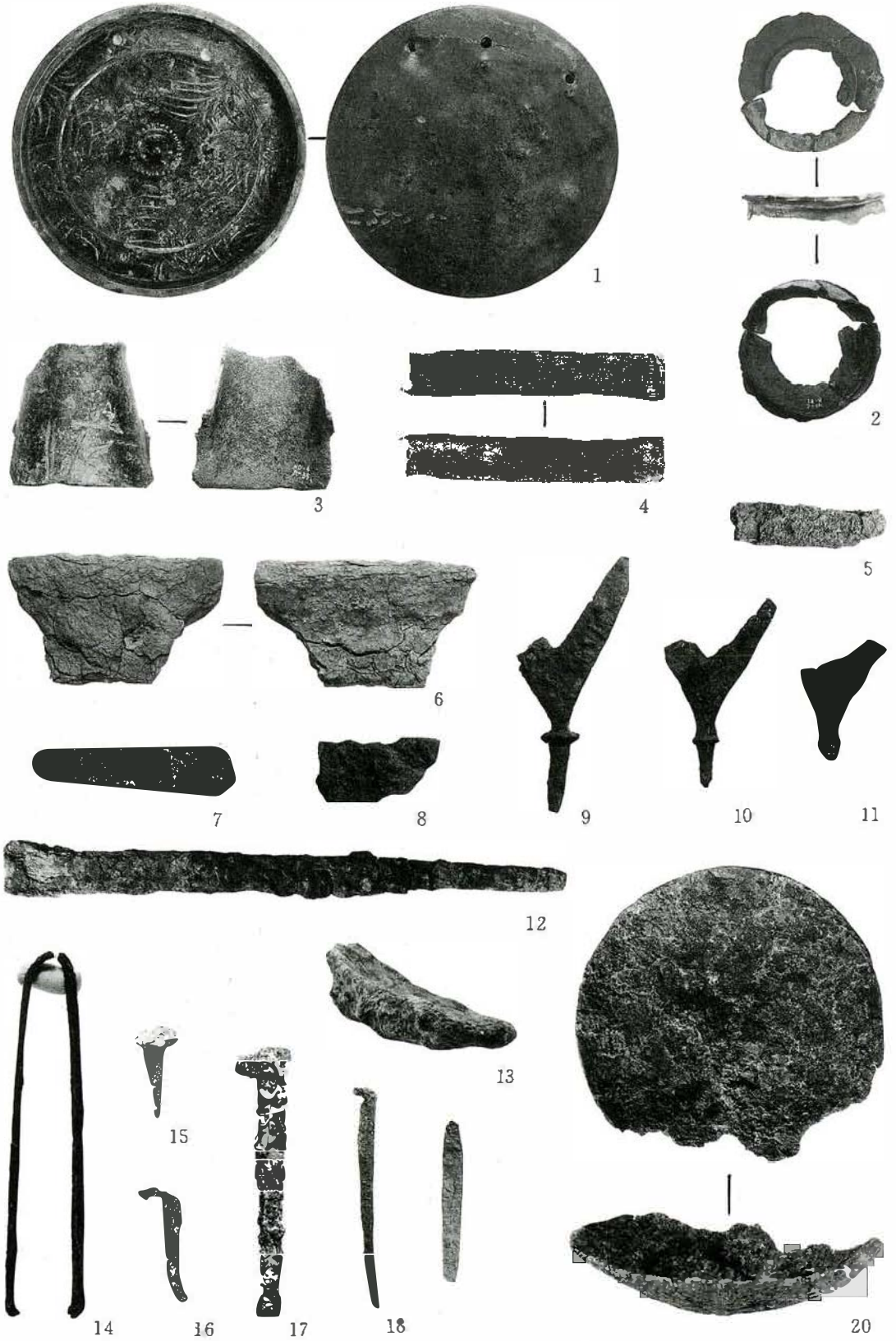


3

4

1 建具部品？ SK-1207 ℓ-4 R-36
2 同上レントゲン写真
3 建築部材 SE-1270 ℓ-4 R-108
4 キセル SK-1215 ℓ-1 R-52

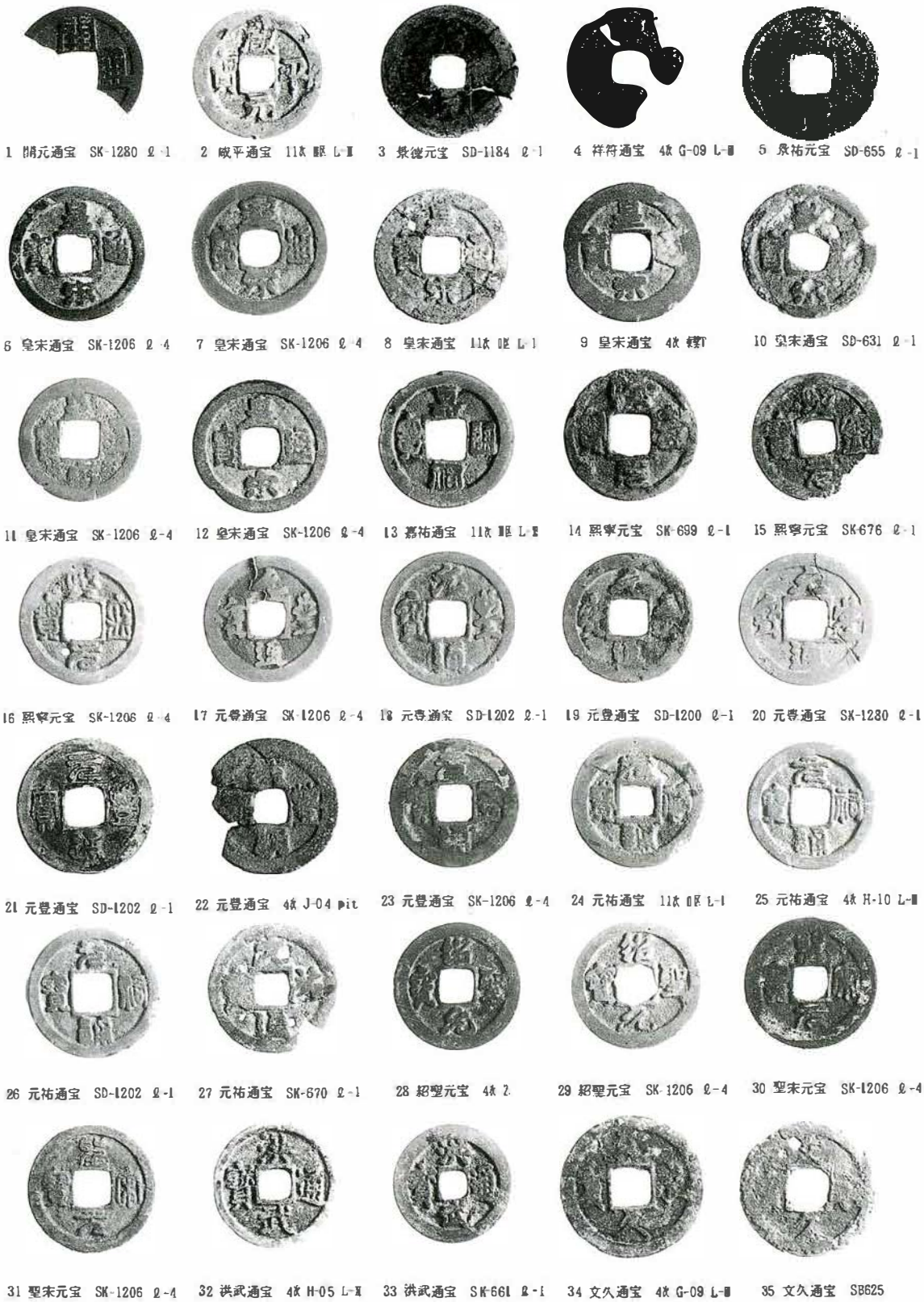
図版42 木製品



1	和鏡	SD-634	ℓ-1	6	鉄鍋	SD-1198	ℓ-1	11	鉄鏃	SX1239	ℓ-1
2	銅製器台	SD-637	ℓ-2	7	小刀	SD-655	ℓ-1	12	不明鉄製品	SK669	
3	不明銅製品	SD-655	ℓ-1	8	小刀	4ℓ(C-01)	L-Ⅱ	13	鉄製皿	4ℓ(A-07)	L-Ⅱ
4	不明銅製品	4ℓ	L-Ⅰ	9	鉄鏃	11ℓ Ⅱ区	L-Ⅰ	14	毛抜	4ℓ(H-07)	L-Ⅲ
5	不明銅製品	SD-633	ℓ-2	10	鉄鏃	SX1291	ℓ-1	15	鋲	SK1218	ℓ-1

16	釘	SD655	ℓ-1
17	釘	SE1253	ℓ-1
18	釘	SK1218	ℓ-1
19	釘	4ℓ(H-06)	L-Ⅲ
20	鉄製皿	SD631	ℓ-1

図版43　金属製品



1 開元通宝 SK-1280 ℓ-1　2 咸平通宝 11水 [illegible] L-Ⅱ　3 景德元宝 SD-1184 ℓ-1　4 祥符通宝 4水 G-09 L-Ⅲ　5 景祐元宝 SD-655 ℓ-1

6 皇宋通宝 SK-1206 ℓ-4　7 皇宋通宝 SK-1206 ℓ-4　8 皇宋通宝 11水 [illegible] L-1　9 皇宋通宝 4水 [illegible]　10 皇宋通宝 SD-631 ℓ-1

11 皇宋通宝 SK-1206 ℓ-4　12 皇宋通宝 SK-1206 ℓ-4　13 嘉祐通宝 11水 [illegible] L-Ⅱ　14 熙寧元宝 SK-699 ℓ-1　15 熙寧元宝 SK-676 ℓ-1

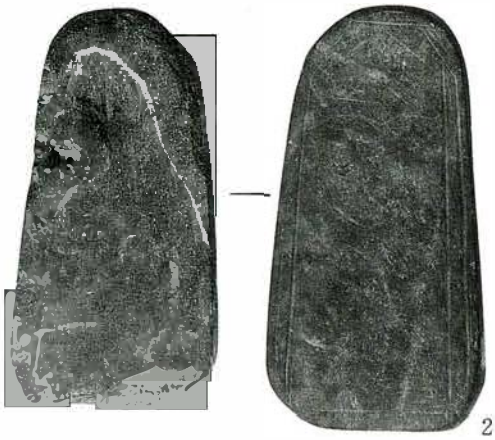
16 熙寧元宝 SK-1206 ℓ-4　17 元豊通宝 SK-1206 ℓ-4　18 元豊通宝 SD-1202 ℓ-1　19 元豊通宝 SD-1200 ℓ-1　20 元豊通宝 SK-1280 ℓ-1

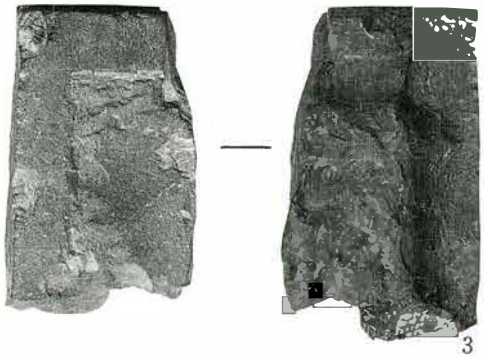
21 元豊通宝 SD-1202 ℓ-1　22 元豊通宝 4水 J-04 pit　23 元豊通宝 SK-1206 ℓ-4　24 元祐通宝 11水 [illegible] L-1　25 元祐通宝 4水 H-10 L-Ⅲ

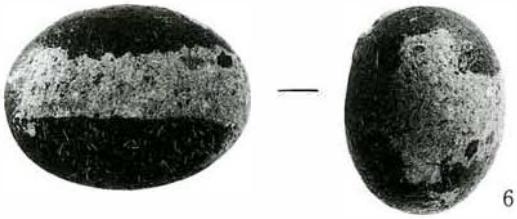
26 元祐通宝 SD-1202 ℓ-1　27 元祐通宝 SK-670 ℓ-1　28 紹聖元宝 4水 2.　29 紹聖元宝 SK-1206 ℓ-4　30 聖宋元宝 SK-1206 ℓ-4

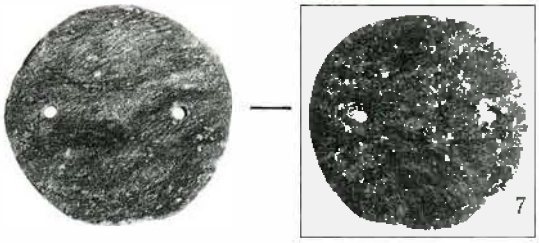
31 聖宋元宝 SK-1206 ℓ-4　32 洪武通宝 4水 H-05 L-Ⅱ　33 洪武通宝 SK-661 ℓ-1　34 文久通宝 4水 G-09 L-Ⅲ　35 文久通宝 SB625

図版44　古　銭



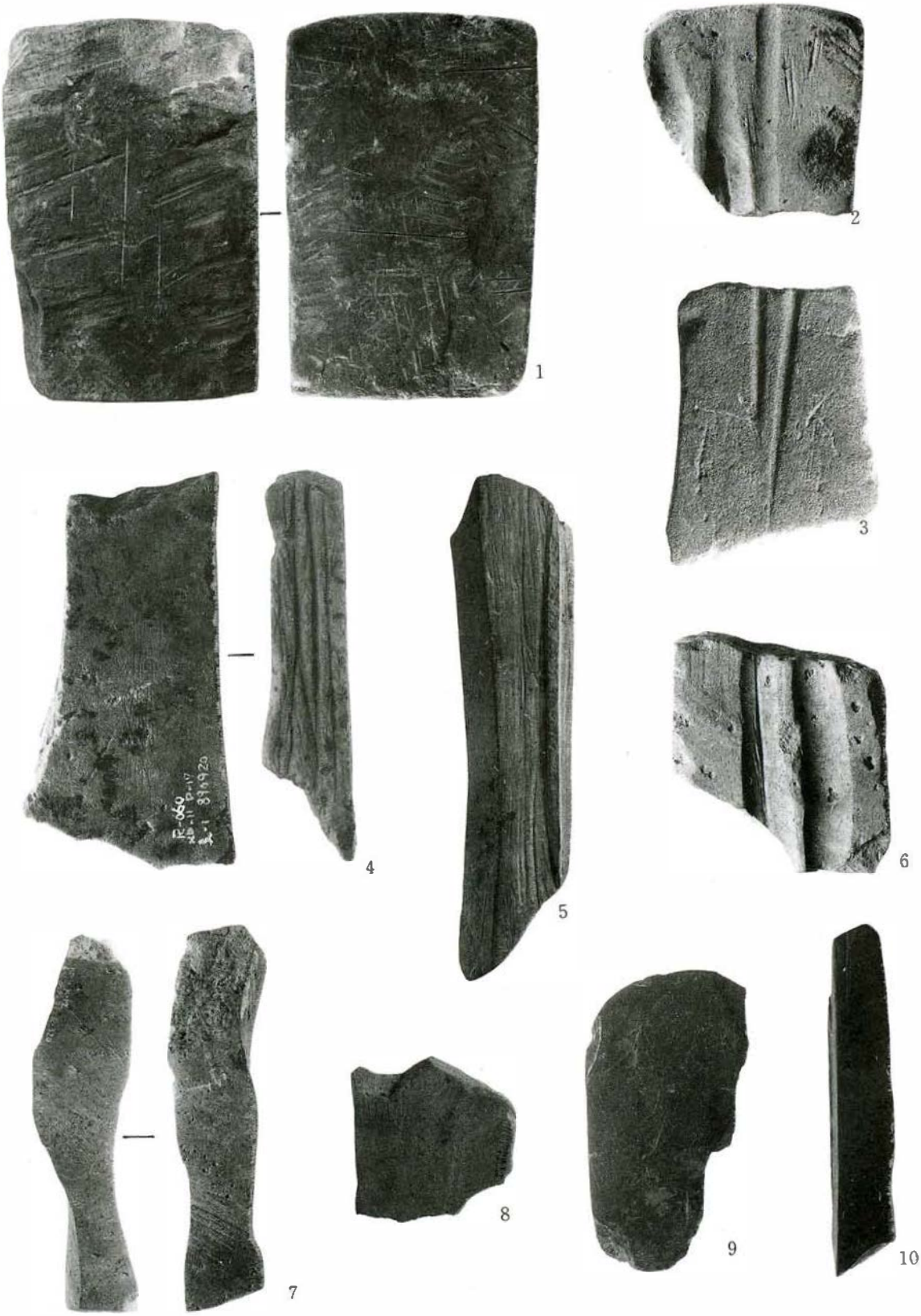






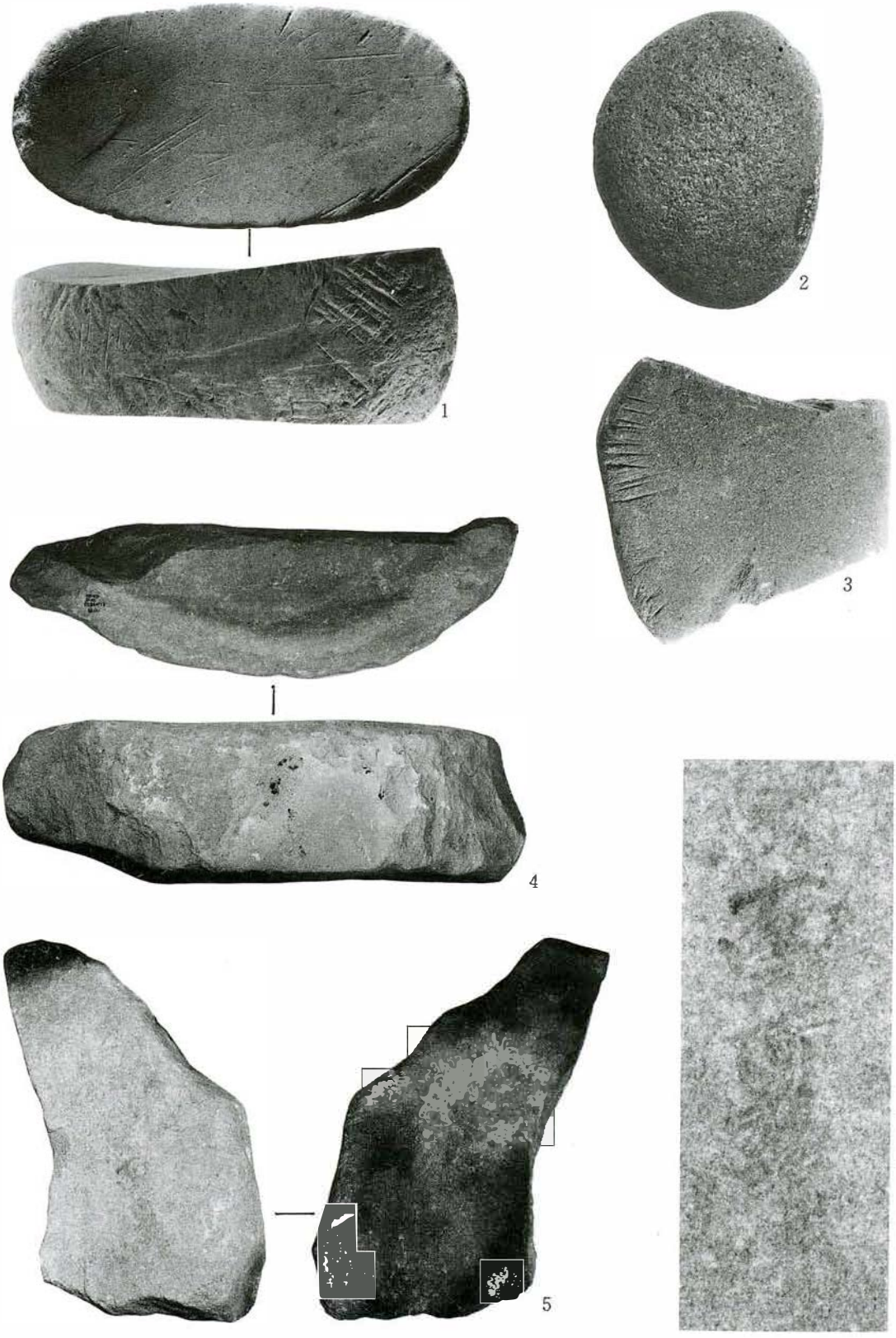
1 墨書のある礫　SD-1202　ℓ-2 R-309
2 石硯　4次 L-I R-4
3 石硯　SD-633　ℓ-1 R-22
4 石硯　SD-637　ℓ-1 R-111
5 石硯　4次 L-I R-2
6 漆塗の石　SB-1272　ℓ-1 R-313
7 石製模造品　11次 ⅡE L-I R-302
8 石帯　4次 L-I R-274

図版45　石製品



1 SK-1263 ℓ-1 R-329
2 SD-1202 ℓ-1 R-331
3 4次 H-06 L-Ⅱ R-224
4 SD-1200 ℓ-1 R-60
5 SK-661 ℓ-1 R-122
6 11次 原 L-Ⅰ R-330
7 SK-1253 ℓ-1 R-320
8 SD-1202 ℓ-3 R-333
9 11次 Ⅲ区 L-Ⅰ R-328
10 SK-661 ℓ-1 R-122

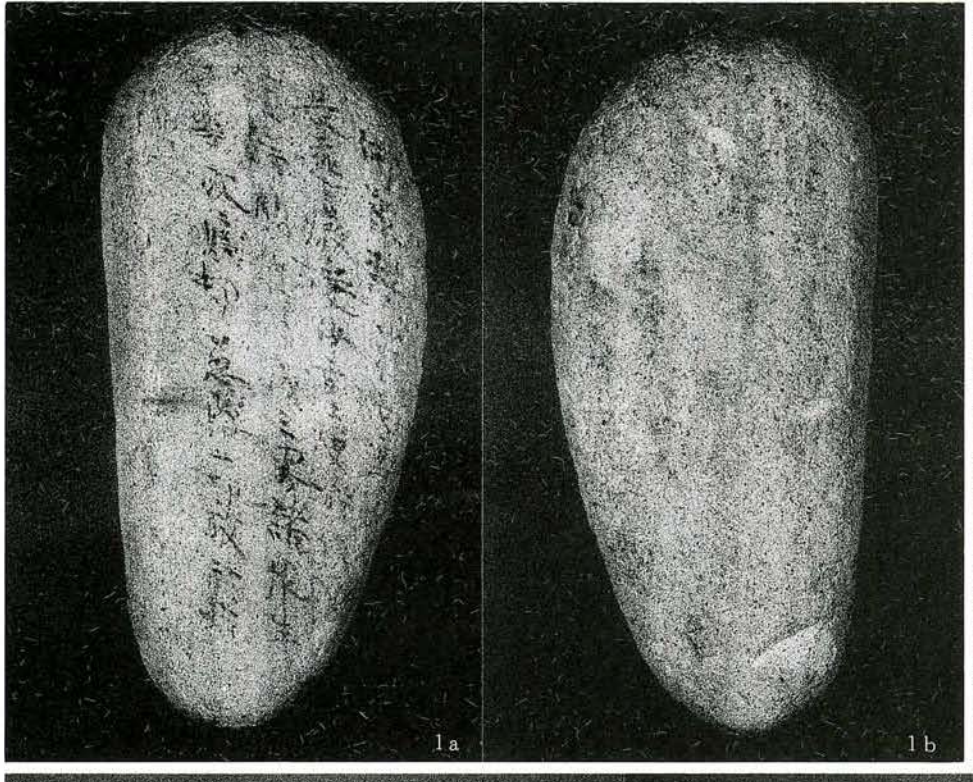
図版46 石製品

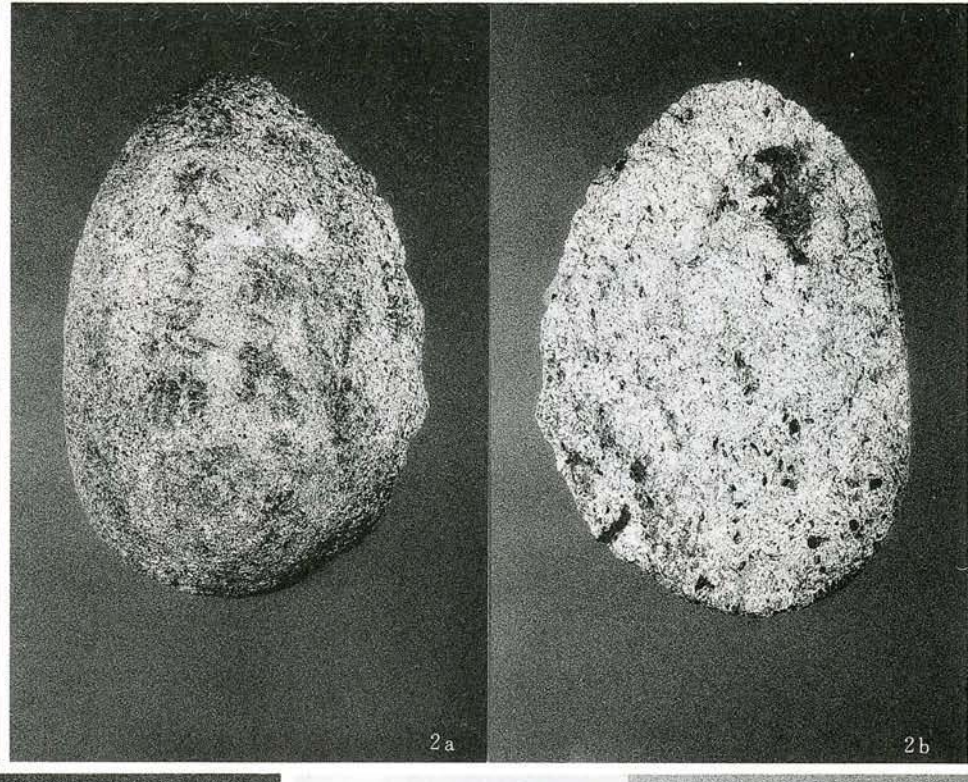


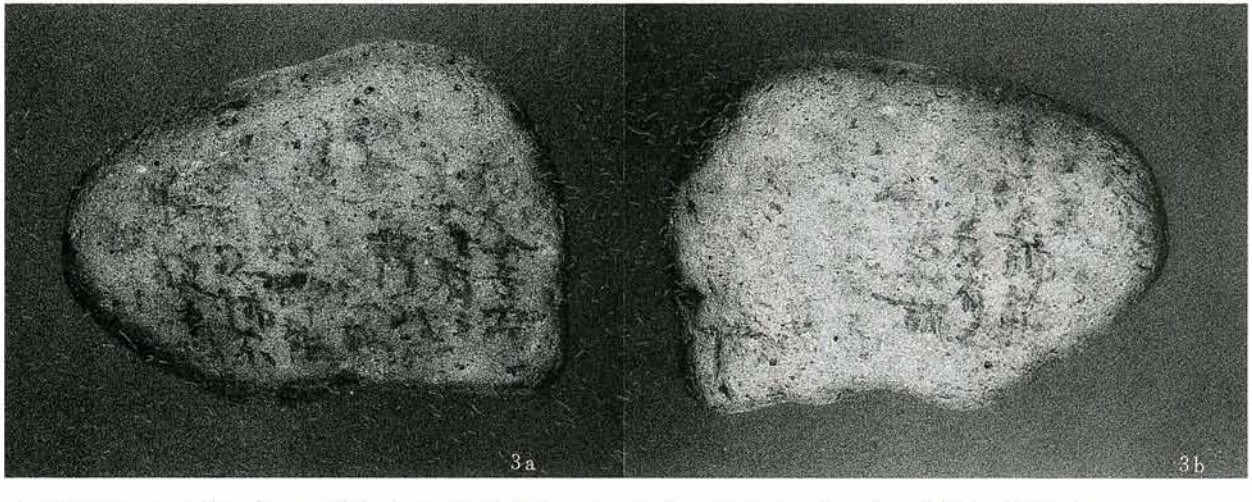
1 砥石　SD-634 ℓ-1 R-57
2 使用痕のある礫　SK-1213 ℓ-2 R-369
3 砥石　SK-669 ℓ-2 R-69
4 砥石　SE-677 ℓ-3 R-210
5 石皿　SE-677 ℓ-3 R-201
6 同上墨書

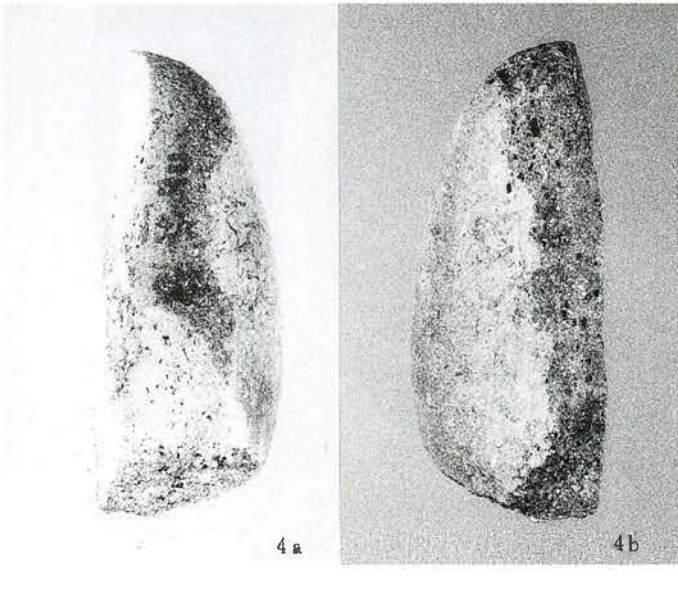
図版47　石製品

図版48　墨書のある礫









番号	遺　構	層位	登録No.	番号	遺　構	層位	登録No.	番号	遺　構	層位	登録No.	番号	遺　構	層位	登録No.
1	SD1200溝跡	ℓ～4	R-311	2	SE1273井戸跡	ℓ～3	R-312	3	SE1260井戸跡	ℓ～1	R-310	4	SE1273井戸跡	ℓ～1	R-383

多賀城市文化財調査報告書第23集

新　田　遺　跡

（第４・11次調査報告）

平成２年３月31日　発行

編　集　多賀城市埋蔵文化財調査センター
発　行　多賀城市中央二丁目27番１号
　　電　話（022）３６８－０１３４

印　刷　㈲　工　陽　社
　　塩釜市尾島町８番７号
　　電　話（022）３６５－１１５１㈹

付図1　第4・11次調査発見遺構全体図